

山 賀

(その4)

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

財団法人 大阪文化財センター

山 賀

(その4)

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

財団法人 大阪文化財センター



弥生時代前期 溝2 南セクション（北から）



4 B トレンチ東セクション 弥生時代中期Ⅰ～縄文時代晩期（南西から）



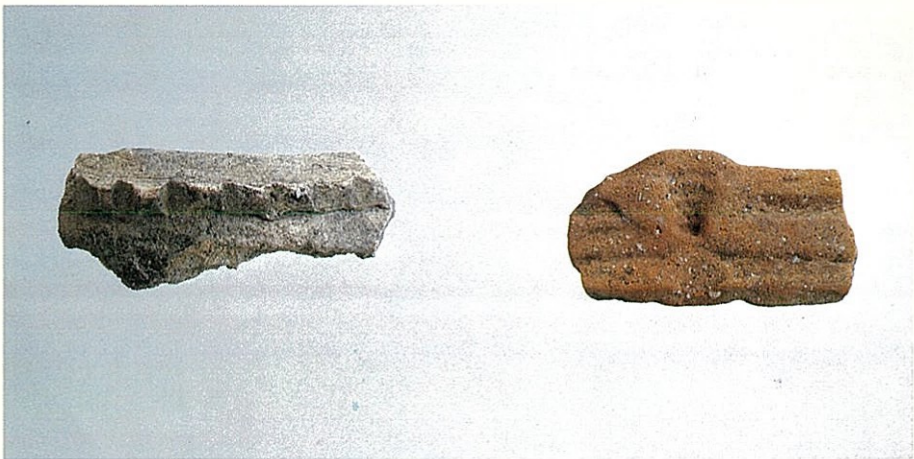
弥生時代中期ⅡB トレンチ足跡（東から）



彩文土器 (15)



縄文時代晩期 甕 (20)



縄文時代晩期 甕 (19)、深鉢 (2)

序 文

「山賀遺跡」は、昭和46年に楠根川の改修工事が行なわれた時、掘削土中から大量の弥生式土器や石器等が出土したことにより遺跡が所在していることが確認された。これら出土した遺物を比較検討した結果、本遺跡より北約500mに所在する瓜生堂遺跡より古い時期であることが明らかとなり、河内平野の中央部に位置する、弥生式時代最古の遺跡として注目された。

その後、昭和47年、昭和49年、昭和53年と数度の発掘調査の結果、鎌倉時代より、平安、奈良、古墳、弥生と各時代の遺構が所在することが確認され、これら各時代の遺構が非常に深い位置にあることも明らかになった。

この「山賀遺跡」は、近畿自動車道天理・吹田線が府道中央環状線中央分離帯部分を縦走する計画が施工されるに及んで確認された14遺跡の内の一つで、昭和51年より着手し現在継続して発掘調査を行っており、長原遺跡、瓜生堂遺跡、新家遺跡、西岩田遺跡、若江北遺跡に次いで発掘調査を実施したものである。

本書は、昭和54年より実施した山賀遺跡の調査概要を収録したものであり、調査の結果従前の調査結果を越えた成果を得たものと確信する。

これら調査を実施にあたって、日本道路公団大阪建設局、財団法人大阪文化財センターをはじめ関係各位ならびに一般府民多数の方々のご協力の賜物と深く感謝すると共に、今後とも温かいご支援を賜わるよう切望してやまない。

昭和58年10月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 籾内盛雄

序 文

河内平野の中に眠る過去の人々の生活の跡は、その質、量とも良好にして、膨大である。

古大和川が運んだ砂や土砂は、古の人々の生活の舞台となった地面を、一層一層包み込んで2000有余年間護り続けて来た。

しかし、この、保護者としての砂や土砂の流入も、当時の人々の生活には、大きな驚異であったであろう。今より、はるかに自然環境の変化が激しかった時代、人々は、その変化に戸惑い、怖れ、そして闘い、克服していった。河内平野の歴史、その河内平野に生活した人々の歴史は、まさに自然の激しい変化の歴史であり、それと闘い、克服し、調和を求めて努力した人々の歴史といっても過言ではあるまい。

近畿自動車道天理～吹田線にかかる13遺跡の調査は、大阪府教育委員会、日本道路公団より継続的に調査を依頼され、すでに長原遺跡、瓜生堂遺跡、巨摩廃寺遺跡、新家遺跡、西岩田遺跡、友井東遺跡、若江北遺跡、山賀遺跡の調査を完了し、美園遺跡、佐堂遺跡、久宝寺遺跡の調査を実施している。

本書は、昭和57年3月に調査を完了した東大阪市若江西新町から八尾市新家町に所在する山賀遺跡の発掘調査の概要を記したものである。

調査に要した期間、費用も膨大ならば、検出した遺構、遺物もまた膨大であり、そのすべてを本書に収録しきれなかったが、河内平野の歴史、河内平野に生活の場を求めた人々の歴史を直接肌で感じ取り、理解していただけるものと確信するとともに、初めて考古学的に、また科学的にメスの入った山賀遺跡という、河内平野で最古にして、瓜生堂遺跡と並び最大の複合集落跡の実態の解明に大きく貢献出来得るものと確信する。

最後に、当文化財センターは、設立以来10年、埋蔵文化財の保護、普及事業を積極的に実施する中で、その使命を果しながら、着実に発展してきた。今後も所期の目標を見失しなうことなく、一層研鑽、努力することを約すると共に、一般府民の皆様を始め、関係各位のより一層のあたたかい御理解、御支援を願ってやまない。

昭和57年10月

財団法人 大阪文化財センター

理事長 加藤 三之雄

及び小林・生田が行った。土器及び土製品一覧表は、弥生時代後期を小山田、他を生田が作成した。

8. 遺構写真は一部を片山彰一、他を小林、小山田、生田が、遺物写真は片山が撮影した。焼付は片山、平井貞子が行った。

9. 本書の遺構実測図の方位は総て国土座標北を示す。遺構番号は各遺構面ごとに通し番号を付した。標高は T.P を使用した。日本道路公団のステーションラインは、S.T.A. と略して使用した。

10. 遺構図の縮尺は、付図全体図を $\frac{1}{200}$ 、付図部分図を $\frac{1}{100}$ 、挿図は $\frac{1}{20}$ 、 $\frac{1}{30}$ 、 $\frac{1}{40}$ 、 $\frac{1}{60}$ 、 $\frac{1}{80}$ とした。遺物実測図の縮尺は、土器及び土製品を基本的に $\frac{1}{4}$ とし、縄文土器は $\frac{1}{3}$ 、小型の土器は $\frac{1}{2}$ とした。石器は S.3 を $\frac{2}{3}$ 、他は $\frac{1}{2}$ 。木器はその大きさにより $\frac{2}{3}$ 、 $\frac{1}{4}$ 、 $\frac{1}{2}$ とした。遺物写真は縮尺を記しているが約数である。

11. 土器及び土製品には総て通し番号を、石器には S、木器には W、鉄器には I を付けて通し番号を付し、実測図、写真図版ともに統一した。

また、中世以降の瓦器、瓦質土器、土師質土器の実測図断面にはスクリーントーンを貼った。

12. 本調査では、自然科学分野に関して、以下の諸氏・機関の御指導、御協力を受け、また鑑定を御願ひし、玉稿をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。（順不同、敬称略）

大阪市立自然史博物館 那須孝悌・樽野博幸(石器等)、(財)元興寺文化財研究所 松田隆嗣

(木材)、武庫川女子大学薬学部 安田博幸・奥野礼子(赤色顔料)、近畿大学農学部

川村三郎(農業土壌)、上野動物園 増井光子(動物足跡)、奈良国立文化財研究所

土肥 孝(動物足跡)

また、花粉分析はパリノ・サーヴェイ株式会社、木器の保存処理については(財)元興寺文化財研究所に委託した。

13. 本書の編集は生田が行った。

14. 本調査にあたっては、写真・実測図などの記録を作成するとともに、カラーライドを多数作成したが、総てを掲載することはできなかった。本調査に関する資料については、総て財団法人大阪文化財センターで保管している。広く利用されることを希望したい。

山 賀 (その4)

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査概要報告書

目 次

巻頭カラー写真図版	1～3
序文	
例言	
第1章 はじめに	中西靖人…………… 1
第2章 地域的環境	生田維道…………… 7
第3章 調査の目的と方法	
第1節 調査の目的と方法	生田…………… 12
第2節 地区割りとトレンチの配置	生田…………… 12
第4章 基本層序	小林義孝…………… 15
第5章 調査の成果	
第1節 縄文時代晩期	小林、生田…………… 23
第2節 弥生時代前期	石神幸子、生田…………… 29
第3節 弥生時代中期Ⅰ	石神、小林、生田…………… 47
第4節 弥生時代中期Ⅱ	小林、生田…………… 59
第5節 弥生時代後期Ⅰ	石神、小林、生田…………… 60
第6節 弥生時代後期Ⅱ	石神、小林、小山田宏一、生田…………… 68
第7節 古墳時代後期	小林、小山田、生田…………… 79
第8節 古代・中世	小林、生田…………… 86
第9節 近世・近代	石神、小林、生田…………… 92
第6章 自然科学の成果	
第1節 山賀遺跡(その4) 試料 花粉分析報告	パリノ・サーヴェイ株式会社…………… 119
第2節 山賀遺跡(その4) 出土の彩文土器の肩部文様に塗彩された赤色顔料物質の化学分析	…………… 安田博幸、奥野礼子…………… 133
第3節 平安時代須恵器長頸壺内底部付着の白色物質についての材質調査(X線回折法)	…………… 山口誠治…………… 135
第4節 山賀遺跡(その4) より出土した木製遺物の樹種について	…………… 松田隆嗣…………… 137
第7章 まとめ	中西…………… 141

挿 図 目 次

第1図	山賀遺跡位置図 (1/40000)	2
第2図	山賀遺跡地区割り図 (1/5000)	4
第3図	周辺遺跡分布図 1/500	8
第4図	トレンチ配置図 (1/50)	13
第5図	基本層序模式図	15
第6図	南北土層縮尺図 (1/40 ↑ 1/400)	17・18
第7図	縄文時代晩期 Bトレンチ自然河川3肩 足跡 人間・鹿 (1/40)	24
第8図	縄文時代晩期 自然河川3出土遺物 (1/5)	25
第9図	縄文時代晩期 自然河川4出土遺物 (1/5)	26
第10図	縄文時代晩期 1Cトレンチ 自然河川4底 足跡 人間・鹿 (1/60)	27
第11図	第3黒色粘土層中出土遺物 (1/5)	28
第12図	弥生時代前期 2Bトレンチ 溝群 (1/80)	30
第13図	弥生時代前期 7Bトレンチ 溝1 (1/80)	31
第14図	弥生時代前期 2Bトレンチ 溝1中層 足跡 (1/40)	32
第15図	弥生時代前期 7Bトレンチ 溝1中層 足跡 (1/40)	33
第16図	弥生時代前期 溝1・2土層図 (1/60)	34
第17図	弥生時代前期 1Aトレンチ北セクション 溝1・2 堤 (1/40)	35・36
第18図	弥生時代前期 溝群模式図 (1/600)	37
第19図	弥生時代前期 溝4出土遺物 (1/4)	38
第20図	弥生時代前期 溝5出土遺物 (上1/2・下1/4)	40
第21図	第3黒色粘土層上面出土遺物 (1/4)	42
第22図	暗青灰色粘土層出土遺物① (上1/4・他1/2)	43
第23図	暗青灰色粘土層出土遺物② (1/2)	44
第24図	淡黒灰色粘土層出土遺物 (1/5)	44
第25図	弥生時代前期 自然河川・流水堆積出土遺物 (上1/3・下1/4)	46
第26図	弥生時代中期I 水田模式図 (1/600)	49
第27図	4Bトレンチ東セクション 弥生時代中期I～前期 人工河川、溝 (1/40)	50・51
第28図	弥生時代中期I 1Bトレンチ 水田面 鋤跡 (1/20)	54
第29図	弥生時代中期I面 出土遺物 (1/4)	55
図30第	弥生時代中期I 水田面耕作土出土遺物① (1/5)	55
図31第	弥生時代中期I 水田面耕作土出土遺物② (1/5)	56

第32図	弥生時代中期Ⅰ	人工河川底出土遺物 (1/2)	57
第33図	弥生時代中期Ⅰ	流水堆積出土遺物① (1/3)	57
第34図	弥生時代中期Ⅰ	流水堆積下層(水田面埋土)出土遺物② (1/4)	58
第35図	弥生時代後期Ⅰ	水田1、畦畔1・2 (1/80)	61・62
第36図	弥生時代後期Ⅰ	水田面1、畦畔1下出土遺物 (1/4)	64
第37図	弥生時代後期Ⅰ	流水堆積出土遺物① (上1/2・下1/4)	65
第38図	弥生時代後期Ⅰ	流水堆積出土遺物② (1/4)	66
第39図	弥生時代後期Ⅰ	流水堆積出土遺物③ (1/2)	67
第40図	弥生時代後期Ⅱ	溝1出土遺物 (1/4)	68
第41図	弥生時代後期Ⅱ	溝2土器出土状況① (1/20)	69
第42図	弥生時代後期Ⅱ	溝土器出土状況② (1/20)	71・72
第43図	弥生時代後期Ⅱ	溝2出土遺物① (1/4)	73
第44図	弥生時代後期Ⅱ	溝2出土遺物② (1/4)	74
第45図	弥生時代後期Ⅱ	溝2出土遺物③ (上1/4・下1/2)	75
第46図	弥生時代後期Ⅱ	溝2出土遺物④ (1/2)	76
第47図	弥生時代後期Ⅱ	溝2出土土器 タタキ拓本 (1/2)	76
第48図	弥生時代後期Ⅱ	包含層出土遺物 (1/4)	78
第49図	古墳時代後期	自然河川1出土遺物① (1/4)	80
第50図	古墳時代後期	自然河川1出土遺物② (1/4)	81
第51図	古墳時代後期	自然河川出土遺物 (1/4)	83
第52図	青灰色粘土層(古墳時代後期)	出土遺物 (1/4)	83
第53図	青灰色粘土層上面(古墳時代後期)	出土遺物 (1/4)	84
第54図	須恵器ヘラ	記号拓本 (1/2)	85
第55図	平安時代	土塙3出土遺物 (1/4)	86
第56図	平安時代	Bトレンチ 土塙・ピット群 (1/40)	87
第57図	平安時代面	出土遺物 (1/4)	88
第58図	中世層	出土遺物 (左1/4・右1/2)	90
第59図	黄褐色土層	出土遺物 (1/4)	90
第60図	灰褐色土層	出土遺物 (1/4)	91
第61図	近世	Bトレンチ 唐鋤跡、鋤跡、牛足跡 (1/30)	93
第62図	近世	振り揚げ田3出土遺物 (1/4)	94
第63図	近世・近代	井戸1・7・11出土遺物 (1/4)	94
第64図	近世・近代	2Bトレンチ 井戸1 (1/30)	95
第65図	近世・近代	井戸1出土遺物 (1/4)	96

第66図	近世・近代	6 B トレンチ	井戸群、足跡 (1/60)	97・98
第67図	近世・近代	6 B トレンチ	井戸 2 (1/30)	99
第68図	近世・近代	6 B トレンチ	井戸 3 (1/30)	100
第69図	近世・近代	井戸 4 出土遺物 (1/4)		101
第70図	近世・近代	8 B トレンチ	井戸 6 (1/30)	102
第71図	近世・近代	8 B トレンチ	井戸 7 (1/30)	103
第72図	近世・近代	13 B トレンチ	井戸 8 (1/30)	104
第73図	近世・近代	13 B トレンチ	井戸 8 枠中段木組 (1/30)	105
第74図	近世・近代	井戸 9 出土遺物 (1/4)		106
第75図	近世・近代	3 C トレンチ	井戸 12 (1/30)	107
第76図	近世・近代	13 B トレンチ	暗渠 1、竹筒暗渠 7 交叉部 (1/30)	109・110
第77図	近世・近代	12 B トレンチ	粘土採取穴、足跡 (1/30)	111
第78図	旧耕地出土遺物①	(1/4)		113
第79図	旧耕地出土遺物②	(1/4)		114
第80図	旧耕地出土遺物③	(1/4)		115
第81図	旧耕地出土遺物④	(1/4)		116
第82図	旧耕地出土遺物⑤	(1/2)		117
第83図	旧耕地出土遺物⑥	(1/4)		118

写真目次

写真 1	現地説明会 (1981年 2月11日)	6
写真 2	調査参加者	14
写真 3	1 C トレンチ西セクション 弥生時代中期 I ~ 縄文時代	22
写真 4	縄文時代晩期 1 A トレンチ 自然河川 I (断ち割りセクション)	23
写真 5	弥生時代前期 0 B トレンチ 溝 5 遺物出土状態 (土器 17・18、S. 2)	39
写真 6	近世・近代 12 B トレンチ 粘土採取穴 (南から)	108
土器・土製品一覧表		144~189

第6章 表・図目次

表1	山賀遺跡（その4）試料	花粉分析結果一覧表	127・128	
図1	試料採取土層断面図		125	
図2	山賀遺跡（その4）試料	主要花粉胞子化石	ダイアグラム	129・130
図3	山賀遺跡（その4）試料	主要樹木花粉化石	ダイアグラム	131・132

図版目次

図版1	縄文時代晩期	Bトレンチ	自然河川2底	足跡	人間・鹿	（南から）
図版2	縄文時代晩期	13Bトレンチ	自然河川4底	足跡	人間・鹿	（南から）
		1Cトレンチ	自然河川4底	足跡	人間・鹿	全景（南から）
図版3	縄文時代晩期	13Bトレンチ	自然河川4底	足跡	人間・鹿	全景（東から）
		Bトレンチ	自然河川2底	鹿足跡		（南東から）
図版4	縄文時代晩期	7Bトレンチ	自然河川2底	鹿足跡		（東から）
		1Cトレンチ	自然河川4底	鹿足跡		
図版5	縄文時代晩期	Bトレンチ	自然河川2底	人間足跡		（右）
		1Cトレンチ	自然河川4底	人間足跡		（左・右）
図版6	縄文時代晩期	1Cトレンチ	自然河川4底	鹿足跡		
		1Cトレンチ	自然河川4底	鹿足跡		
図版7	縄文時代晩期	Bトレンチ	自然河川2底	鹿足跡歩行状況		（西から）
図版8	縄文時代晩期	Bトレンチ	自然河川2	流木		（南西から）
		7Bトレンチ	第3黒色粘土層中	縄文土器甕（4）出土状況		（南から）
図版9	弥生時代前期	1Aトレンチ	溝2	全景		（東から）
		4Bトレンチ	溝8・9	人工河川	全景	（南から）
図版10	弥生時代前期	2Bトレンチ	溝1・2・7	全景		（南から）
		2Bトレンチ	溝2			（南から）
図版11	弥生時代前期	7Bトレンチ	溝1	全景		（東から）
		7Bトレンチ	溝1			（南西から）
図版12	弥生時代前期	2Bトレンチ	溝2北端	底部足跡	人間・鹿	（南から）
		2Bトレンチ	溝2中央部	中層足跡	人間・鹿	（南から）

- 図版13 弥生時代前期 7 Bトレンチ 溝1 中層足跡 人間・鹿 全景 (東から)
7 Bトレンチ 溝1 中層足跡と土層 (南西から)
- 図版14 弥生時代前期 7 Bトレンチ 溝1 中層足跡 人間・鹿 (南西から)
7 Bトレンチ 溝1 中層 人間足跡 (南東から)
- 図版15 弥生時代前期 1 Aトレンチ 溝2 南セクション (北から)
2 Bトレンチ 溝2 南セクション (北から)
- 図版16 弥生時代前期 1 Bトレンチ 溝6 北セクション (南西から)
7 Bトレンチ 溝1 中央セクション (南西から)
- 図版17 弥生時代前期 1 Aトレンチ 北セクション 溝1・2間の堤 (南から)
4 Bトレンチ 東セクション 溝8の堤 (西から)
- 図版18 縄文時代晩期 7 Bトレンチ 自然河川3底 杭(W.1) 出土状況 (東から)
弥生時代前期 10 Bトレンチ 第3黒色粘土層上面 土器(5) 出土状況
- 図版19 弥生時代中期Ⅰ Bトレンチ 水田、畦畔 (北から)
- 図版20 弥生時代中期Ⅰ Bトレンチ 水田、畦畔 (西から)
Bトレンチ 水田、畦畔 人間足跡・鋤跡 (東から)
- 図版21 弥生時代中期Ⅰ Bトレンチ 水田、畦畔 人間足跡・鋤跡 (東から)
Bトレンチ 水田、畦畔 鋤跡 (東から)
- 図版22 弥生時代中期Ⅰ Bトレンチ 水田、畦畔 (北西から)
Bトレンチ 水田、畦畔 鋤跡 (北西から)
- 図版23 弥生時代中期Ⅰ 6 Bトレンチ 水田、畦畔 鋤跡 全景 (東から)
6 Bトレンチ 水田、畦畔と水口 鋤跡 (南西から)
- 図版24 弥生時代中期Ⅰ 7 Bトレンチ 水田、畦畔 全景 (東から)
7 Bトレンチ 水田、畦畔 (南東から)
- 図版25 弥生時代中期Ⅰ 8 Bトレンチ 水田、畦畔 全景 (東から)
8 Bトレンチ 洪水で破壊された水田面と北セクション (南から)
- 図版26 弥生時代中期Ⅰ 7 Bトレンチ 畦畔水口、溜池状遺構 (南西から)
8 Bトレンチ 畦畔 (北東から)
- 図版27 弥生時代中期Ⅰ 7 Bトレンチ 大畦畔セクション (北西から)
7 Bトレンチ 大・小畦畔セクション (北西から)
- 図版28 弥生時代中期Ⅰ Bトレンチ 水田面、鋤跡 (東から)
6 Bトレンチ 水田面、鋤跡 (南西から)
- 図版29 弥生時代中期Ⅰ 6 Bトレンチ 小畦畔上の鋤跡 (北から)
6 Bトレンチ 小畦畔上の鋤跡 (北東から)
- 図版30 弥生時代中期Ⅰ 4 Bトレンチ 人工河川、堤、溝 全景 (西から)

- 4 B トレンチ 人工河川、堤、溝 全景 (南から)
- 図版31 弥生時代中期 I 3 B トレンチ 人工河川 足跡 (東から)
- 3 B トレンチ 堤の水口 (北西から)
- 図版32 弥生時代中期 I 4 B トレンチ 堤の水口、溝 (北西から)
- 4 B トレンチ 人工河川、堤、溝 東セクション (西から)
- 図版33 弥生時代中期 II B トレンチ 人間 足跡 (北から)
- 図版34 弥生時代中期 II B トレンチ 人間 足跡 (北東から)
- B トレンチ 人間 足跡 (東から)
- 図版35 弥生時代中期 II B トレンチ 人間 足跡 歩行状況 (南東から)
- 図版36 弥生時代中期 II B トレンチ 人間 足跡 歩行状況 (北西から)
- 図版37 弥生時代中期 II 13B トレンチ 人間 足跡 歩行状況 (東から)
- 図版38 弥生時代後期 I 12B トレンチ 水田1、畦畔1・2 全景 (南から)
- 12B トレンチ 畦畔1 (南西から)
- 図版39 弥生時代後期 I 11B トレンチ 水田耕作土下 植物堆積
- 12B トレンチ 水田1耕作土下 植物堆積 (北西から)
- 図版40 弥生時代後期 I 11B トレンチ 畦畔3セクション (南東から)
- 12B トレンチ 畦畔1セクション (南西から)
- 図版41 弥生時代後期 I 2 B トレンチ 流水堆積と人間足跡 全景 (西から)
- 13B トレンチ 流水堆積中 石庖丁(S6)出土状況
- 図版42 弥生時代後期 II B トレンチ 溝1・2 (南から)
- 図版43 弥生時代後期 II B トレンチ 溝1・2 (南東から)
- B トレンチ 溝1 (南東から)
- 図版44 弥生時代後期 II B トレンチ 溝1・2 土器出土状況 (東から)
- 4 B トレンチ 溝3・4・5・6・7 (南から)
- 図版45 弥生時代後期 II 6 B トレンチ 溝3・4・5 全景 (南から)
- 8 B トレンチ 溝3・4・5・9 全景 (東から)
- 図版46 弥生時代後期 II B トレンチ 溝11 (東から)
- 12B トレンチ 溝11 (南から)
- 図版47 古墳時代後期 B トレンチ 自然河川1 全景 (南東から)
- 図版48 古墳時代後期 B トレンチ 自然河川1 (北から)
- B トレンチ 自然河川1 (南東から)
- 図版49 古墳時代後期 B トレンチ 自然河川1底 足跡 人間・牛・馬 (南西から)
- B トレンチ 自然河川1底 足跡 人間・牛・馬 (南西から)
- 図版50 古墳時代後期 D トレンチ 自然河川底 足跡 人間・牛 (東から)

		Bトレンチ	自然河川1底 足跡 鹿・牛
図版51	古墳時代後期	11Bトレンチ	自然河川2人間足跡 全景 (南から)
図版52	古墳時代後期	4Bトレンチ	自然河川底 足跡 人間・牛 全景 (南から)
		3Cトレンチ	自然河川底 人間足跡 (北から)
図版53	平安時代	7Bトレンチ	足跡 人間・牛・鹿 全景 (南から)
		7Bトレンチ	須恵器(226)出土状況 (東から)
図版54	平安時代	7Bトレンチ	足跡 人間・牛・鹿
図版55	中世	7Bトレンチ	ステップ状遺構と足跡 人間・牛 全景 (南から)
図版56	中世	11Bトレンチ	畦畔 全景 (北から)
		13Bトレンチ	土壌 全景 (南から)
図版57	近世	Bトレンチ	道路遺構、溝1 人間足跡 (南東から)
図版58	近世	Bトレンチ	耕作溝、唐鋤跡、鋤跡、牛足跡 (東から)
		Bトレンチ	耕作溝、唐鋤跡、鋤跡、牛足跡 (北西から)
図版59	近世	4Bトレンチ	耕作溝 全景 (南から)
図版60	近世・近代	8Bトレンチ	耕作溝、人間足跡、井戸6・7、竹筒暗渠5 全景 (東から)
		3Cトレンチ	掻き揚げ田4、暗渠1、竹筒暗渠9 (東から)
図版61	近世・近代	2Bトレンチ	掻き揚げ田1 北セクション (南から)
		10Bトレンチ	耕作溝 東セクション (西から)
図版62	近世・近代	4Bトレンチ	鋤跡 (北西から)
図版63	近世・近代	12Bトレンチ	人間足跡 (右足)
		12Bトレンチ	人間足跡 (右足)
図版64	近世・近代	10Bトレンチ	耕作溝、鹿足跡 (東から)
		10Bトレンチ	鹿足跡
図版65	近世・近代	10Bトレンチ	鹿足跡
		10Bトレンチ	鹿足跡
図版66	近世・近代	2Bトレンチ	井戸1 (北から)
		2Bトレンチ	井戸1 枠内 鍬身(W.7)出土状況 (北から)
図版67	近世・近代	6Bトレンチ	井戸群(井戸2・3・4・5)全景 (東から)
		6Bトレンチ	井戸3 二・三段目井筒 (東から)
図版68	近代・近代	6Bトレンチ	井戸3 二・三段井筒 (東から)
		6Bトレンチ	井戸3 最下段井筒 (南西から)
図版69	近世・近代	13Bトレンチ	井戸8 中段木組み枠 (東から)
		13Bトレンチ	井戸8 中段木組み枠 (南から)
図版70	近世・近代	13Bトレンチ	井戸8 中段・下段木組み枠 (南から)

- 3 C トレンチ 扱き揚げ田 4 耕作溝、井戸12 (北から)
- 図版71 近世・近代 2 B トレンチ 竹筒暗渠 2 全景 (西から)
13B トレンチ 暗渠 1、竹筒暗渠 7 全景 (南から)
- 図版72 近世・近代 13B トレンチ 竹筒暗渠 7 (東から)
- 図版73 近世・近代 13B トレンチ 暗渠交叉部分 (北から)
13B トレンチ 西セクション 竹筒暗渠 7、扱き揚げ田 2 (東から)
- 図版74 縄文時代晩期 C トレンチ 自然河川 4 底出土土器 (約1/2)
- 図版75 縄文時代晩期 7 B トレンチ 第 3 黒色粘土層中出土土器 (約1/2)
- 図版76 弥生時代前期 7 B トレンチ 流水堆積出土土器 (約1/2)
- 図版77 縄文時代晩期 自然河川、弥生時代前期 自然河川他出土土器 (約1/2)
- 図版78 弥生時代前期 10B トレンチ 第 3 黒色粘土層上面出土土器 (約1/2)
- 図版79 弥生時代前期 0 B トレンチ 溝 5 出土土器 (約1/2)
- 図版80 弥生時代前期 出土土器
- 図版81 弥生時代中期 I 流水堆積 (水田面埋土)、弥生時代後期 II 溝 1 出土土器
- 図版82 弥生時代後期 II B トレンチ 溝 1・2 出土土器 (約1/2)
- 図版83 弥生時代後期 II B トレンチ 溝 2 出土土器 (約1/2)
- 図版84 弥生時代後期 II B トレンチ 溝 2 出土土器 (約1/2)
- 図版85 弥生時代後期 II B トレンチ 溝 2 出土土器 (約1/2)
- 図版86 弥生時代後期 II 包含層、古墳時代後期 自然河川 1 他出土土器 (約1/2)
- 図版87 古墳時代後期 B トレンチ 自然河川 1 出土土器 (約1/2)
- 図版88 古墳時代後期、平安時代、中世、近世・近代層他出土土器
- 図版89 近世・近代層他出土土器 (約1/2)
- 図版90 近世・近代層出土土器、土製品
- 図版91 弥生時代後期土器底部 (約1/2)
- 図版92 弥生時代中期 I 水田面耕作土出土木器 (約1/2)
- 図版93 弥生時代、近世 木器
- 図版94 弥生時代 石器・土製品
- 図版95 人間足跡、鋤跡石膏型
- 図版96 動物足跡石膏型 (約1/2)

付 図 目 次

付図1	縄文時代晩期	全体図① (1/200)
付図2	縄文時代晩期	全体図② (1/200)
付図3	縄文時代晩期	Cトレンチ 自然河川4底 人間・鹿足跡 (1/20)
付図4	弥生時代前期	全体図① (1/200)
付図5	弥生時代前期	全体図② (1/200)
付図6	弥生時代中期 I	全体図① (1/200)
付図7	弥生時代中期 I	全体図② (1/200)
付図8	弥生時代中期 I	水田面 (1/100)
付図9	弥生時代中期 I	水田面コンターライン (1/100)
付図10	弥生時代中期 II	B・Cトレンチ 人間足跡 (1/20)
付図11	弥生時代後期 I	全体図① (1/200)
付図12	弥生時代後期 I	全体図② (1/200)
付図13	弥生時代後期 II	全体図① (1/200)
付図14	弥生時代後期 II	全体図② (1/200)
付図15	古墳時代後期	全体図① (1/200)
付図16	古墳時代後期	全体図② (1/200)
付図17	古代・中世	全体図① (1/200)
付図18	古代・中世	全体図② (1/200)
付図19	近世・近代	全体図① (1/200)
付図20	近世・近代	全体図② (1/200)

第1章 はじめに

山賀遺跡は、近畿自動車道天理～吹田線建設予定地内松原J.C.～東大阪I.C.13.5Km区間に存在する長原、城山、亀井、久宝寺、佐堂、美園、友井東、山賀、若江北、巨摩廃寺、瓜生堂、西岩田、新家の13遺跡の内、最も古くから人々の生活の場となった、いわば、平野開拓の最古の集落跡で、大阪府東大阪市若江南町5丁目、八尾市新家町3～4丁目に所在する。

近畿自動車道天理～吹田線建設予定地内13遺跡の取り扱いについては、昭和46年以来、大阪府教育委員会と日本道路公団大阪建設局を中心として協議を重ねてきたが、昭和48年になって、当該路線の存在する河内平野の特殊性を考慮し、周知されていた9遺跡（亀井、久宝寺、友井東、山賀、若江北、巨摩廃寺、瓜生堂、西岩田、新家）について路線内の範囲確認と、埋没深度の把握、調査経費及び調査期間の算出根拠を得る為の第1次発掘調査を実施することで協議が整い、この調査を（財）大阪文化財センターで実施することになった。調査は、5m×5mのグリッドを45ヶ所（1遺跡平均5ヶ所）発掘調査を実施するものであり、48年度内に総て完了するのは無理であったため、48年度は亀井、久宝寺、友井東の3遺跡について実施し、49年度に山賀、若江北・巨摩廃寺、瓜生堂、西岩田、新家の6遺跡について実施することになった。これら2ヶ年度にわたる第1次発掘調査の結果は、それぞれ『亀井遺跡他2遺跡第1次発掘調査報告書』『瓜生堂遺跡他5遺跡第1次発掘調査報告書』として、（財）大阪文化財センターより刊行された。

さらに、同年、大阪市交通局が建設工事を進めていた高速電気軌道第2号線建設予定地内の中、大阪中央環状線にかかる平野区長吉出戸町、同長吉長原及び長吉川辺町地内については、遺跡の存在する可能性の極めて強い地点ということから、工事に先立って試掘調査を実施する必要があるとの行政指導が大阪府教育委員会から打ち出され、大阪市交通局は、（財）大阪文化財センターに調査の委託をすることになった。この結果、長原遺跡、城山遺跡の2遺跡が新たに発見され、昭和49年5月、（財）大阪文化財センターより『中央環状線内埋蔵文化財試掘調査報告書』として刊行された。

また、昭和50年には、大阪瓦斯株式会社が切り換えを進めていた天然ガスパイプラインとしての河内ラインガス導管が、前述の城山遺跡及び久宝寺遺跡の範囲内に布設されることとなり、これに伴う試掘調査も、（財）大阪文化財センターによって実施されることとなった。この結果、城山遺跡の北限を一応確認すると共に、久宝寺遺跡の範囲も確認することとなった。

一方、当該河内ラインガス導管の布設にかかる八尾市美園町部分については、大阪府教育委員会によって発掘調査が実施され、美園遺跡が確認されることとなった。

以上の様に、主要地方道大阪中央環状線隣接地での各種の工事に先立つ調査及び、近畿自動車道関連の一連の第一次発掘調査の結果により、当該自動車道建設予定地内における遺跡の概略が把握されたのである。



第1図 山賀遺跡位置図 (1/40000)

これらの事実を踏まえて、大阪府教育委員会と日本道路公団は、さらに協議を重ねた結果、基本的には発掘調査の結果を尊重し、設計や工法を検討しながら橋脚位置を決定し、オール高架の道路を建設していくということで合意した。

上記合意に基づき、日本道路公団は、文化庁へ、文化財保護法に基づく協議文書を提出し、文化庁から、事前の発掘調査の徹底と、遺構の保存に十分配慮すべき旨の回答を受けた。ここにおいて大阪府教育委員会は、現地における発掘調査について(財)大阪文化財センターに協力を求めることとし、日本道路公団大阪建設局を含めた三者によって昭和51年4月、調査に関する協定を締結した。

そして、昭和51年7月、最南端に所在する長原遺跡の調査について上記の協定に基づいて三者で契約を締結し、現地調査に着手した。その後、長原遺跡の調査は、古墳群の発見や、掘立柱建物群の発見により、文化庁の回答の精神を踏まえて保存策が講じられ、撤回にわたって設計変更に伴う契約変更を重ねながら、昭和53年3月に現地における発掘調査を終了し、同年5月概要報告書作成作業を完了して、概要報告書『長原』を刊行した。

この長原遺跡の調査の終了を待って、残る12遺跡の調査について、一応の調査目標を昭和58年度末とする、5ヶ年計画を作成すると共に、長原遺跡での設計変更の繰り返し及び調査面積の拡大、期間の延長、経費の増加等々反省する点が多かったことから調査方法の再検討を行なった。その結果建設される道路は高架道路であること、沖積平野上の遺跡の特殊性としての埋没深度の深いこと、発掘作業の安全性の確保及び、調査期間や調査費用を考慮して、いわゆる“トレンチ調査方式”を採用することとなった。“トレンチ調査方式”とは、路線の全面発掘調査より、現況保存を優先した必要最小限度の調査を目的として、発掘面積を極力限定すると共に、主要な遺構の存在する部分の保護、保存をも併せて可能とする沖積平野発掘調査の新しい試みであった。

この調査方式をもって、昭和53年2月には瓜生堂遺跡、昭和53年11月には巨摩摩寺遺跡、昭和54年4月には西岩田遺跡、昭和54年7月には新家遺跡、若江北遺跡、友井東遺跡、亀井遺跡等々順次道路の供用工程及び他の関連公共施設整備計画に基づいて調査に着手してきた。

すでに上記7遺跡の発掘調査は無事その目的を果たして終了し『瓜生堂』『巨摩・瓜生堂』等々として概要報告書の刊行をみているところである。

山賀遺跡は、昭和46年度に大阪府都市河川課及び寝屋川改修工営所の事業として実施された楠根川改修工事によって、その掘削残土の中に多量の弥生式土器や石器が含まれていることを、当時、奈良教育大学学生だった尾崎氏が発見され、瓜生堂遺跡調査会が事前の発掘調査を実施していた中央南幹線下水管渠築造工事に伴う掘削残土ではないかとの連絡を、当時、同調査会の調査主任であった筆者が受けた。調査会の発掘調査は、弥生時代中期を中心とした時期の調査であり、また当時としては、高い問題意識にささえられた正確さをモットーとして実施しており、あらゆる嫌疑をかけられたと一同腹立たしく思いながらも、弥生時代前期の土器が多量に含まれていることに注目し、現地へ行ったのである。現地は田甫を埋めた状態の残土捨て場であり、お

現地調査に着手したのである。その後、トレンチ部調査から切掛け部の調査と、各々の調査区で調査が進捗するにつれ、数回にわたる設計変更に伴う契約変更を繰り返しながら（その2）調査区は昭和57年3月、（その4）調査区は同年5月に現地における発掘調査を終えて完了した。

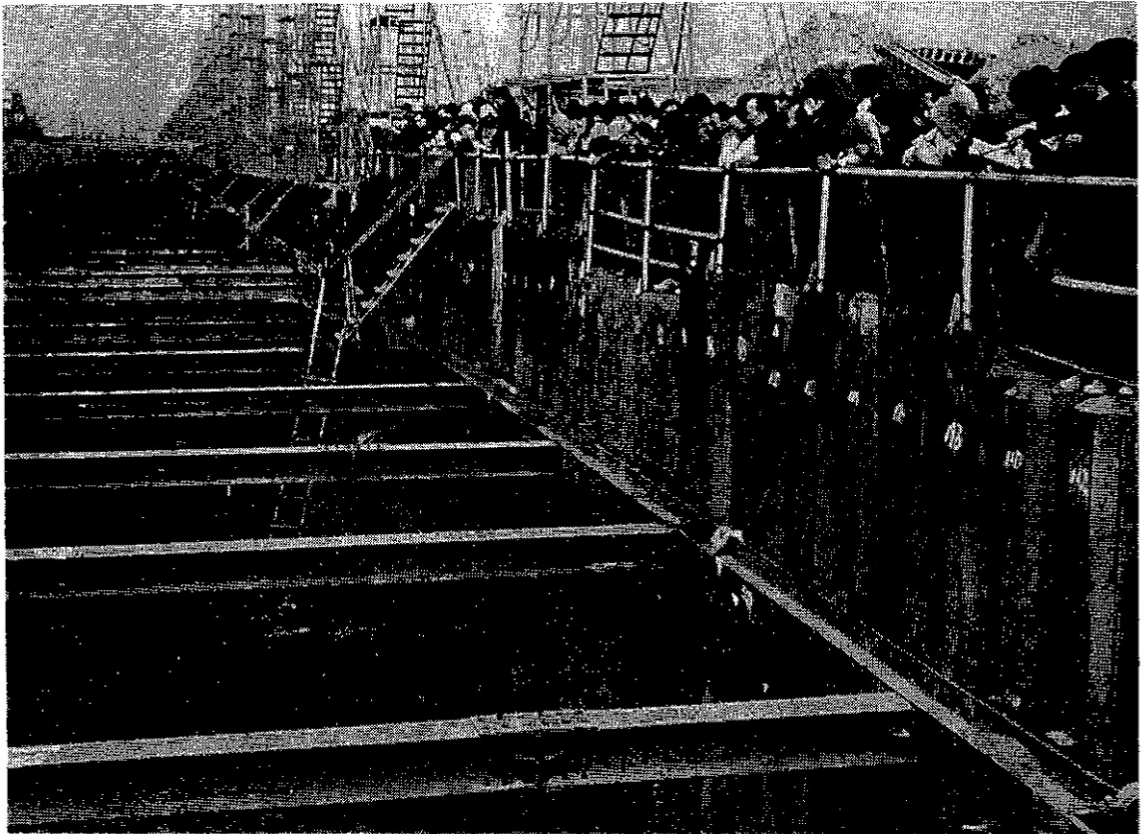


写真1 現地説明会（1981年2月11日）

第2章 地域的環境

山賀遺跡は河内平野のほぼ中央に位置し、北側は若江北、南側は友井東遺跡に接している。河内平野は生駒山地に東側を、上町台地に西側を挟まれて、旧大和川及びその支流河川による土砂の堆積作用によって形成された典型的な沖積平野である。細かく地形を見れば、多くの自然堤防・氾濫原及び潟湖性低地に分けることができる。標高は現在でも4～5mと低く、古代から現在に至るまで人間にとって水利は大きな問題であった。

この地域は旧石器時代から縄文時代中期頃にかけて、古大阪湾から河内湾の頃で、瀬戸内海と連なっており、海水が入り込んだ大きな内湾を呈していた。現在の和川付近にまで海水が及んでおり、時間をかけてゆっくりと湾岸が北進してゆく時代である。旧石器時代の遺跡はそれ程顕著ではなく、東大阪市の生駒山麓付近で数ヶ所が知られている他、長原遺跡（大阪市）では舟底形石器、若江北遺跡では翼状剝片が検出されているが、いずれも後世の土層からの出土である。縄文時代になると、生駒山麓付近で神宮寺遺跡（交野市）、神並遺跡（東大阪市）、田原遺跡（四条畷）、恩智遺跡（八尾市）、馬場川・縄手遺跡（東大阪市）などが点在する。この頃はまだ本遺跡は海水下に没している。

縄文時代後・晩期になると海退期に入り、湾岸線がさらに北上し、河川の沖積作用を伴いつつ、河内潟の時代になる。この頃以降になってようやく本遺跡周辺の河内平野中央部は陸地化していく。低湿地として、幾度かの土砂堆積に覆われて不安定ながらも人間の居住への足がかりが付けられる。本遺跡でも縄文時代晩期になると、陸地化・水没の過程を幾度かくり返しながら、流水堆積作用により晩期前半及び末葉には湿原状の葦原になっていたようである。また、浅い河川状の流れがあり、鹿の足跡が見られる。生駒山麓からこの地域周辺が彼等の生活エリアに含まれており、水飲み場のテリトリーとなっていたのであろう。また、生活の痕跡はなかったが、人間の足跡も同時に刻されている。土器も出土しているところから、人間にとってはハンティングゾーンとして利用されていたと考えられる。山麓の恩智・馬場川遺跡、南方台地上の長原遺跡、上町台地東端の森の宮遺跡などからは至近距離にあり、1日の行程で充分の猟果をあげ得るであろう。縄文時代後・晩期の遺跡は増加するが、低湿地帯ではまだ上述のような状態で、明確な生活痕はみられない。生駒山麓部では前代に引き続いて恩智・馬場川遺跡を始め、岡山遺跡（四条畷市）、日下遺跡（東大阪市）が、上町台地では森の宮遺跡（大阪市）、南方台地上では長原遺跡、船橋遺跡（柏原市）等が営まれる。

水田耕作技術が伝来し、弥生時代に入ると集落の立地にも変化が見られ、ようやく河内平野の低湿地帯に人間が居住・生産の場を構えるようになる。前期の遺跡は、山麓部では中垣内遺跡（大東市）、鬼塚・鬼虎川遺跡（東大阪市）、上町台地及び南部では瓜破・長原遺跡（大阪市）、船橋・国府遺跡（藤井寺市）等が立地する。平野部でも、本遺跡を始めとして瓜生堂・巨摩麿寺



第3図 周辺遺跡分布図 (1/75000)

1	木間池北方遺跡	35	日下貝塚	69	池島遺跡	103	玉串遺跡
2	城遺跡	36	馬場遺跡	70	コモ田遺跡	104	小若江遺跡
3	高瀬寺跡	37	日下神社古墳	71	北屋敷遺跡	105	弥刀遺跡
4	東光寺二丁目遺跡	38	正方寺山遺跡	72	半堂遺跡	106	友井東遺跡
5	馬場町遺跡	39	辻子谷古墳群	73	西代遺跡	107	美園遺跡
6	長池町遺跡	40	千手寺山遺跡	74	馬場川遺跡	108	衣摺遺跡
7	文園町遺跡	41	墓尾古墳群	75	具花遺跡	109	加美北遺跡
8	北口遺跡	42	芝遺跡	76	えびじ遺跡	110	佐堂遺跡
9	北条西遺跡	43	法通寺跡	77	萩山遺跡	111	宮町遺跡
10	北条遺跡	44	灰塚堂田遺跡	78	大竹西遺跡	112	東郷遺跡
11	北条東古墳群	45	額田山古墳群	79	太田川床遺跡	113	万願寺遺跡
12	森小路遺跡	46	植附遺跡	80	大竹遺跡	114	加美遺跡
13	上三ヶ遺跡	47	若宮古墳群	81	水越遺跡	115	久宝寺遺跡
14	ヤタ山古墳	48	みかん山古墳群	82	郡川遺跡	116	小阪合遺跡
15	野崎遺跡	49	鬼虎川遺跡	83	高安千塚古墳群	117	平野野堂遺跡
16	メノコ遺跡	50	西ノ辻遺跡	84	岩戸古墳群	118	亀井遺跡
17	福蓮寺遺跡	51	古下遺跡	85	信貴靈苑内古墳	119	中田遺跡
18	瓦 堂	52	鬼塚遺跡	86	恩智遺跡	120	瓜破北遺跡
19	寺川古墳群	53	鶉立遺跡	87	神宮寺跡	121	瓜破遺跡
20	竜間ハンサカ遺跡	54	出雲井古墳群	88	大光寺山遺跡	122	長吉野山遺跡
21	滝間遺跡	55	皿池遺跡	89	高尾山遺跡	123	長原遺跡
22	太鼓山遺跡	56	客坊山廃寺跡	90	平尾山千塚古墳群	124	老原遺跡
23	国見高地性遺跡	57	山畑遺跡	91	高井田遺跡	125	東弓削遺跡
24	若宮遺跡	58	山畑古墳群	92	大今里遺跡	126	木の本遺跡
25	元粉遺跡	59	鉢伏遺跡	93	契中遺跡・妙法寺境内	127	菌光寺遺跡
26	鍋田川遺跡	60	五里山古墳	94	新家遺跡		
27	中垣内遺跡	61	五合田遺跡	95	意岐部遺跡		
28	坊主山遺跡	62	北烏池遺跡	96	西岩田遺跡		
29	善根寺遺跡	63	縄手遺跡	97	岩田遺跡		
30	池端遺跡	64	幸殿遺跡	98	瓜生堂遺跡		
31	茨田安田遺跡	65	岩滝山遺跡	99	巨摩廃寺遺跡		
32	今福遺跡	66	下六万寺遺跡	100	若江北遺跡		
33	西瀧池遺跡	67	段上遺跡	101	上小阪遺跡		
34	加納遺跡	68	船山遺跡	102	山賀遺跡		

・若江北・美園・亀井遺跡が出現する。これら平野部の諸遺跡は弥生時代中期には、陸地がさらに拡大し、土地が安定度を増すと共に大規模に拡大していく。まとまった一定レベルの技術（治水・灌漑・耕作法・農具等）を伴う水田が開発され、集落、墓地も整備されて、河内の中心地として高レベルの文化を創る。この頃の開発・整備が、後の発展——5世紀代のいわゆる河内政権のバックボーンとして、あるいはさらに降って大国としての河内国——への礎を築いたと言える。

中期には上記遺跡の他、新たに山麓部では西ノ辻・山畑・縄手遺跡（東大阪市）、高尾山遺跡（柏原市）が、上町台地部では桑津・山之内・遠里小野遺跡（大阪市）、また平野南部に中田・東弓削遺跡（八尾市）等が出現する。

弥生時代後期には、旧大和川・淀川の沖積作用が進み、河内潟がさらに淡水化し河内湖の時期を迎える。但し、この前後の時期に平野中央部では瓜生堂・巨摩廃寺・若江北・山賀・友井東遺跡では、一帯が砂に覆われる状態が見られ、陸地化が進んだとは言えまだ不安定さを残す一面を窺わせる。また、この時期には上記の状況を反映してか、平野中央部で遺跡の縮小化がみられる。一方では山麓部で芝ヶ丘・岩滝山・日下遺跡（東大阪市）や大泉遺跡（柏原市）などのように高地性集落の成立もある。平野部及び台地部では、友井東・八尾南・久宝寺遺跡（八尾市）、加美遺跡（大阪市）がある。山賀遺跡では水田・しがらみ等の生産関係の遺構が目立ち、集落の中心からはややはずれている。

古墳時代になると、まだ若干不安定な様相を残しながらも、西岩田・小若江遺跡（東大阪市）、佐堂・久宝寺・八尾南・中田遺跡（八尾市）などが営まれ、巨摩廃寺・若江北遺跡では方形区画に近い、前代より整備された水田が出現する。一方八尾市の山麓に近い扇状地上には前期の後半代に西ノ山・花岡山・向山古墳の3基の前方後円墳が築かれる。前期末から中期初頭には美園古墳、長原塚ノ本古墳が、さらに南で古市古墳群が造営を開始する。

中期以降には新家遺跡においても地形が安定してきており、前代までの大規模洪水による被害はほとんど見られなくなり、新家・西岩田・友井東遺跡などでは前代から継続している。平野中央部から南部にかけては、巨摩・山賀・亀井古墳や長原古墳群の様に従来知られていなかった地域に小型古墳が築かれ、その多くは埴輪を伴っている。また、瓜生堂遺跡でも円筒埴輪が検出されている。新家・西岩田・山賀・八尾南遺跡など、内陸部の集落に製塩土器の検出例が増加している。後期には横穴式石室をもつ群集墳が出現し、生駒山麓の東大阪市から柏原市にかけて高安・平尾山千塚を始めとする古墳群が爆発的に形成され、高井田横穴群等と共に7世紀代に造営が及んで、一大墳墓地帯となる。また、長原遺跡では方形の小区画の水田が古墳に近接して営まれている。

律令期に入ると、本遺跡周辺は若江郡に属する。西岩田・瓜生堂遺跡では奈良時代の掘立柱建物が、西岩田遺跡では引き続き平安時代にも営まれている。『続日本紀』には、奈良時代に河内国が数度の飢饉・洪水に見舞われた記事が散見でき、不安定な時期であった。

古代末～中世にかけては、巨摩廃寺・若江北・美園・佐堂・長原遺跡で集落が営まれる。また、土地区面の条里遺構が友井東・美園遺跡で検出され、現地表に残る条里と合致する方向性をもつものは中世期にまで遡ることが確認されている。西岩田遺跡などでは、古墳・奈良時代の遺構と共に中世の遺構が検出され、前代の遺構は削平を受けていることから、中世に大きな工事——条里の施行、または再区画のような——が行われた可能性もある。本遺跡及び友井東遺跡では水田畦畔が確認されており、池島町条里（東大阪市）でも杭列・水田が検出されている。

江戸時代前半の宝永元年（1704）に大和川の付け替え工事が行われ、従来の石川との合流地点から北流していた旧大和川を、現在の様に台地に沿って西流させ大阪湾に流すようになった。この工事によって、旧河川敷や低湿地では、鴻池新田など多くの大規模な新田開発が行われた。低湿地で放置されていた土地が水田化し、旧大和川の運んだ砂地では畑が増え、本遺跡で検出した耕作溝や掻き揚げ田などが顕著になり、木綿の栽培が盛んになった。後章の花粉分析の結果からも、木綿の生産は裏付けられた。また、畑地の増加に伴うように井戸が多数掘削され、地下含水量の豊富な砂層に達するものが多い。本遺跡を始め、多数の井戸が検出され、井筒の種類もバリエーションに富んでいる。後述の様に唐鋤跡と共に牛の歩行状態を示す足跡が確認され、一昔前の農村風景が展開していたと考えられる。また、畑の畝には鹿などの足跡も見られる。この様に、本地域が、米作・畑作・木綿生産という集約化農業にいち早く取り組み、木綿など商品作物を多量に生産した結果、河内平野は近世において農業先進地となり、上方の流通経済の一翼を担ったのである。木綿は“河内木綿”として近代まで重要な商品となっていた。集落は本調査ではほとんど検出しなかったが、これは調査区が現代に至るまで生産地帯として利用された為であり、近世の村は基本的に旧村と重っている。

近代以降も、本地区は近世以来の生産地帯を引き継いでおり、水田又は畑地であった。但し、第2次大戦中に畑地増加策に伴って、水利の竹筒暗渠が昭和17年頃に設けられている。この方向性も近世以来の条里地割りに沿っている。

以上の様に、山賀遺跡周辺は各期の遺跡が分布している。また、生産関係の遺跡——水田跡などは今後も増加していくであろう。これら諸遺跡と共に、山賀遺跡で今回検出した、特に生産関係の各期の遺構は河内平野の歴史を多面的に解明できる鍵を握っていると考えられる。

第3章 調査の目的と方法

第1節 調査の目的と方法

試掘調査、あるいは周辺の調査結果は、本調査区が集落の中心部からややはずれていることを示している。しかし、従来の弥生時代集落域中心の調査から予想されていた生産域の確認、あるいは集落周辺の土地利用の検討が進んでいる現状では、当然集落をめぐる諸環境の一端として、本調査区を捉えるべきであろう。即ち、当遺跡における弥生時代集落を検討する中で、切り離すことのできない生産域の有無の確認、及びそれらの相互関連性を推定し得る資料の確認が、調査を始めるにあたっての、我々の大きな課題であった。

また、従来弥生時代の遺跡として注目されてきた傾向のある本遺跡について、弥生時代以前及び以後の各時代における遺構・遺物の有無の確認、即ち山賀遺跡の現在に至るまでの変遷過程を跡づけることは、本遺跡の構造を理解するためには必要条件の作業である。また、このことは今後の調査が本遺跡において、初の本格調査である点でも、我々に与えられた課題といえよう。

さらに、今回の調査では、いわゆる現地での考古学的方法による発掘調査だけでなく、関連する各自然科学分野——花粉・顔料・樹種・石材・農業土壌・足跡の同定、鑑定等——からの参加も得て、当時の環境、生活、生産の復原にも努めた。

現地調査は、大阪府教育委員会から数名の派遣をも得て、(財)大阪文化財センターが担当・実施した。なお、調査作業のうち、機械・人力掘削、土止め支保工を始め準備工事等は、調査に伴う補助作業として土木施工業者に請け負わせる形で実施した。

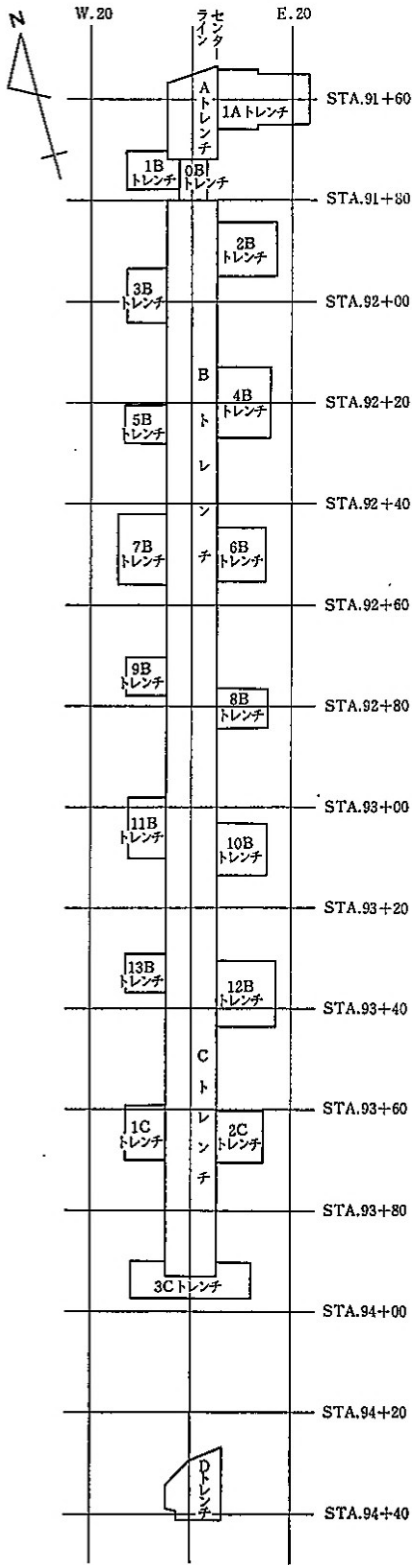
本遺跡では、埋没深度が試掘調査によっても、現地表面下4.5mと深く、湧水等も激しいところから、各トレンチ、拡張部トレンチ（橋脚予定位置）ともに鋼矢板を用いて土止めし、仕切る方法がとられた。さらに、安全管理に万全を期すため、鋼矢板のたわみが生じないように切梁腹起し材を使用した。

また、中央環状線を通る自動車の騒音・排気ガス等からの保護の為、調査区周辺に立入防止柵・ネットフェンス及びガードレールを設置した。

機械掘削には、中央環状線建設時の盛土除去のためにバックホーを使用し、調査終了後の埋めもどしにも用いた。

第2節 地区割りとトレンチの配置

本調査区は、中央環状線の八尾市新家町の交差点から、東大阪市金物田地交差点のすぐ南までを対象とする。調査はトレンチ部と拡張部分に分れる。新家町交差点から金物田地交差点までを北



第4図 トレンチ配置図 (1/450)

からA・B・Cトレンチ、交差点南部分をDトレンチとする。A～Cトレンチ部については拡張部のトレンチを設けた。

Aトレンチは幅10m、南北長西側は14.1m、同東側は16.85mの変形の四角形である。Bトレンチは幅10m、南北長160mの長方形。Cトレンチは幅10m、南北長53mの長方形。Dトレンチは最大幅11.1m、南北長東側は14.1mの変形の多角形である。

拡張部は、Aトレンチ部では東側に1、Bトレンチ部は西側に7、東側に6、Aトレンチとの間に1、Cトレンチ部は東西各1と南側に1箇所拡張部トレンチを設置した。拡張部トレンチの呼称は、基本的に西側を奇数、東側を偶数番号とし、各トレンチ部北西側から順次番号を付けた。

1 Aトレンチは幅18.0m、西側長12m、東側長10mの変形T字形。0 BトレンチはA・Bトレンチの間で、幅6.13m、長8.2mの方形。1 Bトレンチは北幅7.9m、南幅10.5m、西側長7.5m、東側長5.85mの変形L字形。2 Bトレンチは幅11.75m、長10.5mの方形。3 Bトレンチは幅7.8m、長10.5mの方形。4 Bトレンチは幅10.675m、長14mの方形。5 Bトレンチは幅8.5m、長7.5mの方形。6 Bトレンチは幅9.975m、長10.5mの方形。7 Bトレンチは幅9.525m、長14mの方形。8 Bトレンチは幅10.025m、長7.5mの方形。9 Bトレンチは幅7.9m、長7.5mの方形。10 Bトレンチは幅10.025m、長10.5mの方形。11 Bトレンチは幅7.4m、長12mの方形。12 Bトレンチは幅11.25m、長13mの方形。13 Bトレンチは幅7.9m、長7.5mの方形。1 Cトレンチは幅7.9m、長10mの方形。2 Cトレンチは幅9.365m、長10.5mの方形。3 Cトレンチは南幅24.525m、北西幅7.025m、北東幅7.5m、西側長7.125m、東側長6.875mの変形凹字形。

トレンチ部のセンターライン及び東西のステーションラインは、日本道路公団の基準杭から設定し、拡張

部の南北ラインはトレンチ部センターラインから、東へ10 mをE.10、西へ10 mをW.10とした。また、センターラインの方位は本調査区では、国土座標北から15°26'57"東へ振っている。

また、調査区南北端の国土座標のX軸・Y軸は以下の通りである。

S T A .91+40	X-150292.8099	Y-36759.5545
S T A .94+40	X-150581.9703	Y-436839.4689

なお、現地調査は2年余りの長期に亘り、その間、現地調査では、フジタ工業㈱、桑原組、竹内組、中村組の、また、現地調査から遺物整理、本書作成に至るまで学生諸氏の御協力を得た。調査が円滑に進み、概報が作成できたことに対して、以下に御協力いただいた方々の氏名を明記し、謝意を表したい。

<フジタ工業㈱>

池部三郎、岡井勇太雅、角 栄

<調査作業員>

穴吹秀樹、石川 忠、泉 隆之、伊勢昌信、今村勝次、岩谷 保、内司二三夫、浦田勝義、太田建一、大名晴美、大西春義、岡本文也、小田貝矩、音田一郎、金沢寛保、上坂元勝男、亀山好男、川崎 恵、桑原和男、小林富夫、小林芳夫、坂本和利、佐々木 学、高橋昌三、竹内泰一、多田免策、田中 茂、寺園 繁、富永一三、長尾 正、長野正幸、中塚二郎、中村一夫、西川達郎、藤原 進、町田 敏、嶺脇 清、柳沢武義、山下 豊、山田吉彦、吉里利則、渡辺 博

<調査補助員>

飯田智子、池野栄子、石田桂子、井上 聡、植田雅彦、延明一之、大佐古真佐江、小川晋司、奥野 馨、楫野優子、久保寿一郎、桑原真理子、桑村一司、斉藤 進、新中伸子、武井利道、竹村こずえ、辰見和子、西田栄一、能阿弥明美、新田昌隆、伯井幸代、平井美津子、森 加世
山本伸一 (50音順)

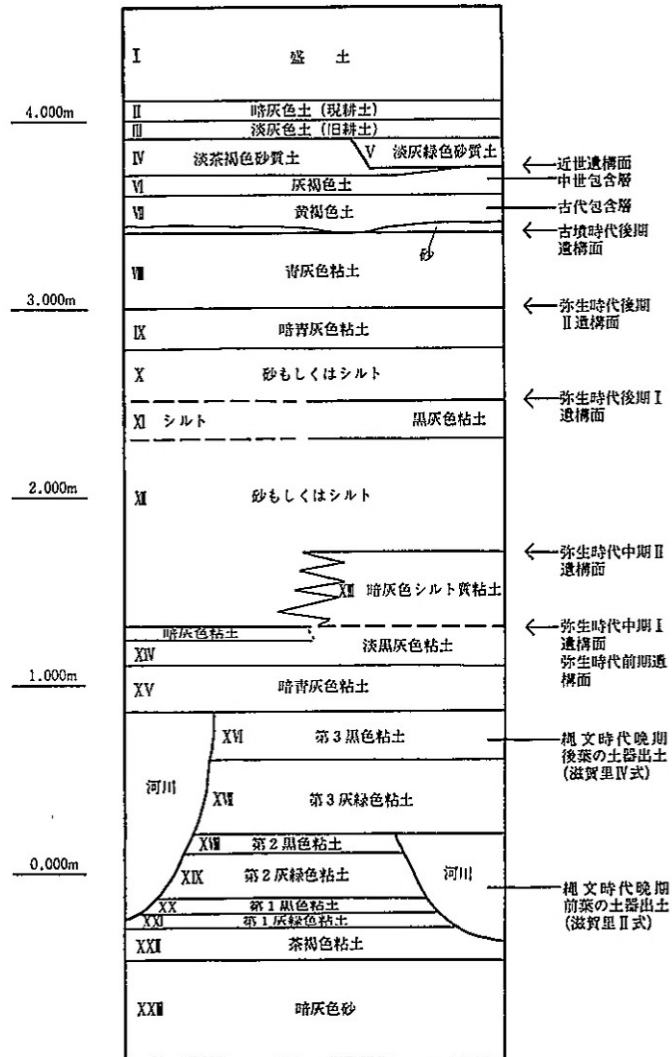


写真2 調査参加者

第4章 基本層序

山賀遺跡南部に設けられた長さ約250mの調査区での基本層序は、現地表面下4.5mまでの平面調査と、さらに深さ1～1.5mの筋掘り調査の成果によって把握した。本調査区は集落・基地の検出された山賀遺跡の中心部と環濠状の大溝を挟んで外側、友井東遺跡との中間を埋める地帯であり、水稻耕作などが行われた部分も多いが、全体に集落域に比べて低地で、河川の流路変更の影響を受け不安定な土地であった。土層についても河川によって浸蝕され、そのすべてを観察できる場所は少ないが、ここでは、調査区全体に広く認められる基本的な層序を述べ、その後に各時期の土層の広がりや立地の関係について考えてみたい。

第I層 盛土。人頭大の石、バラス、砂が全域にわたって35～50cmの厚さで堆積していた。深くまで攪乱されていたAトレンチ部では、約1m現地表面のレベルが高い。Dトレンチでは約70cmの厚さを持っていた。府道中央環状線建設時の盛土である。



第5図 基本層序模式図

第Ⅱ層 暗灰色土。調査区全域に約15～20cmの厚さで堆積。府道中央環状線建設時までの水稲耕作土壌である。

第Ⅲ層 淡灰色土。約10cmの厚さで堆積。比較的きめの細かい均一な土質で、漸次空気にさらすと、現代耕作土である第Ⅱ層（暗灰色土）に似てくる。概ね全域に堆積しているが、部分的に淡茶褐色砂質土が盛り上っている箇所がありその部分では本層はみられない。

第Ⅳ層 淡茶褐色砂質土。全域に堆積し、部分的にテラス状に盛り上る。このテラス状の部分は近世の掻き揚げ田と考えられ、テラス状の部分と一段低くなった部分は、それぞれ耕作地として機能していたと考えられる。また、土質は著しく砂質である。畑作を行う耕作土壌は漸次砂質化していくという土壌の性質と、アブラナ科の花粉の比率が高く、ワタ属の花粉も検出されているという花粉分析結果から、本層の利用された状況が理解される。マンガン、鉄の斑文は見られない。

第Ⅴ層 淡灰緑色砂質土。厚さ約10cmで、第Ⅳ層（淡茶褐色砂質土）のテラス状隆起間を埋めている。掻き揚げ田が放棄された段階で、客土によってか、耕作面を平坦にする目的で埋められたものと考えられる。マンガン、鉄の斑文が見られる。

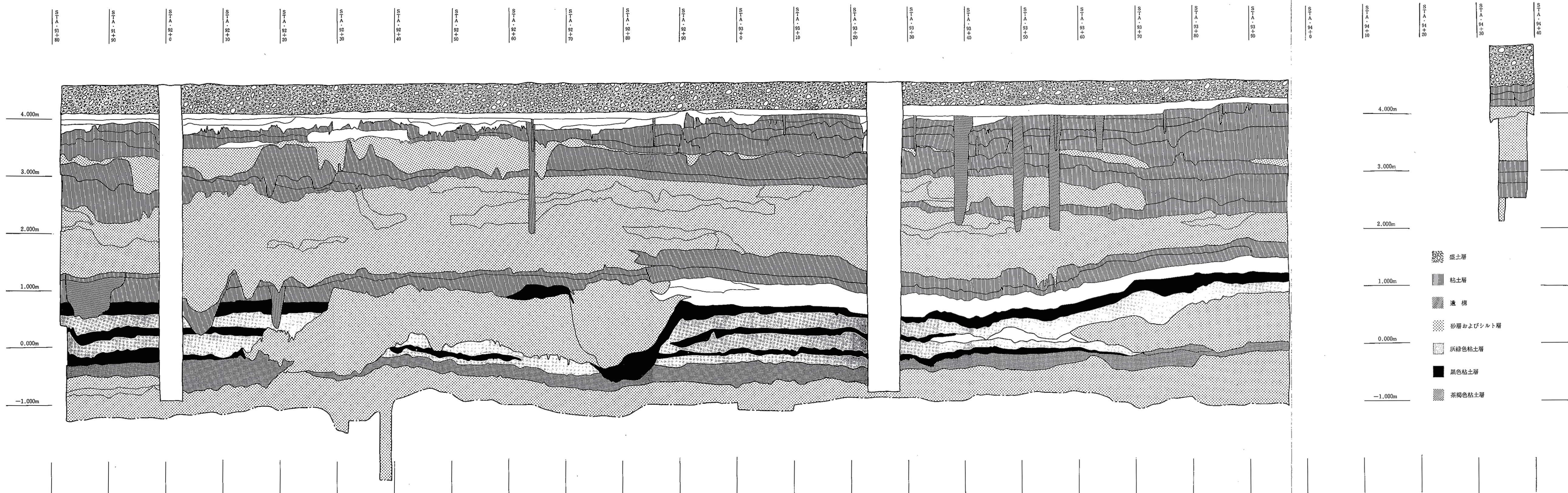
第Ⅵ層 灰褐色土。全域に10～20cmの厚さで堆積。全体が一様な土質でなく、粘土質の部分と砂質の部分がある。本層より瓦器片が出土しており、平安時代末～室町時代にかけての遺物包含層中と考えられる。また調査区北部においては、本層上面に砂層が薄く（2～3cm）堆積しており、それを取り除くと道状の遺構、足跡、耕作痕などが検出された。

第Ⅶ層 黄褐色土。調査区南部に堆積。厚さは20～50cmで南へ行くほど厚くなる。土質は均一ではなく、粘度の著しく高い部分、またシルト質がある。全体にマンガン、鉄の斑文が見られ、部分的には下層にまで影響を及ぼしている。

調査区北部では下層の第Ⅷ層（青灰色粘土）を切り込んでトレンチ部を縦断する自然河川の埋土である砂層が切り込み面よりも高く隆起して堆積しているために、本層はほとんど形成されていない。それに換わって均質ではあるが、若干シルト質の灰色粘土層が堆積している部分もある。

第Ⅷ層 青灰色粘土。調査区全域に約40cmの厚さで堆積。均質で安定した粘土であるが、色調の濃淡によって2～3層に分層も可能である。部分的に、上層の影響をうけて、マンガン、鉄の斑文が見られる。本層上面より長大な自然河川が切り込み、その埋土の砂中より古墳時代後期に編年される遺物が出土している。また、この自然河川のオーバーフローによって堆積した本層上面の薄い砂層を除去すると、全域で人間や動物の足跡が検出された。

第Ⅸ層 暗青灰色粘土。全域に10～30cmの厚さで堆積。調査区の両端では、50～60cmもの厚さを持つ部分もある。調査区の北半分では、本層中に含まれる砂の量が多く、色調も有機質のため黒色に変化し、上面より切り込んだ弥生時代後期Ⅱの溝群が検出された。それ



第6図 南北土層縮尺図 (1/400)

以外の場所では均質な粘土層であり、本層が厚くなる部分では、色調も淡く変化してゆく。また花粉分析の結果によれば、本層と第Ⅳ層（青灰色粘土）は、「イネ科を優占する草地・沼沢地的環境、周辺には針広混交林」が存在すると考えられている。

第Ⅴ層 砂もしくはシルト層。調査区南部では40cm内外の厚さで堆積。色調は灰色から黄色まで、土質も粗砂からシルトまでを含んでいる。本層は流水堆積により形成されたものであり、いくつもの小さな流れごとにラミナを見せて砂やシルトが堆積している。その小さな流れによる堆積物の中にも色調、質の差異がある。それらの小流水堆積の集積されたものが本層である。

調査区北部においては、下層の第Ⅵ層（黒灰色粘土）が漸次シルト化し、遺構面としても不安定になってゆくとため本層の砂・シルトと、第Ⅴ層（黒灰色粘土）に対応するシルト層、さらに下層の第Ⅳ層（砂もしくはシルト層）との識別が困難になる。

第Ⅵ層 黒灰色粘土。調査区南部に顕著にみられ、厚さは15～30cm。著しく粘土質の部分、シルト質の部分と土質は均一ではなく、植物遺体などの有機質が薄く堆積している部分もある。上面では畦畔などの遺構が検出され、本層の断面の一部には水稻耕作土特有のマンガン斑、鉄斑とおぼしき斑文が認められた。調査区北部において本層はシルト質に置き換わり、遺構面としても不安定で、部分的に人間の足跡を検出したが、南部遺構面とのつながりは把握できなかった。

第Ⅶ層 砂もしくはシルト層。本層は調査区域全域に60～100cmの厚さで堆積。第Ⅴ層（砂もしくはシルト層）と同様、小さな流水堆積が集積して形成された土層であるため、色調は黄色から灰色まで、質も粗砂からシルトまで、種々のものを含み込んでいる。調査区北部では先述のように第Ⅴ・Ⅵ層と本層の識別が困難である。

第Ⅷ層 暗灰色シルト質粘土。調査区南部で10～40cmの厚さで堆積。色調の濃淡によって2～3層に区分できる。上面には3～4cmの著しくシルト質の部分があり、その上面より踏み込んだ人間の足跡が多数検出された。しかし調査区北部では、本層に連続する土層も、上面足跡面に続く遺構面も検出できず、換わって第Ⅵ層（砂もしくはシルト層）と非常によく似た土層が堆積しており、この両者の識別は困難であった。本層と、換わって堆積している砂もしくはシルト層とは、S T A .92+80付近で、後者が前者の下部へもぐり込んでいるのが観察されることから先後の関係を把握できる。

第Ⅸ層 淡黒灰色粘土。調査区全域に20～40cmの厚さで堆積するが、北部と南部では著しく様相が異なる。北部では、均質な粘土層であり、上面に弥生時代中期Ⅰの遺構である畦畔や水路などを構築し、畦畔に囲まれた水田面では、水稻耕作土壌として使用されていた本層上部10cmほどが暗灰色粘土として分離できる。南部では上層の第Ⅷ層（暗灰色シルト質粘土）を直接にのせ、遺構は何ら検出できなかった。層自体も淡黒灰色粘土をベースにこそするが、炭化物が集積した2cmほどの黒色粘土層が2層、それに挟まれた2

～3 cmほどの灰緑色粘土層が観察される。この3層は南部全域で見られるが、均一な層ではなく、黒色粘土層は色調の濃淡が著しい。

第XV層 暗青灰色粘土。調査区南部に20～40cmの厚さで堆積、南へ漸次薄くなる。若干シルト質ではあるが、全体に均質で水成堆積と考えられる。北部では、本層と併行して弥生時代前期の自然河川を埋める砂層が存在している。

第XVI層 第3黒色粘土。10～40cmの厚さで調査区全域に見られる。安定した層ではあるが、有機質が多く漆黒色を呈する部分から、暗茶褐色で粘性の高い部分まで、場所によって大きな差異が見られる。本層は、形成される過程で長く空気にふれ、植物も繁殖していた湿地帯に形成されたものと考えられる。

第XVII層 第3灰緑色粘土。調査区全域に約30cmの厚さで堆積。全体にシルト質で、遺物は含まない水成堆積によって形成されたと考えられる。

第XVIII層 第2黒色粘土。調査区全域に10cm内外の厚さで堆積。上下の土層と接する部分では色調は淡くなり、漸次上下の層へ移行しており、部分的に炭化物が集積しているのが観察される。本層は第XVI層（第3黒色粘土）と同じ過程で堆積したのと考えられる。

第XIX層 第2灰緑色粘土。全域に20～30cmの厚さで堆積。様相・性格は第XVII層（第3灰緑色粘土）とまったく同じである。

第XX層 第1黒色粘土。ほぼ全域に見られ10cm内外の厚さを持つ。様相・性格は第XVIII層（第2黒色粘土）とまったく同じである。

第XXI層 第1灰色粘土。全域に10cm内外の厚さで堆積。様相・性格共に第XIX層（第2灰緑色粘土）とまったく同じである。

第XXII層 茶褐色粘土。全域に20cm内外の厚さで堆積。下部は砂質であるが、全体に均質で粘度が高い。

第XXIII層 暗灰色砂。本層の厚さは2m以上と推定され、全域で観察できた上部約1mでは上から、粘土まじりの砂、灰褐色の粗砂、固くしまった暗灰色砂と20～30cmの厚さで明確に分層できる。また、どの層にも木片、植物性遺体などが含まれていた。また筋掘りによって上面より深さ約6mの地点では、シジミ貝を検出している。

本調査区では、堆積している土層の差異から3つの面期がみられる。第XXIII層の上面、第XV層と第XIV層の間、第VIII層と第VII層の間の3つである。

第1の画期は、この地が陸化しつつある段階から、滞水している状態と干上がった状態をくり返しながらも縄文人の生活空間の一部へと組み込まれる段階へ

暗灰色砂は、隣接する山賀遺跡（その3）調査区の知見によれば4mもの厚さを持ち、南北1Kmにも及ぶ山賀遺跡全域で検出されており、また、層中にはシジミなど淡水産の生物遺体が含まれていた。これらのことは暗灰色砂層の形成される過程で、旧大和川の前身河川によって運ばれ

た土砂が盛んに堆積し、デルタが形成され、陸化されたことを示している。

暗灰色砂に続いて、黒色粘土と灰緑色粘土の互層が形成される。この両層も山賀遺跡全域で確認され、さらに広い範囲—河内平野の低湿地部のかなりの部分にも及んでいると考えられている。灰緑色粘土は、水成堆積によって形成されたため、きめ細かく若干シルト質である。黒色粘土は有機質を多く含み、乾痕（当時本層の上面が乾燥してできたひび割れの模様）も見られることから、滞水しつつも表面が水面からのぞいており、湿地帯の草地のような状態の中で堆積したことがうかがわれる。そしてこの2層が交互に堆積している状況から、この地が水没し、静かに灰緑色粘土が堆積する時期と、湿地帯ではあるが、干上がる時期もあり、種々の植物が生えていた時期をくり返していたと考えられる。

3層の黒色粘土のうち、第1・2黒色粘土は、10cm内外の厚さを持つのみで、第3黒色粘土に比して不安定ではあるが、第2黒色粘土を切り込み面とする自然河川の底部には、鹿の足跡と共に人間のものも多数遺存しており、すでにこの一帯は縄文人の生活圏の一部に組み込まれていたと思われる。そして、第3黒色粘土は厚さ40cmにも及ぶ部分があり、乾痕も顕著で、層中に植物遺体と思われる炭化物も多く見られるなど、非常に安定しており、黒色粘土と灰緑色粘土の互層が形成される過程で、次第に人間が恒常的に生活を営む場が出現してくるのである。

また、第3黒色粘土中よりは滋賀里Ⅳ式に編年される縄文土器片が、第2黒色粘土層を切り込んだ自然河川の埋土中よりは、滋賀里Ⅱ式に編年される土器片がそれぞれ出土しており、黒色粘土と灰緑色粘土が、概ね縄文時代晩期を通じて形成されたものと考えられる。

第2の画期は、湿地帯（黒色粘土）から、そこが開拓され農耕が営まれる段階へ

第3黒色粘土の上に暗青灰色粘土層と淡黒灰色粘土層が形成され、後者の上面は、弥生時代前期の生活面として使用され、その廃絶後に淡黒灰色粘土の上部を耕作土として水稻耕作が営まれる（弥生時代中期Ⅰ）。その後弥生時代中期Ⅱ、後期Ⅰ、Ⅱ、古墳時代後期の各遺構面が次々に形成される。この遺構面はそれぞれ20～30cmの厚さを持つ暗灰色系の粘土の上につくられており、粘土層相互の間は流水堆積の砂もしくはシルト層で埋められ、この層が1mもの厚さを持つ場所もある。そして弥生時代前期から古墳時代後期までの600～700年の間に2mを越える土砂が堆積しており、その後、現地表面までは1mの深さを測るのみであることを考えると、この間の堆積のすさまじさがうかがわれる。更に、第2の画期以前の縄文時代のそれぞれの土層が平準に山賀遺跡全体を覆っているのに対し、この時期の土層はほとんど横に10mと連続することがなく、土質の変化も激しく、環境の変化に翻弄されていたであろう当時の状況が表現されている。

また、弥生時代の5つの遺構面は、南北250mの調査区全域に拡がることはなく、前期・中期Ⅰが北部、中期Ⅱ・後期Ⅰ・Ⅱが南部を中心に認められ、それに連続する面は、多く流水堆積の砂やシルトによる不安定な空間である。旧大和川の流路変更によって生活面を押し流されても、そこに近接して、流路をさけて復興していることが、第6図の遺構面位置の移動に読みとれる。この時期の耕作土壌である暗灰色系粘土は、20～30cmの厚さを持つのみで、その下部はほとんど

砂もしくはシルト層であり、水はけが良く、畦畔・足跡・鋤跡などがよく遺存していた。しかしマンガンの斑文の発達是不充分で、本格的な乾田土壌は次の黄褐色系土によって達成される。

第3の画期は、耕作土壌が暗灰色系の粘土から黄褐色系土へ

弥生時代の前期から古墳時代後期の600～700年間の2mを越す粘土や砂の堆積に比べ、それ以後、現代までの1000年を越える時間の経過にもかかわらず1mほどの土の堆積が見られるのみである。通常水田や畑で耕作を行うと、風成堆積によって1年に1mm程度の土が堆積するといわれており、この段階の土層は厚い砂やシルトの層をまったくはさまず、営々と農耕を営んだ成果として1mの土層が堆積したと考えられる。第3の画期以降、この地には出水による大規模な土砂の流入は見られず、いかに安定していたかがうかがえる。

そして、この時期の耕作土壌と考えられる黄褐色系土（第Ⅲ～Ⅳ層）には、多くの部分でマンガンの斑文が顕著に見られ、典型的な乾田土壌の様相を示している。

また、淡茶褐色砂質土（第Ⅳ層）から、花粉分析の結果、アブラナ科の花粉の比率が高く、ワタ属のものも検出されていること、畑作地の土壌が次第に砂質に変化してゆくという点を考えると、この時期、この一帯では、水稲耕作から畑作地へ転換しており、ひとつの小画期が見いだせる。

〔註〕

(1) 石神幸子「河内平野の縄文時代」『河内平野を掘る』（財）大阪文化財センター 1981年



写真3 1Cトレンチ西セクション弥生時代中期Ⅰ～縄文時代

第5章 調査の成果

第1節 縄文時代晩期

縄文時代晩期に比定される土層は、黒色粘土と灰緑色粘土が互層となり、約2mの厚さで堆積していた。3層の黒色粘土の上面は湿地帯であり、植物も多く繁殖し、干上がっていた時期もあったが、そこには長大な自然河川が流れ、その底部には人間や鹿の足跡も遺存していた。多くの人間と鹿の足跡が交錯している状況は、本調査区一帯が“狩り場”として当時の人々の生活圏の中に組み込まれていたことを示し、また、自然河川の埋土中の縄文土器片がほとんど磨滅していない状態で出土したことから、至近距離に集落跡などの存在が想像される。

自然河川1 (写真4)

1Aトレンチの東側で検出。第XX層(黒色粘土)の上面より切り込んでおり、両岸肩部のレベルは-0.2m。川幅は調査区間で13m、全幅で25mを越えると考えられる。深さも1.5mを越え、検出できた西岸は、45度の急激な傾斜で直線的に底へ向う。流れの方向は確認できなかった。埋土は淡灰色砂を中心に、黄色から灰色までの色調の粗砂から細砂までの質の砂によって構成されている。また、埋土中からは長さ3~4m、直径0.6mもの巨大なものを含む数本の流木が出土した。

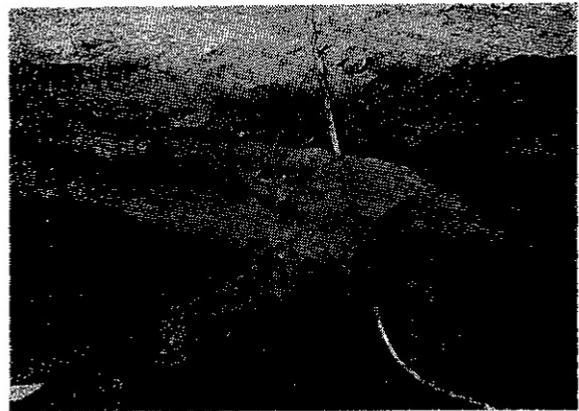


写真4 縄文時代晩期 1Aトレンチ 自然河川1
(断ち割りセクション)

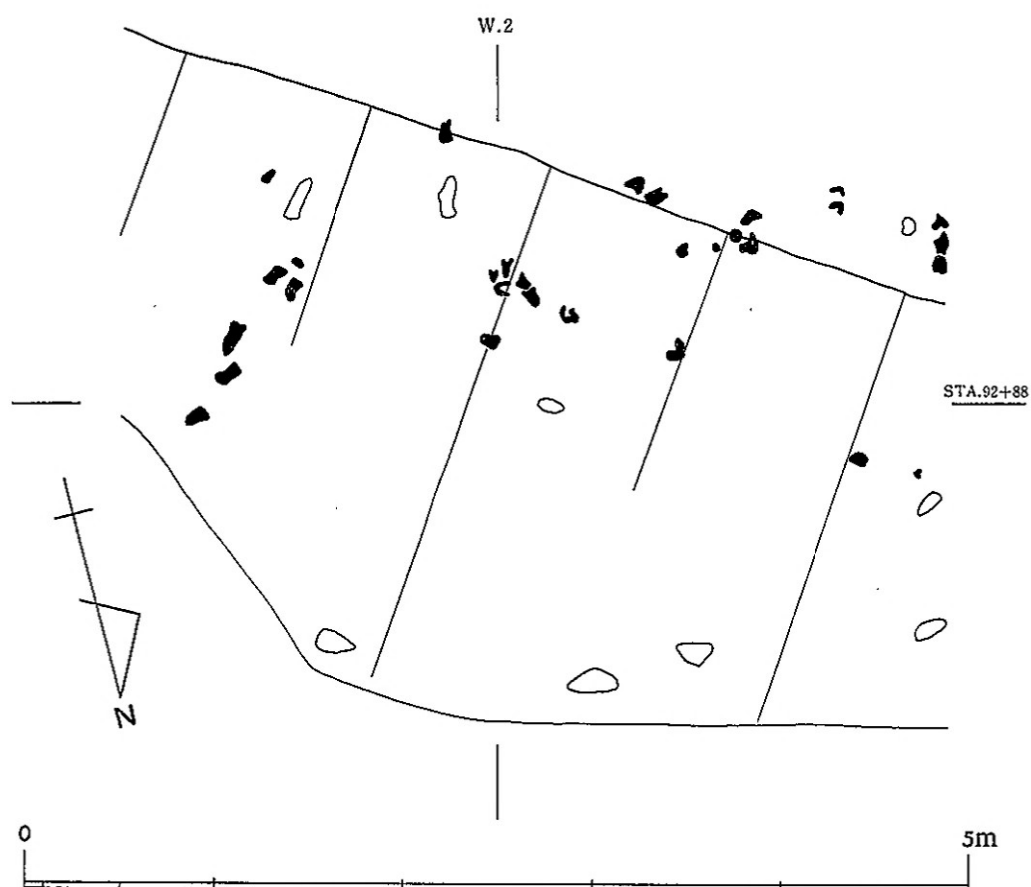
自然河川2 (図版1・3~5・7・8・95)

S T A .92+10~S T A .92+80で検出。第XX層(黒色粘土)を切り込んでおり、レベルはS T A .92+10付近の肩部で-0.2mを測る。川幅は調査区間で25mを越えるが、東岸が検出されておらず、全幅は確認できなかった。深さは1.5m内外であり、南西から北東方向へ流れる。肩部より底部へはなだらかな斜面が続き、底部は平坦で、人間・鹿の足跡が多数遺存していた。埋土は砂とシルトを中心に構成されており、川の流れの中心部では高く隆起して堆積し、肩部より1.0mも盛り上がる部分もある。S T A .92+50付近では、川底より0.4mほど上位で埋土が著しくシルト化し、その中に直径50cmを測る柳の大木の幹が数本横倒しになって埋没していた。

自然河川3 (第7・8図、図版18・93)

STA.92+70~90付近で検出。第XIV層(黒色粘土)を切り込んでおり、レベルは南岸肩部で0.8m、北岸肩部で1.0mを測る。北岸は自然河川2の埋土を切っているため、本河川と自然河川2のそれぞれの埋土の境界は、かならずしも明確にはならなかったが、南岸は25度を測る緩やかな傾斜で底部に続く。底部は平坦であるが、自然河川2の底部と切り合っているため、底部の範囲は確定できなかった。埋土は、自然河川2と同様に砂とシルトで構成されており、ラミナを見せて堆積していた。また南岸斜面と底部には、人間と鹿の足跡が多数遺存していた。

7Bトレンチでは自然河川の底に杭(W.1)が打ち込まれた状態(図版18の上)で出土した。



第7図 縄文時代晩期 Bトレンチ 自然河川3肩 足跡 人間・鹿 (1/40)

杭 W1 (第8図、図版18・93)

樹皮のついた心持材を使用し、上端部は欠損しており、下端部を鋭く削り出している。樹種はカシ類を用いている。現長64.3cm、径4.3×4.2cm。

自然河川4 (第9・10図、付図3、図版2～6・74・98、巻頭図版3の下)

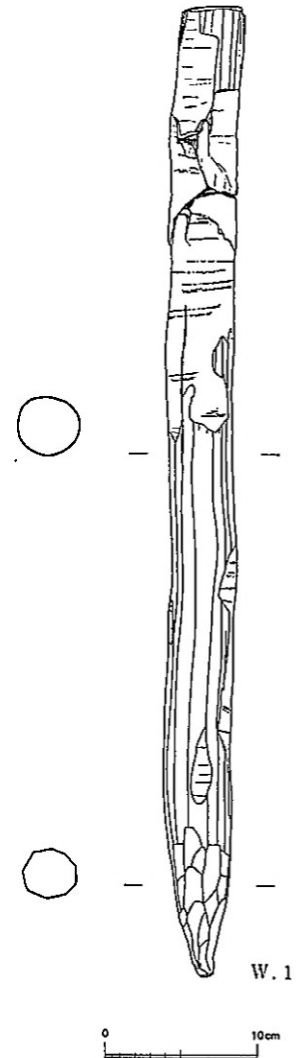
Cトレンチ南部で検出。第XVIII層(黒色粘土)より切り込んでおり、北岸肩部のレベルは0.3m、川幅は18～20m、深さは約0.3mを測り、南東から北西へ流れる。肩部から底部へ向ってなだらかな斜面が続き、底中央部は流れに沿って若干隆起している。恒常的に全幅で水が流れていたとは考えられず、中央部の隆起を挟んで2つの小さな流れが想定される。埋土は黄褐色砂を中心に、色調は黄色より灰色、質も粗砂からシルトまで、ラミナを見せて堆積する。断面観察によれば、埋土の砂層は3Cトレンチ南端(STA.93+96)を越えて南へ拡がっており、しかも、肩部のレベルを越えて0.8mも厚く堆積している部分があり、埋没時の水の流れの激しさと、搬入された土砂の量を物語るものであろう。第9図の縄文土器(1・2・3)片は、この埋土中から出土した。(2)は後期の宮滝式、(1・3)は晩期の滋賀里Ⅱ式に属する深鉢である。(2)以外はほとんど磨滅を受けていない。本河川底には、人間と鹿の足跡が多数遺存していた。

足跡 (付図3・図版1～7・95・96)

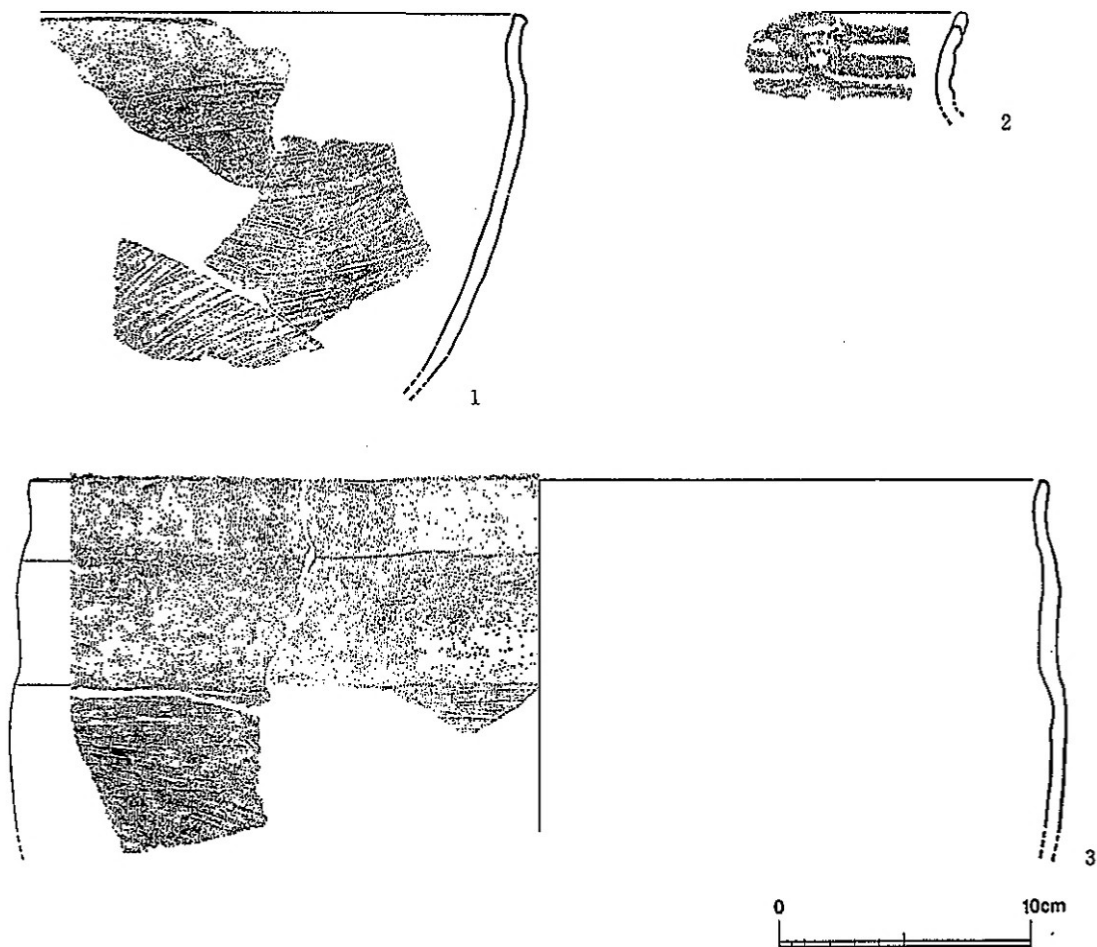
自然河川2、3、4の川岸・川底には、人間・鹿⁽²⁾の足跡が多数遺存していた。人間の足跡は長さ23～26cm、幅10cm内外、深さ約5cmを測る。鹿の足跡は長さ8cm内外、幅約5cmを測り、爪先が割れる馬蹄形を呈す前足と、長さ12cm前後、幅約5cmを測り、爪先が割れるが踵の部分が長い後足の2種が検出された。足跡の埋土の多くは粗砂で、それぞれの自然河川の埋土と同様のものではあった。

自然河川2では、BトレンチSTA.92+10付近の北岸斜面(付図3)と平坦な川底部の7Bトレンチ(図版4の上)の足跡の保存状態が良好であった。北岸斜面では、岸から川底へ向う鹿の足跡(図版7)と、指の部分まで遺存していた人間の足跡(図版5の上)が、7Bトレンチでは一面に無方向、多数の足跡が検出された。

自然河川4では、Cトレンチと1Cトレンチ(第10図、図版2・4～6)において多数の良好な人間と鹿の足跡が検出され、そのいくつかは足跡の刻印時の行動を復原できるものであった。



第8図 縄文時代晩期 自然河川3出土遺物(1/6)

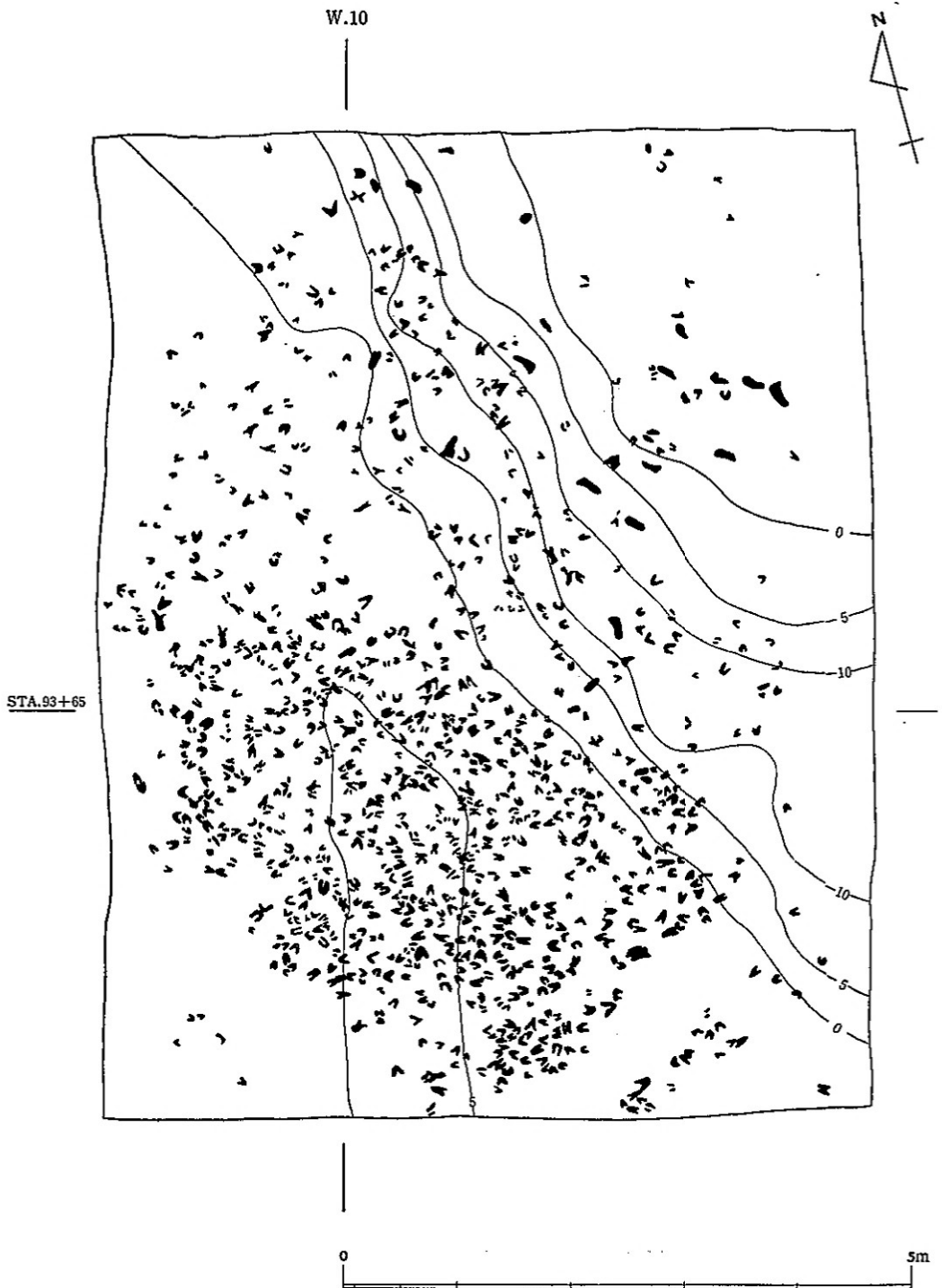


第9図 縄文時代晩期 自然河川4出土遺物 (1/3)

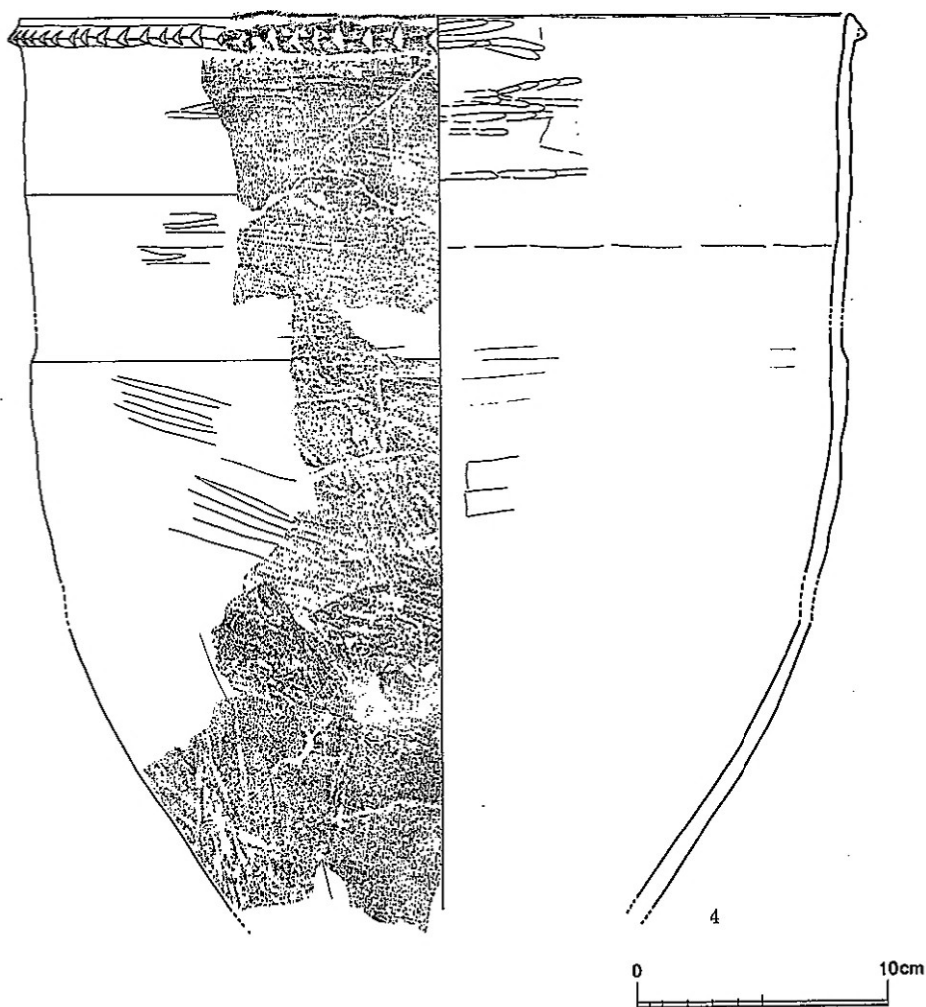
当時浅瀬状であった自然河川4の川底の中央部は流れに平行に隆起し、その隆起部の両岸を水が流れていたと考えられる。歩行する鹿の足跡の幾組かは、隆起した部分と川底の最深部の間を流れに直交して往復しており、水を飲むために川底に降りた鹿の姿が想像される。この地点は鹿の“水飲み場”として機能していたのであろう。また、ここでは人間の足跡が鹿の足跡と交錯して遺存しており、鹿の“水飲み場”は同時に鹿と人間との重要な接点であったと考えられる。

第XVI層（第3黒色粘土層）中出土土器 （第11図、図版8・75）

7Bトレンチの南部、第3黒色粘土層の中から縄文土器・甕が出土した。第3黒色粘土層は、土器出土付近では厚さが約0.3mあり、本土器はその上面から8cm下の0.2×0.3mの範囲に集中的に検出された。24片の破片は、ほとんど同じ高さである。レベルは0.90m前後。完形ではない



第10図 縄文時代晩期 1Cトレンチ 自然河川4底 足跡 人間・鹿 (1/60)



第11図 第3黒色粘土層出土遺物 (1/3)

が、底部を除く体部の各部の破片が揃っている。周辺を精査したが、他の破片は確認できなかった。第3黒色粘土層形成の時期を推定し得る有力な資料である。滋賀里Ⅳ式に編年される。

〔註〕

- (1) 本地区出土の縄文土器に関しては、京都大学埋蔵文化財研究センター助手 泉拓良氏、京都大学大学院 家根祥多氏の御教示による。
- (2) 上野動物園獣医 増井光子氏の御教示による。氏には20数個の足跡の石膏型と写真によって同定していただいた。猪の足跡の場合は、蹄の上にある副蹄の刻印が残るはずであるが、本遺跡で検出された足跡にはこれが見られないことから、猪ではなく鹿と断定できる。また、どの足跡もかなり大きなもので、エゾ鹿に類する大型の鹿のものと考えられるとのことである。

第2節 弥生時代前期

この時期の遺構としては大溝を8条、小溝を1条検出した。大溝はいずれも幅3～4.5mで、同様の溝は山賀遺跡（その2）及び（その3）においても確認されている。また、（その2）と同様に各溝は堤を伴っている。溝群は調査区北半部に集中し、南半では全く検出していない。後にも述べるが、検出した溝及び堤は総て上面が削平されており、特に堤は明確に検出できなかった。これは、次の時期（弥生時代中期Ⅰ）に調査区中央部が水田面として利用され、溝及び堤の凹凸が削平されたものと考えられ、従って溝の検出面は水田面耕作土と同じである。また、1Aトレンチ付近では中期Ⅰ期に水田化されず、粘土の堆積が続き、沼状になっていたらしく、削平をほとんど受けずに比較的良好な状態で自然埋没していた。

溝群は2Bトレンチの切り合い関係から時期差が認められ、方向性も2分できる。北西—南東方向または、北東—南西方向に概ね向いている。この状態は、山賀遺跡（その2）で確認された同期の溝が整然と平行して並ぶ様子とは若干異っている。

以下で各溝について述べる。

溝1（第12～18図、付図4、図版10・11・13・14・16・17）

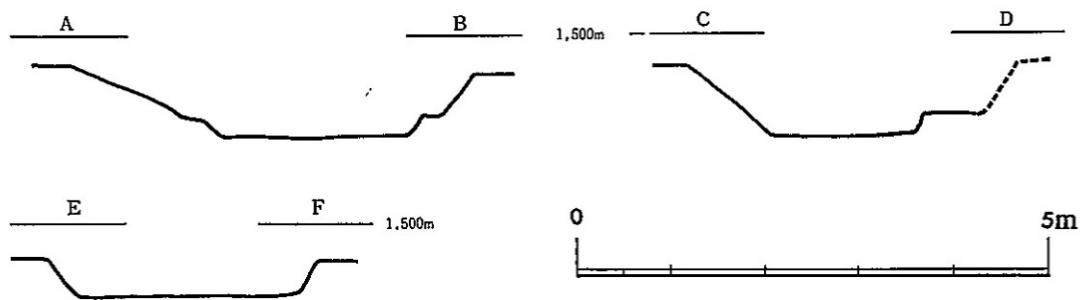
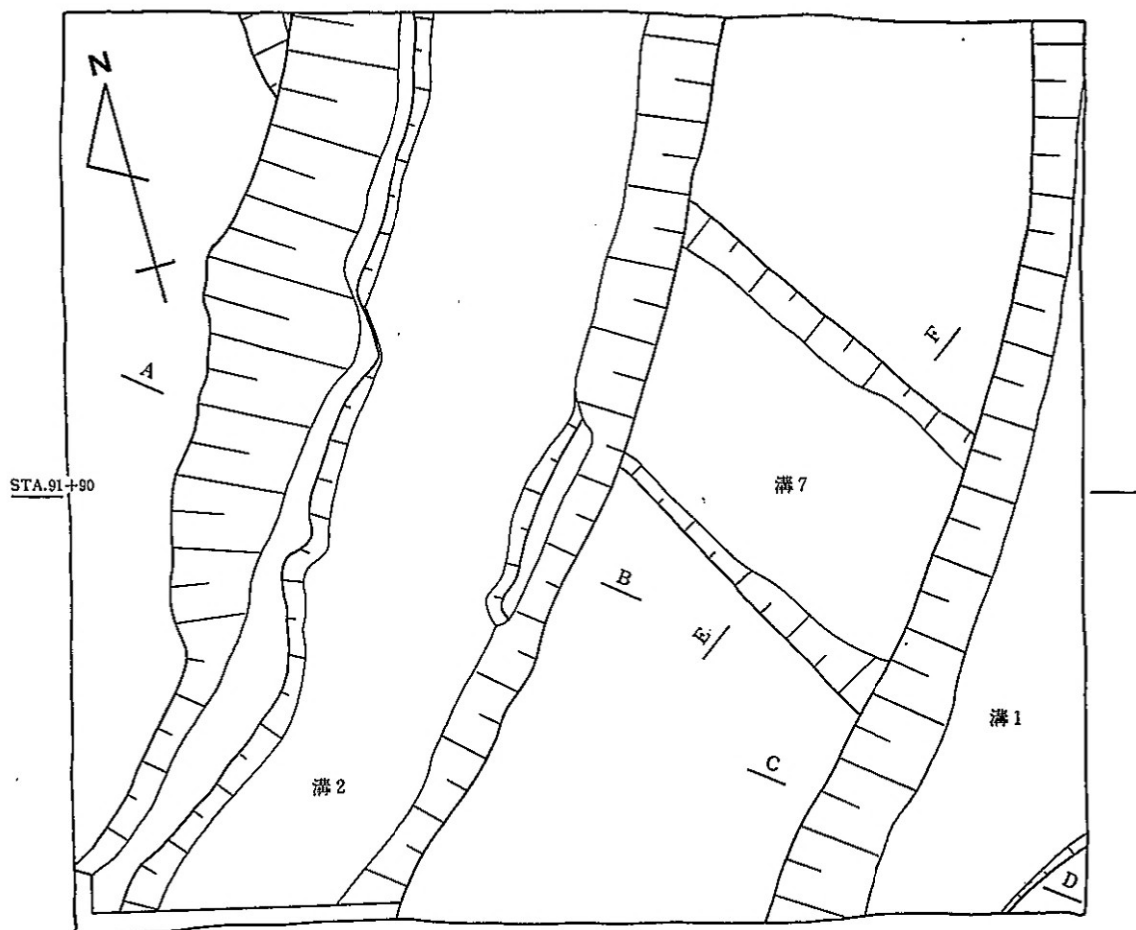
本調査で確認できた、最も長い溝で、1A・2B・B・7Bトレンチにおいて検出した。南南西方向から、わずかに彎曲しながら北東方向に延び、1Aトレンチ部でやや向きを変え北方に直線状に延びる。総延長118mを測る。上幅は3.0～3.6m、下幅は1.2～2.4m、深さは0.82mで、断面はゆるやかな逆台形を呈する。2Bトレンチ部分では、東側に幅0.5m、高さ0.3mの削り出しのステップを有する。また、同トレンチ部で溝7を切り込んでいる。溝の切り込み面は、第3黒色粘土層の2層上の灰色粘土上面をベースとしており、1Aトレンチ部では、溝2との間に堤を設けている。

溝の埋土は、掘削時のベース及びその下層の粘土のブロック（灰色粘土・灰緑色粘土・淡灰褐色粘土・褐色粘土・第3黒色粘土）が充満しており、下層には部分的に灰緑色砂が堆積している。溝の底は、縄文時代晩期の自然河川1上面の砂に達している。

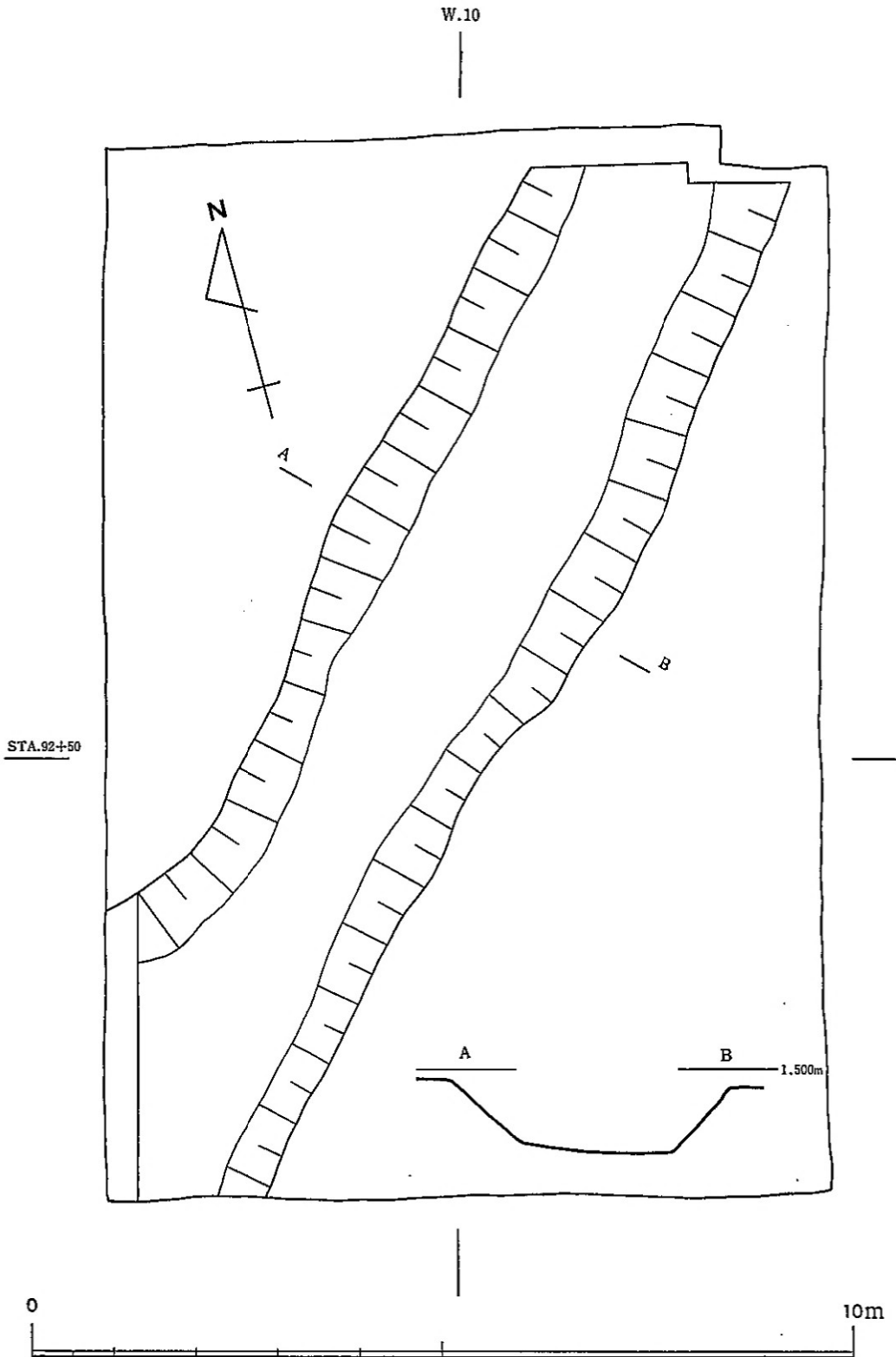
7Bトレンチ部では底部から約0.2m上で人間及び鹿の足跡（第15図）を検出した。これを境として、上下でブロック土の状態が異なる。2Bトレンチ溝2でもこの状態同様の変化が見られた。これは溝掘削後にその機能が衰え、改修を行ったと考えられ、その改修時の作業面底部に残った足跡であろう。ただ、この足跡は溝全域には及んでいないため、部分的な改修の可能性もある。溝からは遺物は全く出土しなかった。

1Aトレンチで見られた堤は、若干削平を受けているものの、本調査区では唯一の遺存例である。堤は溝掘削時の排土をそのまま盛りあげており、同期のベース及びその下層の粘土がブロックになっている。幅3.06m、高さ0.25mを測る。1Aトレンチではこの時期以降は水を含んだ粘

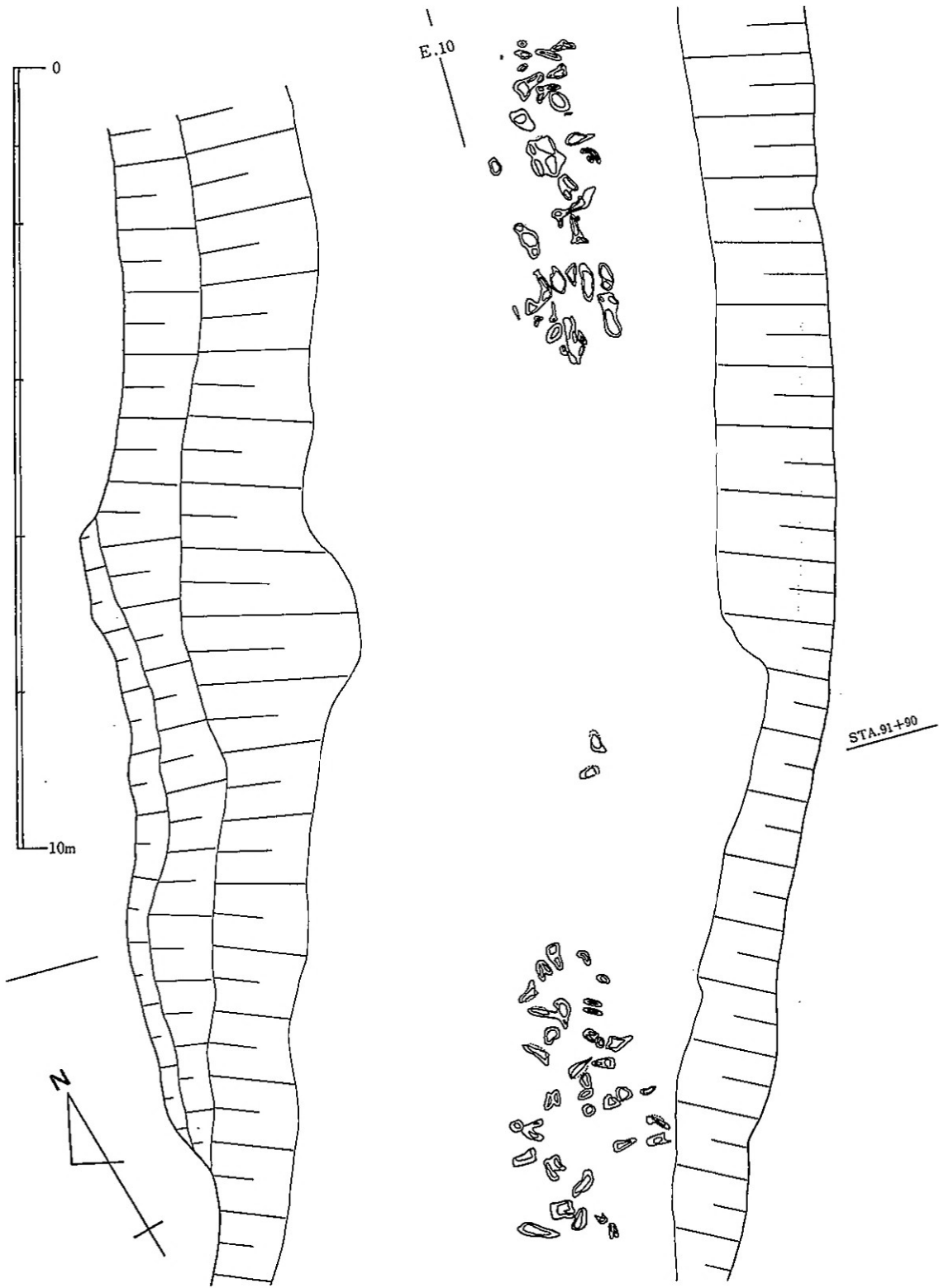
E.10



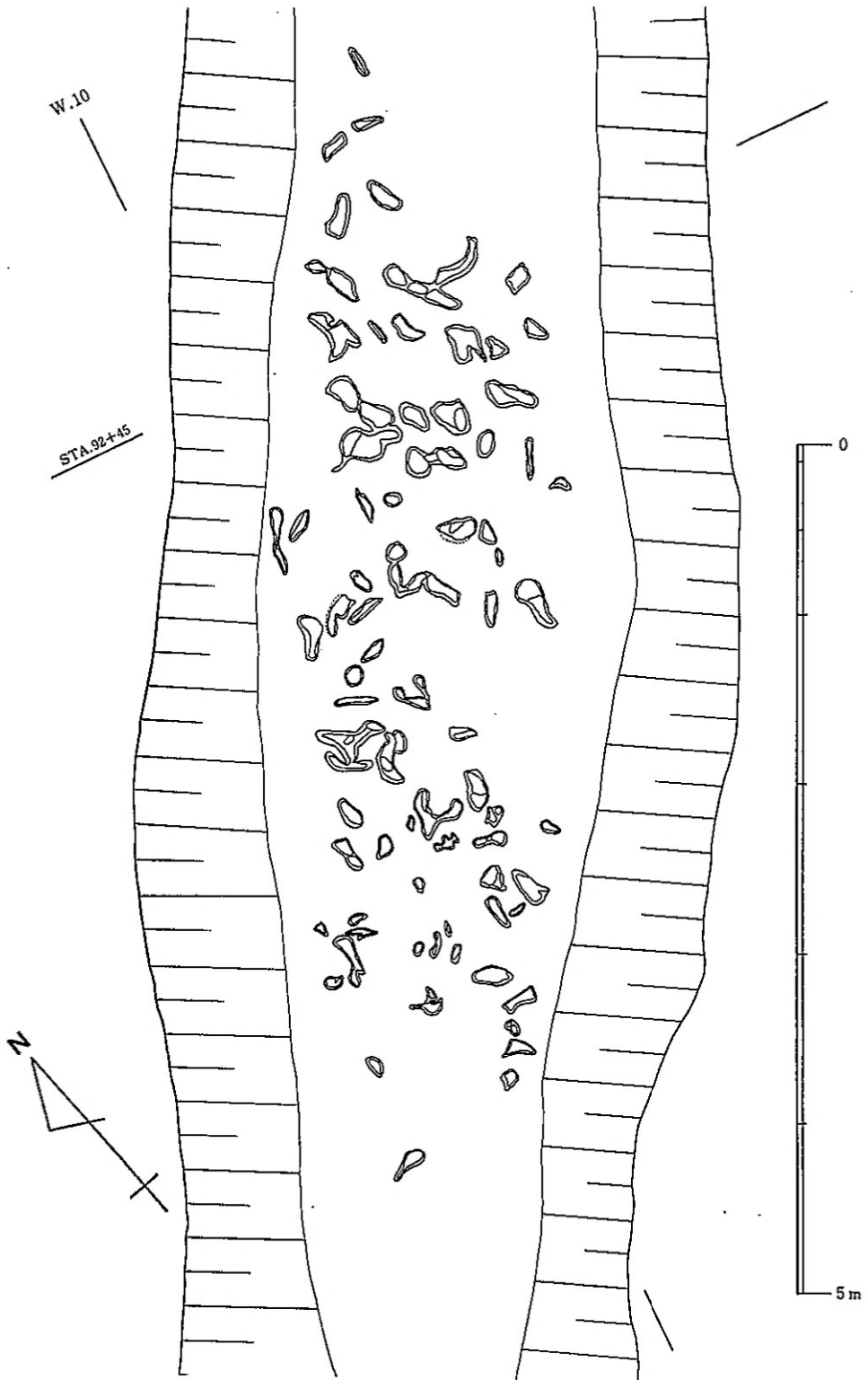
第12図 弥生時代前期 2Bトレンチ 溝群 (1/80)



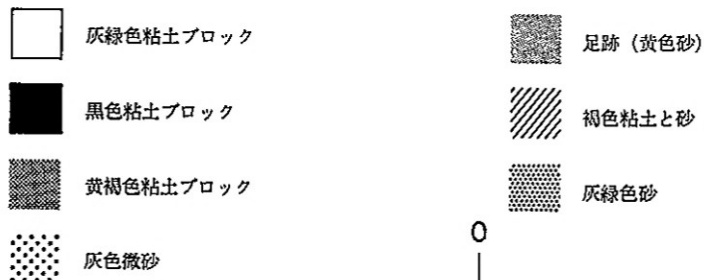
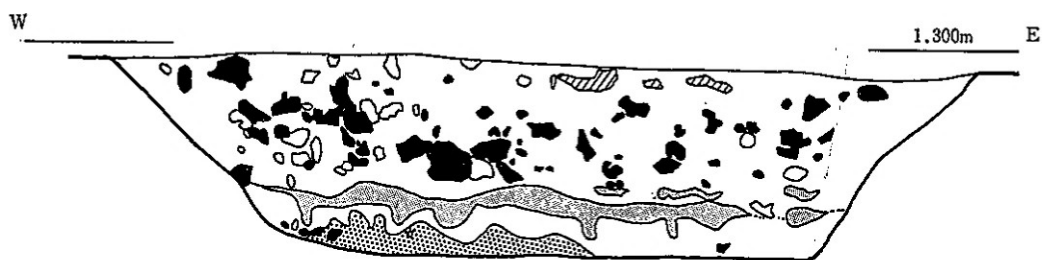
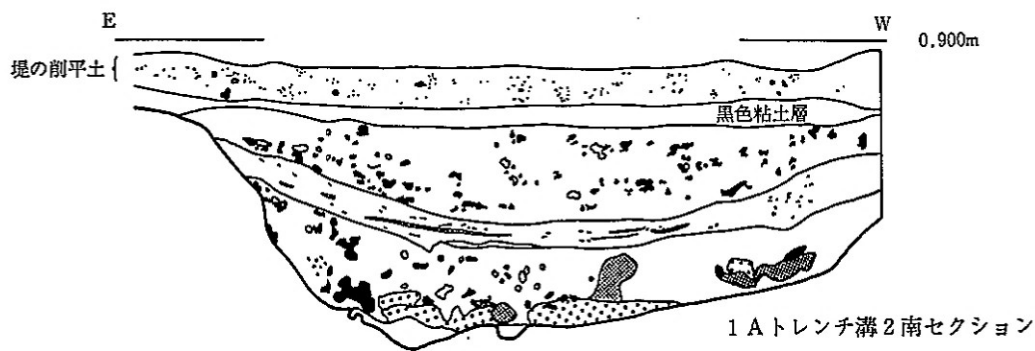
第13図 弥生時代前期 7Bトレンチ 溝1 (1/50)



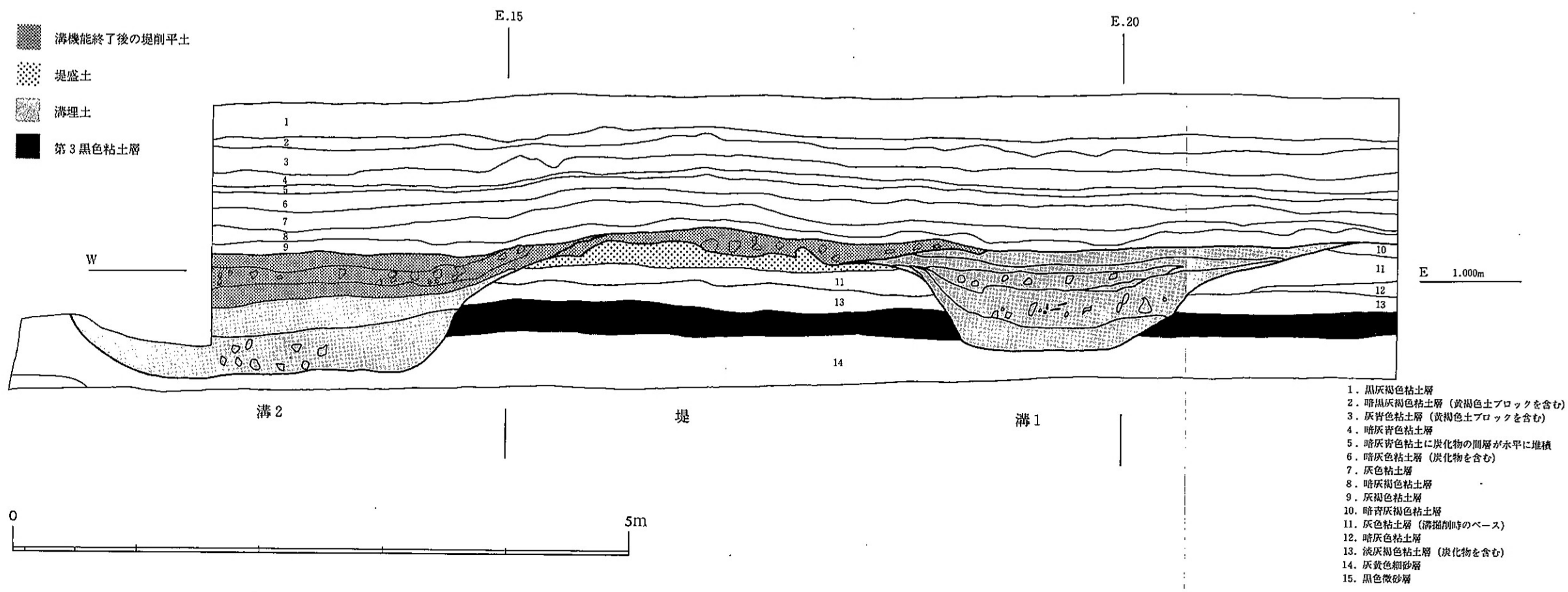
第14図 弥生時代前期 2Bトレンチ 溝1中層 足跡 (1/40)



第15図 弥生時代前期 7Bトレンチ 溝1中層 足跡 (1/40)



第16図 弥生時代前期 溝1・2土層図 (1/50)



第17図 弥生時代前期 1Aトレンチ 北セクション 溝1・2、堤 (1/40)

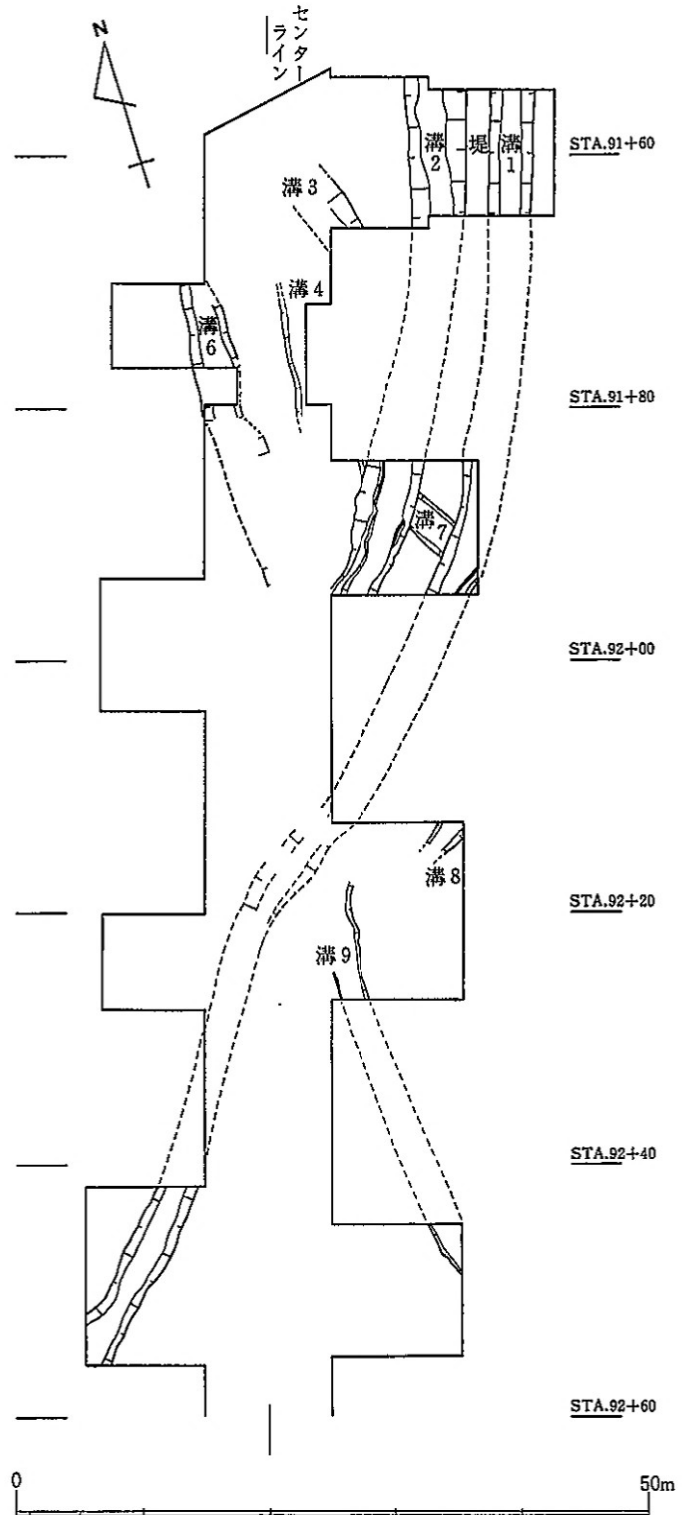
土が1 m以上も自然堆積しており、沼状になっていたらしく、堤はほとんど人工的に削平を受けずに残ったと考えられる。

溝2 (第12・16~18図、付図4、図版9・10・12・15・17)

1 A・2 Bトレンチで検出した。溝1と平行している。南南西からゆるやかに彎曲し、1 Aトレンチ部では北方向になる。1 Aトレンチ部で溝1との間に堤が認められるが、2 Bトレンチでは削平されており、検出できなかった。2 Bトレンチでは弥生時代中期Ⅰの水田面耕作土上面から検出しており、溝の肩及び堤は同時に削平され水田化されたと考えられる。また溝7を切り込んでいる。

総延長43m以上、上幅3.2~5.0 m、下幅1.6~2.2m、深さ0.74~0.89mを測り、断面はゆるやかな逆台形を呈する。2 Bトレンチ部分では、東西両側に削り出しのステップを有する。西側ステップは、長さ7.5m以上、幅0.3~0.6 m、深さ0.45 mを測る。東側は長さ2.4m、幅0.3m、深さ0.38mである。

溝掘削時のベースは灰色粘土上面で淡灰褐色粘土・第3黒色粘土層を掘り抜き、縄文時代晩期自然河川1上面の砂に溝底は達している。埋土は、溝1や他と同様で、ベースとなる灰色粘土・灰緑色粘土・淡灰褐色粘土・褐色粘土・第



第18図 弥生時代前期 溝群模式図 (1/600)

3 黒色粘土・黄褐色粘土の大小のブロックである。また、底部には灰色微砂が部分的に堆積している。2 B トレンチ部では、溝1と同様に中層と底部に人間及び鹿の足跡が認められた。底部の足跡は掘削時の、中層の足跡は改修時のものと考えられる。

溝の上層近くに、2 B トレンチ部では黄褐色粘土の薄いレンズ状の堆積が認められ、これより上層の埋土はブロックが小型化し、それ以下のものとは異なっている。従って、このレンズ状堆積は、溝の機能停止後の堆積と考えられ、レンズ状堆積の上のブロック土は、弥生時代中期Ⅰ期の水田化に伴う溝及び堤の削平土と推定される。即ち、溝の機能停止後に一定期間の空白があった後、この地域が水田化されたのであろう。この事は、1 A トレンチ部においても、溝上面一面に黒色粘土の薄い堆積があり、その上に細かいブロック土を含む溝埋土と同様の（即ち堤の）土が堆積している事からも首肯されるであろう。

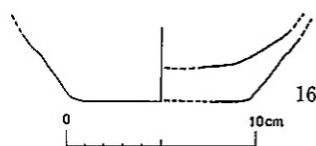
2 B トレンチ部の溝屑で、弥生土器壺片を1点検出した。小片のため図示はできなかった。外面は丁寧にヘラミガキが施され、黄褐色を呈し焼成は良好堅緻である。弥生時代前期であるが詳細は不明。

溝3 (第18図、付図4)

A及び1 A トレンチで溝の東半部のみを検出した。南東一北西方向に延び、溝7と平行になると推定される。長さ4.7m以上、幅2.4m以上、深さ0.76mを測る。断面はゆるやかな逆台形である。溝の切り込み面は灰色粘土層で、底部は、溝1・2と同様に縄文時代自然河川上面の砂に達している。埋土も同様に、灰色粘土・灰緑色粘土・淡灰褐色粘土・第3黒色粘土のブロック土が入っている。溝7と平行関係にあるところから、調査では範囲外にあたるが、溝1・2に切られている可能性が高い。但し、掘削時のベースは同一であるので、大きな時間差は考えられない。遺物は出土しなかった。

溝4 (第18・19図、付図4)

0 B・B トレンチで検出した。北北東一南南西方向である。A及びB トレンチ側へ延びると思われるが、確認できなかった。溝6とほぼ平行の位置にある。長さ9m以上、上幅2.9m、下幅1.8m、深さ0.90mを測る。断面はゆるやかな逆台形を呈する。弥生時代中期Ⅰ面で検出されたため、溝上部及び堤の削平を受けたと考えられる。溝底は第3黒色粘土下の灰緑色粘土に達している。埋土は、灰緑色粘土・暗灰色粘土・第3黒色粘土のブロックからなる。溝内からは、弥生土器壺の底部(第19図16、図版80)が出土した。



第19図 弥生時代前期 溝4出土遺物(1/4)

溝5 (第20図、付図4、写真5)

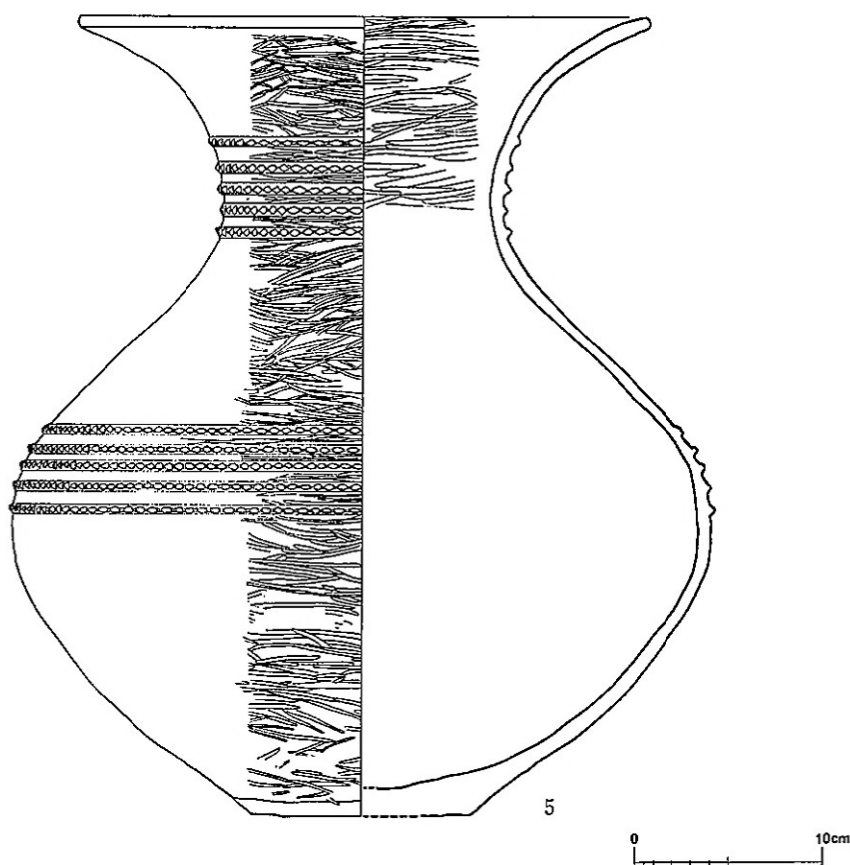
0 Bトレンチで検出した小さな溝で、ゆるやかな逆L字形を呈する。0 Bトレンチ溝4の中央部東側から、北北西に延び、トレンチ北部で西へ彎曲し、端部は丸く収束する。長さ5.2m、幅0.25~0.72m、深さ0.17mを測る。断面はU字形。埋土は暗灰緑色粘土である。溝4との関係は精査したが、切り合い関係は認められず、合流していると考えられる。溝中央部で、弥生土器壺2個体(第20図17・18、図版79)が並んで、またわずかに離れて石庖丁(第20図S.2、図版94)が出土した。S.2は約1/2が欠損している。直刃で、半円状を呈する。刃は両刃である。現存長6.1cm、幅5.4cm、厚さ0.4cmを測る。紐孔部で欠損しており孔径は不明。全体に磨滅している。



写真5 弥生時代前期 0 Bトレンチ 溝5 遺物出土状況(土器17・18、S2)

溝6 (第18図、付図4、図版16)

1 B及びBトレンチで検出した。南から北へやや蛇行気味に延びる。本溝も検出面は弥生時代中期Ⅰの水田耕作土であり、溝の肩部及び堤は同時に削平を受けていると思われる。長さ22m以上、上幅2.9~3.6m、下幅1.5~2.3m、深さ1.0mを測る。断面はゆるやかな逆台形。溝底は、第2黒色粘土層に達している。埋土は、他の大溝と同様で、灰色粘土・灰緑色粘土・第3黒色粘土のブロックからなる。また、溝埋土上面近くで、薄い炭化層が一層堆積している。こ



第21図 第3黒色粘土層上面出土遺物 (1/4)

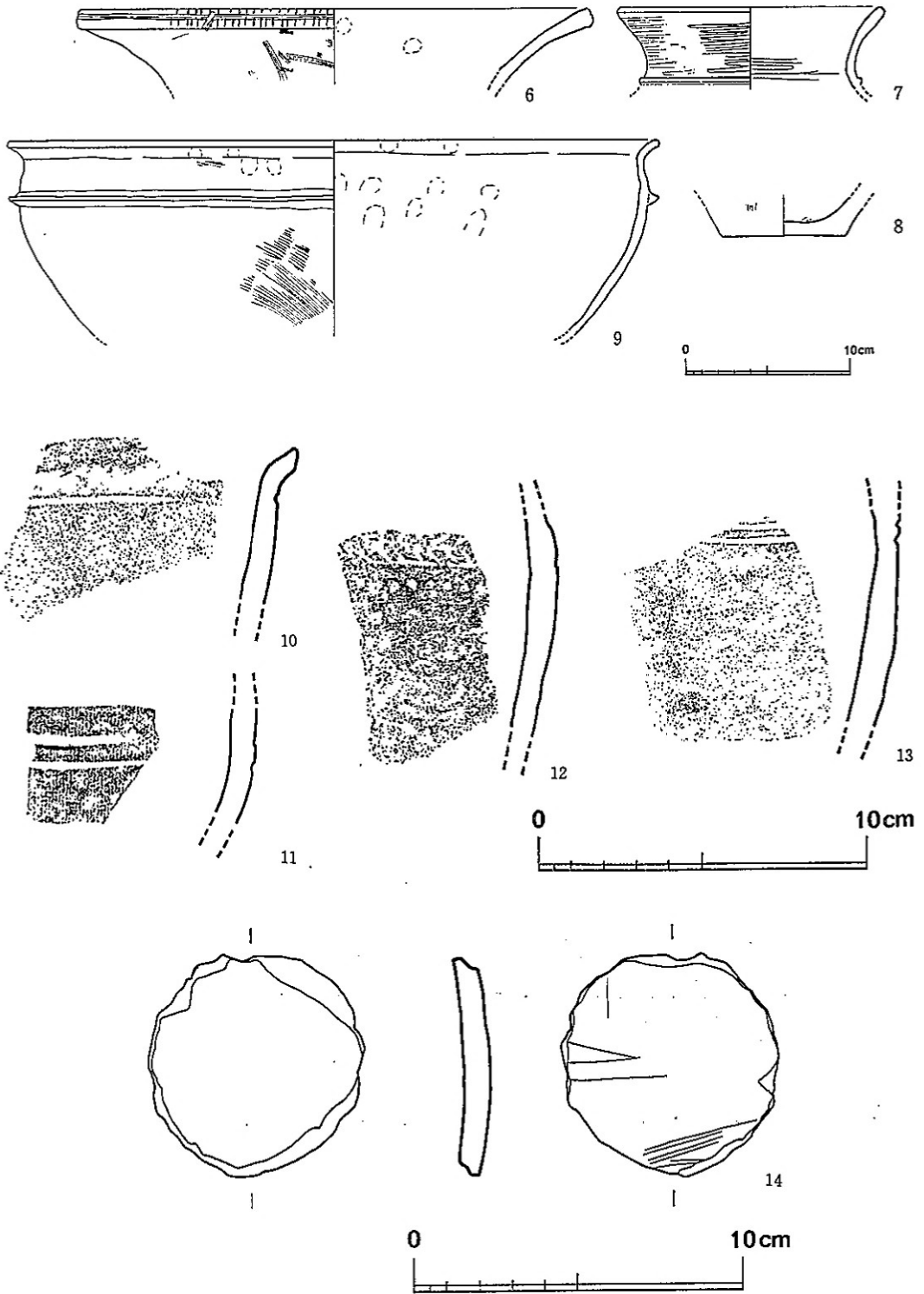
料。第3黒色粘土層は、前節の第11図(4)の滋賀里Ⅳ式の甕が層形成途次の時期を、本土器が層形成終了時を各々示し、即ち、縄文時代晩期後半～末頃には堆積を開始し、弥生時代前期新段階には形成を終えていたと推定される。

暗青灰色粘土層出土遺物 (第22・23図、図版77・80・94)

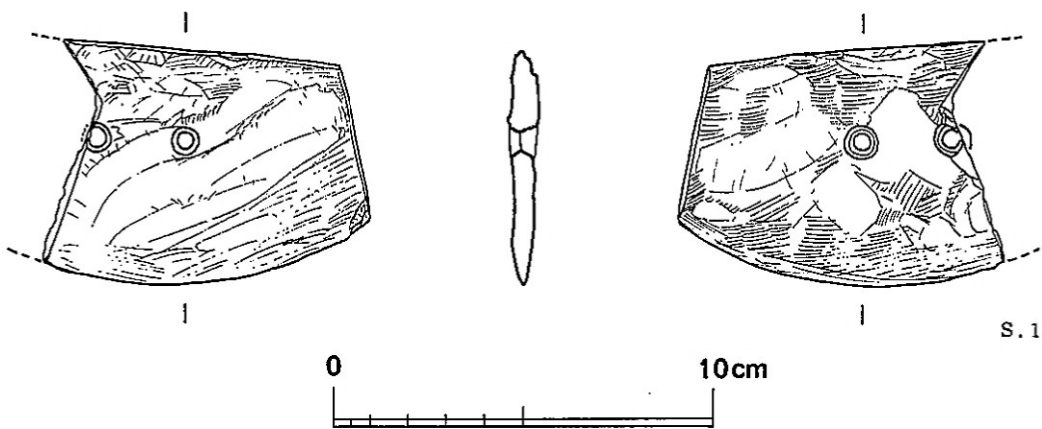
A・B・0Bの各トレンチの暗青灰色粘土層中から弥生時代前期の中段階から新段階に属する弥生土器壺・鉢が出土した。図示できるものは総て掲載した。壺は削り出し突帯をもつ前期中段階のものと、貼り付け突帯をもつ新段階のものがある。また、0Bトレンチでは土器体部を再利用した土製円板(14)が、Aトレンチでは石庖丁(S.1)が出土している。

石庖丁S.1 (第22図、図版94)

外彎刃形態で背面はまっすぐにのびる。刃部は両刃である。中央部に内径0.45～0.5cmの紐孔が双孔間距離2.4cmに位置する。両面とも研磨痕が明瞭に残るが、研磨の及ばない成形段階の剝離面がそのまま残っている。側面は自然面に研磨を施している。裏面刃部は使用による磨滅があ



第22図 暗青灰色粘土層出土遺物 ① (上段・他段)

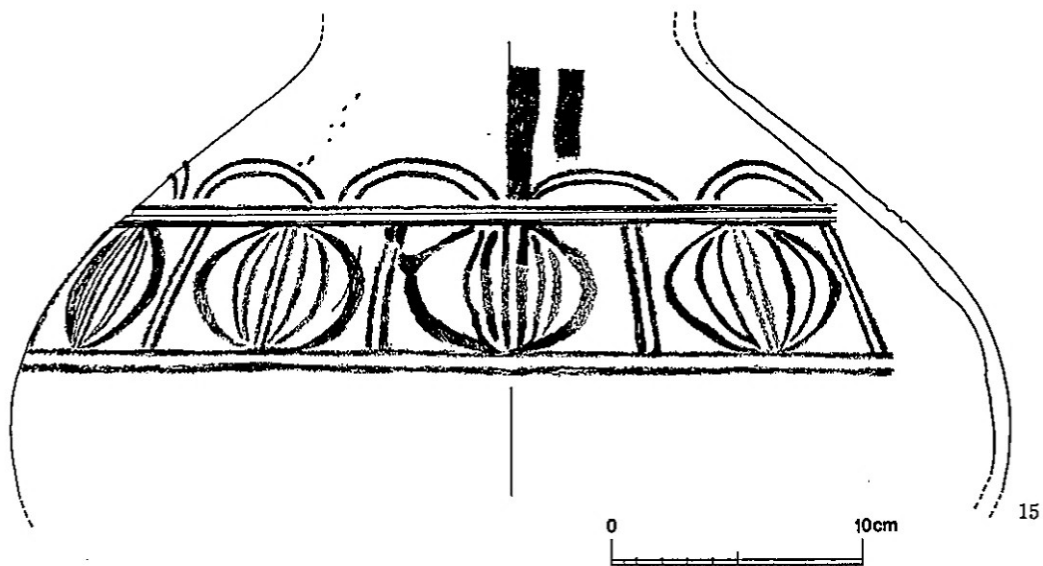


第23図 暗青灰色粘土層出土遺物 ② (1/2)

り研磨痕が消え光沢をもつ。紐擦れ痕は不明。石材は頁岩ホルンフェルスである。現長8.8cm、高さ6.3cm、厚さ0.85cm、重量62.5gを測る。

淡黒灰色粘土層出土土器 (第24図、図版80、巻頭図版2の下)

Bトレンチで出土した。外面肩部周辺に、黒地塗りの上にベンガラ(第6章第2節参照)で文様を施す彩文土器。弥生時代前期の壺で、口縁部・体部下半を欠損する。文様は、肩部の2条の沈線を中心に、横に各2条の帯が1対あり、上部は2本1対の半円、帯の間は縦2本1対の帯に区切られた中に左右各4本からなる半円状文のくり返しである。



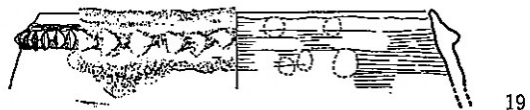
第24図 淡黒灰色粘土層出土遺物 (1/3)

自然河川・流水堆積層出土遺物 (25図、図版76・77)

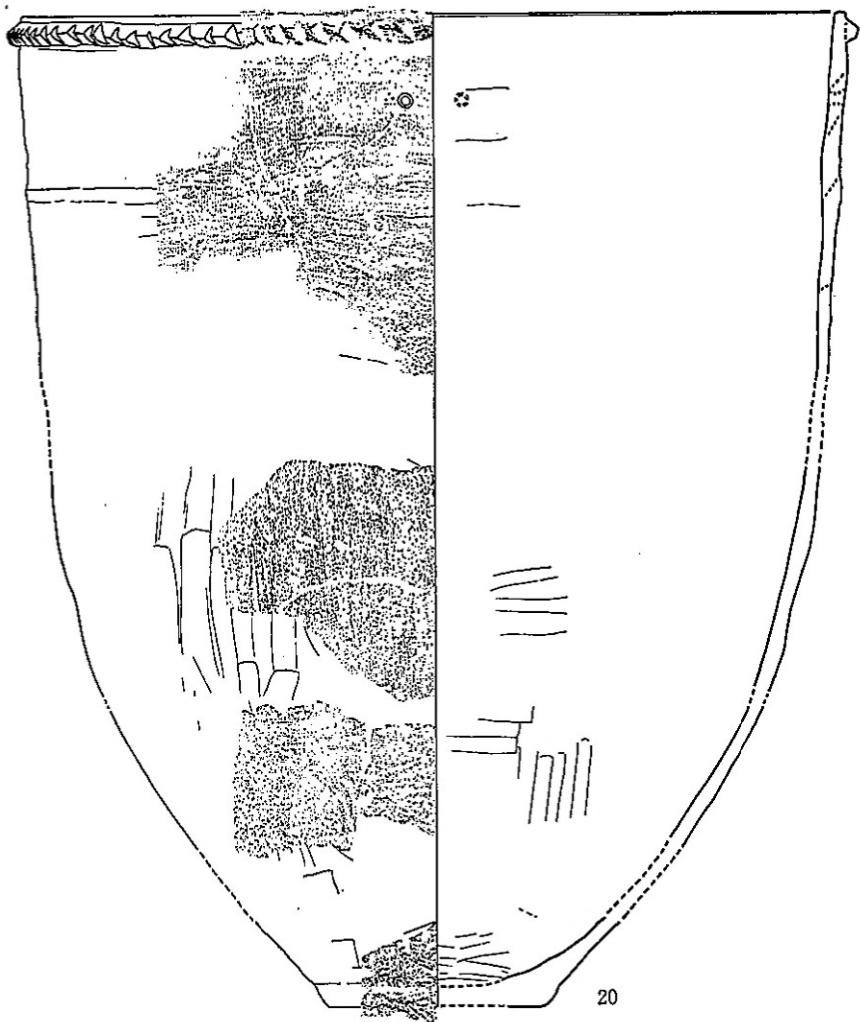
B・3B・5B・7Bトレンチにおいて、弥生時代前期および中期I遺構面をのせる淡黒灰色粘土を除去した後に検出した自然河川および流水堆積層の砂もしくはシルト層から出土した。縄文時代晩期の甕を2点含む。(19)は5Bトレンチ、(20)は7Bトレンチで検出した。(20)は、口縁部から底部までの破片である。また、突帯部下に補修孔と考えられる径0.6cmの孔が1箇所みられる。(19)、(20)ともにほとんど磨滅を受けておらず、滋賀里Ⅵに式に属す、生駒西麓産の土器である。なお、(19)は滋賀里Ⅶ式(船橋式)の可能性もある。

6点の弥生土器は、壺3点、甕3点、鉢1点で、弥生時代前期中段階から新段階のものを含んでいる。

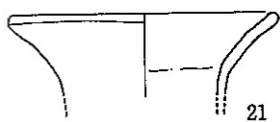
この層は、縄文時代晩期の自然河川2・3の埋土の最上層であるとも考えられる。すなわち、自然河川2の流れの中心部はBトレンチ部を縦断しており、多量の砂・シルトを堆積させているが、中心部からはずれる3B・5B・7Bトレンチ部では、砂・シルトの堆積層の間に薄い粘土層形成している。この粘土の間層にはさまれたシルト・砂の層は、大きな自然河川の一時期の流れに相当すると思われる。先に述べた遺物も、それぞれ、その様な堆積層から出土しており、縄文時代晩期自然河川の最上部出土と考えて大過あるまい。ここでの遺物が、縄文時代晩期末から弥生時代前期新段階におよんでいることは、自然河川の存続時期の幅と考えられよう。



19



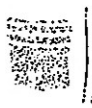
20



21



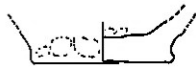
22



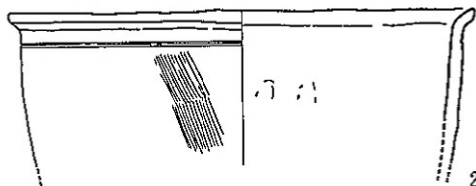
23



24



25



26



第25図 弥生時代前期 自然河川・流水堆積出土遺物 (上1/2・下1/4)

第3節 弥生時代中期 I

調査区北部、約2500㎡の面積に弥生時代中期 I の水田跡を検出した。レベルが1.1m～1.4mの第XIV層（淡黒灰色粘土）の上部を耕作土（暗灰色粘土）として使用し、その上面に高さ5cm内外の断面半円形を呈す小規模な畦畔による方形区画と、そこからの排水の機能を持つ河川を中心とする種々の施設が設けられていた。

本遺構面全域には厚さ2～3cmの淡青灰色シルトが堆積し、さらにその上部は流水堆積による砂もしくはシルト層に覆われていた。この層は、砂粒の混り方、色調の変化の観察によると、一時に急速に堆積したものと考えられ、遺構面は一揆的に流入した水とそれに運ばれた砂とシルトによって瞬時に埋没し、その機能を失ったと考えられる。砂および淡青灰色シルトを除去すると、足跡、鋤跡、畦畔と水口など埋没直前の遺構面の様相がリアルにうかがえる部分も広く遺存していた。また同時に、遺構面を突切り、畦畔を削り取った部分からは、その埋没時のすさまじさがうかがえる。

耕作土（図版27）

耕作土として第XIV層（淡黒灰色粘土）の上部、暗灰色を呈す部分を使用していた。厚さは10cm内外であり、礫などは含まずきめ細かい粘土である。そして検出時には粘性がかなり高かったが、時間の経過と共に、耕作土自体が空気を含んでやわらかくなり、現在耕作している水田土壌と非常によく似た様相を呈するようになる。また耕作土中には植物遺体などの有機物を多く含んでいるばかりか、いくつかのモミも検出された。

S T A . 92+10 以北の耕作土中には、黒色粘土や灰緑色粘土のブロックが多数見られた。これは、この一帯に存在した弥生時代前期の大溝と堤遺構が機能を停止した段階で、堤遺構を削平して大溝を埋め、水稻耕作が可能な平坦な面に造営する際のものと考えられる。A・1Aトレンチ付近では、弥生時代前期の大溝と堤が自然堆積によって埋没しつつも、その痕跡を明確に遺存させているが、ここでは、それらの廃絶後長く土地の利用はみられず、古墳時代後期に至るまで湿地帯であって人為的な遺構は構築されていない。この利用状況の差異は立地のちがいが、主要には下層の土質に左右されていると考えられる。

耕作面の直下には、縄文時代晩期の長大な自然河川2・3の埋土である砂層が堆積しており、1.5mもの厚さを持つ部分もある。この上に作られた耕作面は、砂層まで10～20cmほどしかない場所もあり、かなり水はけが良く、上面の畦畔・足跡・鋤跡などの遺存状態から考えて、通水しない限り、恒常的に乾いた状態であったと考えられる。水田土壌に特有のマンガンの斑文が耕作土や下層で見られなかったことも、この砂層と関連があるのかもしれない。

耕作面が途切れたA・1Aトレンチ帯とS T A . 92+90以南では、耕作土に併行する土層が淡黒灰色粘土をベースに薄い2層の有機質層とその間の灰緑色粘土によって構成されており、湿

地帯で沼のような環境が考えられる。また、耕作面がこの沼状遺構に移行する地点と、下層の砂層の始まる地点とが概ね一致することは、偶然ではあるまい。従来、沼状の低湿地帯がより初期の水稻耕作に適すると考えられていたが、ここでは逆に比較的乾燥した場所を選んで耕作地を形成していたと考えられる。

畦畔（付図6～9、図版19～27・29）

本調査区では、水田を形作る畦畔を多数検出した。通常下幅20～40cm、高さ3～10cmで断面半円形を呈す小規模なもので、耕作土である暗灰色粘土を周囲から掻き揚げただけの簡易なものである。この小畦畔が等高線に対して平行もしくは直前に設けられて区画を作る。等高線の変換点に作られた大畦畔部（畦畔6）は、下幅約150cm、上幅50～100cm、高さ50cmであり、断面は台形を呈し、上面はフラットで、人間の歩行に耐え得る広さをもつ。しかしSTA.92+60、E2で屈曲した後、著しく幅・高さを減じ小規模化していくことは、長く連続する大畦畔ではなく、この地点にのみ設けられたものであることを示している。大畦畔部に盛られた土は、色調の違いから3～4層に分けられるが、土質はすべて耕作土である暗灰色粘土と同一であり、砂などを混入して積み上げたものではない。STA.92+58、W.5～STA.92+60、センターライン付近のこの畦畔の上部平坦面に、アランダムな方向の多数の鋤跡が遺存し、その部分の畦畔はおし広げた状況であったが、その性格は不明である。

水田の給排水を行うための水口は、小畦畔上では畦畔4・6・7・8・9・13で検出された。すべて水田区画を作る畦畔の中央部に幅40cmほどの規模で作られていた。恒常的に機能を維持するため設けられた杭などの施設は検出されず、鋤で畦畔を切ることで水口の機能を果している。畦畔9に見られる水口には鋤跡が遺存し、これを実証している。また大畦畔である畦畔6の中央にも上幅2.5m、下幅1.7mの水口が存在する。ここでも水口を開閉する杭その他の施設の痕跡は認められず、鋤で畦畔を切り水を流し、粘土をつめて水口を閉じたと考えられる。水口の北面側では、大畦畔部は南へ張り出したかのように規模を拡大する部分（大幅約3m、上幅約1.5m）があるが、整えられた形状ではなく、水口を切った際の粘土をこの地点に積んだ結果かもしれない。

溜池状遺構（付図6・8・9、図版26）

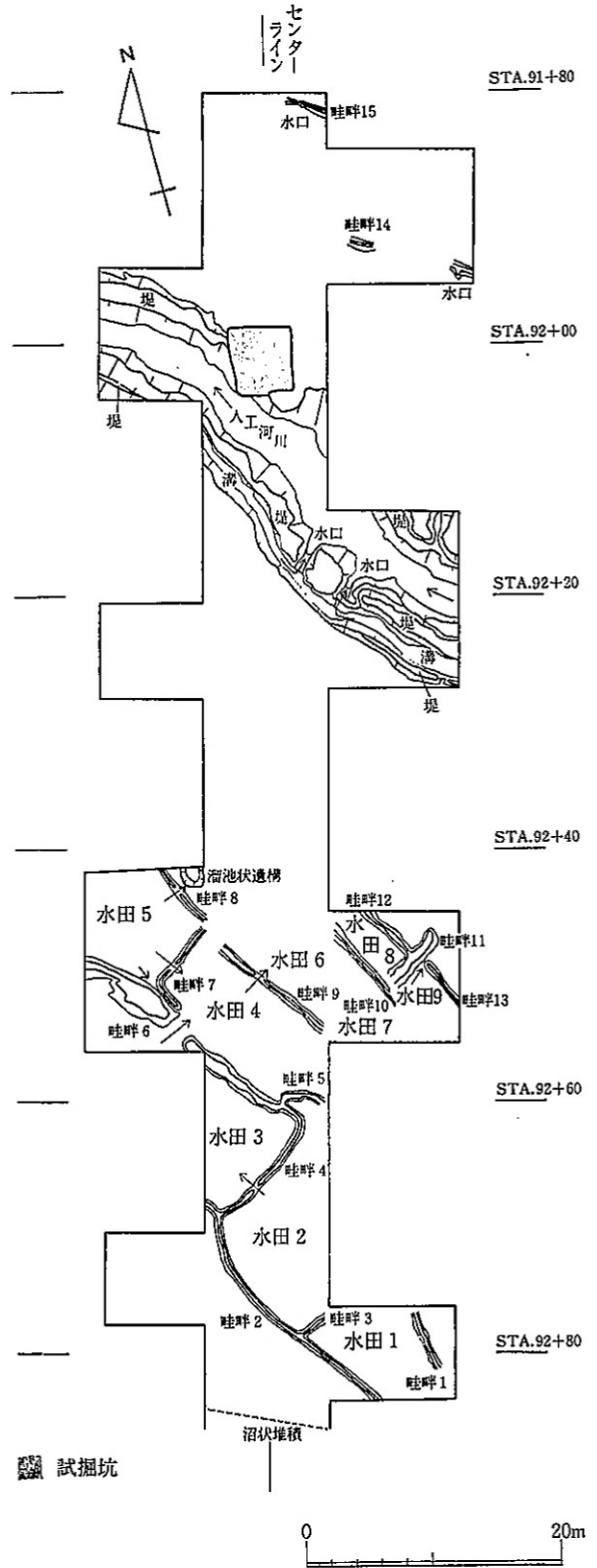
7Bトレンチ北東端に遺存。直径2m内外、深さ0.8m。溜鉢状を呈している。水田面5から畦畔8の中央部の水口を通して水が落ちる。機能については不明。

水田区画と水利（第26図、付図6～9）

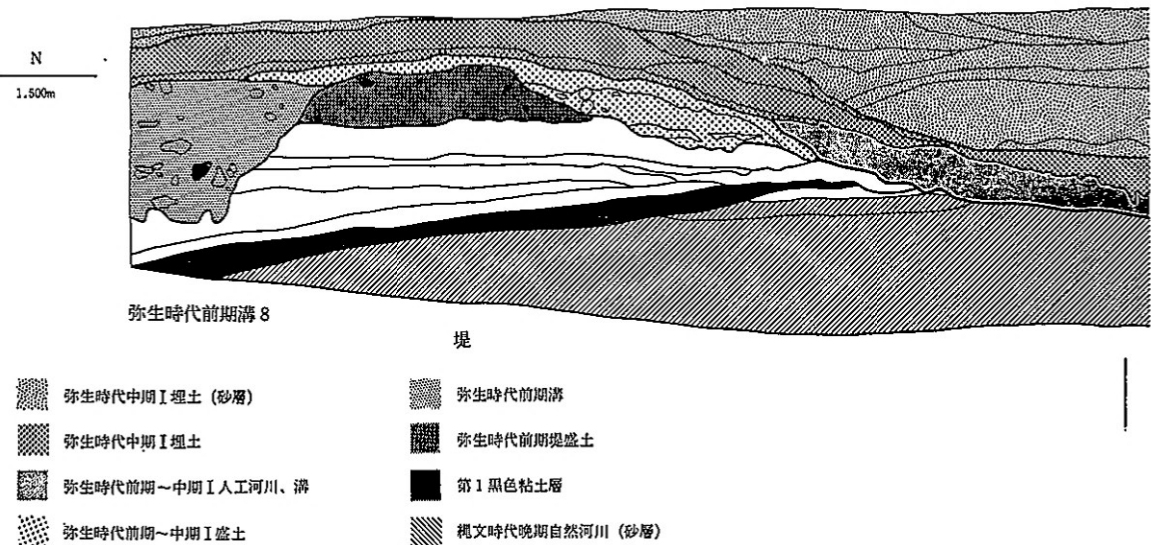
人工河川以南の水田面は、人工河川に向って南西から北東方向へ傾斜している。各水田はこれに規定され、等高線に平行または直行する畦畔によって区画されている。等高線に平行する畦畔

は、畦畔1・2・6・8・9・10・12・13であり、北西から南東に走り、人工河川の流れる方向とも平行している。このうち大畦畔部である畦畔6は、等高線の交換点に構築され、それを挟んで南側の畦畔の間隔が、畦畔2と畦畔6の間では8.7mあるのに対して大畦畔部より北側では、畦畔6—9間が6.5m、畦畔9—10間が5.5m、畦畔10—12間が2.6mと人工河川に接近するに従ってその間隔を狭めている。1枚の水田内のレベルをより水平に保つため、平坦な地点にはより大きな区画、若干傾斜をもつ地点では小区画を設定していることは、水田の造成に際して細かく地形を観察し、水田への給排水を考慮した上で、計画的に施工されたことを示している。

等高線に直行する畦畔は、畦畔3・4・7・11の4条が遺存していた。大畦畔部（畦畔6）より南では、直行する畦畔は平行する畦畔との合流点で完結してしまい、何本もの等高線と平行する畦畔と交叉して規則的に方形区画を形作ることはないと考えられる。STA.92+69、W.4で畦畔2から北東方向へ発した畦畔4は、STA.92+60付近で北西方向へ屈曲し、畦畔6に至る。大畦畔部である畦畔6も、STA.92+60、センターライン付近から漸次細くなっており、この2条の畦畔は、連続している1条の畦畔とも見え、区別するのは困難である。また畦畔3—4間は10.4mを測るが、畦畔4と西側で対となるべき畦畔は、9Bトレンチ内では検出されず、水田3の南東、



第26図弥生時代中期I 水田模式図 (1/600)



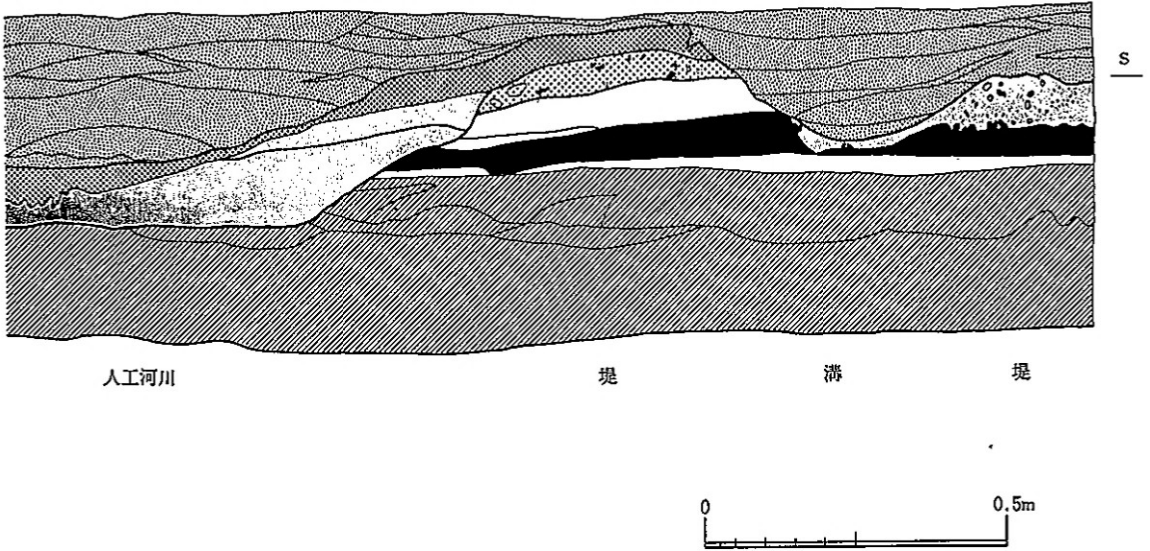
第27図 弥生時代中期Ⅰ～前期

北西方向の距離は20mを越え、直行する各畦畔間の距離にかなりばらつきがあったことが想定できる。大畦畔以北の部分では、畦畔7・8・9、畦畔11・12・13に見られるように、等高線に直行する畦畔は平行する畦畔と何条も交叉し、連続した方形区面を作っていたと考えられる。

大畦畔部以南の水田1・2・3のレベル差はほとんどなく、どの水田も平坦であり、かなり広い面積の水田を自由に設けることが可能であったが、以北の部分は、傾斜する面を等高線に平行する畦畔で区切り、各畦畔間をフラットに保ち、直行する畦畔で仕切って規則正しい方形区面を設定したと考えられる。

次に本水田面の水の流れを述べる。大畦畔部に設けられた水口を通り、大畦畔部以南の水田の水が流れる。これは畦畔4に見られるように畦畔の中央部に切られた水口によって水田1→水田2→水田3と東から西へ順に流れ、水田3に集中した水である。水田5の水の一部は畦畔8の水口を通して溜池状遺構に落ちる。残りは畦畔7の水口と大畦畔部と畦畔7との間を抜けて水田4へ流れる。このように大畦畔部直下に位置する水田4では、大畦畔部より上流域の水と水田5の水を一度集中しており、畦畔9の中央に切られた水口を通じて下流に水が流れる。さらに、下流域では畦畔11と畦畔13の間の水口が確認できただけであるが、水田6→水田8の順で水が流れ、最終的には人工河川へとつながっていたと考えられる。

人工河川 (第27図、付図6～9、図版30～32、巻頭図版1の下)



4 B トレンチ東セクション 人工河川、溝 (3/40)

S T A .91+95～S T A .92+25付近では、水田からの排水施設の一部と考えられる遺構を検出した。人工河川に水田からの排水をすべく、溝と堤が築造され、堤には水口が切られていた。

人工河川は、上幅4.5～6 m、下幅2～3.5 m、深さ1.4 mを測り、南東から北西へ流れていた。岸から急激な傾斜で底部へ続くが、底部は平坦で、河川の断面はU字形を呈す。川底には人間の足跡が多数、流れと平行に歩行している状況で遺存しており、通常の流量は、人間が歩いて渡れる程度のものであったと考えられる。埋土は、黄色砂を中心に、黄色から灰色までの色調と粗砂からシルトまでの質をもち、ラミナーを見せて堆積している。また両岸の水田面も、この人工河川のオーバーフローによって埋没したものと考えられる。

断面観察によると、本河川の間は存在期間はかなり長く、その間、北岸では青灰色粘土が約30cm堆積し、幾度か川底の泥を両岸に掻き揚げた状況が理解できた。当初の川底より暗灰色粘土・暗灰緑色粘土、黒灰色粘土の3層が堆積しているが、暗灰色粘土は河川のも最深部では深く、暗灰緑色粘土、黒灰色粘土の2層は川底部へは続かず、岸近くに掻き寄せられ、一部は堤遺構上面に積み上げられていた。また、人工河川埋土の最下層より磨製石剣（S 4）の破片が出土した。

堤遺構 （第27図、付図6・8・9、図版30～32、巻頭図版1の下）

人工河川の両岸に堤遺構がみられた。右岸のものは、上幅0.5～1.5 m、下幅1～3 m、高さ0.3mを測るが、意識的に盛土、整形されたものではなく、人工河川の底部に堆積した泥を岸に掻

き揚げることによって形成されたと考えられる。

左岸の堤遺構は、上幅1.5～2 m、下幅2～3 m、高さ0.6mを測る。断面観察によると、厚さ約20cmの明確な盛土が見られ、盛土中に黒色粘土のブロックが含まれることから、当初第XVII層（第3黒色粘土）を切り込んで南側に築造された溝の掘削時の排土を意識的に積み上げたものとも考えられる。そして、人工河川底に堆積した黒灰色粘土が堤遺構上に積み上げられていったため、埋没時には約20cm高さを増していた。また、左岸の堤遺構にはS T A .92+17、W .4とS T A .92+20、W .6の2箇所にも水口が設けられていた。堤遺構の南側に平行して走る溝の流水を人工河川に落すためのものと考えられる。東側の水口では溝を北西へ流して来た水、また西側の水口では南東へ流れてきた水を集中させ、人工河川へ排水していたようである。水口には杭、その他恒常的に機能を維持するための施設は何ら設けられず、ここでも畦畔と同様粘土をつめて水口を塞いだと考えられる。

S T A .92+0付近のB、3 B、4 Bトレンチでは弥生時代前期の溝を切って南東～北西へ流れる流路と、それに平行して走る溝を検出した。この流路と溝は、後述する弥生時代中期Ⅰに伴う遺構であり、規模その他詳細については前述したが、ここでは弥生時代前期にこの一帯で掘削された9条にも及ぶ溝群と、それに続く時期⁽¹⁾の遺構との関係について述べる。

4 Bトレンチにおいて、溝8、9は、その埋没後に流路と溝によって分断されており、両者の先後関係は明確に把握することができた。この両者の形成、埋没の長期に及ぶ過程の追求によってこの地で水稲耕作を営んだ弥生時代人の労働の在り方をうかがい知ることができるであろう。4 Bトレンチ東セクションにそれを見てみたい。

第27図の左端には溝8の黒色粘土、灰緑色粘土などの小ブロックを含む埋土が見られ、その右に接して溝8に伴う堤遺構の盛土（弥生時代前期盛土）が存在する。溝8の埋土は、砂層を含まず主に粘土によって構成されており、長い期間の滞水の結果として形成されたものと考えられる。また埋没の間、何回かに渡って溝をさらっている可能性も指摘されており、そうであるとすると、この溝の存続期間はさらに長く想定せねばならない。溝8が最終的に埋没した段階では、埋土が堤遺構の盛土上を埋め、かなり厚く堆積している。

この後、この地点に幅8 mを測る流路が流れる。この流路の始源については、人為的に構築されたものか、自然に依るものか方面観察によって判方を下すことは不可能であった。しかしこの下層にはかつて縄文時代晩期に属する河川が流れており、この地点が微高地の縁辺に立地していることから、前期溝群の埋没後、ここに水が集中し、そのために流路が自ら形成されたと考えるのが妥当であろう。同セクションには、この流路を安定させ、機能を充実させるべく、改修を行った様子がうかがわれる。

第1回の改修は、流路の南に平行な溝を切り、流路との間に堤遺構を築造する。この堤遺構の盛土と流路の北岸に積まれた粘土とは、黒色粘土の小ブロックを含み、同一のものであることから、流路の底部の堆積土と底部に露出した土層（黒色粘土、その他）を一部削って掻き上げたも

のと考えられる。

次に流路下層の粘土層が堆積するが、ここからは第34図の弥生時代前期のものと考えられる石剣の破片が出土している。そしてこの堆積土と同じものが、溝の底部と溝の南側に堆積しているが、当初、若干大規模に掘削されていた溝が、この堆積土によって埋没してゆく過程で、底ざらえがなされ、溝の機能を維持させたものであろう。(2回目の改修)

3回目の改修では、続いて堆積した流路埋土の上層を流路の北岸と、堤遺構の上に掻き上げる。この土層は川底部では薄く、岸の両肩部では原くみられることからこのことは確認できる。

そして最終的にはこの一帯は水田を含めてかなり広範囲に、この流路が運んだ土層によって埋没してしまう。少なくとも3回に渡って川底をさらえ、通水量を多くしようとした努力にかかわらず、この時の水と土砂は流路をオーバーフローし、耕作地とその施設を無に帰したのである。この土砂の中には畿内第Ⅱ様式に編年される土器が出土している。

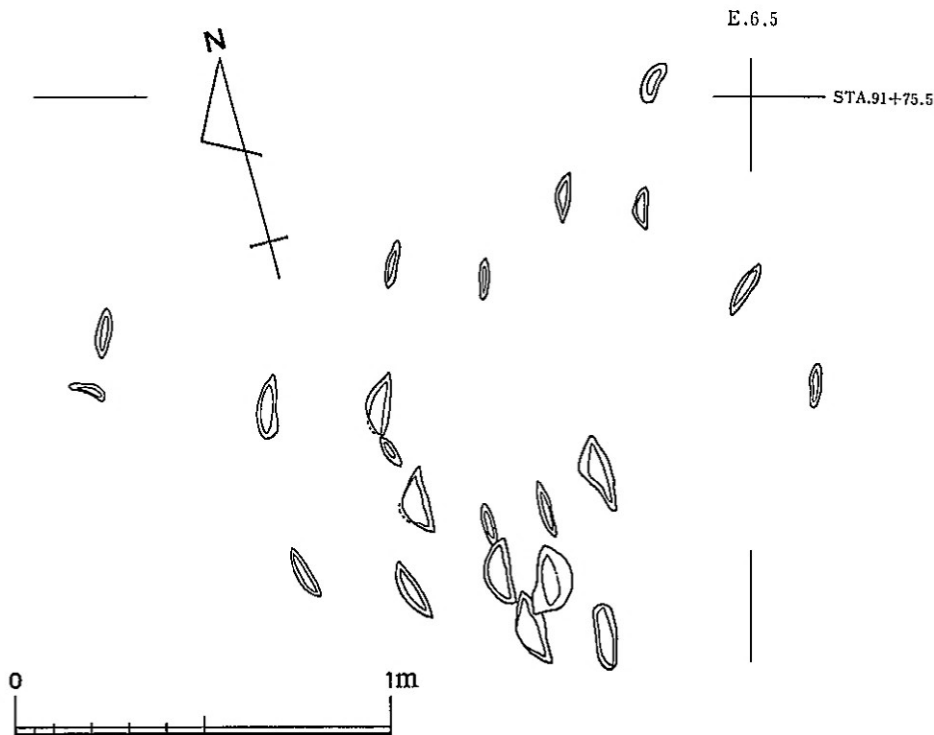
溝 (第27図、付図8、図版30・32)

4Bトレンチの南東のコーナーから北西方向へ走る。幅1.2~2m、深さは南岸から0.3m、北岸の堤遺構頂部より0.6mを測る。底部のレベルは堤遺構に設けられた水口の部分を最深部にし、両方向へレベルを上げており、水は南東と北西の両側から堤遺構に設けられた水口に向けて流れる。水田から排水された水はこの溝に流れ、両方向から水口の部分に集中し、人工河川に落されるといふ構造が想像される。

以上述べた人工河川以下の一連の施設は、これ以南の水田の排水を受け持つためのものと考えられる。STA.92+40~90一帯で検出された水田と人工河川との間、約20mは埋没時の水と土砂によって著しく侵蝕され、両者の関係を把握することは困難であった。しかし、水田の水の流れは、等高線に直角に北に向っており、最終的には人工河川に至るといふ以外に考えられず、また、川岸に近接して鋤跡が遺存していたことも、この一帯まで水田が連続していたことを示している。それに対して、人工河川以北の水田の水利は別系統によったものと考えられる。右岸の堤遺構は単に川底の浚渫時の排土を積み上げただけにすぎず、意図的に築造したものではなく、また地形的にみてもこの一帯の水が人工河川に排水されたかどうか疑問である。

鋤跡 (第28図、付図8、図版20~23・28・29・95)

遺構面上に単独または10~50個のまとまりをもって検出された。横幅10~20cm、深さ1~8cmを測り、地面と30°~70°の角度をもって踏み込まれており、鋤によるものか鍬によるものか断定できないが、一応鋤によるものとする。刃先は半月形のもののみである。STA.91+95、E.4付近では、鋤跡20個ほどが1m四方の範囲に遺存しており、南東から北西に向けて踏み込まれている。STA.92+22、センターライン付近では、約50個の鋤跡が、1.5×2mの範囲に南から



第28図 弥生時代中期I 1Bトレンチ 水田面鋤跡 (1/20)

北に向って踏み込まれていた。これらの鋤跡は、現在の水田にみられる稲刈り後の根おこしの痕跡に非常によく似ている。当時の水稻耕作における収穫法は、石庖丁による穂首刈りであると考えられている。この方法による収穫後、稲のクキの部分を水田に放置した場合、同一水田面での連作は不可能であるため、連作する場合は、クキを除去し根おこしする必要があると考えられる。本遺構のように一連の体系をもつ施設では、連作を前提としている以上、これらの鋤跡は収穫後の根おこしによるものと理解して大過あるまい。また、畦畔の水口が多く切られていることは、この水田面の埋没時期を収穫以降とすることと矛盾しない。しかし、水田4の場合、全面ではなく、一部分にのみ遺存していることの意味は不明である。人工河川左岸の近くまで鋤跡が遺存していることから、この一帯に水田跡が拡がっている可能性が考えられる。

畦畔6と畦畔9上にも多くの鋤跡が遺存していた。畦畔6(大畦畔)上には2箇所、1m四方ほどの範囲にみられ、アトランダムな方向より踏み込まれていた。その性格は不明であるが、この付近の畦畔はかなり広範に拡がっており、これに関連するかもしれない。畦畔9のものも、1m四方の範囲に南西から北東に向って踏み込まれており、水田面上のものと類似しているが性格は不明である。

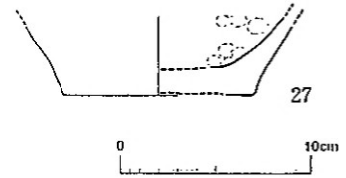
足跡 (付図8、図版20・21・31)

本遺構面上からも多数の人間の足跡が検出された。長さ24~26cm、幅8~10cm、深さ8cm内外

である。足跡は全面に拡がっているが、特に水田4埋没時に侵蝕されたS T A.92+30付近一帯で密度が高く、人工河川底にも多数遺存していた。川底のものは川の流れの方向と平行に歩行した状況が想像されるが、それ以外の足跡は方向性がなく、いかなる作業の過程で刻印された足跡か不明である。

弥生時代中期Ⅰ面出土土器 (第29図)

5 B トレンチの中期Ⅰ面上に貼り付いて出土した。弥生土器甕底部である。



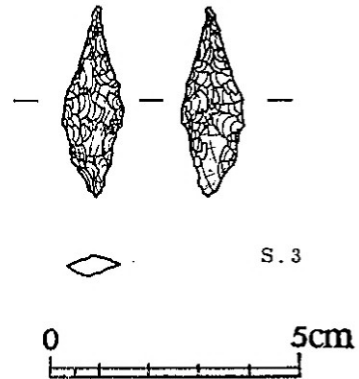
第29図 弥生時代中期Ⅰ面 出土遺物 (27)

弥生時代中期Ⅰ水田面耕作土出土遺物

7 B トレンチの耕作土中より石鏃 (S. 3) が、また、C・2 C トレンチの同土からは木製やす (W. 3~5) が出土した。

石鏃 S. 3 (第30図、図版94)

この石鏃は凸基式の小型のものである。先端部が非常に鋭角で細長く、逆刺部がわずかに突出し、基部が幅広い形を成し薄身である。先端部は中央に稜が通り断面菱形になるが、基部は扁平な六角形になる。基部は一部欠損している。現長3.8cm、幅1.2cm、厚さ0.35cm、重量1.3gを測る。



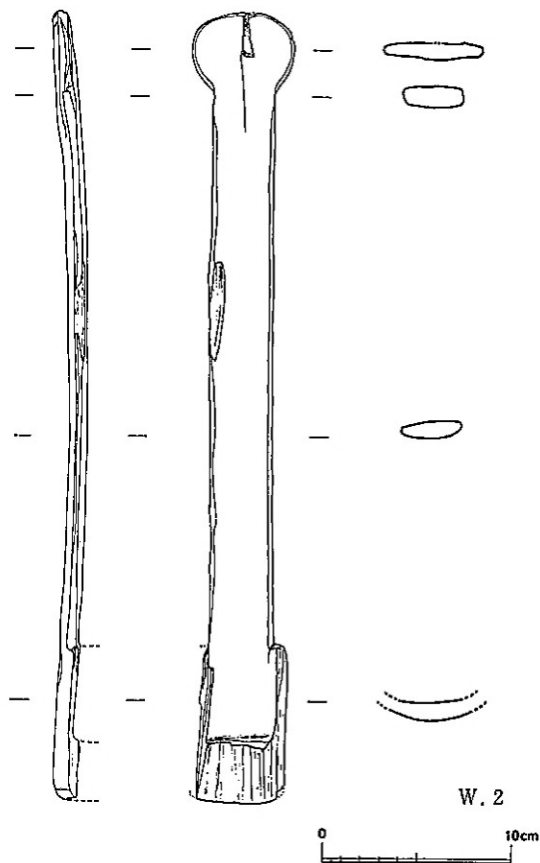
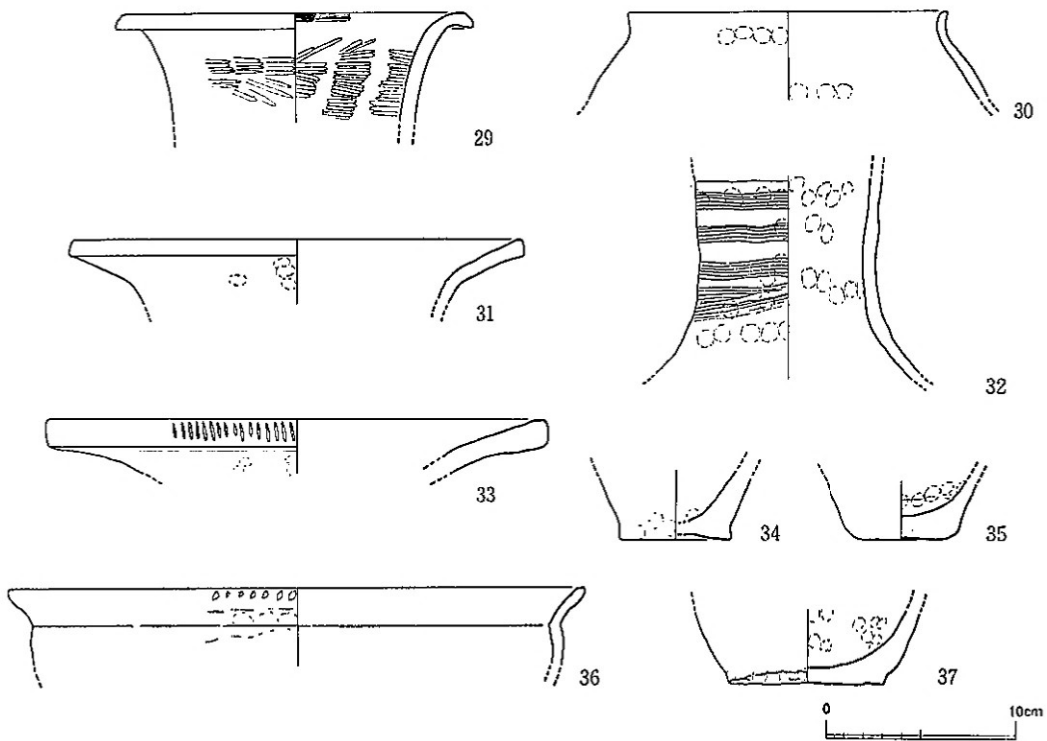
第30図 弥生時代中期Ⅰ 水田面耕作土出土遺物 ① (36)

木製やす W. 3・4・5 (第33図、図版92)

3点のやすが出土している。樹種はW. 3のみ鑑定を行ったが、3点とも同じ材質とみられる。

W. 3は、先端部がわずかに欠けているが、現長19.9cm (復元長20.4cm)、最大径0.8×0.75cmを測る。断面は円形~楕円形を呈す。木目がまっすぐにのびており、ヒノキかカヤの針葉樹を利用していると思われる。年輪の径が直線的にのび、細い枝から作られたものではないことがわかる。上半部に浅い挟りがあり、側面からみて、先端部が反り返っている。浅い挟りは着装用のもので、軸に2~3本のやす先を組合わせて、軸に取りつける際のかかりになるものである。おそらく三ッ又やすになるであろうと考えられる。先端部が反っているのもそのためとみられる。

W. 4は完形品で、全長15.8cm、最大径0.7×0.5cmを測る。断面は楕円形を呈す。基部に最大径を有し、基端は斜めに削られて鋭く作られる。年輪の径は直線的にのび、細い枝から作られたものではないことがわかる。



第34図 弥生時代中期Ⅰ 流水堆積（水田面埋土）出土遺物 ② (1/4)

第4節 弥生時代中期Ⅱ

S T A. 92+80以南、第Ⅲ層（暗灰色シルト質粘土）上面に多数の歩行状態を示す人間の足跡を検出した。遺構面のレベルは1.2~1.7 mを測り、S T A. 93+40を最深部に、南北両側にレベルを上げていく。全体としてU字形に傾斜したこの面では、人為的な遺構は何ら検出されず、最深部は埋没時に激しい水によってえぐられた跡が残る。この上部は第Ⅳ層（砂もしくはシルト）が覆い、一時の大量の水と土砂の流入によって埋没したと考えられる。また遺構面以下の土層を見ると、縄文時代晩期以来、一環して粘土層が堆積しており、この時期まで軟弱な地盤の湿地帯であったと考えられる。（付図10、図版34~37）

足跡は長さ概ね24~26cm、幅8~15cm、深さ約15cm前後である。

S T A. 93+40付近では、南西方向に8歩分の直線的な歩行状態が認められる。左足から始まり、歩幅は27~30cmと短い。前後の状況はわからない。

S T A. 93+45付近では、トレンチ中央部から東方向へ4歩、南東へ向きを変え5歩分の歩行がみられる。方向を変えた時の歩幅は65cm、他は27~35cmである。

13Bトレンチ（図版37）では、6歩分の足跡が東→西へ直線状に伸び、7歩目で方向を変え、北西へ向う。その他、数例の歩行を読みとれる足跡がある。

足跡の検出例が多数にのぼるにもかかわらず、その行動を確認できたものは少ない。

また、足跡の方向は無秩序であり、足跡同士の切り合いが見られないことから、この当時には踏み分け道的なものは存在せず、湿地帯を縦横に歩きまわっていたらしい。歩幅は総体的に短い。足跡の大きさからは（湿地であり、踏み込んだ時に多少長くなっているが）20cmを割るものではなく、全て大人のものと考えられる。従って、歩幅が短いのは歩いた人間が子供ではなく、歩行当時の当地域の環境に起因するものであろう。即ち、粘土をベースとしている本時期はぬかるみ状の湿地帯であったため、通常の乾燥地の歩行に比べ著しく歩行速度が落ちると共に、自然に歩幅も短くなっていったものと推定される。一步一步踏み出すように素足で歩いていた当時の人間の姿が想像される。

また、縄文時代晩期・弥生時代前期・中期Ⅰでみられた鹿の足跡は、本期では全く存在せず、次の後期Ⅰ・Ⅱの時期も顕著ではない。降って平安時代前期・中世・近世には再び多数の鹿の足跡（古墳時代後期の牛・馬は除く）がみられる。当時、鹿がこの地域に生息していなかったとは考えられず、恐らくは一時的に彼らの行動テリトリーから本地域が外れていたのであろう。

第5節 弥生時代後期Ⅰ

Bトレンチの南部からCトレンチ北部の、南北約70mの範囲において弥生時代後期Ⅰの遺構面が遺存していた。本遺構面はトレンチ部調査時の機械掘削中に検出され、精査が可能であったSTA.93+30~45付近(約150m²)では、水田面と畦畔が遺存していた。拡張部調査時においては、STA.93+30~43付近のBトレンチ及び12BトレンチでCトレンチに連続する畦畔その他の遺構が検出され、10B・11B・13Bトレンチにおいても面としての拡がりが確認された。

本遺構は、第Ⅷ層(砂もしくはシルト)の上に形成された厚さ15~30cmの黒灰色粘土(レベルは2.4m前後)の上面に構築されたものであるが、STA.93+30以北では、黒灰色粘土自体が次第にシルト化し、面としては不安定となり、上面に人間の足跡こそ見られるがそれ以外の遺構は検出されなかった。また、遺構面の上には2~3cmの薄いシルト層が乗り、更にその上には50cm近い流水堆積による砂またはシルトの層が堆積していた。ここでも弥生時代中期Ⅰの遺構面と同様流水に伴う土砂によって急速に埋没した状況が読みとれる。

STA.93+30~50付近の遺構 (第35図、図版38)

弥生時代後期Ⅰの水田跡は、この部分でのみ体系的に把握できた。下幅で2mを測る北東から南西へ弧状に走る畦畔を挟み、レベルの低い南側は沼沢地、北側は耕作面(水田Ⅰ)が拡がり、Cトレンチ北西端では、水田1とさらに一段高い位置の水田面とを画する畦畔2が検出された。

耕作土 (図版37・40)

第Ⅷ層(黒灰色粘土)の上部を耕作土として利用していた。黒灰色粘土は、15~30cmの厚さで調査区南部に拡がっているが、水田耕作土の部分、沼沢地の埋土の部分と、色調・質とも異なり、詳細に観察すれば、利用状況の違いによってさらに細かく分層が可能のようである。耕作土は暗灰色を呈し、礫などを含まないきめ細かい粘土であり、弥生時代中期Ⅰの水田耕作土と同様、検出後の時間の経過と共に粘性が低下し、耕作土が空気を含んでふくらみ、暗灰色土へと変化してゆく。しかし、畦畔2の周辺では耕作土全体がシルト質に変化し、また15cmほどの厚さの耕作土の下部でも次第にシルト化してゆくことは、粘土質の耕作に適した部分の範囲は狭く、少なくとも精査した部分の耕作土は立地条件に恵まれているといたがたい状況にあったことを示している。

上面から5cmほどの耕作土中には、多量の植物遺体が敷き詰められた状態で遺存していた。(図版39)。5cmの長さに裁断された縦方向に繊維の方向を持つ径5mmほどの茎と、幅5~7mmの細長い葉の部分が、1cm内外の厚さで重なって、平坦に堆積していた。そして、断面観察によれば、畦畔の最上層には耕作土と同じ土壌が覆っているにもかかわらず、この植物遺体の層は畦畔の手前で終り、畦畔部には及んでいない。これらのことから、この植物遺体は処理しやすい長さに人為的に裁断され、水稻の栽培範囲にのみ意識的に踏み込まれたものと考えられることも可能であろう。

畦畔 (第35図、付図11・12、図版38・40)

2条の畦畔が検出された。南側の畦畔1は、北東から南西へ走り上幅0.8～1m、下幅2m、水田面より高さ20cmの大規模なものであり、34mもの長さが確認された。

畦畔は断面半円形を呈すが、下幅の大きさに比べて、高低差がないため、畦畔上部は概ね平坦になっている。この畦畔を挟んで北側が水田面、南側は水田面より20cmのギャップを持って湿地帯が広がる。この畦畔は等高線の変換点であると共に、水田域の終る箇所であるため、堤もしくは作業経路としての機能を持つものとして築かれたと考えられる。S T A. 93+44、E 2付近には、下幅1m、上幅2mもの大きな水口が開かれていた。水田面から湿地帯に向かって水を落すためのものと考えられるが、杭・矢板など恒常的に機能を維持するための施設が設けられた痕跡は認められなかった。ここでも、弥生時代中期Ⅰの畦畔と同様に、畦畔を切ったり、また粘土をつめて復旧したりして水田の用を足したと考えられる。

畦畔2は水田1の北側、12Bトレンチの北西角で長さ約3mが検出された。畦畔の北西側の肩が調査区の外へ出てしまうため、畦畔の規模はもとよりそれ以北の様相は、全く把握できなかった。しかし、畦畔1と畦畔2の頂部のレベルを比較すると、畦畔2の方が約10cm高いが、検出された部分から類推すると、規模の差はさほどなかったように思われる。またトレンチ部調査時の断面観察では、S T A. 93+30以北では遺構面が次第にシルト化していき、更に北の11Bトレンチでも、畦畔1・2とはほぼ同じ規模・様相の畦畔3が単独で検出され、その付近にまで耕作面が広がっていたと考えられる。このことは、畦畔2以北も耕作面の範囲に含まれ、畦畔2を挟んで水田1より約10cmレベルの高い水田2の存在が予想される。

畦畔の構築と水田面の造成 (第35図)

断面観察によって、畦畔1は3層の土壌が積み上げられて構築されたことが確認された。下層ほどシルト質であり、上層では耕作土とほとんどかわらない粘土が積まれていた。また、どの層にも砂・シルト・粘土のブロックが含まれ、人為的に盛られたものであることを示している。そしてこの畦畔盛土の下層・中層は、第Ⅷ層(砂もしくはシルト)の最上部に形成された淡青灰色シルトの直上に置かれており、耕作土はもとよりさらに下層の暗灰色シルト質粘土の下位に位置することがわかる。畦畔の構築と水田面の造成順序を復原すると、湿地帯であったこの地に、粘土によって畦畔を築き、湿地帯から畦畔以北を切り離し、その後、暗灰色シルト質粘土、耕作土である暗灰色粘土を客土し、水田面を造成したのである。このことは、当時の地山である淡青灰色シルト面が、北から南へ若干傾斜してはいるがほぼ平坦であり、湿地帯の側は約10cmの厚さで自然に堆積したと思われる淡黒茶色シルトで埋められているのに対して、水田面の側では、湿地帯との間の20cmのレベル差と耕作面の水平が、地山の土の暗灰色シルト質粘土と暗灰色粘土によって維持されていることからわかる。

足跡

水田1では、多数の足跡遺構が検出された。長さ24~28cm、幅10~15cm、深さ15cmの規模で、楕円形または逆三角形の平面プランを持つ。埋土は、遺構面直上を薄く覆うシルトとその上層の砂もしくはシルトである。足跡の内壁に人間の指によってできた起伏が見られ、総てが人間のものである。しかし、それぞれの足跡に歩行状態を示すような連続性のあるものは見い出せなかった。

遺構面の拡がり (図版41)

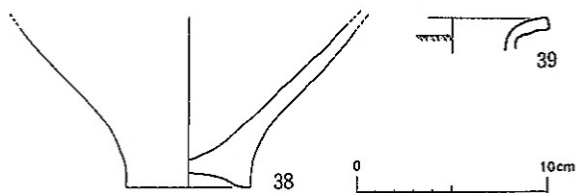
トレンチ部の調査時においては、STA.93+30以南で安定した黒灰色粘土層が断面観察され、拡張部の調査では、この黒灰色粘土の上面の精査を行った。しかし、1C・2C・3Cトレンチなどでは、人間の足跡と自然流路と思われる面の起伏を検出した以外、顕著な遺構は検出されず、この部分での黒灰色粘土上面の利用状況は明らかにできなかった。

STA.93+30以北では、黒灰色粘土層が漸次シルト化してゆき、面の連続の把握が難しいが、2B・9Bトレンチでは、この面に相当する足跡面を検出した。2Bトレンチでは、北東~南西方向に流れる幅約2m、深さ0.6~0.7mの自然流路があり、流路内を流れに平行及び逆行する歩行状況が認められる。これはシルトもしくは安定して固い砂層の上に形作られており、足跡面を覆うより粒の細かいシルトもしくは砂を除去すると出現する。しかし、足跡面自体は安定した単一の面ではなく、いくつかの足跡面が同一の地点に2~3cmの厚さで堆積した砂もしくはシルトの層を挟んで存在しており、面としての理解を困難にしている。調査区南部が水田として利用されている時、この北部では、砂とシルトが堆積し、その上につけられた足跡も、不規則に流れる水によって運ばれる土砂により、次々と埋められてゆく状況が復原できる。

弥生時代後期Ⅰ 水田面 畦畔1下

出土遺物 (第36図)

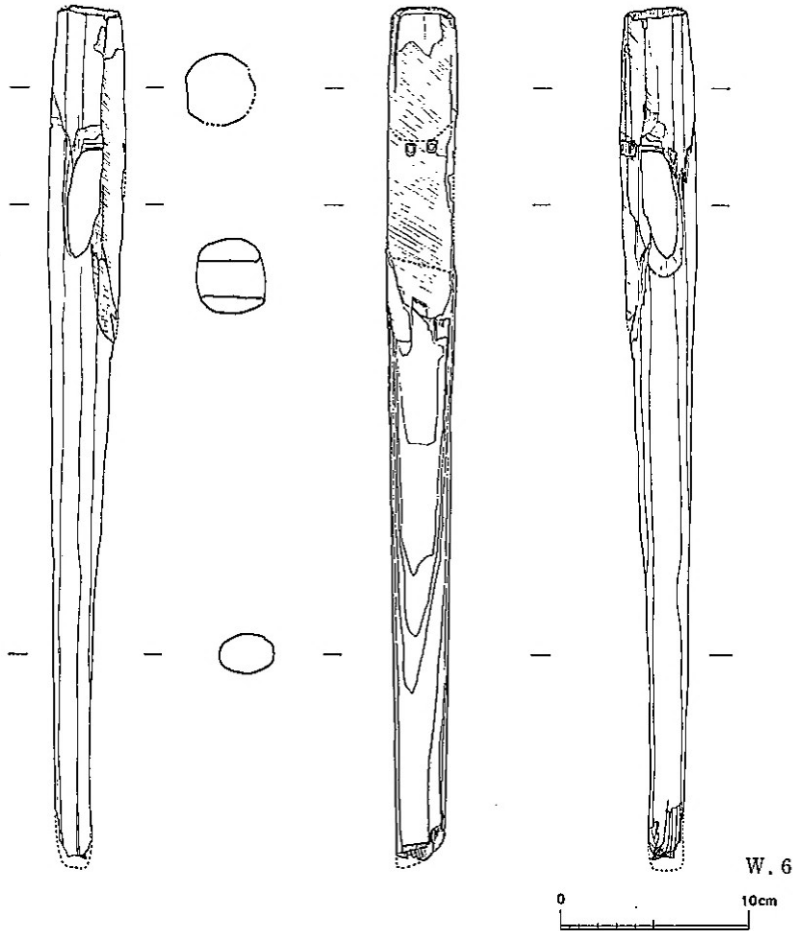
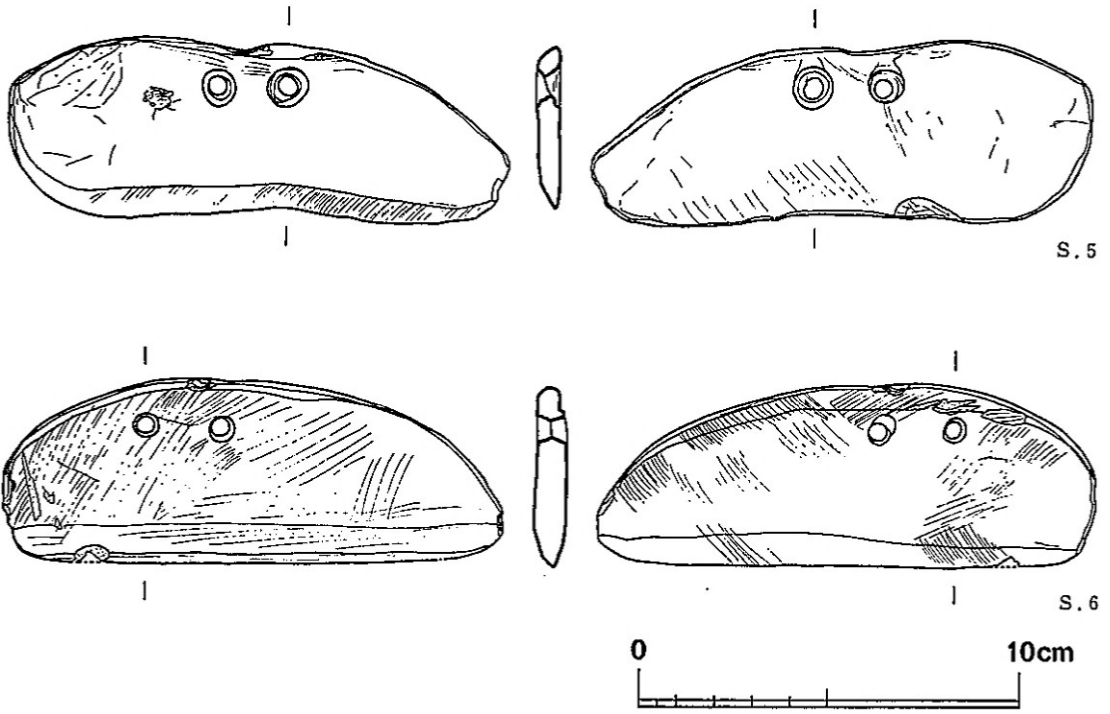
12Bトレンチの畦畔1の下層から弥生土器壺・甕片が出土した。共に弥生時代後期初頭に属すると考えられる。他に、2片を同層から検出したが小片のため、図示できなかった。



第36図 弥生時代後期Ⅰ 水田面畦畔1下出土遺物 (4)

弥生時代後期Ⅰ 流水堆積出土遺物 (第37~39図、図版41・93・94)

Bトレンチの本期水田面を覆っている砂層から弥生土器甕片3点(第38図40・41・42)、壺片1点(第38図43)が出土した。いずれも顕著な磨滅は受けていない。また、Bトレンチで同層から石庖丁(S.5)、13Bトレンチでも石庖丁(S.6)が出土した。7Bトレンチの水田面埋土の砂層では斧柄状木製品(W.6)、尖頭器(S.7)を検出した。



第37図 弥生時代後期Ⅰ 流水堆積出土遺物 ① (上 $\frac{1}{2}$ ・下 $\frac{1}{4}$)

石庖丁 S. 5 (第37図、図版94)

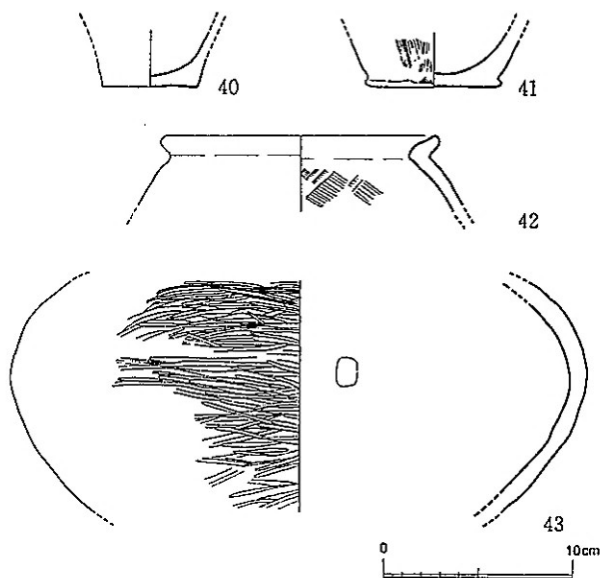
この石庖丁は、直刃の半円形態で両刃気味片刃である。完形品。全長13.2cm、高さ4.9cm、厚さ0.9cm、重量81.4gを測る。正面は研磨痕がよく残っているが、刃部先端は円く磨滅し、刃部周辺から裏面全体にかけて使用による磨滅が著しく、光沢をもつ。紐擦れ痕は不明。紐孔は左寄り背面寄りに位置する。孔径0.5cm、孔中心間距離1.95cmを測る。石材は砂岩ホルンフェルスである。

石庖丁 S. 6 (第37図、図版41・94)

この石庖丁は完形品で、刃部中央が浅く凹む内彎刃形態で片刃である。刃先は磨滅して円く擦り減っており、裏面全体も磨滅している。正面片刃面は研磨痕がみられ、刃部の研ぎ直しを行っていたことがわかる。中央背面寄りに、孔径0.5cmの紐孔が、孔中心間距離1.9cmの位置に存し、正面は双孔を結ぶ方向、裏面は双孔とも背面方向に紐擦れ痕がみられる。これは裏面を上、正面を下にして掌中におき、正面方向より紐を指にかけて握り、稲穂を刈り取った事を示すと考えられる。全長13.4cm、高さ4.8cm、厚さ0.75cm、重量69.8gを測る。緑色片岩製である。弥生時代中期の特徴を示す。

斧柄状木製品 W. 6 (第37図、図版93)

柄状木製品は、着装部上端面は切断面よりなり、着装孔は斜方向に穿孔されている。着装孔径は長径6.3cm×短径1.8cmを測る。その着装孔を横切るように側面から2本の木釘が孔を通して打ち込まれている。着装部断面は隅丸方形を呈し、握り部にむかって徐々に細く扁平になり、握



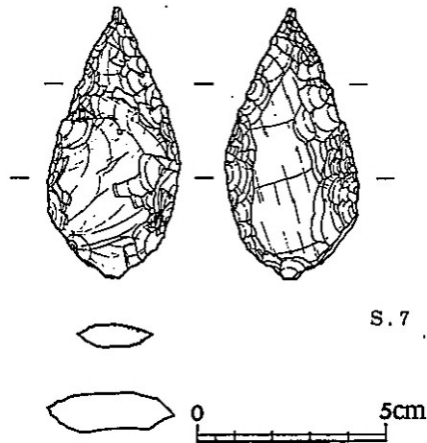
第38図 弥生時代後期Ⅰ 流水堆積出土遺物 ㊦(1/4)

部断面は楕円形を呈す。下端は欠損しており、下端部に握りがつくられていたかどうかは不明である。現長45.1cm、最大幅4.0cm、厚さ3.7cmを測る。樹種はカヤで割り材を利用している。

木釘が着装孔部に打ち込まれている例は、平城京で出土している鎌の柄の着装孔に釘の打ち込まれているものがあり、よって鎌の柄とも考えられる。また、静岡県登呂遺跡より出土した組み合わせ式用途不明木製品の部材とも考えられる。

尖頭器 S. 7 (第39図、図版94)

この尖頭器は完形品で、全長7.15cm、幅3.5cm、厚さ1.1cm、重量25.6gを測る。両面とも両側辺より加工が施され、先端部は鋭く、基部は円くつくられる。しかし、基部には自然面が残ри、正面中央は主要剝離面よりなり、打瘤が厚く残り基部の厚みを増している。裏面中央には大剝離面が残る。両面とも加工は一次調整で、部分的に二次調整が施されるのみである。断面は杏仁形を呈す。



第39図 弥生時代後期Ⅰ 流水堆積出土遺物 ③ (1/2)

第6節 弥生時代後期Ⅱ

弥生時代後期Ⅱの遺構面は、第Ⅴ層（暗青灰色粘土）の上面に2.8m～3.1mのレベルで検出された。そこには11条の溝が遺存しており、概ね南東―北西方向に走っていた。遺構は調査区の北部（STA.92+00～60）に集中しており、その部分では砂質の粘土層上面が遺構面とされ、調査区南部の遺構面が均質で粒度の高い粘土であったのと対照的であった。

また、この付近には、下層で弥生時代中期Ⅰの自然河川、上層では古墳時代後期の自然河川Ⅰ（後述）が同方向に走り、時代を越えてこの一帯が若干低く、谷状の地形になっていたことが理解できる。

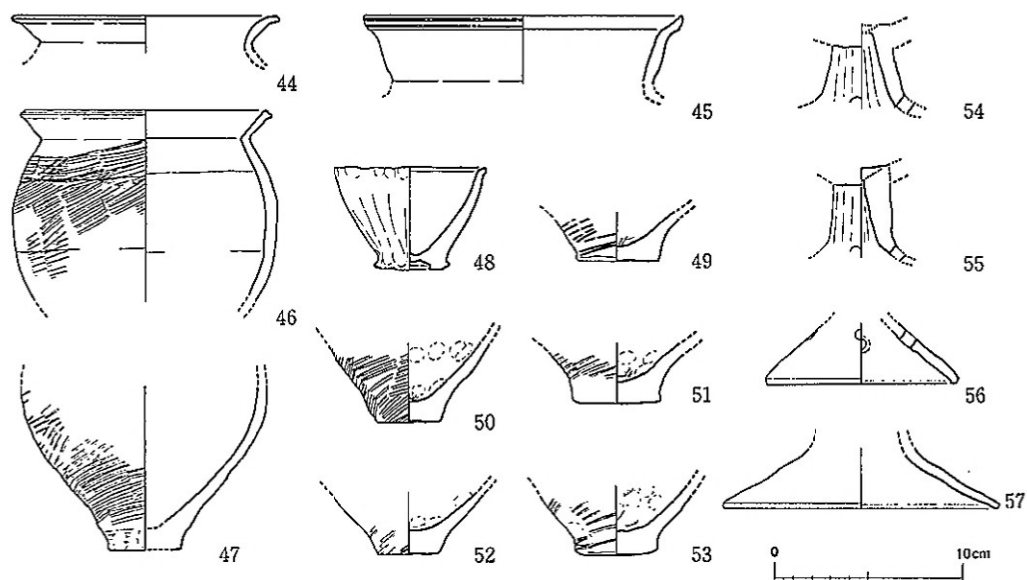
溝1（付図13、図版42～44）

Bトレンチ STA.92+30、E.5から STA.92+10、W.5へ、南東から北西へほぼ直線的に走る。総延長26m以上、幅約1.2m、深さ0.3m。埋土は黒灰色砂質粘土であり、埋土中より甕・高杯・鉢片が出土。破片は多数にのぼるが、14点を図示できたのみ。

溝1 出土遺物（第40図、図版81・82・91）

検出土器は弥生土器で、甕・高杯・鉢がある。破片も個体数に換算すると18個体になり、その構成は、甕13、高杯4、鉢1となる。壺は欠落する。鉢（第40図48）のみ完形品。

甕（44～47・49～53） 口縁部形態で分類すると、方形断面を呈する（46）、外方向に肥厚し円く終る（44）、「はね上げ口縁」を呈する（45）とがある。底部には、円板充填法で成形され突



第40図 弥生時代後期Ⅱ 溝1出土遺物（1/4）

出度の高い(50)と、円板据え置き法で成形され突出度の低い(53)の二種類がみられる。(46)は中型の甕で連続ラセン印きで成形されているが、技法的には稚拙である。外面には体部肩を除きススが付着しており、次代の様相と同一である。

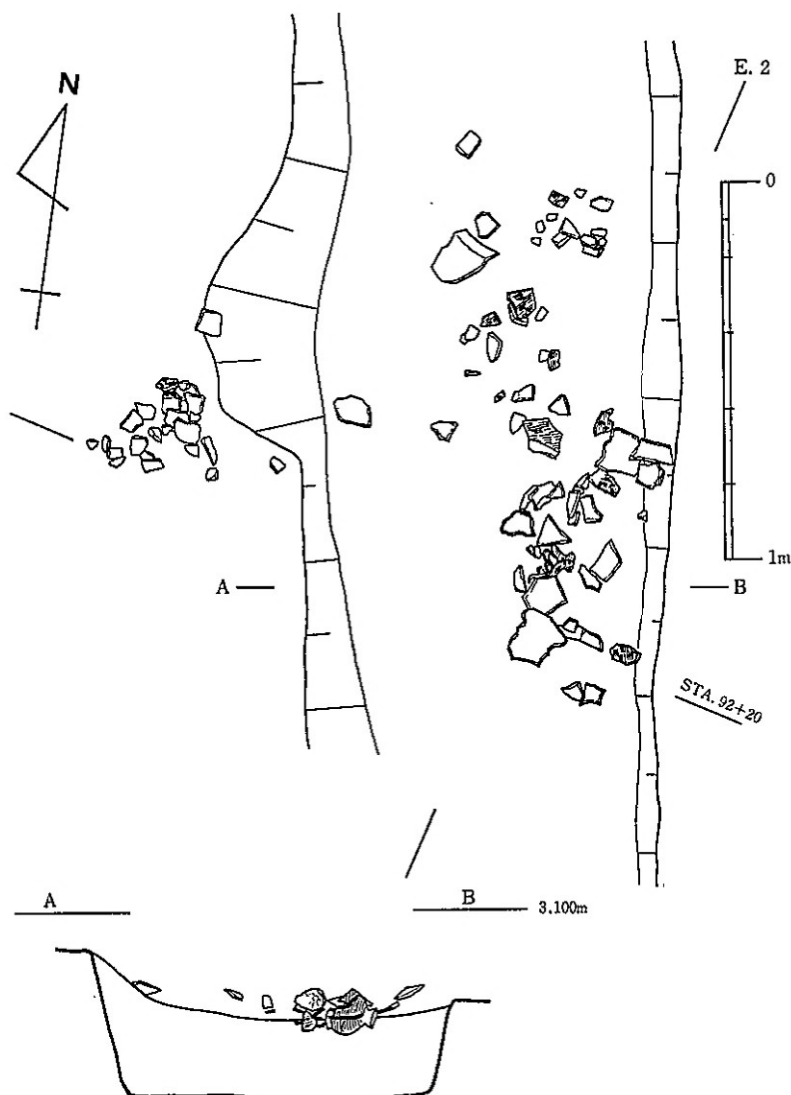
高杯(54~57) 短い脚柱部を有する(54・55)と、「ハ」の字形にひろがる脚裾部を有する(56)とがある。

鉢(48)は、底部輪台法の手づくねにより成形されている。

上記の土器は、諸特徴より畿内第Ⅴ様式後半に属する。また、相互に型式学的に一括できる。

溝2 (第41・42図、付図13、図版42~44)

Bトレンチ溝1の南東3mに平行して走る。総延長25m以上、幅0.8m、深さ0.3mを測る。



第41図 弥生時代後期Ⅱ 溝2土器出土状況①(1/20)

埋土は、黒灰色砂質粘土と淡黒灰色粘土の上下2層に分かれ、両層の境界より甕・壺・高杯・鉢などが多数出土。また、溝の肩部に接する遺構面上からも同様の遺物が出土しており、溝の下層が堆積した段階で、溝とその付近に土器が放棄されたと考えられる。

溝2出土遺物 (第43～45・47図、図版82～85・91)

口縁部と、識別できる体部を対象に個体数を復元すると、甕63、壺7、高杯7、鉢4となり、甕が78%を占める。

甕(58～95・106・108・110・112～114) 大型・中型・小型・台付がある。大型には、明瞭な叩き痕を残し良好な焼成を呈する(94)や、やや軟質で体部外面に指頭圧痕やナデが残る(92)などがある。いずれも体部において逆円錐形台部の占める割合が大きく体部の中位まで及び、2段階成形である。(63)(77)には連続ラセン叩きが見られるが、技法的には稚拙である。小型甕(84)(85)は、全体に粗雑な或形・調整で、貼り付けによる口縁部が相対に大きいのが特徴である。台付甕(114)は、二段に屈曲する部分まで叩きで成形された後に粘土紐を継ぎ、口縁部が受け口状に形づくられている。

壺(105)は直立する口縁部をもつ短頸壺で、端部に凹線が走る。未掲載ではあるが、叩き痕・ヘラみがき・刷毛目が残る体部破片もある。しかし、総て破片で本遺構でも壺は重要な構成器種ではないと考えられる。

高杯には、大型で浅い杯体部から口縁部が短く外反する(98・99)と、小型で脚裾部が「ハ」の字形に開く(107・111)がある。

鉢(97・103・104・109・115) 碗状の体部に突出する底部が付き口縁部がゆるやかに外反する(115)や、扁平な体部を呈する(97)がある。手づくねによる(109)は、形態・法量・成形技法が溝1出土鉢(48)に酷似する。(97)は内面にヘラミガキが見られ、小さな突出する底部が付くと推定される。

上記の土器群は、型式学的に畿内第Ⅳ様式後半に位置づけられる。

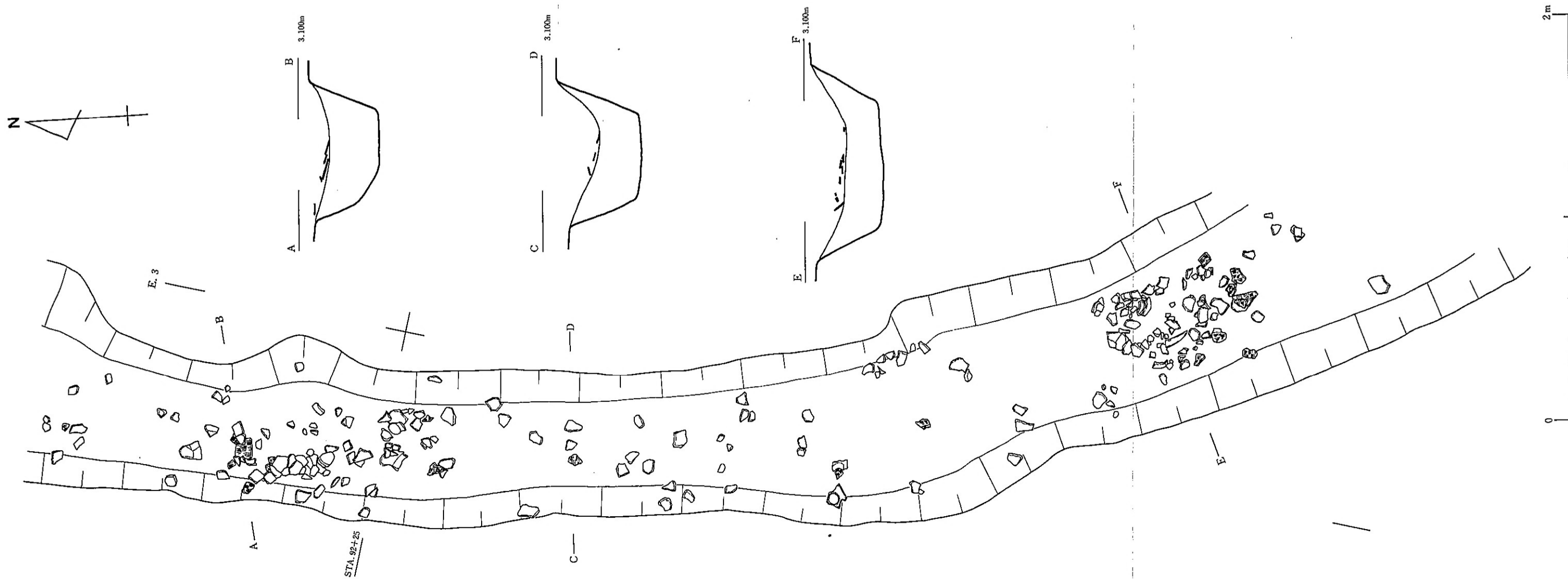
また、不定形刃器(S.8)が1点出土した。

不定形刃器 S.8 (第46図)

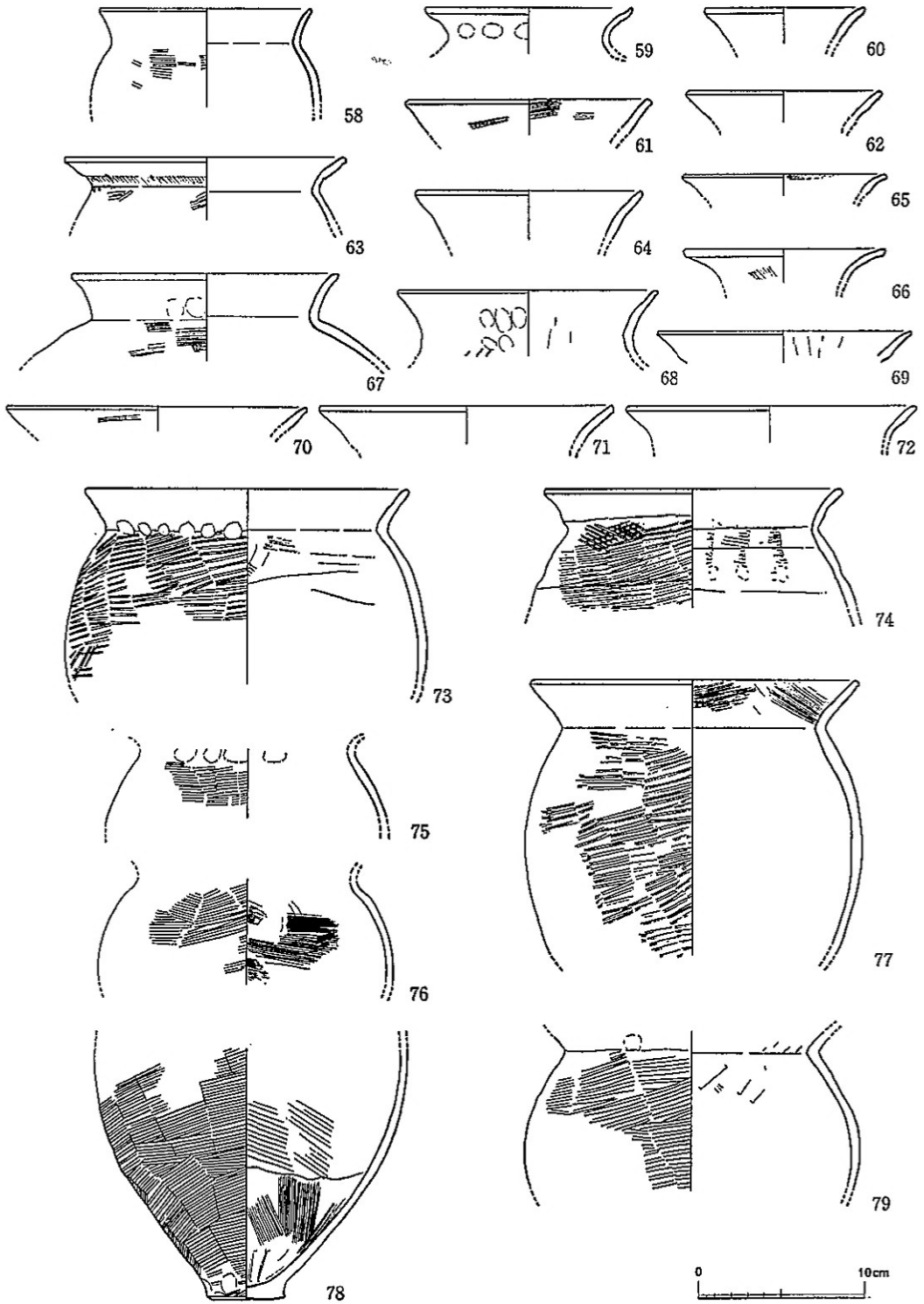
この不定形刃器は、背面に自然面を厚く残した剝片の鋭い末端に調整を施し、刃器として作っただけのものである。加工途上に中央部で割れたものとみられる。現長5.6cm、残存部高6.0cm、厚さ1.4cmを測る。

溝3 (付図13、図版44・45)

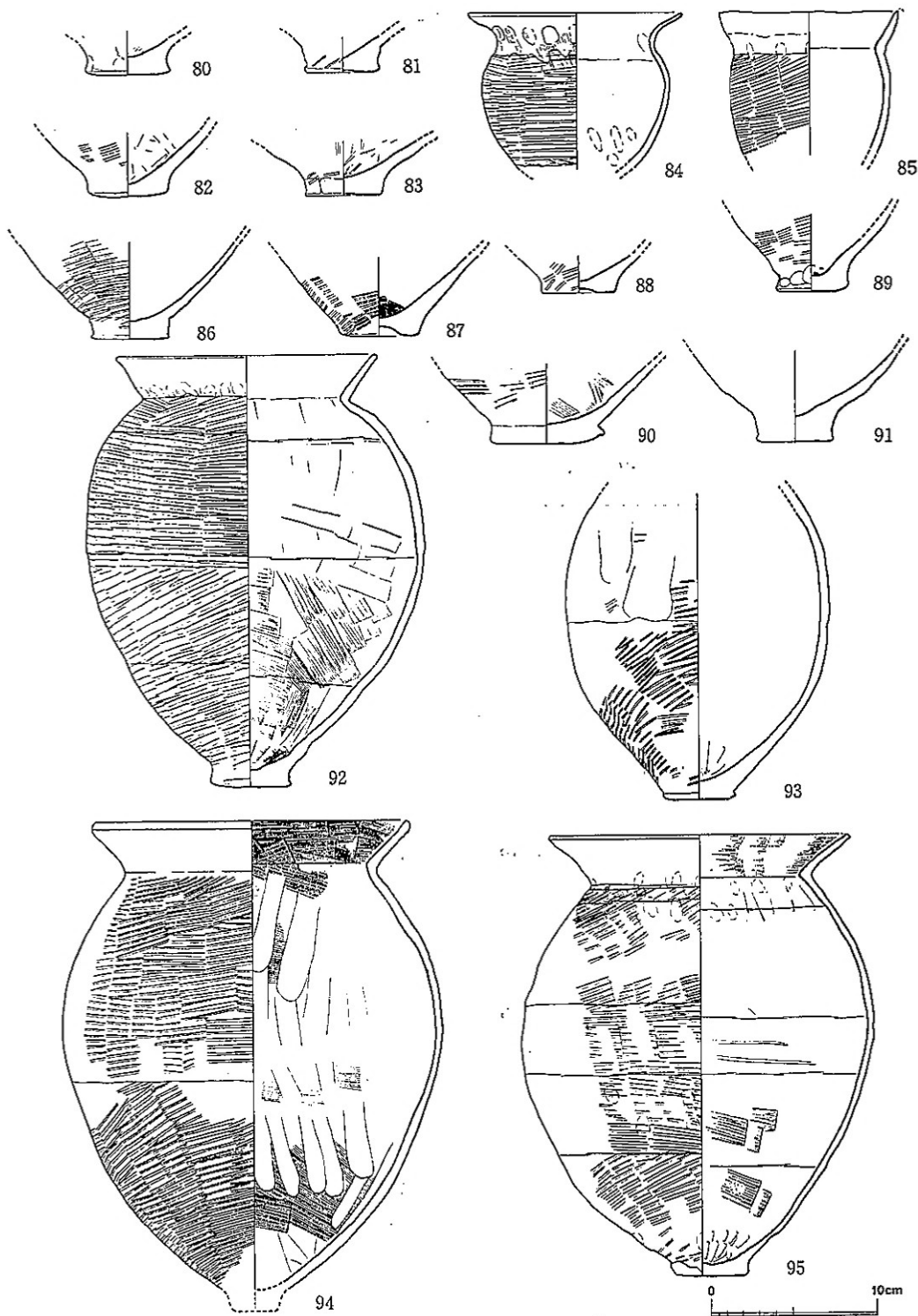
4B・6B・8Bトレンチの西側を南北に走り、4Bトレンチでは溝1と平行して、BトレンチSTA.92+5、W5で消える。長さ85m以上、幅約0.7m、深さ0.2mを測る。埋土は黒灰色土が一層。遺物の出土はなし。



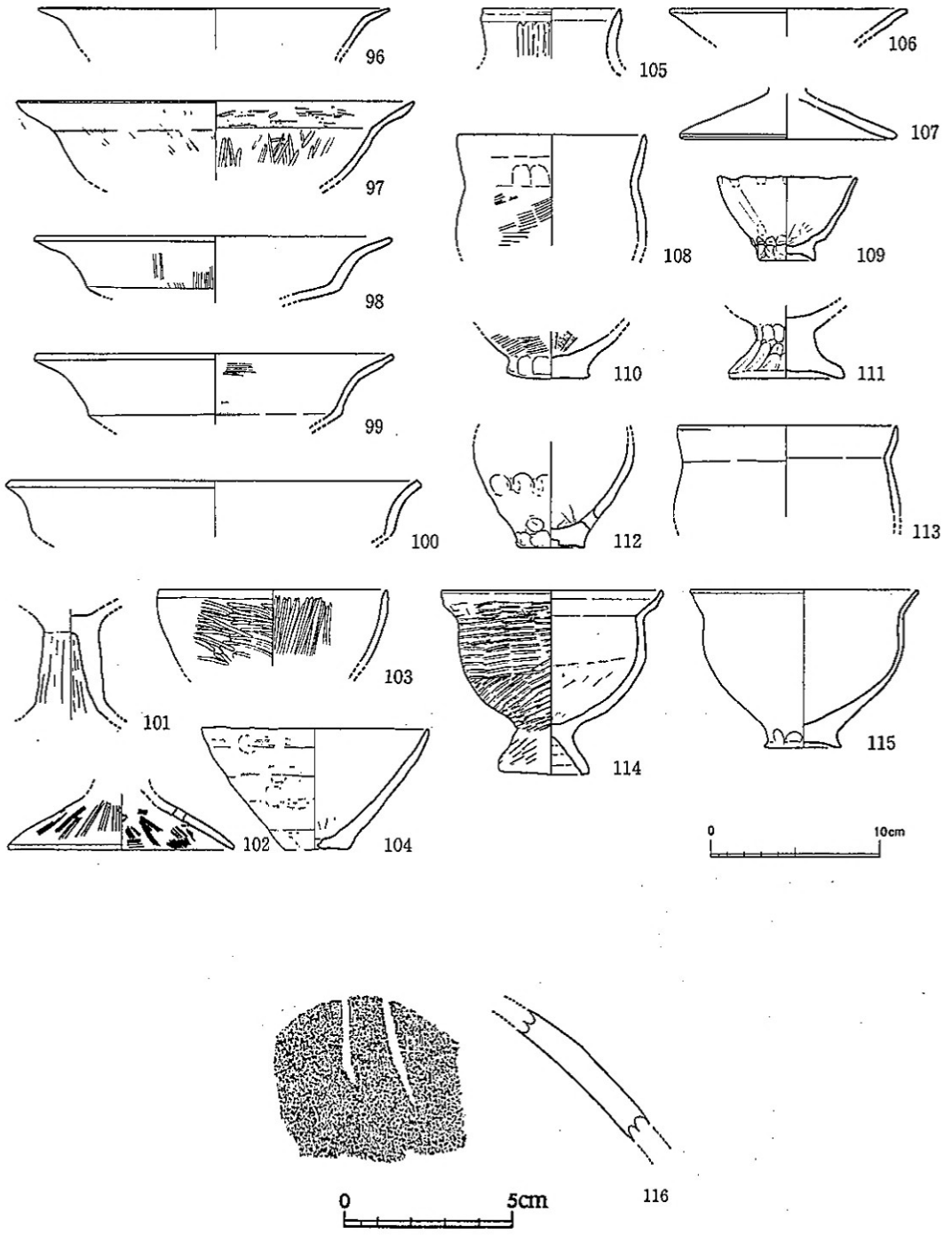
第42图 弥生時代後期Ⅱ 溝2土器出土状況 ② (1/20)



第43図 弥生時代後期Ⅰ 溝2出土遺物 ① (1/4)



第44図 弥生時代後期Ⅱ 溝2出土遺物 ② (1/4)

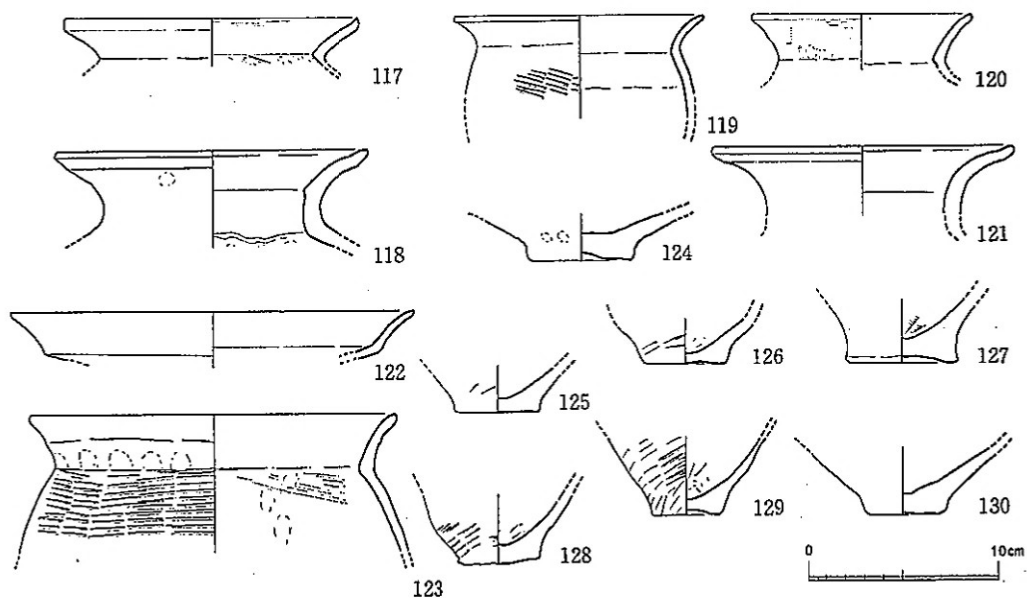


第45図 弥生時代後期Ⅱ 溝2出土遺物 ㊸ (上 $\frac{1}{4}$ ・下 $\frac{1}{4}$)

ら北東方向。長さ 30.5m 以上、幅 0.4m、深さ 0.4 m を測る。埋土は黒灰色粘土、遺物の出土はない。この付近は遺構面である暗青灰色粘土層が漸次深くなり、シルト化してゆく。溝 11 以南での遺構の検出はなく、遺構面として連続的に把握はできるが、不安定になってゆく。

弥生時代後期Ⅱ 包含層出土遺物 (第48図、図版86)

A・B・3B・6B・C トレンチの同期の包含層中から、弥生土器甕・壺・高杯を検出した。14点を図示できたのみで、他は小片。甕が大多数を占め、この状況は前述の溝 1・2 と同様である。(117) は庄内式の土器である。



第48図 弥生時代後期Ⅱ 包含層出土遺物 (34)

第7節 古墳時代後期

古墳時代後期遺構面は、第Ⅶ層（青灰色粘土）上面に3.5m～3.6mのレベルで全域に拡がる。調査区を蛇行する長大な自然河川と全面に刻印された多数の足跡が遺存していた。本調査区以北では山賀遺跡（その2）の山賀古墳付近まで顕著な遺構は検出されず、本調査区付近は、縦横に自然河川が流れる不安定な未開墾地として放置されていたと考えられる。

自然河川1 （付図15、図版47～50・52）

総延長108m以上、幅5～10m、深さ0.8～0.6mを測り、蛇行しながら概ねトレンチに沿って南から北へ流れていた。南北方向の流れが7Bトレンチで西へ振り、トレンチ外へ出るが、S T A.92+60付近で水が停滞するために川幅を著しく拡げ、S T A.92+45付近で北方向と北西方向の二つに分流する。そして、大きく見ると河川は南西から北東への流れから、北西への流れへとカーブするため、流れの外側である東側では大量の砂が堆積し、調査範囲内では東岸が検出できなかった。分流後の北西方向の流れは4Bトレンチへと続き、北への流れはトレンチ部をほぼ一直線に北上し、S T A.92+5付近で北西へ向きを変え、1Bトレンチの南西コーナーをかすめて調査区外へ出る。

埋土は黄褐色砂を中心に、色調は黄色から灰色まで、質も粗砂から細砂まで種々を含み、ラミネーションを形作って堆積している。足跡の遺存状況から考えて、通常の水量は多くはないが、最終的には多量の水と土砂の一時の流入によって埋没したと考えられる。

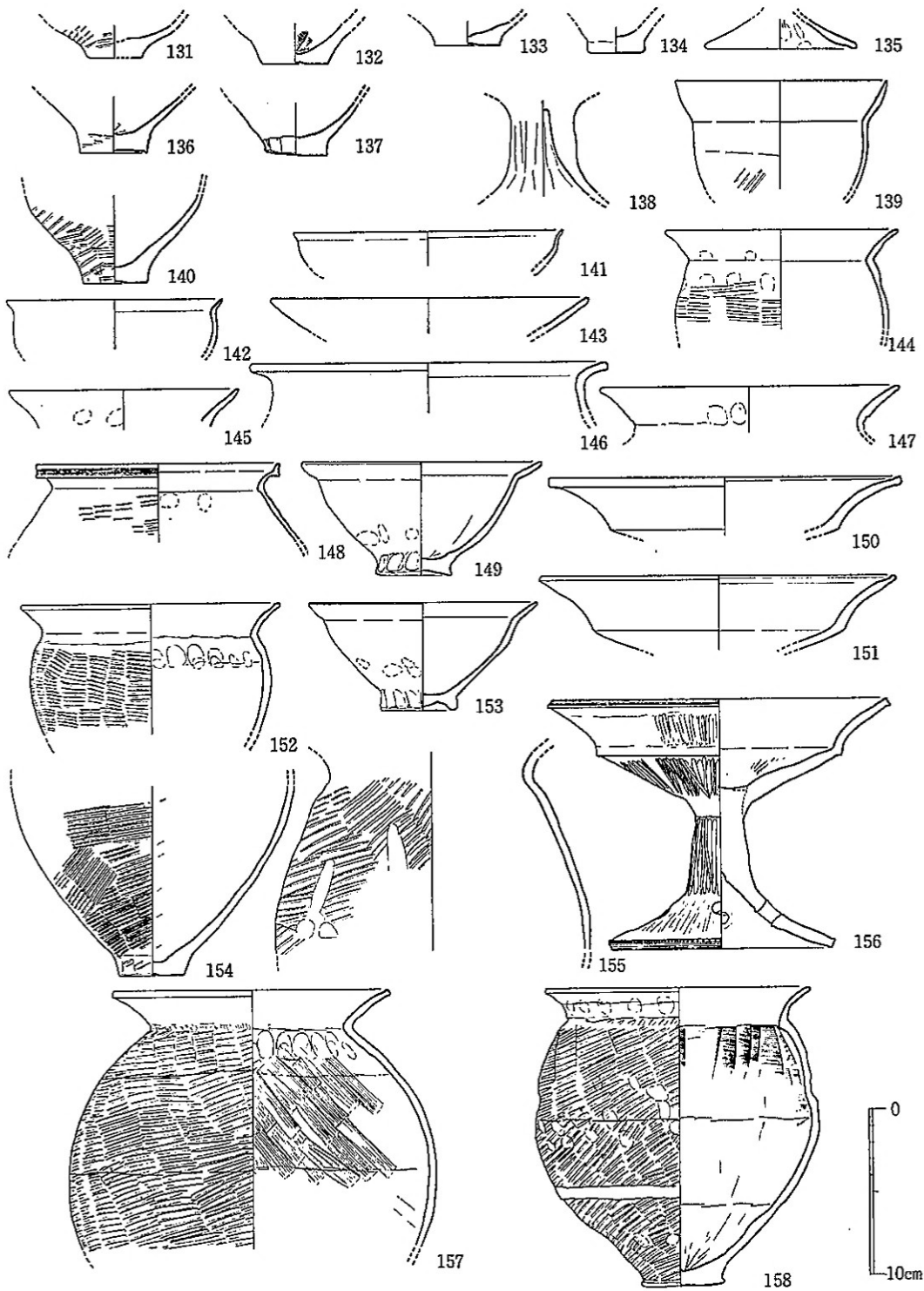
彎曲する流れの外側に当る東岸では、肩部から底になだらかに続くが、それ以外の場所では水の流れのため底は起伏に富む。特に、分流点以北の流れは著しく底部を荒らしており、弥生時代後期Ⅱの溝2を抉っている。また、河川の肩部、底部を問わず全域に人間と動物の足跡が検出された。特にS T A.92+70～40付近には、遺存状態の良いものが多くみられた。

自然河川1 出土遺物 （第49・50図、図版86・87・91）

検出土器は弥生土器、庄内式・布留式以降の土師器、須恵器、製塩土器、土錘である。

弥生土器は、検出総量の約90%を占める。口縁部、識別できる体部を対象に個体数を復元すると、甕35・鉢5・高杯2となる。壺は構成器種より欠落する。

甕（131～134・136・137・140・145～148・152・154・155・157・158・171・174・176） 大型で体部の球形化の進行している（157）や、小型で外面に指頭圧痕が顕著に残る粗製の（158）がある。いずれも連続ラセン叩きによるが、技法的には稚拙である。口縁部形態には、（174）のような「はね上げ口縁」もみられるが、絶対量は少ない。体部から口縁部への成形は、その大部分が「口縁部貼り付け」によっており、「口縁叩き出し技法」によるものは少ない。（148）は、他に総て畿内第Ⅴ様式後半に属するのに対し、口縁端部が上下に拡張し凹線がめぐるなど、型式学



第49図 古墳時代後期 自然河川1出土遺物 ① (1/4)

的に先行する特徴を示す。第Ⅴ様式前半でも古く位置づけられる。

鉢 (139・149・153) 叩き成形による長胴気味の体部より口縁部が内彎気味に伸びる (139) や、碗状の体部に突出するあげ底の底部が付き、口縁部が短く外反する (149) がある。

高杯 (138・150・151・156) 総て浅い杯体部から口縁部が短く外反する形態である。(156) は、外面は丁寧にヘラミガキされ、脚裾部端面に刻み目がめぐり、脚柱部は中実で挿入付加法による。(138) は、中空で円板充填法による。いずれも第Ⅴ様式後半に属す。

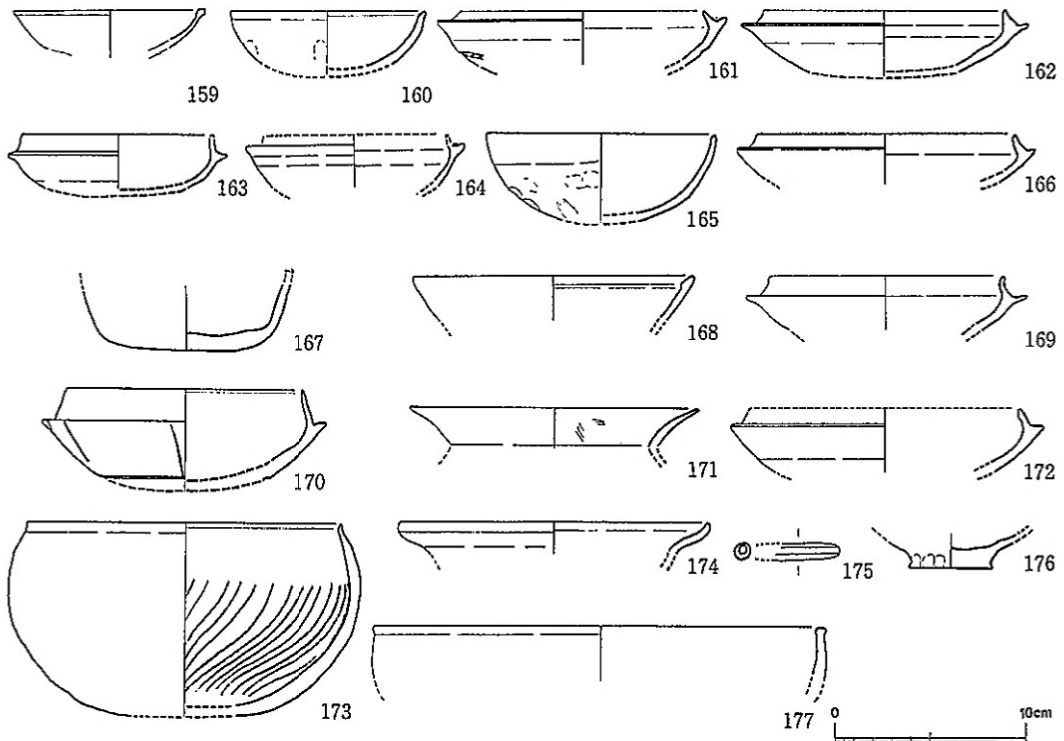
須恵器は甕の破片と杯身で、弥生土器以外の大半を占める。杯身は、中村浩氏『陶邑』編年による第Ⅱ型式2段階 (170)～6段階 (161) の幅に収まるが、その中でも5段階が最も多い。(162・163・166・172)

庄内式甕は上田町Ⅱ式の新相で、暗褐色を呈し搬入品である。

土鍾 (175) は小型で円筒状を呈し、胎土に長石・チャート・角閃石・雲母が含まれる点、注目される。

庄内式以降の土師器には、布留式甕 (168)、他は鉢 (141・142・160・165・173・177) がある。(173) は内面に丁寧な暗文風の放射状ヘラミガキが施されている。

これら庄内式以降の土器が概ね小破片で磨耗を受けているのに対して、先の第Ⅴ様式の土器群は完形品や大きな破片を含み、あまり磨耗もみられない点、様相が異なる。本河川底が弥生時代後期の溝2上面に位置する関係上、この第Ⅴ様式の土器群は溝2より上がった可能性が高いと言える。



第50図 古墳時代後期 自然河川1出土遺物 ㊸ (14)

自然河川2 (付図15・16、図版51)

総延長44m以上、幅2～4m、深さ0.2～0.4mを測る。11Bトレンチを西から東へ流れ、トレンチ部センター付近で北へ折れ、そのまま真直に北上し、STA.92+80付近で自然河川1と合流するかのようには深さを浅くし、消えていく。埋土は黄褐色砂を中心に、色調は黄色から灰色、質も粗砂から細砂まで種々を含む。しかし、河川の両岸は肩部から底部に至る斜面が深く侵蝕されており、水流の強さが想像できる。底部には、人間と動物の足跡が遺存していた。

足跡 (図版49～52・95・96)

砂を埋土とする、人間と動物の足跡が検出された。人間の足跡は長さ23～27cm、幅8～15cm、深さ10cm内外を測り、遺存状態の良いものは指の跡も明確に確認できた。動物のものは直径8～12cm前後の円形で、先が馬蹄型に割れ、深く踏み込まれている。牛と在来種の馬の足跡を比較すると、プランにはほとんど差がないが、足跡前後が逆になり、牛の場合は前方が2つに割れると共に若干深くめり込んでいると考えられることから、本遺構面の足跡は牛のもの⁽¹⁾と断定できる。

この人間と牛の足跡は遺構面全域で検出できたが、特にSTA.92+50～70一帯の自然河川底の遺存状態が良く、このあたりでは満遍なく刻印されていた。その地点以南では次第に密度が粗となり、Cトレンチ南端では、粗砂によって埋められた遺存状態の悪い足跡がいくつか検出できたのみである。しかしDトレンチでは再び密度が高くなり、近隣に遺構の存在を感じさせる。

古墳時代後期 自然河川出土遺物 (第51図、図版88)

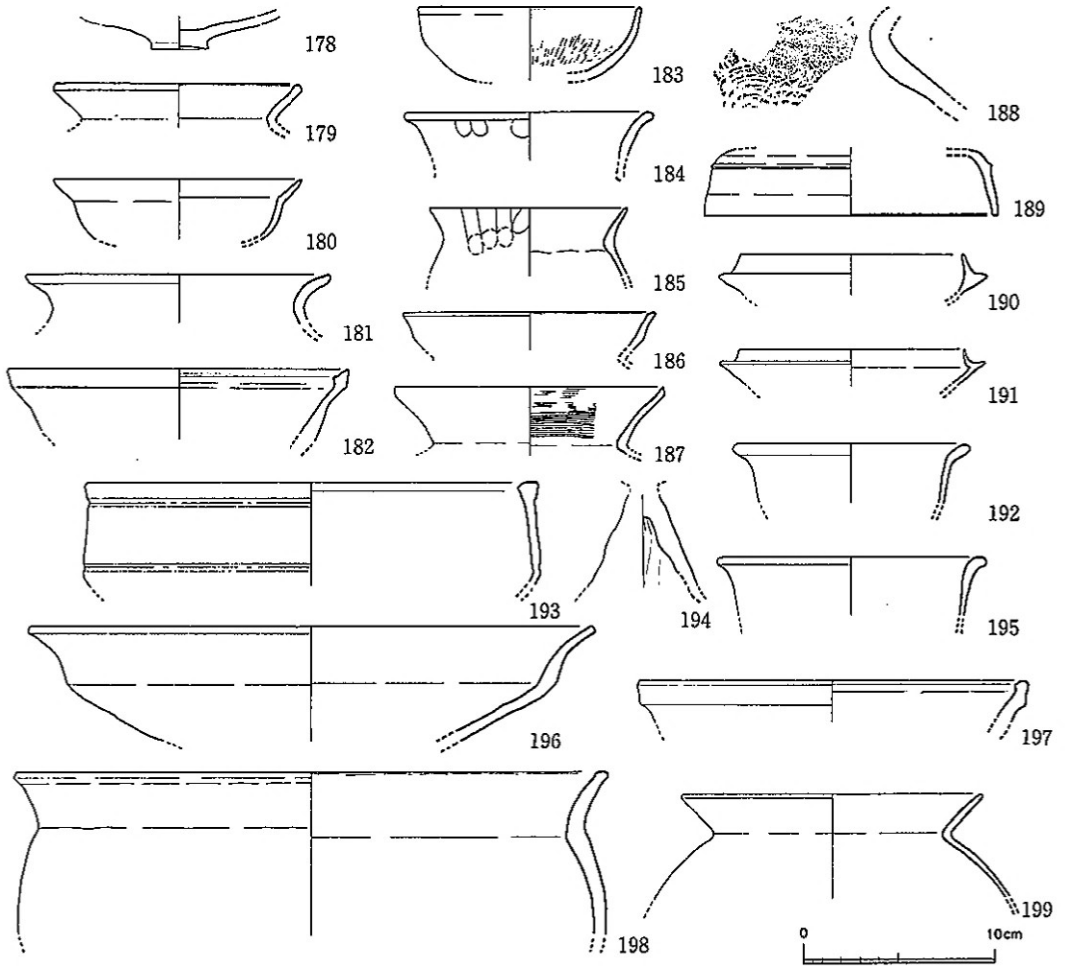
A・B・6B・9B・11B・Dトレンチの自然河川、あるいはオーバーフローした同期の砂層中から出土した。弥生土器甕・鉢・高杯、土師器甕・壺・杯・鉢、須恵器杯身・杯蓋・壺等が出土した。弥生土器は第Ⅳ～第Ⅶ様式に属する。土師器は、古墳時代前期～後期のものを含む。須恵器は、6世紀代に編年されるものが大半である。

青灰色粘土層(古墳時代後期)出土遺物 (第52図)

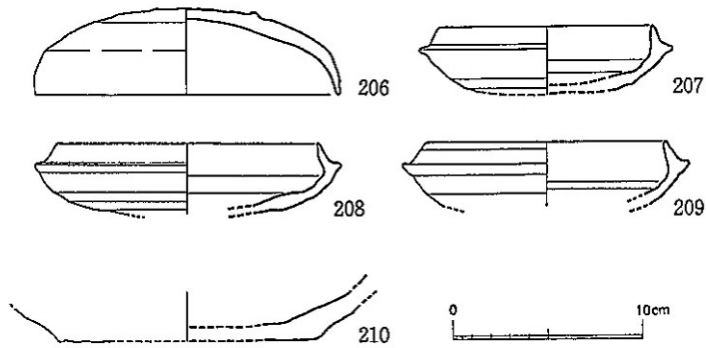
総て12Bトレンチの、本期面のベースとなる青灰色粘土層の上部から出土した。須恵器杯身・杯蓋・鉢に分類することができる。6世紀後半代に編年されるもので、本遺構面の時期を推定する資料となる。

青灰色粘土層上面(古墳時代後期)出土遺物 (第53図、図版86)

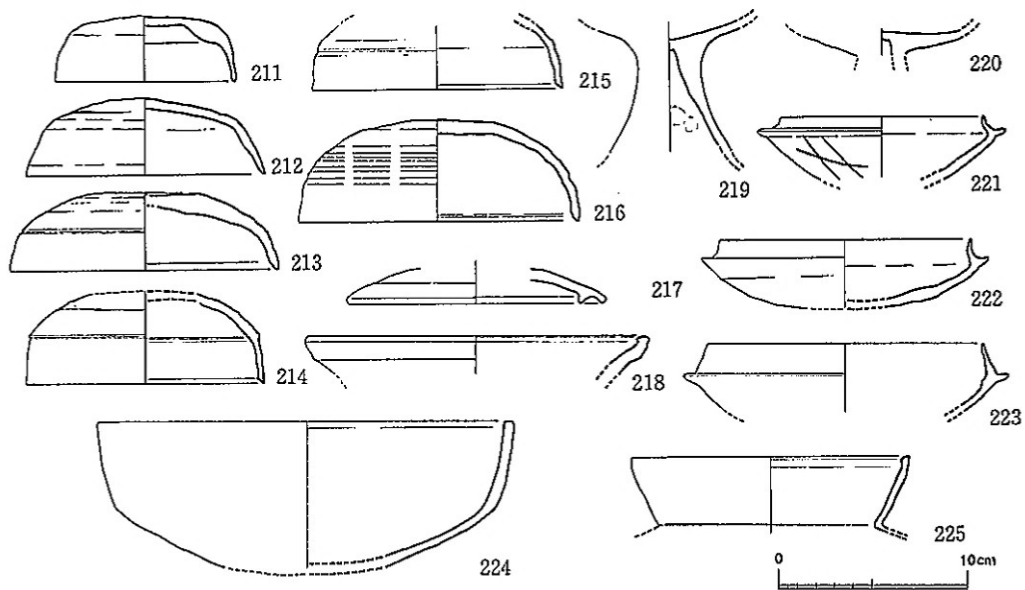
本期のベースとなる青灰色粘土層の上面、B・3B・5B・6B・7B・C・2C・3Cトレンチから出土した。土師器高杯・鉢・壺、須恵器杯身・杯蓋で、出土量は須恵器の方が多い。概ね6世紀に編年されるが、その後半代に集中する。本遺物と共に、前述の青灰色粘土層上部からの出土遺物は、本期のベースである青灰色粘土の堆積の終了時を決め得る資料となる。恐らく、



第51図 古墳時代後期 自然河川出土遺物 (1/4)



第52図 青灰色粘土層 (古墳時代後期) 出土遺物 (1/4)



第53図 青灰色粘土層上面（古墳時代後期）出土遺物（1/4）

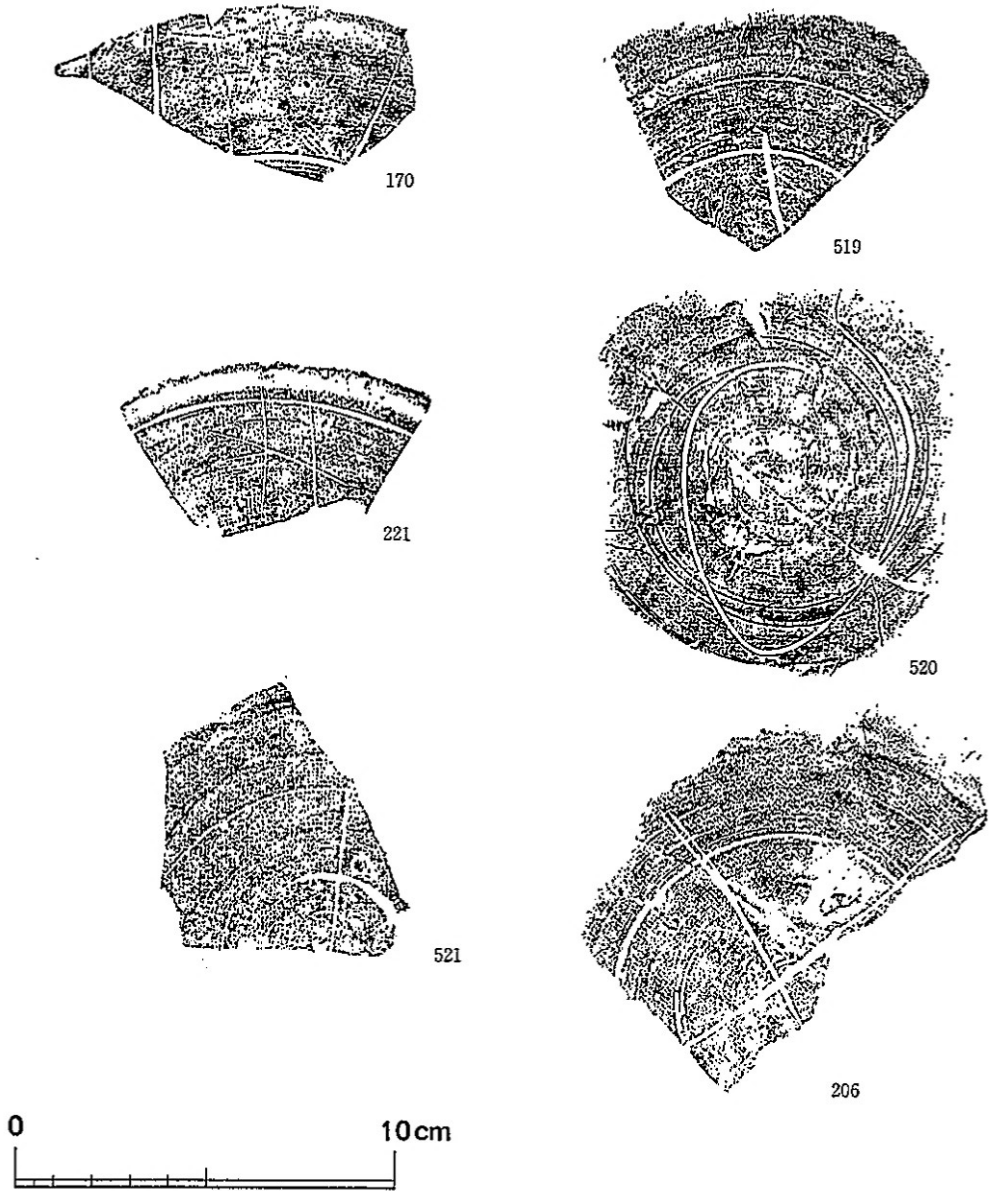
6世紀末葉には、その堆積を終えていたと考えられる。

須恵器のヘラ記号（第54図）

本地区出土の須恵器のうち、6点にヘラ記号がみられた。(519～521)の3点は小片又は径が出せず、図示できなかった。6点のヘラ記号をもつ須恵器は総て杯である。(206・519)が蓋、他は身。ヘラ記号は天井又は底部に印されている。(170)は小片のため、全容は不詳。底部中央から、外へ向って3本の直線が引かれており、うち2本は接近している。(206)は天井部中央を中心とした十字文。(221)は受部下に縦2本、斜め横1本の短い直線が交叉する。「卍」。(519)は小片のために全容は不詳。天井部に2本の直線が引かれている。(520)は、底部中央を中心としたいびつな長円を描く。線の両端は合致しない。(521)は小片のため、全容は不明。底部に直線が1条認められるのみ。(221)のヘラ記号が最も細い。

〔註〕

(1) 上野動物園獣医 増井光子氏に御教示いただいた。



第54図 須恵器ヘラ記号拓本 (1/2)

第8節 古代・中世

平安時代

BトレンチのSTA.92+55~70付近、レベル3.7mで、古墳時代後期自然河川1の埋土である砂層及びシルト層に切り込まれた土塼・ピットを検出した。埋土はすべて暗灰褐色粘土。時期を示す遺物の出土がないため、掘削時期は不詳。自然河川1の埋土は、この付近では肩部よりかなり盛り上がって堆積しているために、調査区南部との土層の連続は把握しにくい。この遺構面は第Ⅳ層（黄褐色粘土）上面に併行すると考えて大過あるまい。

土塼1（第58図）

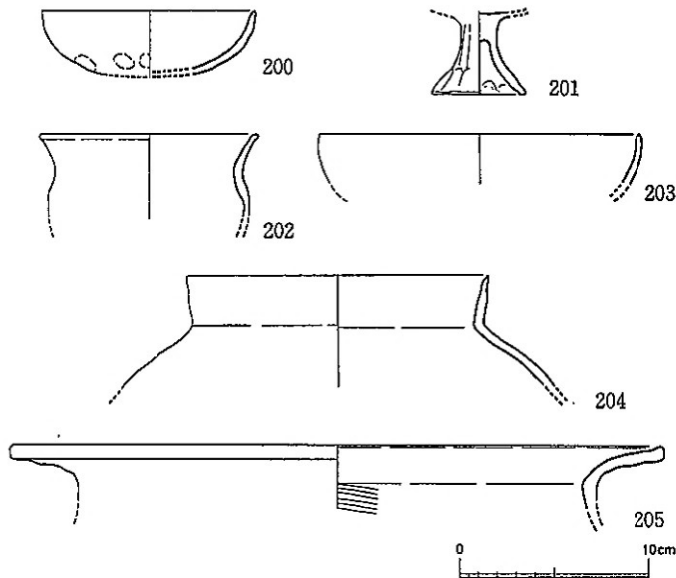
径約0.8m、深さ0.3mの円形土塼。遺物の出土なし。

土塼2（第58図）

径約0.4mの円形土塼と推定される。深さ0.2m。遺物の出土なし。

土塼3（第57・58図、図版36）

一辺が0.7~0.8mの三角形に近い不整形の土塼。深さ0.4m。土師器杯が1個体出土したが、古墳時代に編年されるものであり、元来ベースである古墳時代後期自然河川1に含まれていたものと考えられる。その他、土師器・甕・高杯を検出した。



第55図 平安時代 土塼3出土遺物 (1/4)

土壇4 (第58図)

長径約0.8m、短径約0.7mの楕円形土壇。深さ約0.3m。遺物の出土なし。

土壇5 (第58図)

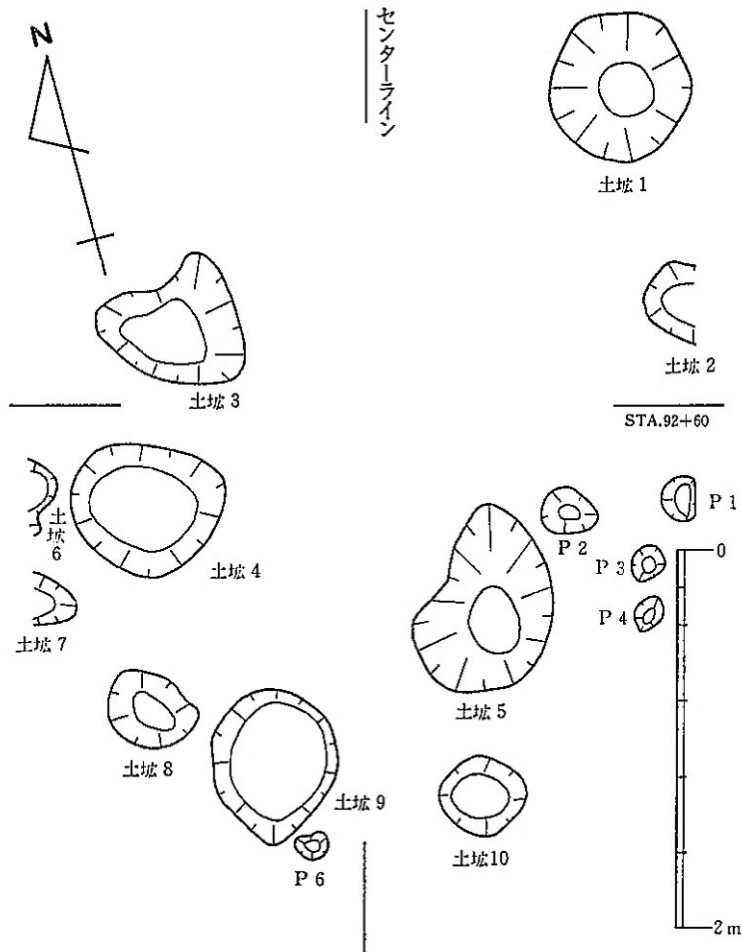
長径1m、短径0.8mの楕円形土壇。深さ約0.3m。遺物の出土なし。

土壇6 (第58図)

一部分のみ検出。径が復原で0.2m前後の円形土壇と考えられる。深さも復原で0.2m前後。遺物の出土なし。

土壇7 (第58図)

一部分のみ検出。長径で0.3mを測る楕円形の土壇と考えられる。深さは0.15m内外。遺物の



第56図 平安時代 Bトレンチ 土壇・ピット群 (1/40)

出土なし。

土壌8 (第58図)

長径0.5m、短径0.4mの楕円形土壌。深さ0.3mを測る。遺物の出土なし。

土壌9 (第58図)

径0.7mの円形土壌。深さ約0.3m。遺物の出土なし。

土壌10 (第58図)

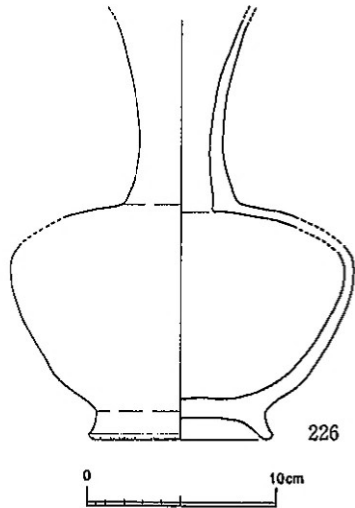
径0.5mの円形土壌。深さ約0.2m。遺物の出土なし。

ピット (第58図)

6個検出。径0.1~0.2m。深さ0.1~0.2m。遺物の出土なし。

7Bトレンチ 平安時代面 (第57図、図版53・54・88・96)

ほぼトレンチの全域にわたって、人間・牛・鹿の足跡が認められる。特に中央部~東部にかけて顕著に集中し、西半は散在的である。埋土は黄色砂で、総ての足跡に共通する。足跡は総体的に浅く、残存状況はそれ程良好ではない。人間の足跡は、長さ20~25cm、幅8~10cm、深さ2~6cmを測る。指の痕跡は残っていない。牛の足跡は、不整なハート形を呈する。径7×13cm、深さ5cmを測る。深く踏み込んでいるものもあるが、形状が不整であり、断定できないものもある。鹿の足跡は、縄文時代晩期のそれと同様に2種が確認できた。長さ5cm前後、幅3~5cm、深さ2~5cmである。踏み込み深度が浅いためもあり、歩行状態を確認できるものはなかった。概して、人間・牛・鹿とも無秩序に歩行していたと考えられる。また、この足跡面に貼り付いた状態で、須恵器長頸壺(第57図226)が出土した。体部の一部及び口縁端部を欠損しており、底部内面に白色物質が溜っていた。(第6章第3節参照)



第57図 平安時代面出土遺物(226)

中世

7Bトレンチでステップ状遺構、11Bトレンチでは畦畔を検出した。

ステップ状遺構 (図版55)

7Bトレンチで検出した。ステップは南東—北西方向に延びており、両端は調査区外へ延びている。また、西側の肩は大半がトレンチ外である。上幅5.2m、下幅6.8m、高さ0.43mを測る。頂部は平坦。断面観察の結果、本遺構は盛土による構築ではなく、削り出しによったと考えられる。条里地割りにほぼ合致し、道路としての可能性もある。ステップの下、東側一帯には多数の人間・牛の足跡が確認できる。人間の足跡は、長さ18～26cm、幅7～10cm、深さ5～10cm、牛の足跡は、径10～15cm、深さ7cmを測る。共に残存状況はそれ程良好ではなかった。また、歩行状態を確認できるものはなく、多数の人間・牛が無秩序・無方向に歩行(あるいは作業)していたようである。ステップ状遺構の上面には足跡は認められず、ステップ下にのみ足跡が存在することから、そのベースの土質にもよるが、ステップ下の地域が作業面(水田など)になっていた可能性も考えられる。

畦畔 (図版56)

11Bトレンチで検出した。南東—北西方向に直線状に延びる。西端は調査区外。上幅0.65～0.9m、下幅1.7～2.35m、高さ0.32mを測る。盛土によって構築されたものであろうが、周辺の水田面の土を掻き揚げたらしく、断面観察からは断定できなかった。あるいは削り出しの可能性もある。方向は条里地割りに合致し、恐らくは整然とした方形区画の水田が拡がっていたと考えられ、本畦畔はその1つに当たるものであろう。しかし、直交・平行する畦畔が他地区で検出されなかったため、水田面の拡がり、1枚の水田面の規模、あるいは坪界等は遺構の上からは不明である。また前述の7Bトレンチのステップ状遺構とは方向がほぼ同じである。

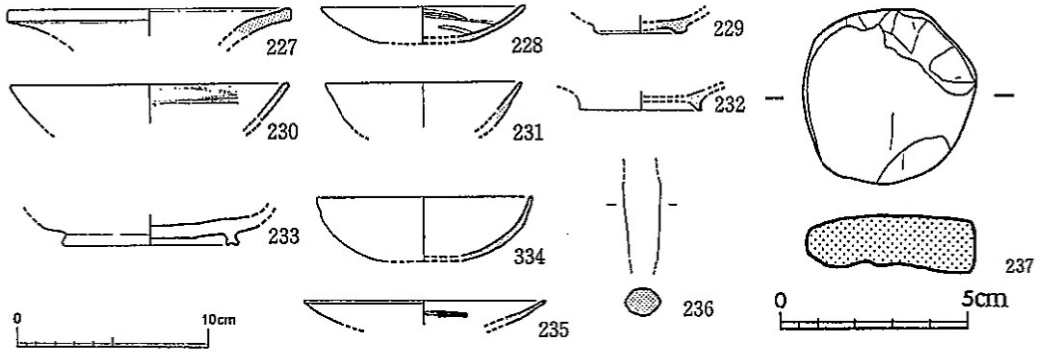
中世層出土遺物 (第58図、図版88)

A・B・5B・7B・Dトレンチで検出した。土師質土器壺・埴・土釜、瓦器埴・皿、須恵器杯身、瓦製円板が出土した。須恵器杯身(233)は古墳時代のものであるが、他は概ね鎌倉～室町期に属する。

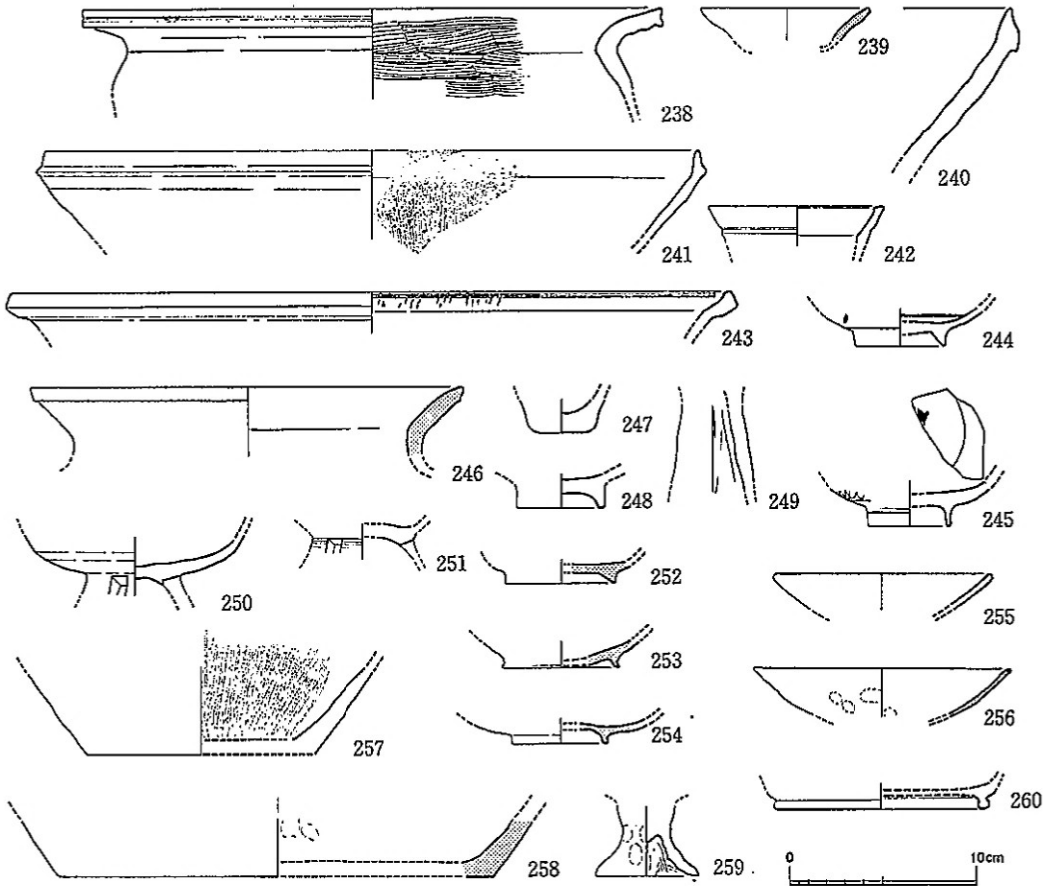
黄褐色土層出土遺物 (第59図、図版88・89)

B・7B・11B・13B・C・2Cトレンチの黄褐色土中から出土した。土師質土器甕・壺・埴・高杯、須恵質土器こね鉢・搦鉢、須恵器・高杯・杯身、瓦器埴、陶器、磁器など、雑多な日常雑器類を含む。陶器・磁器は混入の可能性が高く、本来この層は平安時代末～中世の堆積と考

えられる。



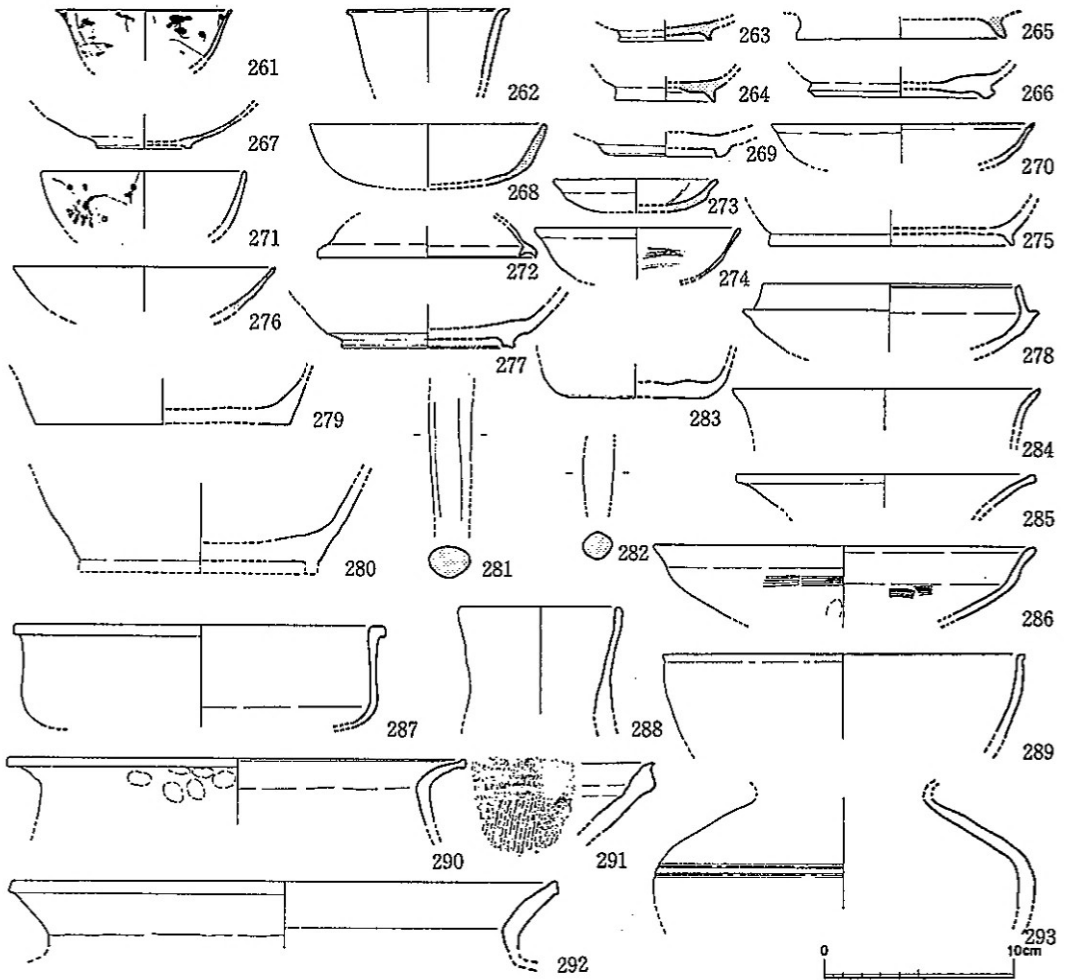
第58図 中世層出土遺物 (左1/4・右1/2)



第59図 黄褐色土層出土遺物 (1/4)

灰褐色土層出土遺物 (第60図、図版88・89)

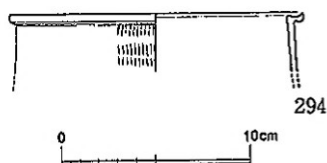
B・7B・11B・C・3Cトレンチの灰褐色土層中から出土した。須恵器壺・杯身・杯蓋、土師質土器壺・杯・壺・甕・鉢・土釜、瓦器壺、瓦質土器土釜、陶器壺・搦鉢・碗、磁器碗等の日常雑器類が出土した。また、この層も本来中世頃の堆積であると考えられ、陶器・磁器類は後の混入と考えられる。



第60図 灰褐色土層出土遺物 (14)

この掻き揚げ田の中央を横断すると考えられるが、それと無関係に構築されていることは示唆的である。

掻き揚げ田3は、1 Cトレンチ南半部で確認され、南側は調査区外。高さは0.3m。上面には直交及び平行する耕作溝が設けられていた。なお、本遺構中から施釉陶器鉢片（第62図294）が出土した。



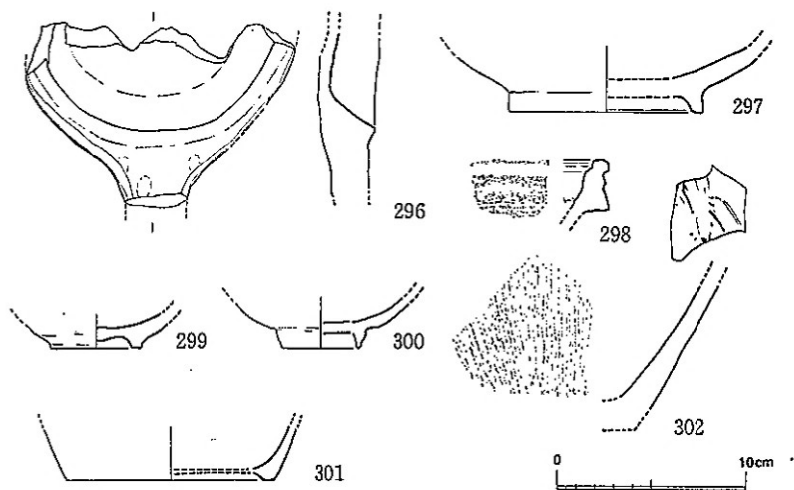
第62図 近世 掻き揚げ田3出土遺物 (14)

掻き揚げ田4は、Cトレンチ南端と3 Cトレンチ全面に拡がっており、掻き揚げ田の全貌が見られた。幅は5 m、長さは調査区内だけでも30mを測り、高さは0.3~0.4m。上面には井戸12と耕作溝が遺存していた。

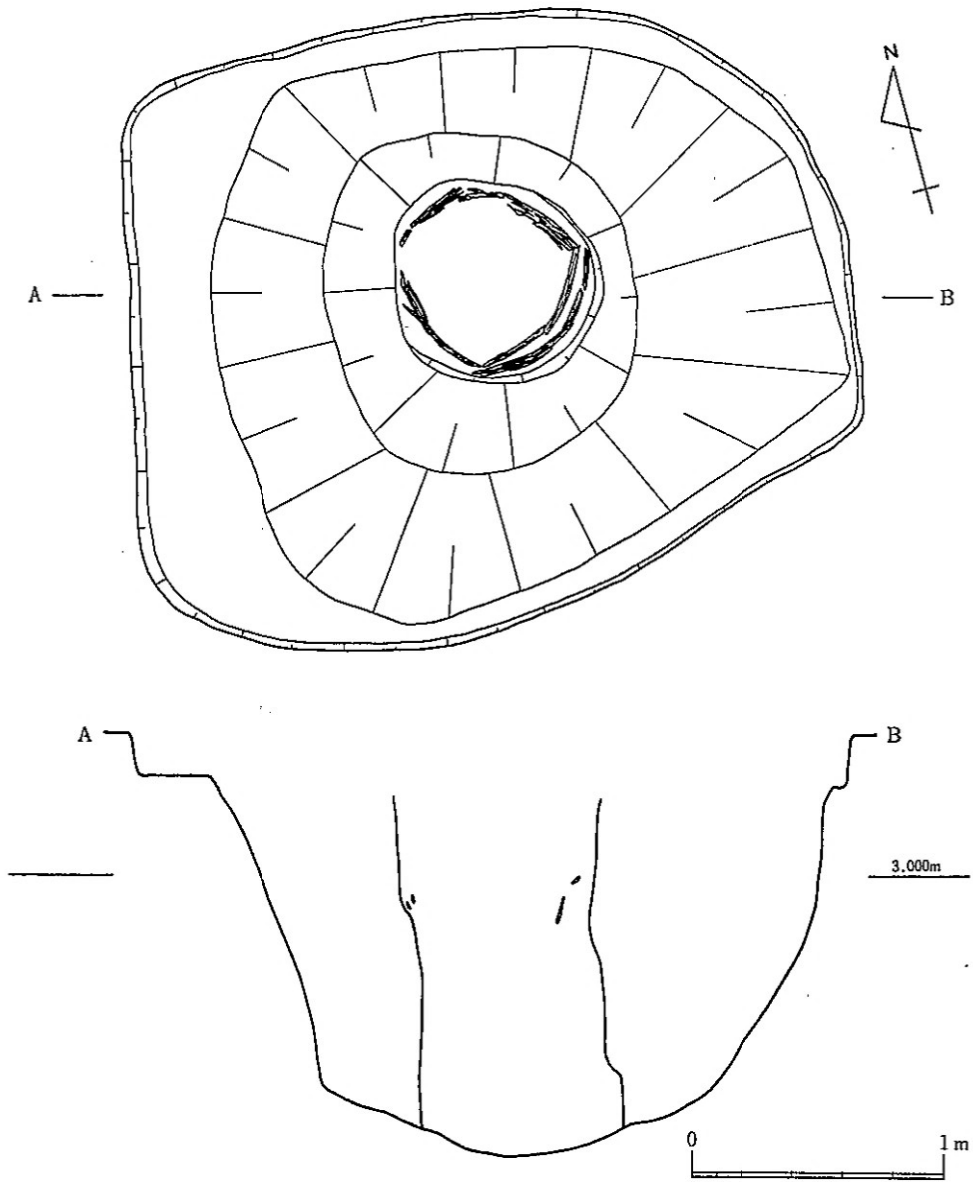
掻き揚げ田に接する一段下がった耕作地には多くの耕作溝が見られ、特に掻き揚げ田に接する部分では、かなりしっかりした耕作溝が存在していた。また、掻き揚げ田の上部には井戸が多く見られ、両者には強い相関関係が見られる。

井戸1 (第63~65図、図版66)

2Bトレンチ北西部で検出した。掘り方は不整な円味をもつ五角形を呈する。径2.87×2.52m、深さ1.69mを測る。肩部から約0.2m程下で、幅0.05~0.28mの犬走り状の段をもつ。底部は中央が最も低くなり、弥生時代中期の砂層に達している。掘り方中央に井筒が据えられていたようで、抜き取り穴を検出した。井筒は木組の桶であったらしく、タガが2条残っていた。抜き取り穴から、井筒の径は約0.8m程であったと考えられる。井筒内より木製鋏身(W. 7)及び陶器・磁器片(第65図296・297・299・300)を検出した。



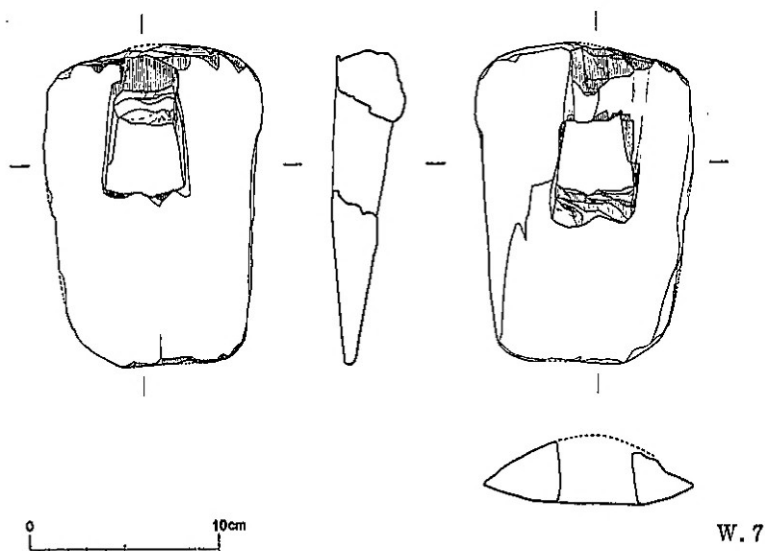
第63図 近世・近代 井戸1・7・11出土遺物 (14)



第64図 近世・近代 2Bトレンチ井戸1 (1/50)

鋏身 W.7 (第65図、図版93)

中央に着柄角66度の角孔が位置し、横断面形は前面が深く後面が浅い山形を呈する杏仁形である。上端部に最も厚みがあり4.6cmを測る。両側縁・下端縁には鉄製鋏先が着装される。樹種はカシで、柱目材の縦木取りである。



第65図 近世・近代 井戸1出土遺物 (14)

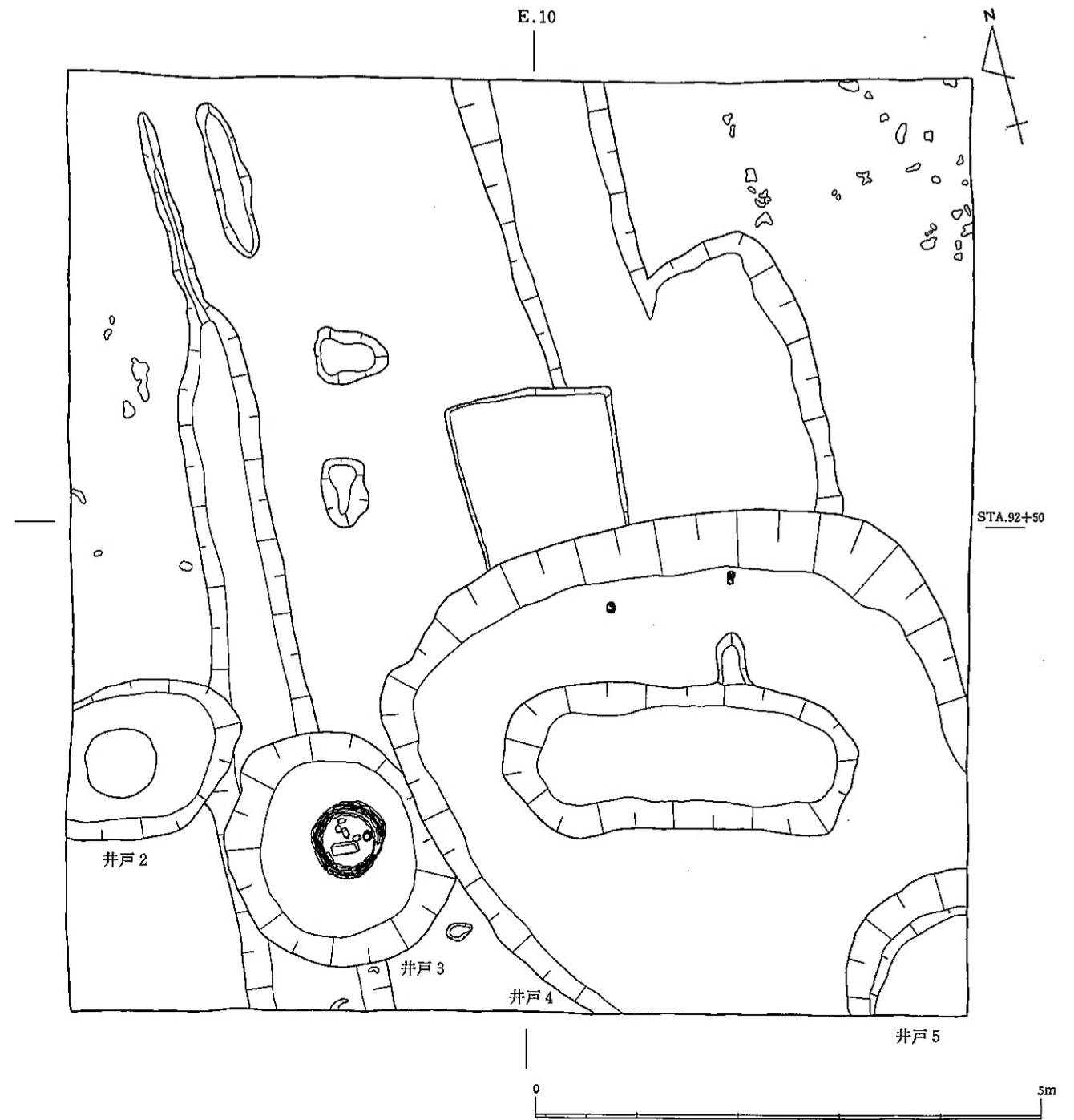
井戸2 (第66・67図、図版67)

6 B トレンチでは、南半部に井戸が集中し、西から井戸2・3・4・5とした。本井戸はそのうち最も西に位置するものである。

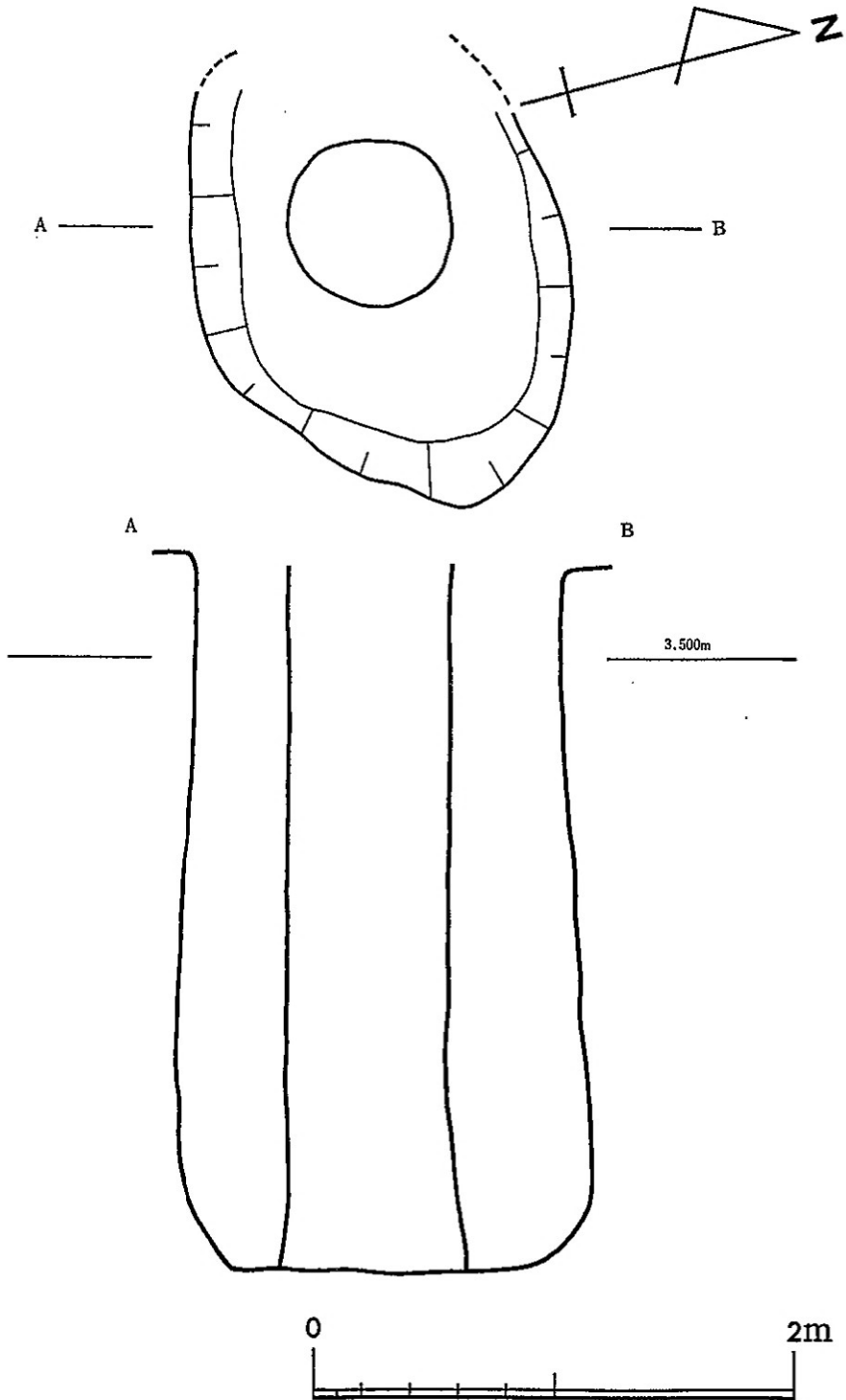
掘り方はややいびつな長円形を呈し、断面は底部近くがやや広くなる袋状をなす。底部はほぼ水平である。径0.78×1.05m、深さ1.51mを測る。底部は弥生時代中期の砂層に達している。掘り方中央に井筒が据えられていたらしく、抜き取り穴が検出できた。井筒は木組の丸い桶と考えられる。径は0.35mで、ほぼ下部までまっすぐである。遺物は検出しなかった。

井戸3 (第66・68図、図版67・68)

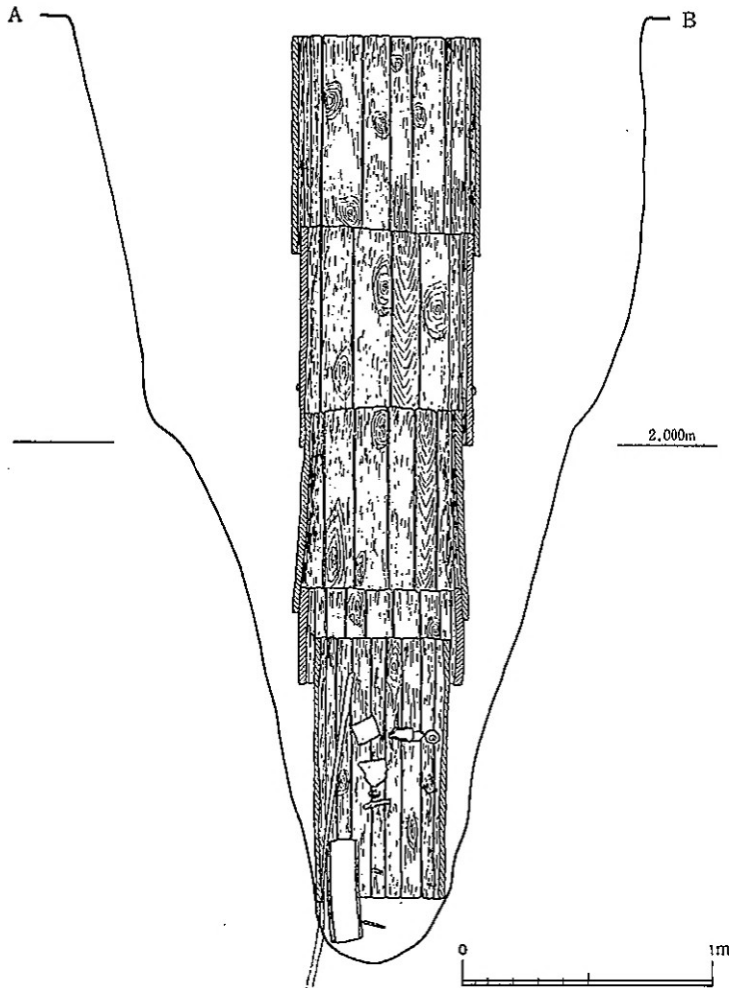
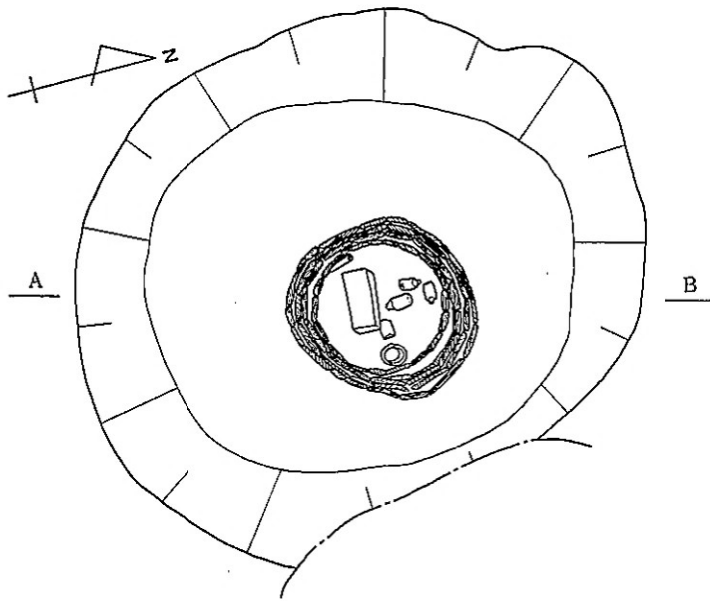
井戸2・4に挟まれ、井戸4の掘り方に東側掘り方を切り込まれている。掘り方は不整な円形を呈する。径2.14×2.20m、深さ3.76mを測る。掘り方は、中位にわずかな段をもち、底部になるほど径が小さくなり、底部は井筒の径と同じで、断面は丸い。底部は縄文時代晩期の砂層に達しており、本調査区で検出した井戸では井戸7に次いで深い。掘り方中位の段は1.70×1.48m、底径は0.33mを測る。井筒は、丸い木組の桶を五段重ねにしており、上段の桶から順次その径が小さくなり、桶の接合部は10~20cm程度重ねている。1段目は、20枚の坂を組み合わせ、径0.76×0.73m、高さ0.87mを測る。2段目は15枚を組み合わせ、径0.69×0.65m、高さ0.88m。3段目は15枚を組み合わせ、0.63×0.61m、高さ0.84m。4段目は21枚を組み合わせ、径0.64×0.59m、高さ0.39m。5段目は19枚を組み合わせ、径0.54×0.53m、高さ0.95mを測る。5段目井筒下に土管を立て水の湧出を図ったらしい。5段目井筒内からは、薬ビン・瓦・レンガ・貯金



第66図 近世・近代 6Bトレンチ 井戸群、足跡 (1/60)



第67図 近世・近代 6Bトレンチ 井戸2 (1/50)

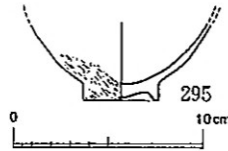


第68図 近世・近代 6Bトレンチ 井戸3 (1/50)

箱（三和銀行）等を検出し、中央環状線施設時頃まで使われていたと考えられる。

井戸4 （第66・69図、図版67）

6 Bトレンチ南西部に位置し、南東部は井戸5に切り込まれている。掘り方の南東部約 $\frac{3}{4}$ は調査区外。掘り方は、不整な方形又は五角形を呈すると考えられる。径5.5×5.0m以上、深さ2.26mを測り、最も大きい規模をもつ。掘り方の北部に杭が2本並び、その間隔は1.2mである。杭は井戸に伴う施設と考えられるが、その用途はわからない。杭の径は10cmほどで、撥釣瓶の支柱と考えるには若干無理があらうと思われる。掘り方中央部北寄りには、3.54×1.44mを測る丸味をもつびつな長方形の抜き取り穴があり、東西方向に長軸を置く。井筒は総て抜かれており、掘り方底部まで抜き取り穴が達していた。従って、井筒の形態は不明である。掘り方内からは、陶器碗片（第69図295）が出土した。



第69図 近世・近代 井戸4出土遺物 (1/4)

井戸5 （第66図、図版67）

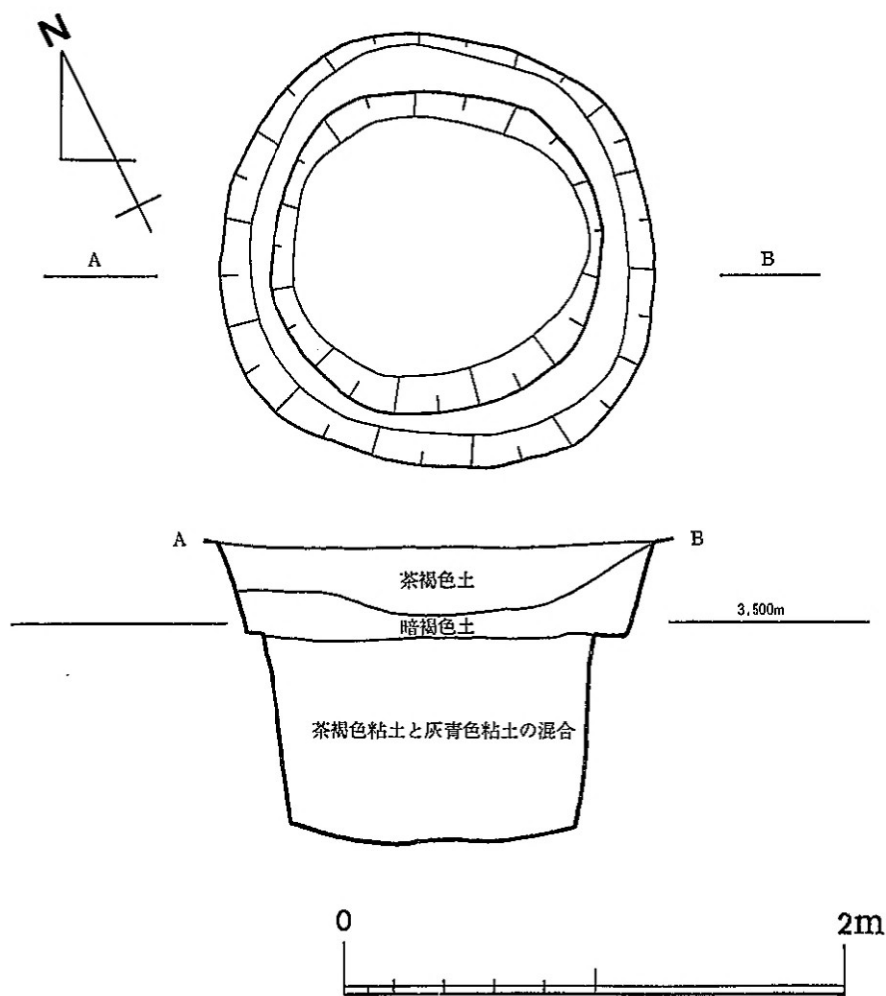
6 Bトレンチ南東隅で約 $\frac{1}{4}$ を検出したのみである。井戸4を切り込む。掘り方はほぼ円形を呈する。推定径2.4m、深さ1.32mを測る。井筒は検出されず、抜き取り穴もなかったため、素掘り井戸であったことがわかる。

井戸6 （第70図、図版60）

8 Bトレンチ北部に位置する。畑の耕作溝を切り込んでいる。ほぼ円形を呈する素掘りの井戸である。径1.70×1.68m、深さ1.24mを測る。底部はほぼ水平で、弥生時代中期の砂層に達している。上面から0.25mの位置に、幅0.12～0.20mの犬走り状の段を有する。

井戸7 （第63・71図、図版60）

8 Bトレンチ北東隅に位置し、約 $\frac{3}{4}$ は調査区外。本井戸も畑の耕作溝を切り込んでいる。掘り方は円形を呈すると思われる。規模は大半が調査区外にあり、不明。深さ3.92mを測る。掘り方中位に幅0.20～0.30mのやや傾斜をもつ段を有する。底部は径0.60mを測り、中央が少し凹む。縄文時代晩期の砂層に達している。井筒は板を円く組んだ桶で、5段を確認した。井戸の深さから、あと1段積まれていたと考えられる。井筒は井戸3と同様で、下段になるほど径は縮小して

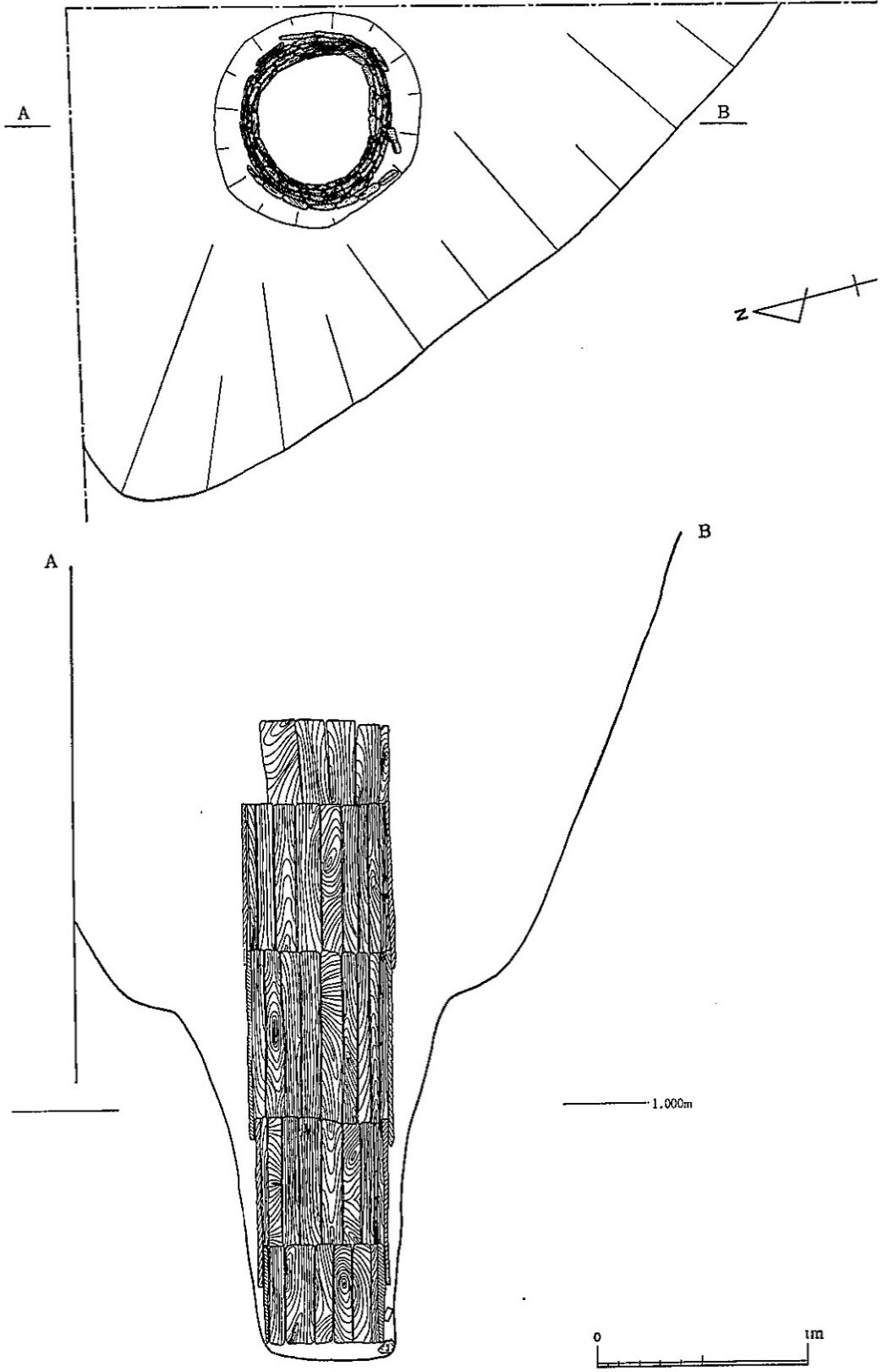


第70図 近世・近代 8Bトレンチ 井戸6 (1/40)

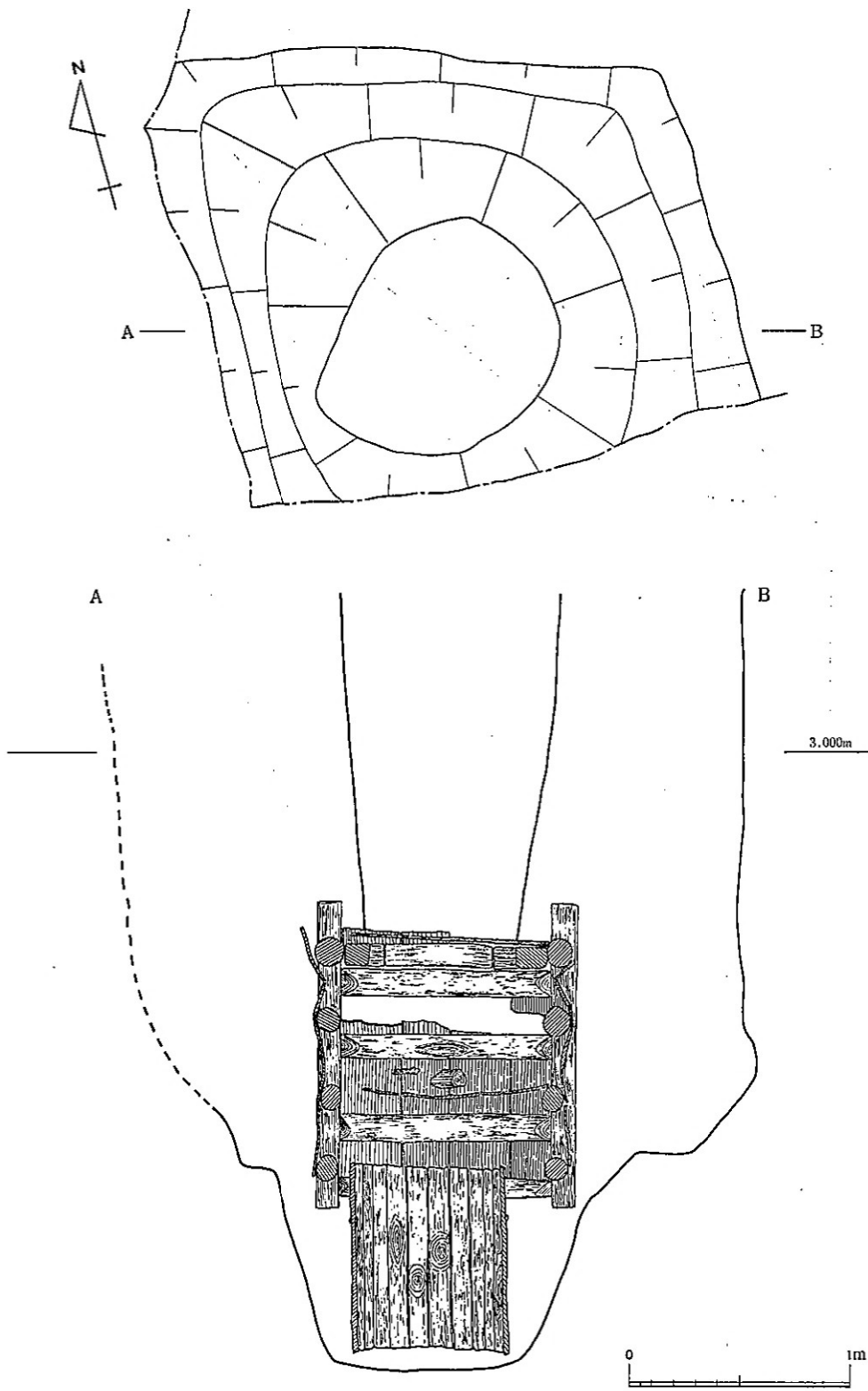
いる。1段目は約半分の板が抜き取られ、12枚が残っている。高さ0.43mを測る。2段目は、21枚の板を組み合わせ、径0.79×0.68m、高さ0.79m。3段目は22枚の板を組み合わせ、径0.75×0.66m、高さ0.93m。4段目は21枚の板を組み合わせ、径0.71×0.64m、高さ0.80m。5段目は19枚の板を組み合わせ、径0.66×0.58m、高さ0.47mを測る。5段目の井筒下端は、掘り方には接せず、10cm程の空間がある。また、同井筒の下及び外側には瓦・石が据えられている。陶器・播鉢片（第63図302）を検出した。

井戸8 （第72・73図、図版69・70）

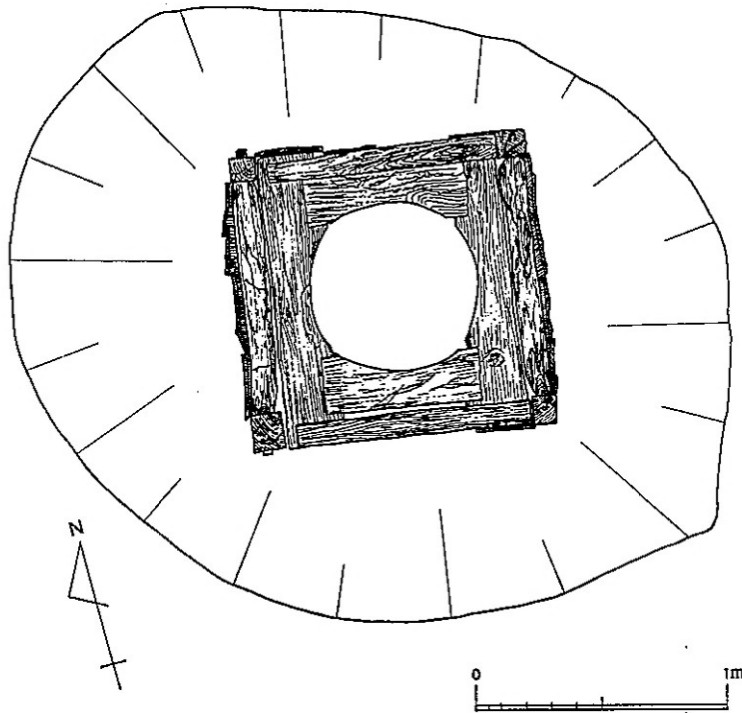
13Bトレンチ北東部に位置し、掘り方の南及び西部を竹筒暗渠7に切り込まれている。掘り方



第71図 近世・近代 8Bトレンチ 井戸7 (1/30)



第72図 近世・近代 13Bトレンチ 井戸8 (1/60)

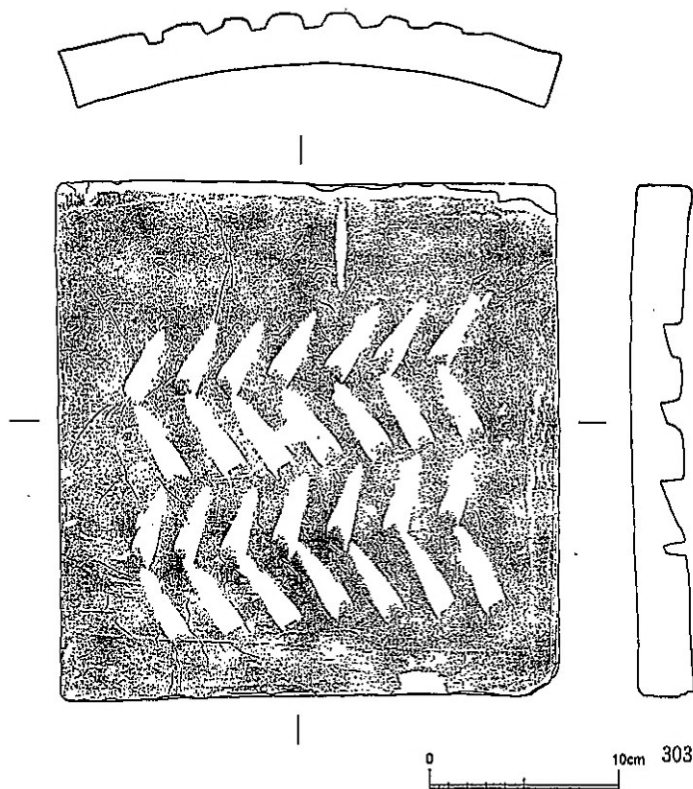


第73図 近世・近代 13Bトレンチ 井戸8枠中段木組 (1/60)

はほぼ方形をなすと考えられる。規模は、東西2.34m以上、南北2.05m以上、深さ3.54mを測る。掘り方下位近くで犬走り状の段を設け、底部は中央がやや凹む。底は縄文時代晩期の砂層に達している。井筒は大きく三段に分かれる。上段は木組の桶の井筒、中段は四天柱を組んだ枠、下段は木組の桶である。上段の木組桶の井筒は抜き取られ、その抜き取り穴から、上径1.0m、下径0.7m、高さ1.57mを測る。この高さから、桶は2段重ねと考えられる。中段の枠は、四天柱を立て、各柱の2面に柄穴を穿って前後左右各4本の梁を架けている。さらにその木組の外には、これも前後左右の各面に薄板を各4枚立て並べている。柱は0.10~0.14m、長さ1.38mの角材、梁は0.10~0.15m、長さ0.95mの柄部分のみ加工した丸太材を用いている。四面に立て並べた薄板は厚さ2~4cm、高さ1.18m前後の杉材である。木組の上面は、厚さ0.10mの板を4枚、中央部が円形になるように加工し、組み合わせ、上段の木組桶の井筒が接する様になっている。組み合わせられた穴の径は0.67×0.67mである。下段は木組の丸い桶で、中段の下部と重なるように据えられている。22枚の板を組み合わせ、径0.70×0.68m、高さ0.68mを測る。本井戸からは遺物は出土しなかった。

井戸9 (第74図)

2 Cトレンチ北東部に位置する。ほぼ円形の素掘り井戸である。径1.80×1.60m以上、深さ2.52mを測る。瓦が出土している。



第74図 近世・近代 井戸9出土遺物 (1/4)

井戸10

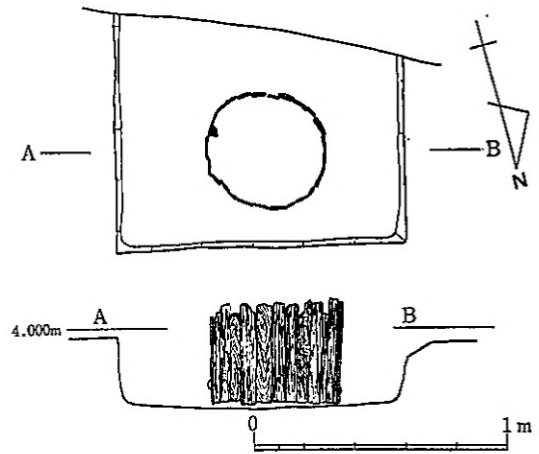
2 Cトレンチ北西部に位置する。約1/2が調査区外にある。掘り方は円形を呈する。径1.32m以上、深さ3.62mを測る。底部は縄文時代晩期の砂層に達する。井筒は木組の円形の桶を重ねている。最下段の桶が遺存するのみで、他は抜き取られている。残存する桶も全周はせず、15枚の板が形をくずして並んでいる。径0.7m、高さ0.92mを測る。上下2箇所タグを付ける。

井戸11 (第63図)

1 Cトレンチ中央部に位置する。いびつな長円形の掘り方をもつ素掘りの井戸である。径1.1×0.8m、深さ2.06mを測る。底部は弥生時代前期の砂層に達している。陶器摺鉢片が出土。

井戸12 (第75図、図版70)

3 C トレンチ南西部に位置する。ほぼ方形の掘り方で、東西1.16m、南北1.12m、深さ0.30mを測る。底部は中央がやや凹む。掘り方中央部やや北寄りに、木組の桶が据えられる。径0.47×0.45m、高さ0.5mを測る。26枚の比較的薄い板を組み合わせ、下部にタガがある。肥料溜めとも考えられる。



第75図 近世・近代Ⅲ 3 C トレンチ 井戸12 (1/30)

暗渠 (第76図、付図19・20、図版60・71～73)

調査区全域にわたって、“しけぬき”用の暗渠を検出した。第Ⅱ層(暗灰色土)上面より切り込んでおり、節を抜いた竹筒によるものと、溝に木の枝を充填したものの2種類ある。方向は周辺の地割りに一致しており、東西方向に竹筒のもの、南北方向に木の枝のものが設置されていた。

竹筒暗渠は、幅0.5～0.6m、深さ0.55～0.6mの溝に、節を抜き縦に2つ割りにした竹筒をそのまま合わせて置き、何本かをつないで連続させ、まわりに桜の細枝をからませている。もう一方は、幅0.5～0.6mの垂直な側面を持つ溝の中に、0.5m前後の長さの桜の枝をぎっしり充填した暗渠1である。竹筒暗渠の下にもぐって立体的に交叉するため、深さは0.7mを越している。両者の交叉点では、上部を走る竹筒暗渠の竹筒の中を伝ってきた水が、ここでは下部を走る木の枝の暗渠に落ちるように設置されている。竹筒暗渠8と暗渠1が交叉するBトレンチ、STA. 93+75付近は鋼矢板打設前に本遺構面の調査を実施したが、その段階では2本の暗渠とも実際に機能しており、水量こそ少ないが、常に竹筒暗渠から下の暗渠に水が流れ出していた。また、暗渠設置時期は、古老の話によると1940年代とのことである。

竹筒暗渠は、調査区周辺の地割りに一致して東西方向に9本検出した。それぞれの間隔は北から21.8m、43.5m、23.3m、21.0m、22.3m、22.2m、42.3m、22.5m、39.5mであるが、耕作溝の項で述べた調査区内の地割りで復原してみると、同一区画に含まれると考えられる竹筒暗渠4から8の間の距離が107.9mを測り、ほぼ1町に近い数値が得られる。暗渠1の位置も先に坪界と想定した線に概ね一致しており、この2つの暗渠は周囲の地割りに規定されて設けられたと考えられる。また、竹筒暗渠2・3が、道路遺構の存在するあたりを避けて、それぞれ東と西へ水を流しており、道路遺構もまた暗渠設置時の地割りに大きな影響を持っていたことがわかる。

粘土採取穴と足跡 (第77図、写真6、図版63・97)

12Bトレンチで検出した。東西方向に直線状の溝が3条平行して走る。東端部は調査区外へ延びる。北側の溝から、長さ11m以上・幅0.68~0.96m・深さ0.3m、長さ4.8m以上・幅0.78~1.2m・深さ0.28m、長さ11m以上・幅1.96~2.18m・深さ0.35mを各々測る。埋土は総て赤味を帯びた黄褐色粘土。この3条の溝のうち、北側の溝内の北東部に、0.1×0.1m~0.38×0.2mの丸味をもつ方形又は長方形の凹地が、連続して4列に並んでいるのが見られた。溝の埋土である黄褐色粘土を、小さく持ち運べる大きさに切り取った跡と考えられる。粘土の用途は不明。

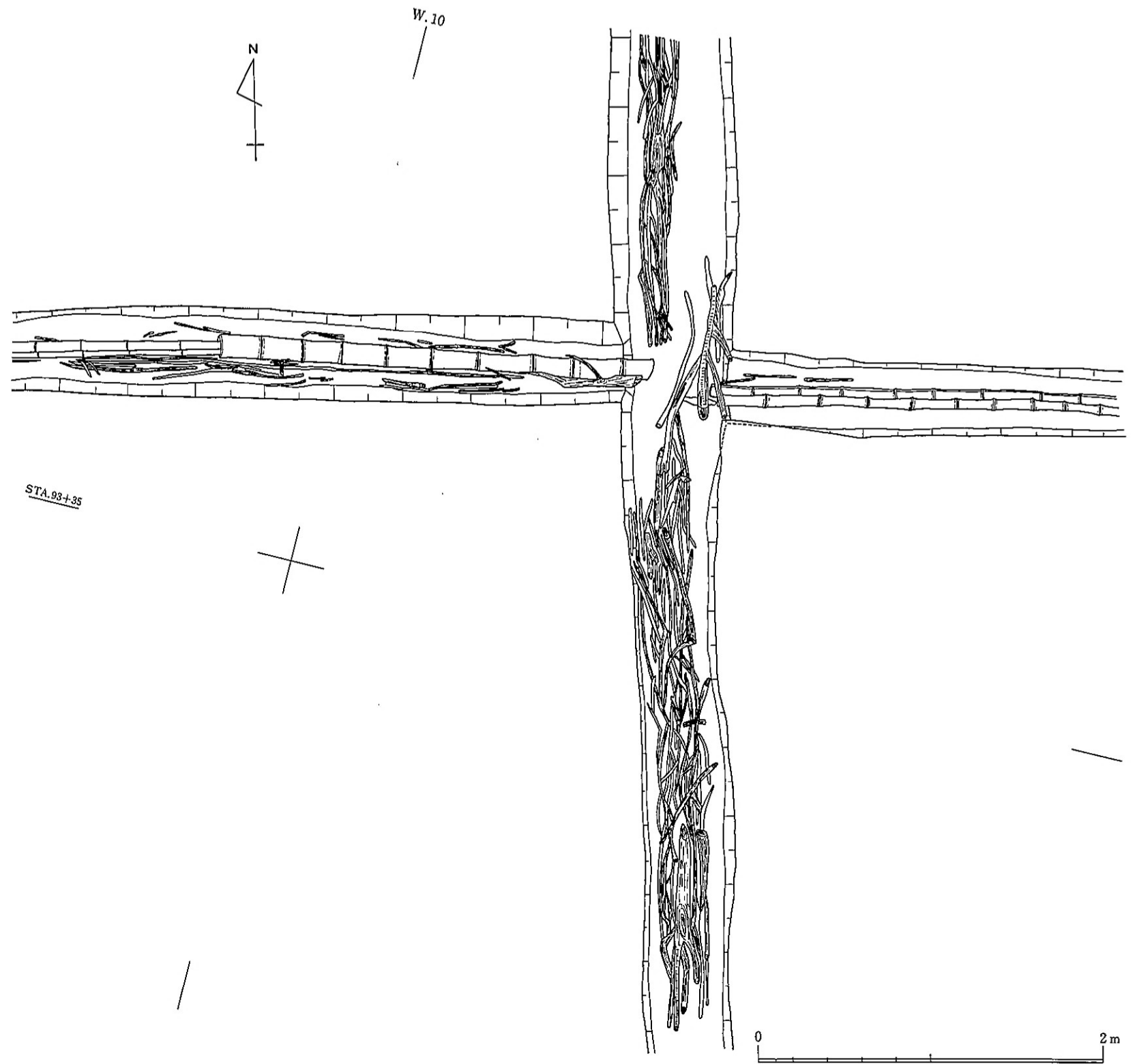
また、本トレンチ東半部の遺構面は淡茶褐色砂・黄褐色砂に覆われており、遺構面上に多数の人間・鹿の足跡が遺存する。人間の足跡は、長さ20~31cm、幅9~14cm、深さ5~8cmを測る。指の痕跡まで認められる遺存状況の良好な足跡が多い。鹿の足跡は、長さ9~14cm、幅7~12cm、深さ2~5cmを測る。人間の足跡に比べて、鹿のそれは残存状態があまり良くない。明確な歩行状態は観察できなかった。



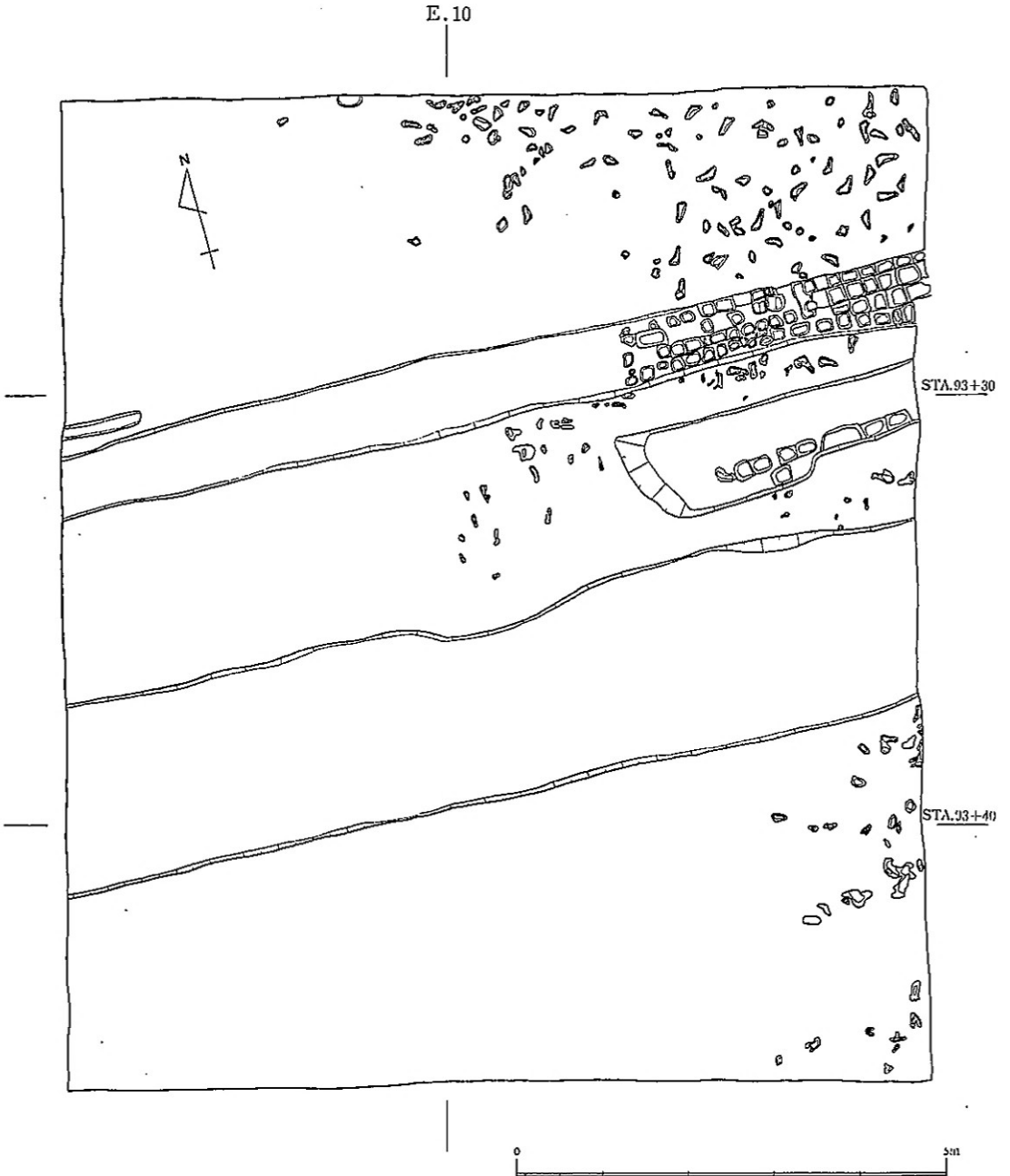
写真6 近世・近代 12Bトレンチ 粘土採取穴(南から)

耕作溝と足跡 (図版60・64・65)

8Bトレンチでは、耕作溝の間(畝)に人間の足跡が多数並んでいる状態を検出した。溝に直交する2種類の足跡が認められる。耕作溝は東西方向であるので、この人間は北と南を向いてい



第76図 近世・近代 13B トレンチ 暗渠1、竹筒暗渠7 交叉部 (1/30)



第77図 近世・近代 12Bトレンチ 粘土採取穴、足跡 (1/80)

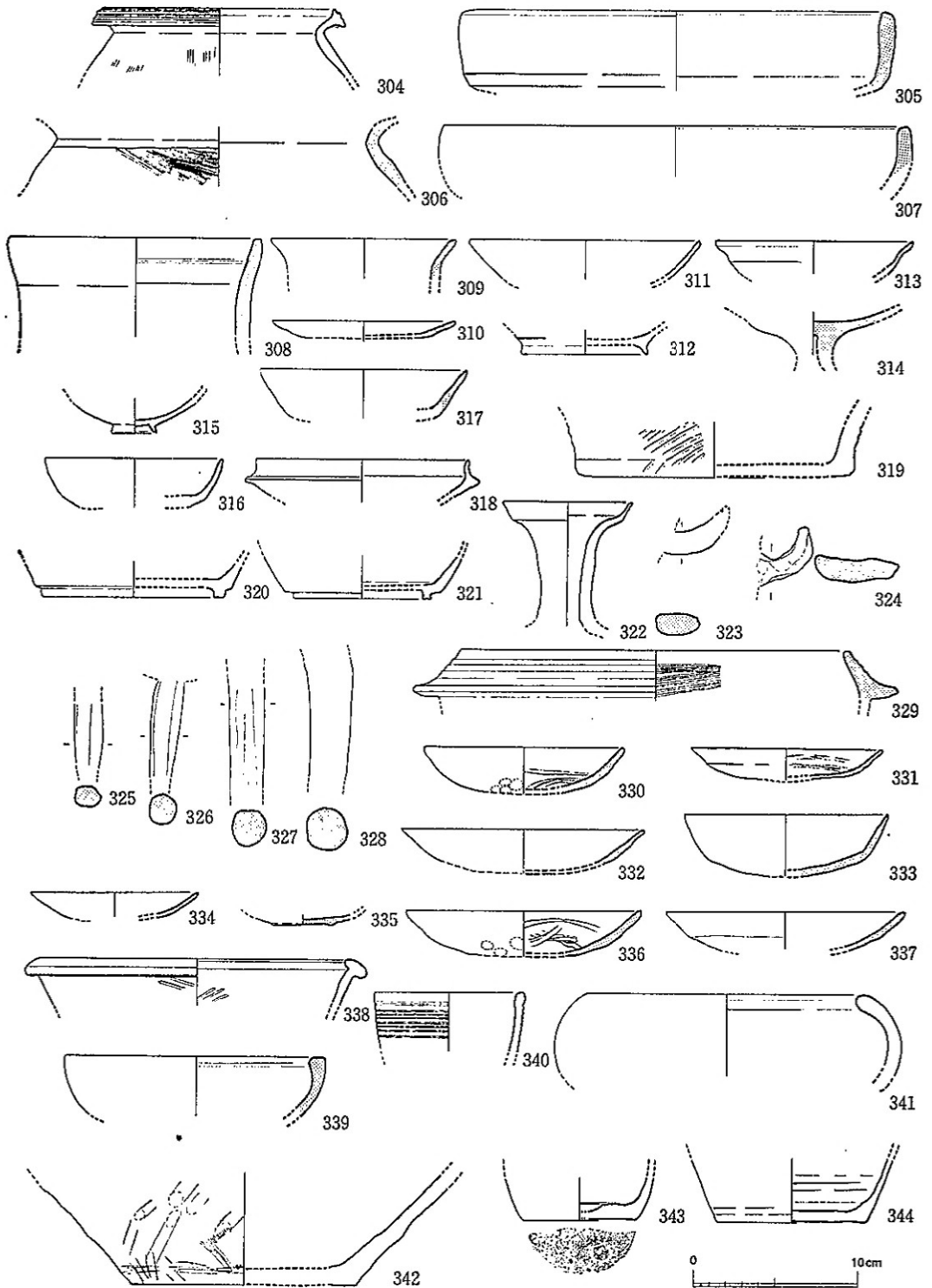
たことになる。直進歩行ではなく、畝上を横（東→西又は西→東）に足を運んでいる。即ち耕作溝に沿って（恐らく、中腰かあるいはしゃがんで）畝上を畑作業をしながら横歩きした跡である。この畝は幅0.6~0.8mであるため、同時に同箇所では2人で作業できない。従って、この2

種類の足跡は、同一人物が畝上を1往復（東西どちらが起点になっているかは不明）して、往路と復路では体の向きを180°変え、畑作業を続けた可能性もある。足跡の規模（長さ24cm前後）がほぼ同じであることも、その蓋然性を高めている。

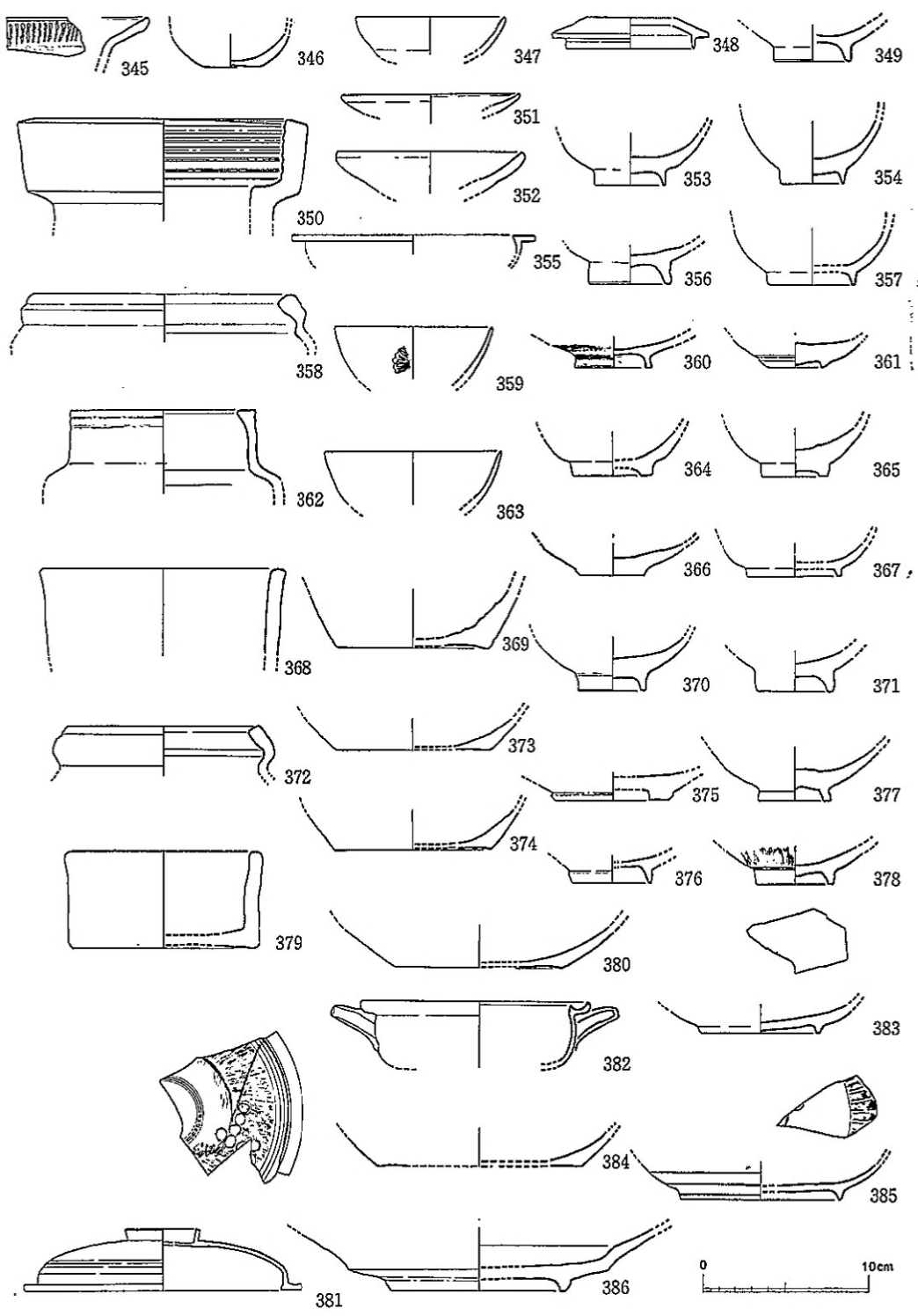
10Bトレンチでは、耕作溝のすぐ近くで鹿の足跡を検出した。いずれも先が2つに分かれているが、踵の部分が割れるものと割れていないものの2種がある。これは縄文時代晩期他と同様である。長さ8～12cm、幅5～8cmを測る。明確な歩行状態は読み取れないが、概ね耕作溝に平行しており——西向きと東向きの2方向——畑の作物でも食べに来たのであろうか。近世のこととは言え、現在の河内平野の環境からは考えられない状態である。

旧耕土出土遺物（第78～83図、図版88～90）

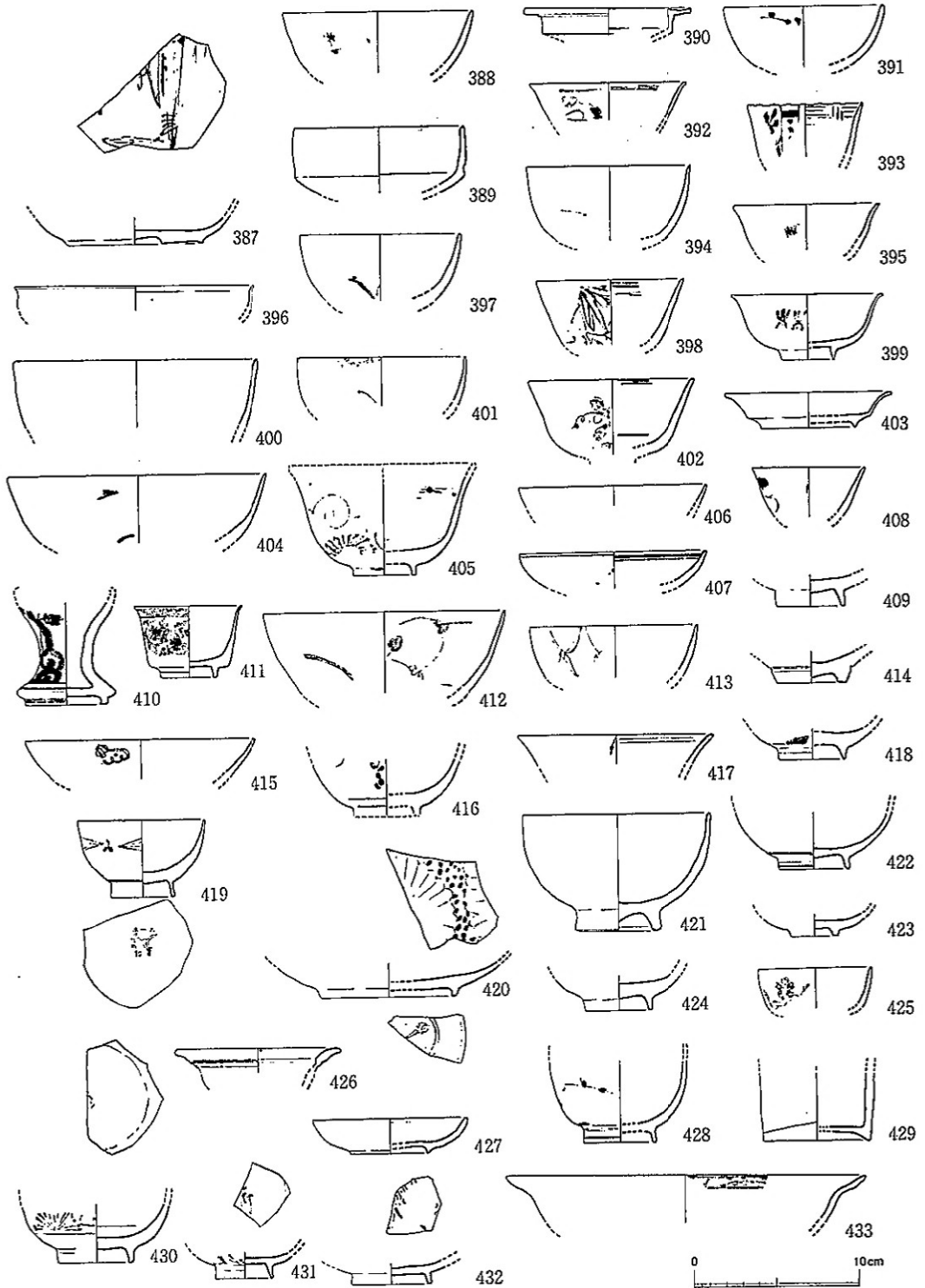
各トレンチの近世相当層からは多数の土器及び土製品を検出した。旧耕土出土遺物はその大半を占める。陶器・磁器が量的に多く、近・現代のものも含む。土器は、弥生土器甕、須恵器杯身・長頸壺、土師器甕、土師質土器鉢・甕・皿・埴・高杯・土釜、須恵質土器甕・鉢・こね鉢、瓦器埴・皿、瓦質土器甕・土釜・鉢、陶器碗・壺・甕・皿・鉢・播鉢、磁器碗・皿・鉢・壺・燈明皿、青磁碗等の日常雑器類や、土製人形の鶏（499）・仏像（501・502）、土製のメンコ（500）等が出土した。須恵器では、愛知県・葦投窯の製品（322）が1点みられる。磁器類では伊万里焼が最も多く、次いで瀬戸焼他があり、各地の製品がみられる。また、鉄釘が1本（I・1）出土している。



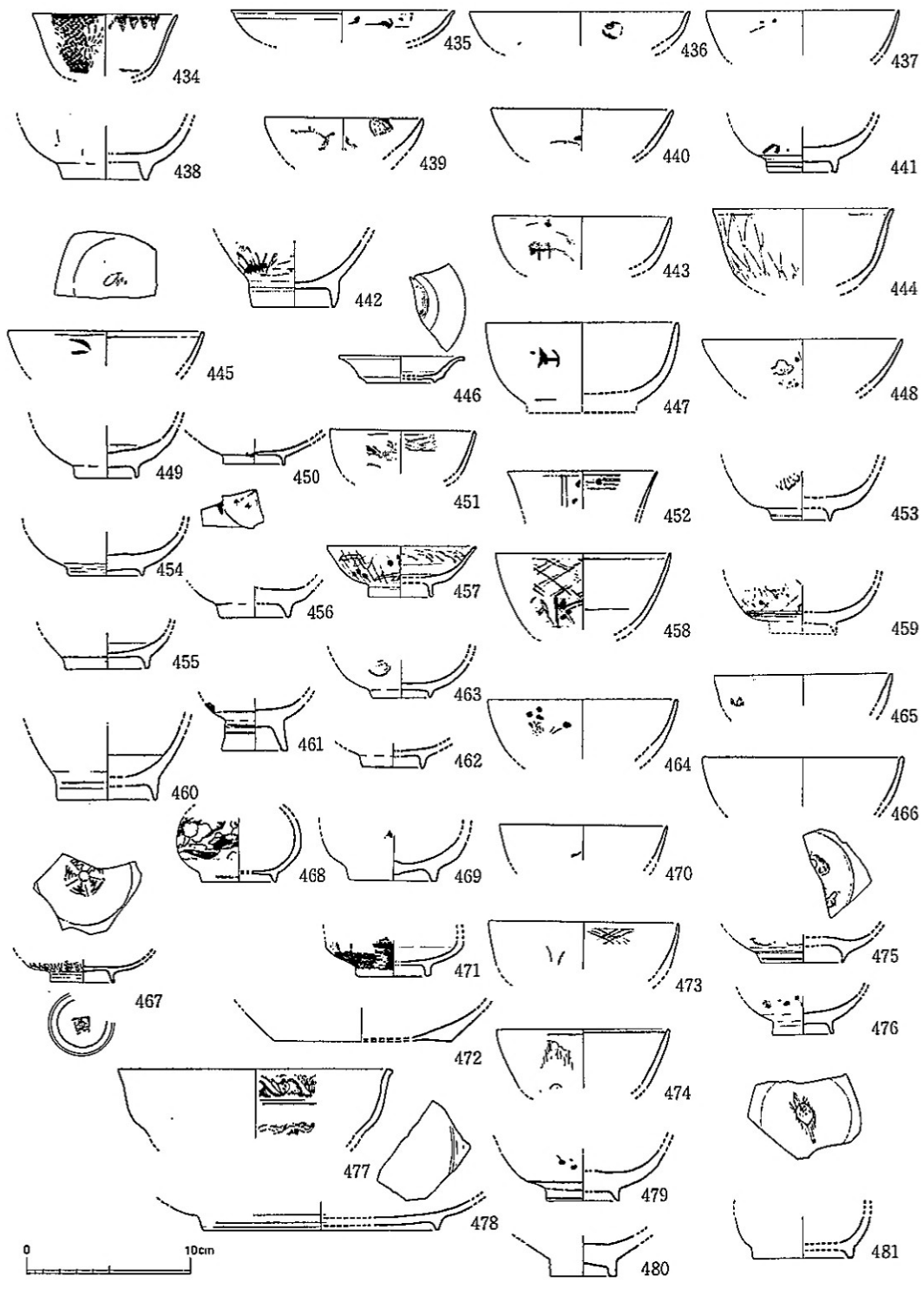
第78図 旧耕地出土遺物 ① (1/4)



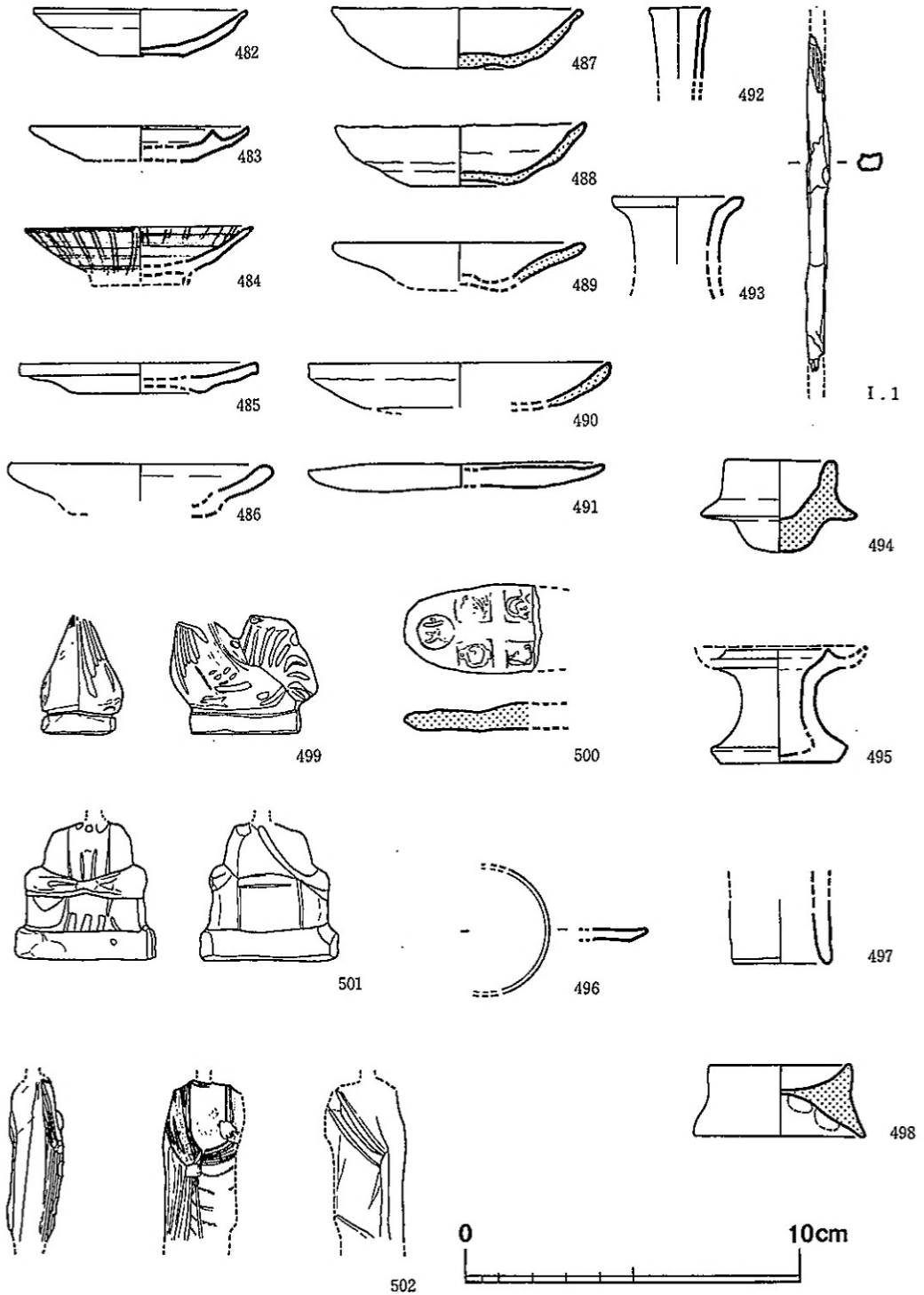
第79图 旧耕土出土遺物 ② (14)



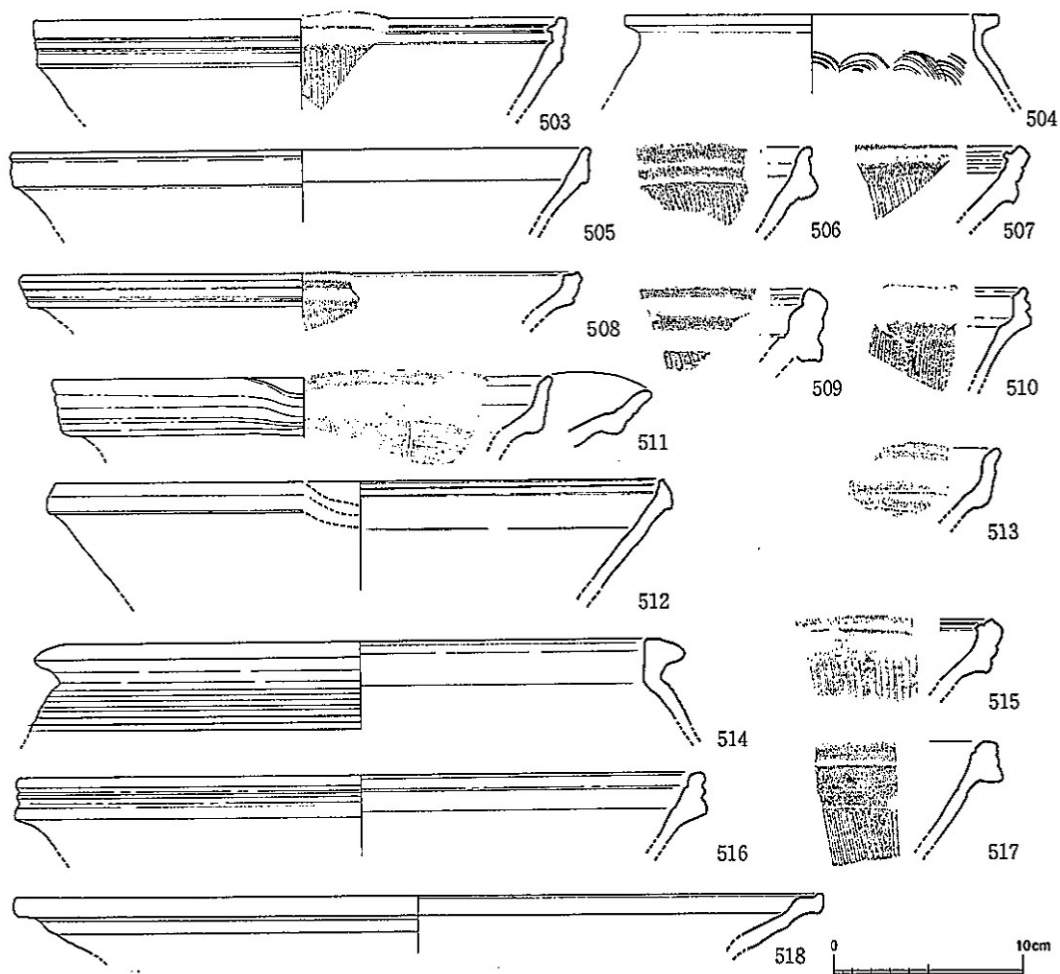
第80図 旧耕土出土遺物 ③ (14)



第81图 旧耕土出土遺物 ④ (14)



第82図 旧耕土出土遺物 ⑤ (1/2)



第83図 旧耕土出土遺物 ⑥ (14)

第6章 自然科学の成果

第1節 山賀遺跡（その4）試料 花粉分析報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. 試料（図1参照）

その4：5地点、花粉分析試料29点

2. 分析方法

花粉分析方法

試料秤量→HCl処理→HF処理→重液分離→アセトリシス処理→KOH処理→封入

試料秤量は試料の材質によって下記の如く行った。

その4……10～20gで処理

検鏡に際しては400～600倍で200または250の個体を鑑定した。

3. 分析結果

分析結果は次記の表及び図に表わした。

花粉分析では、検出された花粉・胞子化石の総数を基数とする場合と、樹木花粉総数を基数とする場合の2通りで産出頻度を百分率で表わし（表1）、この中で頻度の高い花粉・胞子化石についてはダイアグラム（図1・2）を作成して後掲した。

その4 表1 （花粉・胞子化石総数を基数、樹木花粉化石総数を基本とする2通りの内容をもつ表）

図2 （花粉・胞子化石で産出頻度の高いもののダイアグラム）

図3 （樹木花粉化石で産出頻度の高いもののダイアグラム）

(1) 試料の分析で検出された花粉・胞子化石は下記の如くである。

《A P—1（針葉樹花粉）》

Abies（モミ属）、Picea（トウヒ属）、Pinus（マツ属）、Tsuga sieboldii（ツガ）、Tsuga（ツガ属）、Podocarpus（マキ属）、Cryptomeria（スギ属）、Sciadopitys（コウヤマキ属）、T. C. T.（Taxaceae・イチイ科、Cupressaceae・ヒノキ科、Taxodiaceae・スギ科の3つの中の何れかであるが、分別の困難なもの）

《A P—2 (広葉樹花粉)》

Myrica (ヤマモモ属)、*Juglans* (クルミ属)、*Pterocarya* (サワグルミ属)、*Salix* (ヤナギ属)、*Alnus* (ハンノキ属)、*Betula* (カバノキ属)、*Carpinus* (クマシデ属)、*Corylus* (ハシバミ属)、*Castanea* (クリ属)、*Castanopsis* (シイノキ属)、*Fagus* (ブナ属)、*Cyclobalanopsis* (アカガシ亜属)、*Lepidobalanus* (コナラ亜属)、*Celtis* (エノキ属)、*Aphananthe* (ムクノキ属)、*Ulmus* (ニレ属)、*Zelkova* (ケヤキ属)、*Moraceae* (クワ科)、*Liquidambar* (フウ属)、*Rhus* (ウルシ属)、*Acer* (カエデ属)、*Aesculus* (トチノキ属)、*Ilex* (モチノキ属)、*Tilia* (シナノキ属)、*Elaeagnus* (グミ属)、*Araliaceae* (ウコギ科)、*Ericaceae* (ツツジ科)、*Styrax* (エゴノキ属)、*Symplocos* (ハイノキ属)、*Ligustrum* (イボタノキ属)、*Viburnum* (ガマズミ属)、*Lonicera* (スイカズラ属)、*Camellia* (ツバキ属)、*Diospyros* (コクタン属)、*Viscum* (ヤドリギ属)、*Phellodendron* (キワダ属)、*Parthenocissus* (ツタ属)、*Mallotus* (アカメガシワ属)、*Vitis* (ブドウ属)、*Cornus* (ミズキ属)、*Melia* (センダン属)、*Illicium* (シキミ属)、*Rosaceae* (バラ科)、*Rhamnaceae* (クロウメモドキ科)、*Abelia* (ツクバネウツギ属)。

《N A P (草本花粉)》

Persicaria (サナエタデ節)、*Polygonum* (タデ属)、*Caryophyllaceae* (ナデシコ科)、*Che-
nopodiaceae* (アカザ科)、*Thalictrum* (カラマツソウ属)、*Sanguisorba* (ワレモコウ属)、*Cruciferae* (アブラナ科)、*Geranium* (フウロソウ属)、*Impatiens* (ツリフネソウ属)、*Halor-
agis* (アリノトグサ属)、*Umbelliferae* (セリ科)、*Carduoideae* (キク亜科)、*Artemisia* (ヨ
モギ属)、*Cichoriaideae* (タンポポ亜科)、*Liliaceae* (ユリ科)、*Gramineae* (イネ科)、*Typha*
(ガマ属)、*Cyperaceae* (カヤツリグサ科)、*Aneilema* (イボクサ属)、*Ranunculaceae* (キ
ンボウグサ科)、*Sagittaria* (オモダカ属)、*Actinostemma* (ゴキツル属)、*Rotala* (キカシグサ
属)、*Fagopyrum* (ソバ属)、*Rumex* (スイバ属)、*Eriocaulon* (ホシクサ属)、*Plantago* (オ
オバコ属)、*Gossypium* (ワタ属)、*Portulaca* (スベリヒユ属)、*Ludwigia* (チョウジタデ属)、
Alisma (ヘラオモダカ属)、*Galium* (ヤエムグラ属)、*Leguminosae* (マメ科)、*Vicia* (ソラ
マメ属)、*Labiatae* (シソ科)、*Euphorbia* (トウダイグサ属)、*Monochoria* (ミズアオイ属)、
Macleaya (タケニグサ属)、*Nuphar* (コウホネ属)、*Potamogeton* (ヒルムシロ属)。

《F P (形態分類花粉)》

Triporate pollen (三孔型花粉)、*Tricolpate pollen* (三溝型花粉)、*Tricolporate pollen* (三
溝孔型花粉)、*Monocolpate pollen* (単溝型花粉)、*Inaperturate pollen* (無口型花粉)。

《F S (羊歯類孢子)》

Lycopodium (ヒカゲノカズラ属)、*Polypodiaceae* (ウラボシ科)、*Pteris* (イノモトソウ

属)、*Ceratopteris* (ミズワラビ属)、*Salvinia natans* (サンショウモ)、*Azolla* (アカウキクサ属)、*Monolete spore* (単条溝型孢子)、*Trilete spore* (三条溝型孢子)。

《B S (蘚類)》

Sphagnum (ミズゴケ属)。

《その他の微化石》

Pseudoschizaea

Botryococcus

Pediastrum

花粉分析

本遺跡試料は、それを時代の古い順に配列してみると、花粉・孢子構成の特徴から、山賀4—I、山賀4—II、山賀4—III、山賀4—IV、山賀4—V、山賀4—VIの6花粉帯に分帯することができる。

次に、これらの花粉帯の特徴ならびに古環境について述べる。

《山賀4—I》(1Bトレンチ No.21)

Cyclobalanopsis の優占によって特徴づけられる帯である。これに随伴して *Lepidobalanus*, *Castanopsis* などの広葉樹、*Cryptomeria* 等の針葉樹が検出された。また湿地性の *Typha* が低率ながら検出された。

従って前述の広葉樹類から成る照葉樹林が存在したと推定される。

古気候は暖温帯～暖帯に相当しよう。

《山賀4—II》(1Bトレンチ No.20～No.12)

Cyclobalanopsis の減少、*Sciadopitys* の増加によって特徴づけられる。しかし No.15 を境に *Cryptomeria*, *Castanopsis* に減少→増加の消長がみられることから、本帯は更に山賀4—II—i と山賀4—II—ii の2亜帯に細分することができる。

山賀4—II—i 亜帯は、*Cyclobalanopsis* が減少したとは言え、*Sciadopitys* と共に高率で検出され、これに随伴して *Abies*, *Cryptomeria* 等の針葉樹類や *Castanopsis*, *Lepidobalanus* 等の広葉樹類が検出される特徴がみられる。

よって、*Sciadopitys*, *Cyclobalanopsis* を主体とし、*Cryptomeria*, *Lepidobalanus*, *Castanopsis* が生育する針広混交林が形成されていたことが推定される。

しかし *Cryptomeria* と *Castanopsis* は当花粉帯上で衰退して行ったことが考えられる。この亜帯で検出された *Abies* は後背地の山地から飛来して混入したものと思われる。

山賀 4—II—ii 亜帯は、一度衰退した *Cryptomeria* と *Castanopsis* が再び増加することによって特徴づけられる。その他の点では *Cyclobalanopsis* が山賀 4—II—i と比べて減少、*Castanopsis* が増加した。

従って *Sciadopitys*, *Cryptomeria*, *Cyclobalanopsis*, *Castanopsis* 等から成る針広混交林が存在していたと推定される。

《山賀 4—II》(7 B トレンチ No.28, No.27, 12 B トレンチ No.26, No.25)

Cyclobalanopsis をはじめ *Cryptomeria*, *Castanopsis*, *Sciadopitys* が高率で検出されることが特徴である。また抽水生の *Sagittaria*, *Ceratopteris* が僅かながら検出された。

従って *Cyclobalanopsis* を主体とし、*Cryptomeria*, *Castanopsis*, *Sciadopitys* 等の生育する針広混交林が形成されていたことが推定される。また抽水生植物から沼沢地環境も共に推定される。

《山賀 4—IV》(2 B トレンチ No.30, No.29 6 B トレンチ No.24~No.22, No.10~No.6)

全般的に *Gramineae* が優占して検出されることが特徴である。

樹木花粉は山賀 4—III 帯と比較して *Cryptomeria* が *Cyclobalanopsis* を圧して多産することが特徴である。

この他、*Pinus*, *Abies*, *Sciadopitys* 等の針葉樹、*Castanopsis*, *Lepidobalanus* 等の広葉樹が随伴する。

また *Typha*, *Sagittaria*, *Ceratopteris* などの抽水植物、*Salvinia natans* 等の浮葉植物の胞子が良好に検出された。

従って *Gramineae* を優占とする草地が形成されていたことが推定される。この草地は前述の抽水植物や浮葉植物の出現から、沼沢地的環境であったと推定される。

また周辺植生は、*Cryptomeria*, *Cyclobalanopsis* を主体として、*Pinus*, *Sciadopitys*, *Castanopsis*, *Lepidobalanus* が混生する針広混交林が存在したと推定される。更に、*Tsugu* や *Abies* は山地から飛来したものと考えられる。

2 B トレンチの No.30, No.29 は、6 B トレンチの No.22, No.10, No.9 付近の構成に近似することから、試料採取層準の点からも矛盾しない構成を示す。

《山賀 4—V》(6 B トレンチ No.5, No.4)

全般的には *Gramineae* が優占し、山賀 4—IV 帯と変らないが、当花粉帯は *Lepidobalanus* が多産する点において他と区別される。これに次いで *Cyclobalanopsis*, *Sciadopitys*, *Pinus*,

Cryptomeria, *Castanopsis*等が随伴する。

また *Sagittaria*, *Ceratopteris* 等の抽水植物、*Salvinia natans* などの浮葉植物の花粉や胞子が検出された。

従って *Gramineae* を優占とする沼沢地的な草地在存在していたと考えられる。また周辺植生は *Cyclobalanopsis* を主体とする植生から *Lepidobalanus* を主体とする植生へ変化したことが窺われる。これに伴って前述の樹木類が共存して生育していたであろう。

《山賀4-VII》(6Bトレンチ No.3~No.1)

全体としては *Gramineae* が優占する植生が示されるが、No.3はこれに代って *Cruciferae* が優占する。

この他、*Typha*, *Sagittaria* *Ceratopteris* 等の抽水植物、*Salvinia natans* 等の浮葉植物の花粉や胞子が検出された。

一方樹木花粉は *Pinus*, *Cryptomeria* の針葉樹が優占となった構成を示す。

従って、No.3は *Cruciferae*、No.2・No.1では *Gramineae* を優占とする草地在存在していたと考えられる。また抽水植物や浮葉植物の出現から沼沢地環境も併せて推定される。

以上のことをまとめると、次記表「山賀(その4)試料の花粉帯と古環境」のようになる。但し同表中で1BトレンチのNo.15は含有花粉・胞子が非常に少なかったので除外してある。

参 考 文 献

- | | | |
|----------------|------|-------------------------------------------------------------------|
| 財団法人 大阪文化財センター | 1980 | 『瓜生堂 近畿自動車道天理~吹田線工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』 |
| 安田喜憲 | 1978 | 「大阪府河内平野における過去一万三千年間の植生変遷と古地理」
『第四紀研究』Vol 16, No. 4, p.212~229 |
| 前田保夫 | 1977 | 「大阪湾の自然史」
『科学』Vol 47, No. 9, p.514~523 |
| 濃尾平野第四系研究グループ | 1977 | 「濃尾平野第四系の層序と微化石分析」
『地質学論集』No.14, p.161~183 |

山 賀 (その4) 試 料 の 花 粉 帯 と 古 環 境

試料番号 (トレンチ名)	花 粉 帯	優 占 樹 木 花 粉	特 徴 樹 木 花 粉	優 占 草 本 花 粉	特 徴 草 本 花 粉	周 辺 古 植 生	草 地 古 植 生	古 気 候
6 B No.1 } No.3	山 賀 4-VI	Pinus (マツ属) Cryptomeria (スギ属)	Cyclobalanopsis (アカガシ亜属) Castanopsis (シイノキ属) Sciadopitys (コクヤマキ属) Pinus (マツ属)	Cruciferales (ただしNo.3 (アブラナ科))	Typha (ガマ属) Sagittaria (オモダカ属) Ceratopteris (ミズウラボシ属) Salvinia natans (サンショウモ) Cyperaceae (カヤツリクサ科)	針葉樹林 (二次林)	草 地 (湿地または 沼沢地)	温 帯
6 B No.4 } No.5	山 賀 4-V	Lepidobalanus (コナラ亜属)	Abies, Pinus (モミ属 マツ属) Sciadopitys (コクヤマキ属) Castanopsis (シイノキ属)	Gramineae (イネ科)				暖 温 帯
6 B No.6 } No.10 No.20, 29 6 B No.22 } No.24	山 賀 4-IV	Cryptomeria (スギ属) Cyclobalanopsis (アカガシ亜属)	Cryptomeria (スギ属) Sciadopitys (コクヤマキ属) Castanopsis (シイノキ属) Lepidobalanus (コナラ亜属)					暖 帯
12 B No.25 } No.26 7 B No.27 } No.28	山 賀 4-III	Cyclobalanopsis (アカガシ亜属)	Cryptomeria (スギ属) Sciadopitys (コクヤマキ属) Castanopsis (シイノキ属) Lepidobalanus (コナラ亜属)	Artemisia (但しNo.15のみ (ヨモギ属))				
1 B No.12 } No.14	山 賀 4-I-II-ii	Sciadopitys (コクヤマキ属)	Cryptomeria 増 (スギ属) Castanopsis 増 (シイノキ属) Cyclobalanopsis 減 (アカガシ亜属) Cyclobalanopsis (アカガシ亜属)					
1 B No.16 } No.20	山 賀 4-I-I-i							
1 B No.21	山 賀 4-I	Cyclobalanopsis (アカガシ亜属)						

図1 試料採取土層断面図 ※層位断面に記したNo.は総て試料No.であり、層位No.ではない

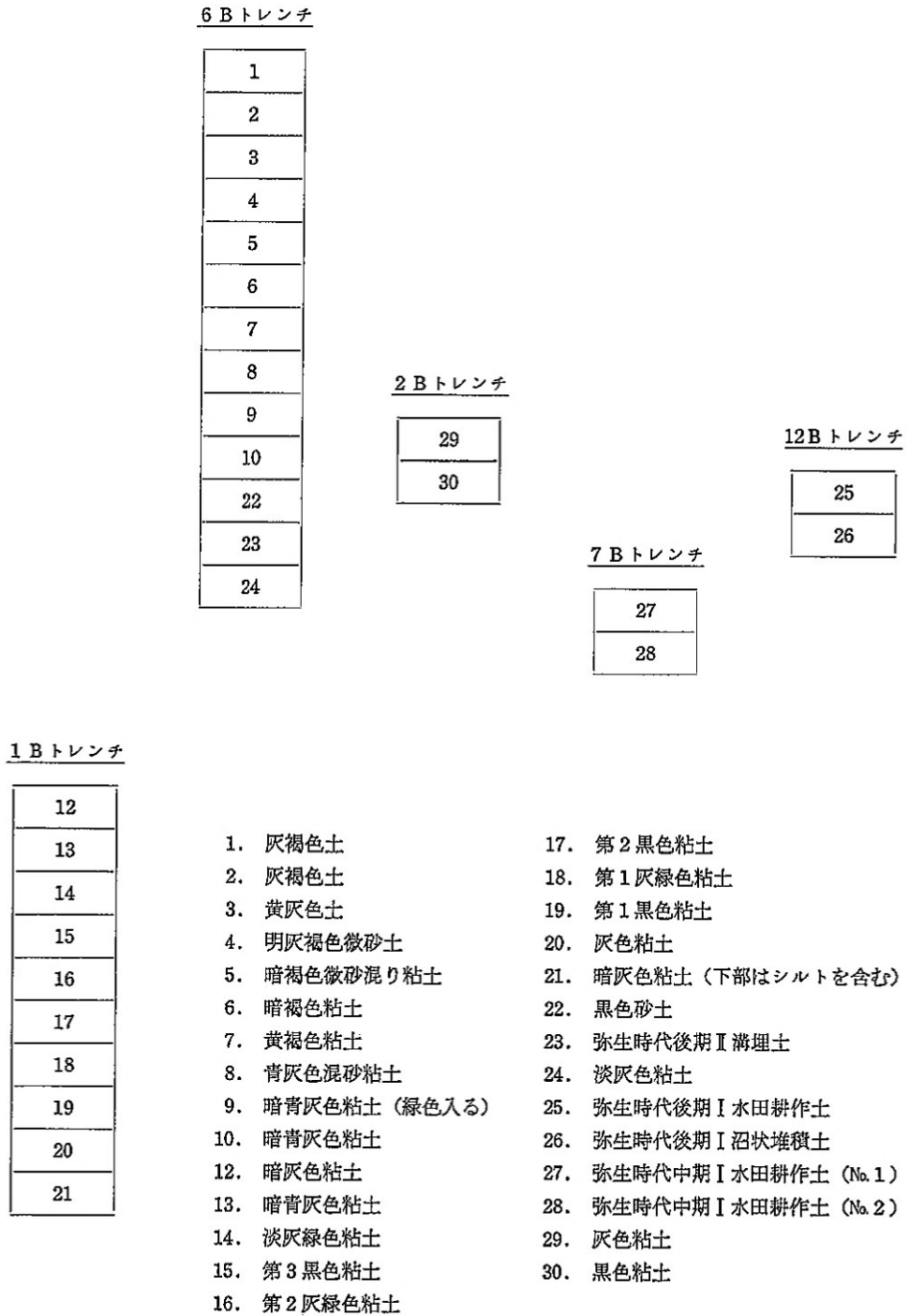
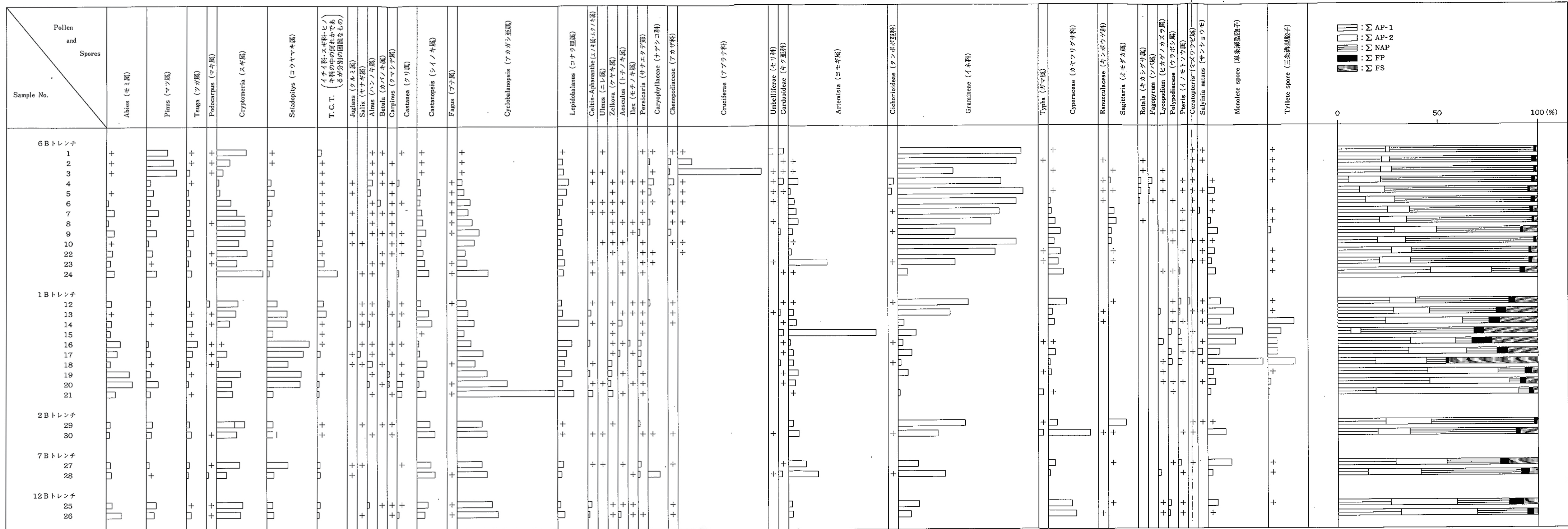




表1 山賀遺跡(その4) 試料 花粉分析結果一覧表

Pollen and Spores	Sample No.	Sample No.																																									
		500トロン						10トロン																								70トロン						120トロン					
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36						
Aster (トウモロコシ)		+	0.5	+	0.5																																						
Pilea (ヤマブキ)																																											
Typha (マコモ)		20.0	41.0	12.0	88.0	25.0	2.4	6.4	3.8	16.8	2.0	2.0	6.3	16.0	2.0	6.0	3.8	16.0	2.2	6.5	2.2	7.0	4.0	6.0	3.0	4.5	0.4	0.5	0.4	0.5	0.4	0.5	0.4	0.5	0.4	0.5	0.4	0.5					
... (remaining rows follow similar pattern)																																											

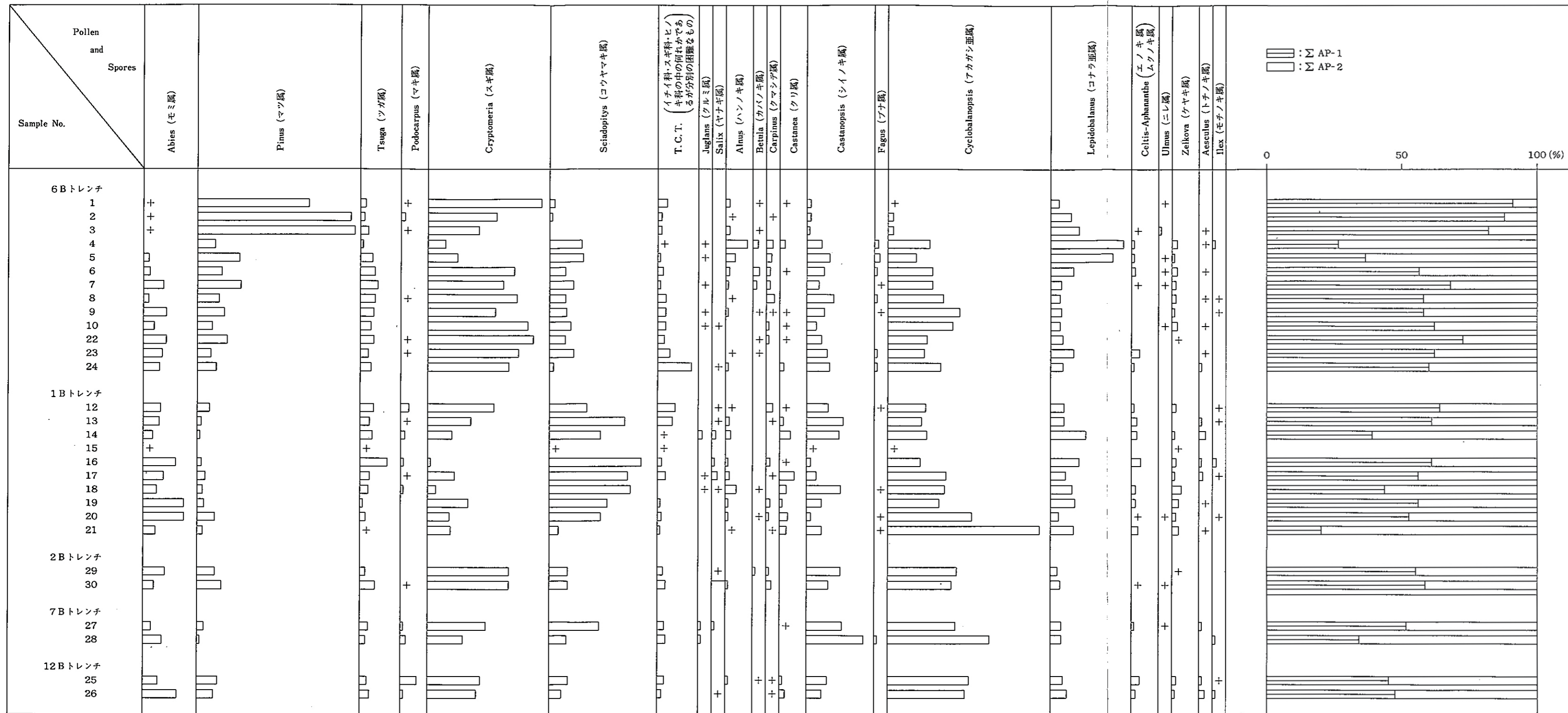
単位：% 十：200, 250, その他, 顕微鏡検査後、確認されたもの *：樹木花粉だけの%



0 10 20 30 40 50 (%)
 + : 1%未満の検出を示す。

[Pattern 1] : M AP-1
 [Pattern 2] : M AP-2
 [Pattern 3] : M NAP
 [Pattern 4] : M FP
 [Pattern 5] : M S

図2 山賀遺跡(その4) 試料 主要花粉胞子化石ダイアグラム



0 10 20 30 40 50 (%)
 + : 1%未満の検出を示す。

図3 山賀遺跡(その4) 試料 主要樹木花粉化石ダイアグラム

第2節 山賀遺跡（その4）出土の彩文土器の肩部 文様に塗彩された赤色顔料物質の化学分析

武庫川女子大学薬学部 安田博幸・奥野礼子

標記の赤色顔料物質について、筆者らの常法¹⁾に従い、ろ紙クロマトグラフ法と検出試薬による微量化学分析を行った結果、赤色顔料物質の成分を確認したので報告する。

試料の外観および分析試料の採取

試料1 山賀遺跡（その4）の弥生時代前期淡黒灰色粘土層より出土した彩文土器（第23図15）の、肩部の黒色地塗りの上に塗彩された線条文様の赤色顔料物質。その線条文様の赤色顔料約3mgを注意深く、ミクロスパーテルで削り取り分析用試料とする。

実験の部

試料検液の作製

上記採取試料1をガラス尖形管に移し、濃硝酸1滴と濃塩酸3滴を加え、加熱し、酸可溶性成分を溶解させたのち、適当量の蒸留水を加えて遠心分離器にかけ、酸不溶性成分と分離した上澄液を加熱濃縮して、ろ紙クロマトグラフ用の試料検液とする。

ろ紙クロマトグラフ法と検出試薬による呈色反応からの赤色顔料成分の確認

東洋ろ紙No.53（2cm×40cm）を使用し、ブタノール硝塩酸を展開溶媒として、試料検液と対照の鉄イオン（ Fe^{3+} ）と水銀イオン（ Hg^{2+} ）の標準液を同条件下で展開した。

展開の終わったろ紙を風乾してから縦に二分し、その一方は検出試薬として1%ジフェニルカルバジドのアルコール溶液を噴霧してからアンモニア蒸気に曝し、もう一方には検出試薬として、0.05%ジチゾンクロロホルム溶液を噴霧し、それらの際、ろ紙上に発現するそれぞれの呈色スポットの位置（ R_f 値で表現する）と色調を検した。

上記試料検液ならびに対照イオンの標準液について得られたろ紙上のスポットの R_f 値と色調は、下記の表1、表2のとおりである。

- (1) ジフェニルカルバジド・アンモニアによる検出：（ Hg^{2+} は紫色、 Fe^{3+} は紫褐色スポットとして検出される。）

変化はない。穿孔は単穿孔、放射組織は同性、単列放射組織と複合放射組織よりなる。

考 察

木製遺物の出土点数が少なく、山賀（その4）遺跡における用材の利用状況を明らかにすることは困難である。各資料における用材の利用状況を見ると次のようなことが考えられる。

広鋳の身

用材としてはカシが利用されている。

各地から出土している鋤・鋳類の用材の大部分はカシが利用されており、その作成においてカシが選択的に用いられていたことは明らかである。材の強度が強く、かつ材の入手が容易であったことなどからカシが選ばれたものと思われる。

斧柄木製品

用材としてはカヤが用いられている。

斧柄の用材としては一般にカシが用いられることが多い。これは鋤・鋳類と同様にその使用に際して材に強度が必要であったことから選ばれたものと思われる。カシ・ヤブツバキと言った材は堅く重い材であり、山賀遺跡（その4）、里田原遺跡で用いられているカヤは加工性はすぐれているが、軽くて軟らかい材であり材質的に異なる。

このように斧柄の用材に全く性質の異なる材が用いられている理由は明らかではないが、カヤのような軽く軟らかい材でも利用上問題がなかったのか、あるいは別の用途に用いられたものか今後さらに検討を要する問題と言えよう。

木製やす

用材としてはモミが利用されている。

山賀遺跡（その2、3）からも同様なやすが多数検出されている。用材は数例を除き悉てモミが用いられており、モミが選択的に利用されていることは明らかである。

モミの材質としては、割裂性が大きく、切削加工が容易であり、材は軽く軟らかいと言った特徴があげられる。このような材の性質を考えると、やすのような用途に用いられる材としては必ずしも適していないようにも考えられる。

ただ、利用上、材の強度を用いたのか、あるいは、材の弾力性を利用したものか不明であるため、どのような選択理由が重要視されたのか興味深い所である。

杓子

用材としてはカヤが用いられている。

近畿地方から出土する杓子の用材としては、クスノキ・カヤ・ヤマグワなどが用いられており、加工性のよい材を選んで用いられたものと考えられる。山賀遺跡（その4）においても同様な利用から選ばれたものと思われる。

杭

用材としてはカシが用いられている。

弥生時代における杭の用材の一般的な利用傾向としては、手近にあった樹木が用いられることが多い。山賀遺跡（その4）においてもこのようなことからカシが用いられたものと思われる。

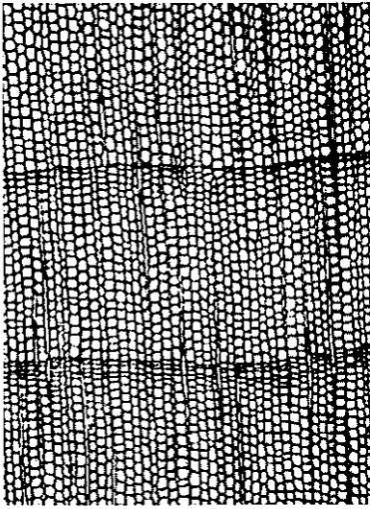
このような用材状況は府下の遺跡から出土する木製遺物の用材の利用状況とあまり変わることはない。ただ、斧柄木製品がカヤを用いて作られており、これらの用材を用いた資料は、西岩田・瓜生堂と言った隣接した遺跡でのみ発見されている点に何らかの関連があるのかどうかは今後検討を要することと思われる。

斧柄の用材

時代	遺跡	時期	府県	針葉樹 イチイ科 Torreya属	広葉樹	
					ブナ科 Quercus属	ツバキ科 Camellia属
弥生時代	篠東納所	中前	愛知		カシ(1)	ヤブツバキ(1)
		中	三重		カシ(1)	
	山賀Ⅳ	中	大阪	カヤ(1)		
	恩智	中	大阪		カシ(1)	
	池上	中～後	大阪		カシ(4)	
里田原	中	長崎	カヤ(1)	カシ(1)		

山賀遺跡（その4）出土木製品の樹種

No.	遺物名	整理番号	樹種
①	斧柄木製品	W. 6	カヤ
②	杭	W. 1	カシ
③	広鋏の身	W. 7	カシ
④	杓子	W. 2	カヤ
⑤	木製やす	W. 3	モミ

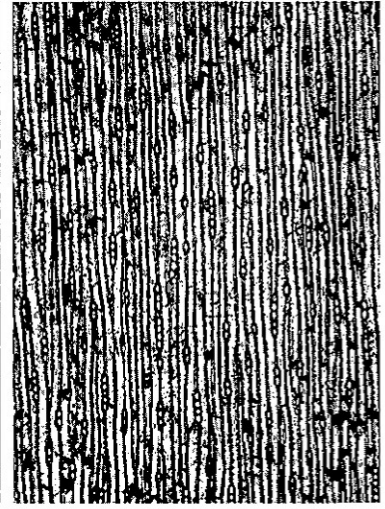


1. カヤ

C-50×

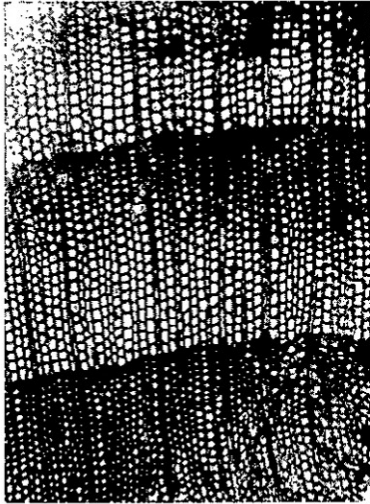


R-200×



T-50×

杓子柄 (YMG 4-2Bトレ)



2. モミ

C-50×

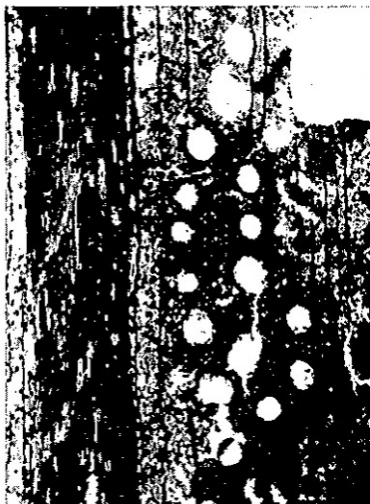


R-200×



T-50×

木製ヤス (YMG 4C-2トレ)



3. カシ

C-30×



R-100×



T-50×

広楸の身 (YMG 2Bトレ)

第7章 ま と め

ここに概要を報告した山賀遺跡（その4）調査区の発掘調査は、日本道路公団によって計画、実施されている近畿自動車道天理～吹田線の建設に伴う事前の調査であった。現地における発掘調査と、これと平行して行なった遺物の基本的な整理作業、並びに本書作製のための総括的な整理作業を含めると、約28ヶ月の長きにわたって実施したものである。調査で得た史料も遺物もともに膨大であり、総てを完全に報告しきれた訳ではないが、今後、本報告を基礎として、遺物整理を実施し、調査報告書を刊行していく所存である。従って、以下当該調査区の各遺構面毎に、その状況を記し、まとめとしたい。

縄文時代

当該調査では、縄文時代晩期相当層は、遺物によって確認されたもので2層存在する。1つは第2黒色バンド層と呼んでいる黒色粘土層をベースとするもので、滋賀里Ⅱ式土器、及び宮滝式土器を含む自然河川が検出された。この内、宮滝式土器片は激しくローリングを受けており、上流域からの流入遺物と判断されるが、滋賀里Ⅱ式のものには、ローリングの痕は認められない。従って、時期的には晩期と理解している。この河川底面には、人間及び鹿の足跡が明瞭に残っており、河内平野中央部がすでにこの時期から、人間の活動の場となっていたことがうかがえる。もう1つは、第3黒色バンド層と呼んでいる黒色粘土層をベースとするもので、滋賀里Ⅲ式土器を含む自然河川を検出した。この自然河川の底部にも、人間及び鹿の足跡が多数認められ、下層と同様、人間が平野部に活動していたことが判明した。これらの事実に基づいて、当時を概観すれば、縄文海進によって大きな入江を形成していた河内湾は、縄文時代晩期前半（滋賀里Ⅱ式）の段階で、海水準の下降と、それに伴う汀線の後退により、干潟の拡大もしくは陸地化が進行し、河内湾沿岸部への人間の活動が始まった時期であろう。この様に一旦後退した汀線は、再び滋賀里Ⅲ式期には上昇し、山賀遺跡の地も水面下へ没した様である。そして滋賀里Ⅳ式期には、また汀線が後退し、干潟化もしくは陸化した様である。この様に、縄文時代晩期に始まる自然環境の変化の時期を具体的に遺物から確認できたことには、大きな意義を認める。また、汀線の前進・後退が、一度ならず、数次にわたって繰り返されたことが明らかとなったことから、縄文海退と一言でいっていた自然環境の変化が、実はもっと複雑なものであり、同様の変化が、その後弥生時代後期まで続いていくものと考えている。

弥生時代

弥生時代の遺構面は、前期1面、中期2面、後期2面の計5面を確認した。

前期の遺構としては、8条の大溝のみである。この8条の大溝は、山賀（その2）、（その3）

各調査区で検出された環濠状遺構と規模や形態、埋土等全く同一であり、集落外辺に掘られたものと理解している。この環濠状遺構の性格については、明確な結論を得ていないが、埋土がほぼ粘土層であることや、底面が平坦に成形された様子のないことから、集落外縁辺部の湿地帯の中へ排水の目的で掘られた可能性が強いものと考えられ、いわゆる一般的な環濠のように、集落を取り囲み、防御的な意味をもそなえ持ったものというより、規模こそ小さいが、輪中の水災からの防衛や、集落内の排水に主眼をもつものであろう。

中期の遺構面は2面存在した。下層（中期遺構面Ⅰ）は上述の前期遺構面直上に検出されるものであり、時期的には畿内第Ⅱ様式に当る。検出した遺構は水田が中心となり、一部縄文時代と同様、鹿や人間の足跡が河川底部に認められた。特に水田経営に関する諸施設とその構造、及び立地条件については、第5章で詳述したが、中期初頭の水田経営や水の管理については、不明な点が多かったが、今回の調査結果によって、その一端を知ることが出来た。さらに、水田土壌については、湿地より、比較的乾燥状態にある部分を選んで水田としている点、水の管理の面から見ても、すでに水田経営のレベルは、高度に発達したものであった様である。

また、当該遺構面と前期新段階遺構面の間は、間層をも挟むことなく密接しており、その後の中期遺構面上層（中期遺構面Ⅱ）との間には、砂及びシルトの間層が厚く堆積していることから、瓜生堂遺跡と同様、中期初頭（畿内第Ⅱ様式）までは前期に開始された集落が存続し、中期中葉直前に自然環境の激変があったことを再確認した。

中期遺構面上層（中期遺構面Ⅱ）は、シルト質粘土をベースとする平坦面に人間の足跡を残すのみである。時期的には、わずかに検出された土器片から、畿内第Ⅲ～Ⅳ様式の時期が与えられる。同時期については、北側に位置する山賀（その3）調査区南半部において、木棺墓や甕棺墓が散見されると同時に、北半部では溝や井戸、土壇といった居住空間を検出している。また、さらに北に位置する山賀（その2）（その1）調査区では水田面を確認しており、山賀遺跡全体として見れば、居住域、墓域、生産域のセットが確認されたことになる。ただし、集落を構成する3大要素が検出されたといっても、居住域及び墓域は、その一端をのぞかせたのみであり、集落の規模や構造、さらに社会構成といった点については、今後に残された課題である。

後期遺構面は、上述した中期遺構面Ⅱの上に砂やシルト層が1m前後堆積した後、湿地化したと考えている黒色粘土層やシルト質粘土の上面に第Ⅰ遺構面が検出される。ここでも、河内平野の変遷の中で確認してきた中期末葉の自然環境の変化とまったく一致することが再確認された。

遺構としては、畦畔を伴う水田面のみである。水田構造等注目に値するものは認められない。

後期遺構面Ⅱにおける溝群は、埋土中に完形品に近い土器群を多量に含んでおり、その性格は、水田に伴う溝とは、若干異なる様であるが、周辺に居住空間の存在を考えさせる遺構も検出されなかったため、河内平野低湿地部における後期集落の確認がいまだなされていない時点での貴重な資料とはなるが、その性格や内容は不明である。

古墳時代以降

古墳時代以降の遺構面としては、古墳時代後期、平安末～中世、江戸以降の3面が存在する。いずれも、(古墳時代後期のものは自然河川であるが)、それ以外は、総て水田関係の遺構となる。河内平野における大部分の遺跡が、古墳時代後期以降、水田化されている傾向と同様に、山賀遺跡も(その2)調査区で検出した山賀1号墳及び掘立柱建物群以外は水田化されている。

河内平野における条里制の施行の時期の問題や、それ以前の水田経営、中世以降～近代までの農業のあり方等は、今後に残された課題としておきたい。

土器・土製品一覽表

※ 弥生時代後期Ⅰ薄1・2、古墳時代後期自然河川Ⅰ
色調は、(財)日本色彩研究所「新版標準土色調」に依った。
※ 単位はcm

No	種類	器種	法量	形態の特徴	成形・調整	胎土	色調	焼成	備考
縄文時代晩期 自然河川4出土遺物									
1	縄文土器	深鉢	—	口縁部はゆるやかに外反する。段は1段	体部外面の段以外は巻貝糸痕。口縁部内外面はナデ。	石英・長石・角閃石・雲母粒を含む。	暗茶褐色	硬	Cトレンチ 滋賀里Ⅰ式
2	縄文土器	鉢	口径：39.9④	口縁を2条有し、口縁部に半楕円形の突起をもつ。突部には巻貝で押さえたあと。端面は、孔味をもつ。	内外面ともナデ。全体に磨滅して丸くなる。	石英・長石粒を含む。	淡黄褐色	硬	Cトレンチ 宮滝式
3	縄文土器	深鉢		口縁部はゆるやかに外反する。段は2段	体部外面の段以下は巻貝でナデた糸痕。口縁部内外面はナデ。	石英・長石・角閃石・雲母粒を含む。	暗茶褐色	硬	Cトレンチ 滋賀里Ⅰ式
第3黒色粘土層中出土遺物									
4	縄文土器	甕	口径：33.2④ 器高：39.8④ 胴部最大径：32.2④	口縁部直下に突起が1条。段は2段。口縁部は直線状に伸び、端部近くで、わずかに外反する。	口縁部外面は横方向の糸痕調整。段の側面は横方向のヘラ削りの糸痕調整。段以下外面は斜方向の削り状糸痕に斜方向のヘラ削りの面上半は糸痕後ナデ。下半は横方向のヘラ削りナデ。	石英・長石・角閃石・雲母粒を含む。	暗茶褐色	硬	7Bトレンチ 滋賀里Ⅳ式
第3黒色粘土層上面出土遺物									
5	弥生土器	壺	口径：30.0④ 器高：42.5④ 底径：11.6④ 頸部最大径：14.8④ 胴部最大径：37.0④	やや扁平な球形胴に大きく外反する口縁部。刻目突起を頸部と体部上半に各々5帯貼り付けている。	体部外面及び口縁部内面は横方向のヘラミミガキ。口縁部は横ナデ。体部外面はナデ。	石英・長石・雲母・角閃石・雲母粒を含む。	にぶい澄	硬	10Bトレンチ 体部外面 下位に黒斑
暗青灰色粘土層出土遺物									
6	弥生土器	壺	口径：31.2④	大きく外反する口縁部。口縁部の丸線の上下にヘラによる刻み目。	口縁部外面は刷毛目。内面は横方向のナデ。	石英・長石・雲母・角閃石粒を含む。	暗灰褐色	硬	Aトレンチ
7	弥生土器	壺	口径：16.0④	ゆるやかに外反する口縁部。頸部に削り出し突起。	口縁部内外面ともナデ後、横方向の粗いヘラミミガキ。	石英粒を含む。	淡茶褐色	硬	0Bトレンチ

8	弥生土器	甕	底径：7.6④	底部は直線状。	内外面ともナデ。	石英・長石・角閃石・雲母粒を含む。	暗褐色	硬	Bトレンチ
9	弥生土器	鉢	口径：39.6④	口縁部が短く外反する。貼り付け突帯が体部上半に1帯。	口縁部内外面は横ナデ。体部上半はハケ後ナデ、下半は斜方向のハケ。内面はナデ。成形時の指圧痕。	石英・長石・雲母粒を含む。	淡黄褐色	硬	Bトレンチ
10	弥生土器	甕	—	口縁端部が外反する。頸部に沈線が1条。	外面はナデ。内面はハケ後ナデ。	石英・長石・雲母粒を含む。	灰白色	硬	Bトレンチ 口縁外面にススが附着。
11	弥生土器	壺	—	体部破片・削り出し突帯。	内面はハケ状のナデを施した後粗いヘラミミガキ。	石英・長石・角閃石・雲母粒を含む。	灰褐色	硬	Bトレンチ
12	弥生土器	壺	—	体部破片・竹管刺突文とその上下に刻窪のため不明。	不明。	長石・石英・雲母粒を含む。	淡黄灰白色	軟	Bトレンチ
13	弥生土器	壺	—	体部中位の破片。削り出し突帯上沈線1条以上。	外面は斜方向のナデ後ヘラミミガキ、内面は横方向のナデ。	石英・長石・雲母粒を含む。	淡灰褐色	硬	Bトレンチ
14	土製品	土製円板	6.7×6.8	土器の再利用。周辺を打ち欠いて不整な円形に仕上げる。	外面はハケ、内面は磨滅のため不明。	石英・角閃石粒を含む。	暗褐色	硬	0 Bトレンチ 内外面に黒色物質塗布。
淡黒灰色粘土層出土遺物									
15	弥生土器	壺	胴部最大径：39.6④	球形の肩の張る体部。肩部下に2条の沈線がめぐる。外面沈線の上下にはベンガラで文様を施す。	体部外面上位は斜め方向のヘラミミガキ、中位は横方向のヘラミミガキ、下位は上位が横方向のヘラミミガキ、中位はナデのち粗いヘラミミガキ。	石英・長石・角閃石・雲母粒を含む。	淡黄褐色	硬	Bトレンチ
弥生時代前期溝4出土土器									
16	弥生土器	壺	底径：9.0④	肉厚の平底の底部。	内外面ともナデ。	石英・長石・雲母・角閃石粒を含む。	暗灰黄色	硬	Bトレンチ 外面にススが附着。
弥生時代前期溝5出土土器									
17	弥生土器	壺	底径：8.5 残存高：25.9 頸部径：12.6 胴部最大径：28.3	やや扁平な体部に外反する口縁部を2条に削り出し突帯上沈線1条が、ほとんどこさされる。	外面・口縁部に横及び斜方向のヘラミミガキ、体部上半は縦方向のヘラミミガキ、下半は横及び斜方向のヘラミミガキ、内面は縦及び斜方向のヘラミミガキ。底部はナデ。	石英・角閃石・金雲母粒を含む。	暗褐色	硬	0 Bトレンチ 体部外面下位に黒斑。内外面とも黒色物質塗布

No.	種類	器種	法量	形態の特徵	成形・調整	胎土	色調	焼成	備考
18	弥生土器	壺	口径：16.8 器高：28.6 底径：9.1 胴部最大径：28.9	扁平な球形胴に端部で大きく外反する口縁をもつ。頸部に4条、体部上半に2条の削り出し突帯。体部中央部の突帯下にヘラ描きの重弧文様の2個1組の模様がある。	口縁部内外面及び体部外面は横及び斜方向のヘラミミガキ。頸部外面は横方向のヘラミミガキ。体部内面は横及び斜方向のヘラミミガキ。	石英・長石・角閃石・雲母粒を含む。	黒褐色	硬	0 B トレンチ 底部外面に黒斑。 外面に黒色物質を塗布。口縁部に紐孔一對
弥生時代前期 自然河川・流水堆積出土遺物									
19	縄文土器	甕	口径：15.6⑩	口縁部は内傾する。口縁端部下に突帯が1条	口縁部外面は横方向のナデ。内面は横方向のハケ状のナデ。指圧痕が残る。	長石・石英・雲母粒を含む。	灰黄褐色	硬	5 B トレンチ スズが付着。船橋式か
20	縄文土器	甕	口径：32.6⑩ 器高：39.5⑩ 底径：8.6⑩	体部中位からほぼまっすぐに上がり、口縁部近くでやや内傾気味になり、口縁部下に突帯が1条。	外面口縁部から肩部はナデ、肩部から体部上半は斜め及び横方向の削り出し突帯。体部下半は縦方向のヘラミミガキ。体部は横方向のヘラミミガキ。内面は上半は横方向のナデ、中位は横方向のヘラミミガキ、下位から底部は削り出し突帯。	石英・長石・角閃石・雲母粒を含む。	灰褐色	硬	7 B トレンチ 突帯下に補修孔(?) 滋賀里IV式
21	弥生土器	壺	口径：14.0⑩	口縁部は外反する。	口縁部内外面ナデ。	石英・長石・雲母粒を含む。	灰色	硬	B トレンチ
22	弥生土器	壺	—	削り出し突帯が1帯。	内外面ともナデ。	石英・長石・雲母粒を含む。	黄灰色	硬	B トレンチ
23	弥生土器	壺	—	削り出し突帯上沈線1条。	内外面ともナデ。	石英・長石粒を含む。	淡褐色	軟	B トレンチ
24	弥生土器	鉢	—	口縁部が外反する。長さ4cmの把手を貼り付ける。	内外面ともナデ。	石英・長石粒を含む。	淡灰黄色	硬	3 B トレンチ
25	弥生土器	壺	底径：7.2⑩	底側面が窪む。	底部外面・内面に指圧痕	石英・長石粒を含む。	淡灰黄色	硬	3 B トレンチ
26	弥生土器	甕	口径：24.6⑩	口縁部が外反する。端部直下に沈線1条。	外面口縁部はナデ、体部は斜め及び横方向のハケ。内面は、斜め方向のナデ。	石英・長石・雲母粒を含む。	灰黄色	硬	B トレンチ
弥生時代中期 I 面出土遺物									
27	弥生土器	甕	底径：10.0⑩	底部からゆるやかにひろく。	底部内外面ともナデ。内面には指圧痕が残る。	石英・長石・雲母粒を含む。	灰白色	硬	5 B トレンチ
弥生時代中期 I 流水堆積(水田面埋土)出土遺物									

28	縄文土器	甕	—	口縁部外面に断面三角形の装帯を貼り付ける。端部には刻目が施され、形はO字形を呈し、狭く小さい。	全体に磨減が著しい。内面は縦方向石英・長石・角閃石・雲母茶褐色の稜痕。突帯下部に貼付時の棒先状粒を含む。	石英・長石・角閃石・雲母茶褐色	硬	0 B トレンチ 長原式	
29	弥生土器	壺	口径：18.2②	口縁部がゆるやかに外反する。	外面・口縁部はナデ、口縁部はナラ後ヘラミガキ。内面はナデ後ヘラミガキ。	石英・長石・角閃石・雲母褐色	硬	6 B トレンチ	
30	弥生土器	無頸甕	口径：17.0④	口縁部は、ほぼ直立気味に立ち上がる。	内外面ともナデ。指圧痕が残る。	石英・石英・雲母粒を含む暗灰褐色	軟	5 B トレンチ	
31	弥生土器	壺	口径：23.6④	口縁部が大きく外反する。	口縁部周辺は横方向のナデ。口縁部下半に指圧痕が残る。	石英・長石・角閃石を含む灰茶褐色	硬	5 B トレンチ	
32	弥生土器	壺	頸部径：12.1④	肩部からほぼまっすぐ頸部が立ちあがる。	頸部外面はナデ、後6条1単位の直線文をめぐらす。内面はナデ。内外面とも指圧痕が残る。	石英・長石粒を含む茶褐色	硬	5 B トレンチ	
33	弥生土器	壺	口径：21.6④	口縁部が大きく外反し、端部は厚い。	外面は、縦方向のナデ。内面は、横方向のナデ。口縁部にヘラによる刻み目を施す。	石英・長石・雲母粒を含む灰茶褐色	軟	6 B トレンチ	
34	弥生土器	甕	底径：5.8④	底部はわずかに上げ底。	外面体部下半は、下から上へのナデ。底部は、横方向のナデ。内面はナデ。底部内外面共指圧痕が残る。	石英・長石・雲母粒を含む暗灰褐色	硬	5 B トレンチ	
35	弥生土器	壺	底径：4.6	底部はわずかに上げ底。	外面は、下から上へのナデ。内面はナデ。内面に指圧痕が残る。	長石・石英・雲母粒を含む淡褐色	硬	6 B トレンチ	
36	弥生土器	鉢	口径：30.4④	口縁部は肥厚気味に外反する。体部と口縁部の境にヘラ描きのび線を1条施す。口縁部にヘラによる刻み目を施す。	口縁部外面はナデ。口縁部下位には指圧痕が残り、内面は下から上方のナデ。	石英・長石・角閃石粒を含む褐色	軟	B トレンチ 外面にススが付着。	
37	弥生土器	甕	底径：8.2④	底部は比較的短い。中央部がやや窪む。	内外面ともナデ。底部に粘土の巻き上げ痕が残る。内外面共指圧痕が残る。	長石・石英・雲母粒を含む暗灰褐色	軟	5 B トレンチ	
弥生時代後期 I 水田面畦畔下出土遺物									
38	弥生土器	壺	底径：6.6	底部は上げ底。	内外面ともナデ。	長石・石英粒を含む。灰色	硬	12 B トレンチ	
39	弥生土器	甕	—	口縁部が短く外反し肥厚する。	内外面ともヨコナデ。頸部との境にヘラで刻み目を施す。	石英・雲母粒を含む。淡灰褐色	硬	12 B トレンチ 外面にススが付着。	

No.	種類	器種	法量	形態の特徴	成形・調整	胎土	色調	焼成	備考
弥生時代後期 I 流水堆積出土遺物									
40	弥生土器	甕	底径：5.0	底部がやや窪む。	内外面ともナデ。	石英・長石・雲母粒を含む。	灰黄褐色	硬	Bトレンチ外面にススが付着。
41	弥生土器	甕	底径：7.2④	底側面がやや外へ張る。	外面はハケ後ナデ、内面はナデ。	石英・長石・雲母粒を含む。	灰褐色	硬	Bトレンチ
42	弥生土器	甕	口径：14.3③	口縁部がくの字形に外反し、端部は丸く終る。	体部外面はナデ、口縁部は内外面ともヨコナデ。体部内面はハケの後ナデ。	石英・長石・雲母粒を含む。	灰褐色	軟	Bトレンチ
43	弥生土器	壺	胴部最大径：30.6⑤	やや扁平な体部を持つ。	外面は横及び斜め方向のヘラミガキ、内面は磨減の為不明。	石英・長石粒を含む。	淡黄褐色	硬	Bトレンチ
弥生時代後期 I 溝 1 出土遺物									
44	弥生土器	甕	口径：13.6⑥	ゆるやかに外反し、端部は外方向に丸く肥厚する。	内外面ともヨコナデ。	石英・長石・雲母粒を含む。	灰黄褐色 10Y R 7/2	硬	Bトレンチ外面にスス付着。
45	弥生土器	甕	口径：16.8⑥	直線的に伸び、途中で角度を変え、「はねあげ口縁」を呈する。	内外面ともヨコナデ。	石英・長石・チャート・雲母粒を含む。	にがい黄橙 10Y R 7/2	やや軟	Bトレンチ外面にスス付着。
46	弥生土器	甕	口径：12.8⑥ 胴部最大径：14.0⑥	口縁部は体部より屈曲し直線気味に伸びる。端部は外傾する。端面を呈し、凹線がめぐる。体部は球形。	口縁部は内外面共ヨコナデ。体部外面は左下がりのタタキ(断面方形で3凹/cm)。内面はナデ。	石英・長石・チャート・雲母粒を含む。	にがい黄橙 10Y R 7/2	硬	Bトレンチ外面にスス付着。外面は肩部を除き、スス付着。
47	弥生土器	甕	底径：3.8⑥	体部から連続して突出する。体部は球形を呈する。	体部外面は左下がりのタタキ、(断面方形で3凹/cm)。内面はナデ。底側面は面取り風のナデ。	石英・長石・チャート・雲母粒を含む。	明黄褐 10Y R 7/6	硬	Bトレンチ外面底部から全表面スス付着。
48	弥生土器	鉢	口径：8.0 底径：4.1 器高：5.4	口縁部は、丸く外方向に肥厚する。体部は、上げ底の底部から内彎気味に伸びる。	口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は左下がりのタタキ、(断面方形で3凹/cm)。内面はナデ。底側面は面取り風のナデ。	石英・長石・雲母粒を含む。	灰色 2.5Y 7/2	硬	Bトレンチ
49	弥生土器	甕	底径：4.2	体部より連続して突出する平底で、底中央が少し窪む。	外面は左下がりのタタキ、底面はナデ(単位は不明)。内面は、クモの巣の果目状ハケ目。	石英・長石・チャート・雲母粒を含む。	黄赤 2.5Y 7/3	硬	Bトレンチ内面はこげつき。
50	弥生土器	甕	底径：3.4	体部から連続して突出する平底。底中央が少し窪む。	外面は左下がりのタタキ、底面はナデ(断面方形で3凹/cm)。凹線は充填法。	石英・長石・角閃石・雲母粒を含む。	にがい黄 7.5Y R 7/4	硬	Bトレンチ

51	弥生土器	甍	底径：4.7	突出する平底。端部が少し外方向に拡張する。	外面は左下がりのタタキ、底部はナデ(断面三角形で3凹/cm)。内面はクモの巣状ハケ目。底部は凹版すえおき法による。	石英・長石・チャート・雲母粒を含む。	淡黄 2.5Y%	硬	Bトレンチ
52	弥生土器	甍	底径：3.2	底部中央が少し窪む。	外面は左下がりの叩き後ナデ。内面はナデ。内面に指圧痕が残る。	長石・石英・チャート粒を含む。	赤褐色	硬	Bトレンチ 体部下位に黒斑。
53	弥生土器	甍	底径：3.5	突出度の低い平底。	外面は左下がりのタタキ、底部はナデ(断面方形で3凹/cm)。底部は凹版すえおき法による。	石英・長石・雲母粒を含む。	にぶい黄橙 10Y R $\frac{7}{4}$	やや軟	Bトレンチ
54	弥生土器	高杯	脚部上部径：3.2 3方透し。	脚柱上部は、やや閉き気味で短い。3方透し。	脚柱部外面は縦方向のヘラミミガキ。内面は、しぼり痕が残る。	石英・長石・チャート・雲母粒を含む。	にぶい黄 2.5Y%	やや軟	Bトレンチ
55	弥生土器	高杯	脚部上部径：3.0	脚柱部は、直立気味で短い。3方透し。	外面は縦方向のヘラミミガキ。内面はしぼり痕が残る。底部は凹版充填法による。	石英・長石・雲母粒を含む。	黄橙 10Y R%	やや軟	Bトレンチ
56	弥生土器	高杯	底径：10.1⑩	脚柱部は「八」の字形に開く。端部には1条の凹線が走る。4方透し孔。	外面は不閉。内面はナデ。	石英・長石・雲母粒を含む。	淡黄 2.5Y%	やや軟	Bトレンチ
57	弥生土器	高杯	底径：14.6④	脚部下半は大きく閉き、端部は丸味をもつ。	外面は斜方向のハケ後ヘラミミガキ。内面は斜方向のハケ。	長石・石英・チャート・雲母粒を含む。	淡黄 2.5Y $\frac{1}{4}$	やや軟	Bトレンチ
弥生時代後期Ⅱ 溝2出土遺物									
58	弥生土器	甍	口径：12.1④	口縁部は体部よりゆるやかに外反す。端部は丸く終る。体部はなで肩。	口縁部は内外ともヨコナデ。体部は平行タタキ(断面方形4凹/cm)。	石英・長石粒を含む。	淡黄 5Y%	硬	Bトレンチ 外面にススス付着。
59	弥生土器	甍	口径：12.1④	口縁部は体部よりゆるやかに外反し、端部はやや上方に伸び丸く終る。	口縁部は内外ともヨコナデ。外面は指圧痕が残る。	石英・長石・チャート粒を含む。	橙 7.5Y R $\frac{1}{6}$	硬	Bトレンチ 口縁部外面にススス付着。
60	弥生土器	甍	口径：8.8⑥	口縁部は外反し、端部近くでさらに開く。端部は丸く終る。	内外ともヨコナデ。	石英・長石・雲母粒を含む。	にぶい黄橙 10Y R $\frac{7}{6}$	硬	Bトレンチ 外面にススス付着。
61	弥生土器	甍	口径：13.9⑥	口縁部は外反し、端部がさらに開く。	口縁部内外はヨコナデ。外面は斜方向のハケ。内面は縦方向のハケ。	石英・長石・雲母粒を含む。	黄橙 2.5Y R%	硬	Bトレンチ ススス付着。

No	種類	器種	法量	形態の特徴	成形・調整	胎土	色調	焼成	備考
62	弥生土器	甕	口径：10.7⑩	口縁部は外反し、中位でやや肥厚する。	内外面ともヨコナデ。	石英・長石・雲母粒を含む。	橙 2.5Y R ½	硬	Bトレンチ 外面にスス付着。
63	弥生土器	甕	口径：16.8⑩	口縁部は体部より屈曲し外反する。端部は丸く終わる。	口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は左下がりのタタキ(断面方形3回/cm)。内面はヨコナデ。	石英・長石・雲母粒を含む。	灰黄 2.5Y R ½	やや軟	Bトレンチ 外面にスス付着。
64	弥生土器	甕	口径：12.8⑩	口縁部は外反し、端部近くでやや立ち上がり気味になる。	内外面ともヨコナデ。	石英・長石・チャート・雲母粒を含む。	明褐 5Y R ½	硬	Bトレンチ スス付着。
65	弥生土器	甕	口径：11.2⑩	口縁部近くで大きく外反する。	内外面ともハケ状のヨコナデ。	石英・長石・雲母粒を含む。	にぶい黄橙 10Y R ½	硬	Bトレンチ スス付着。
66	弥生土器	甕	口径：11.1⑩	口縁部は大きく外反し、端部は丸く終る。	口縁部端部及び内面はヨコナデ。口縁下半面は、斜め方向のハケ。	石英・長石・雲母粒を含む。	灰褐 5Y R ½	硬	Bトレンチ
67	弥生土器	甕	口径：15.3⑩ 頸部径：13.3⑩	口縁部は体部よりゆるやかに外反し、端部は丸く終る。体部は肩の張りがあり大きい。	口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は左下がりのタタキ(単位は不明)。内面はナデ。	石英・長石・雲母粒を含む。	にぶい赤褐 5Y R ½	硬	Bトレンチ 外面にスス付着。
68	弥生土器	甕	口径：15.4⑩	口縁部は体部よりゆるやかに外反し、端部は丸く終る。	口縁部内面は縦ハケ後ヨコナデ。外面はヨコナデ。	石英・長石・雲母粒を含む。	にぶい橙 5Y R ½	硬	Bトレンチ
69	弥生土器	甕	口径：14.5⑩	口縁部は外反し、端部は丸く終る。	口縁部外面はヨコナデ。内面はヨコナデ後指ナデ。	石英・長石・雲母粒を含む。	にぶい黄橙 10Y R ½	硬	Bトレンチ 外面にスス付着。
70	弥生土器	甕	口径：17.3⑩	口縁部は外反し、端部は丸く終る。	口縁部端部は内外面ともヨコナデ。口縁部外面は横方向のハケ。	石英・長石・チャート・雲母粒を含む。	にぶい橙 5Y R ½	硬	Bトレンチ スス付着。
71	弥生土器	甕	口径：16.8⑩	口縁部は大きく外反する。	口縁部内外面ともヨコナデ。	長石・石英・雲母粒を含む。	にぶい黄橙 10Y R ½	硬	Bトレンチ スス付着。
72	弥生土器	甕	口径：16.6⑩	口縁部は大きく外反し、端部は丸く終る。	口縁部内外面ともハケ状のヨコナデ。	石英・長石・雲母粒を含む。	黄橙 2.5Y R ½	硬	Bトレンチ
73	弥生土器	甕	口径：17.9⑩ 頸部径：17.2⑩ 胴部最大径：21.9⑩	口縁部は体部より屈曲外反し、伸び、端部は丸く終る。体部は球形。	口縁部は内外面ともヨコナデ。胴部には指圧痕が残る。体部外面は左下がりのタタキ(断面方形3回/cm)。内面はハケ目調整(7条/cm)。	石英・長石・雲母粒を含む。	にぶい橙 7.5Y R ½	硬	Bトレンチ
74	弥生土器	甕	口径：17.8⑩ 頸部径：15.3⑩	口縁部は体部より屈曲し、外反する。端部は丸く終る。	口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は左下がりのタタキ(断面方形4回/cm)。内面はヨコナデ。	石英・長石・チャート・赤鉄粒を含む。	にぶい黄橙 10Y R ½	硬	Bトレンチ

75	弥生土器	甗	頸部径：12.2②	肩部は張りが多い。	頸部外面はヨコナデの後指圧痕、肩部からは頸部ヨコナデの後指圧痕、肩部からは頸部上半はヨコ及び斜め方向のハケ状のナナデ、体部中位は縦方向のナナデ。	石英・長石・チャート粒を含む。	にぶい黄澄 10Y L 9%	硬	B トレンチ
76	弥生土器	甗	頸部径：17.9②	体部は球形。	体部外面はタタキ(2凹/cm)。内面は斜方向のハケ(10条/cm)。	石英・長石粒を含む。	にぶい橙 5 Y R 7%	硬	B トレンチ
77	弥生土器	甗	口径：18.9頸部径：16.0④ 胴部最大径：20.4④	口径部は体部より屈曲外反し、伸び、端部は丸く終る。体部は長形。	口径部は内外面ともヨコナデ後内面にハケ目調整(10条/cm)。体部外面は左下がりのタタキ(2~3凹/cm)。内面はナデ。	石英・長石粒を含む。	にぶい橙 7.5 Y R 7%	硬	B トレンチ
78	弥生土器	甗	底径：4.3	球形の体部に突出する底部がつく。底中央が少し窪む。	分割成形痕が残存部の中位に。体部外面は左下がりのタタキ(断面方形2~3凹/cm)。内面はハケ目調整。	石英・長石粒を含む。	橙 5 Y R 7%	硬	B トレンチ 外面にスス付着。
79	弥生土器	甗	頸部径：14.7 胴部最大径：19.7	体部は球形を呈する。	体部外面は左下がりのタタキ(断面方形2凹/cm)。内面は斜方向のハケ目調整(10条/cm)。	石英・長石粒を含む。	にぶい橙 10Y R 7%	硬	B トレンチ 外面にスス付着。
80	弥生土器	甗	底径：5.1①	突出する平底。	側面に指圧痕が残る。内面にはへラ状工具の圧痕が残る。底部は凹状すえおき法による。	石英・長石粒を含む。	にぶい橙 2.5 Y R 9%	硬	B トレンチ
81	弥生土器	甗	底径：4.0②	突出度の高い平底。底中央が少し窪む。	外面はタタキ後ナデ。底部内面はへラ状工具の圧痕が残る。底部は凹状すえおき法による。	石英・長石・雲母粒を含む。	淡赤橙 2.5 Y R 7/4	硬	B トレンチ
82	弥生土器	甗	底径：4.8	突出しない平底。	外面は体部下半はタタキ、底部側面は斜め方向のナナデ、底部はナデ。内面は斜め方向の細かいハケ目、底部はクモの巣状のハケ目。	石英・長石・雲母粒を含む。	橙 2.5 Y R 9%	硬	B トレンチ
83	弥生土器	壺	底径：4.5②	突出する平底。底中央部が少し窪む。	外面はタタキ後ナデ。内面はへラ状工具の圧痕が残る。底部は凹状すえおき法による。	石英・長石・雲母粒を含む。	にぶい黄澄 10Y R 7%	硬	B トレンチ 二次的加熱。
84	弥生土器	甗	口径：12.8② 頸部径：9.4④ 胴部最大径：11.3④	口径部径は体部最大径より大きく、外反し伸びる。体部上位に最大径を有す。	口径部は内外面ともヨコナデ。外面に指圧痕が残る。体部外面は平行タタキ(断面方形2.5凹/cm)。内面はナナデ。体部下半には指圧痕が残る。	石英・長石粒を含む。	にぶい橙 5 Y R 9%	硬	B トレンチ №88と同一個体か(？)

No.	種類	器種	法量	形態の特徴	成形・調整	胎土	色調	焼成	備考
85	歌生土器	甕	口径：10.8⑧ 頸部径8.9⑧ 胴部最大径：9.6⑧	口縁部は体部よりゆるやかに外反し伸びる。体部には肩の張りは見られず、底部に連続すると推定される。	口縁部は内外面ともヨコナデ。外面は左下がりタタキ(断面方形形3凹/cm)。内面はナデ。	石英・長石・赤酸粒を含む。	明褐色 7.5 Y R 5/6	やや軟	Bトレンチ
86	歌生土器	甕	底径：4.6	突出する底部をもち、端部はやや外へ張る。底は平底。	体部外面は左下がりのタタキ(断面方形形3凹/cm)。内面はナデ。	石英・長石・雲母粒を含む。	灰黄褐色 10 Y R 2/6	硬	Bトレンチ 外面にステンス付着。
87	歌生土器	甕	底径：5.4	突出度の低い平底。底中央が大きく窪む。	外面は左下がりのタタキ(断面方形形3凹/cm)。内面はナデ。底部は凹板充填法による。	石英・長石・チャート・雲母赤橙を含む。	淡赤褐色 2.5 Y R 7/4	硬	Bトレンチ
88	歌生土器	甕	底径：4.2	底部の突出度は高く、底中央は少し窪む。	底部外面は左下がりのタタキ(断面方形形3凹/cm)。内面はナデ。底部は凹板充填法による。	石英・長石・チャート粒を含む。	にぶい橙 5 Y R 9/4	硬	Bトレンチ No.84と同一個体か(?)
89	歌生土器	甕	底径：3.4	突出する平底で、側端面が外へ拡張する。	体部外面は左下がりのタタキ(断面方形形3凹/cm)。底部側面は縦方向のナデ後指圧痕。内面はナデ。底部は凹板すえおき法による。	石英・長石・チャート・赤明燧を含む。	明褐色 7.5 Y R 5/6	硬	Bトレンチ
90	歌生土器	甕	底径：6.9	突出度の低い平底で端部が外へ張る。	体部外面はタタキ(断面方形4凹/cm)。底部はナデ。内面は斜め方向のハタケ後ナデ。	石英・長石・雲母粒を含む。	淡黄褐色	硬	Bトレンチ 外面にステンス付着。
91	歌生土器	甕	底径：4.5	突出度の高い平底。球形と推定。	体部は内外面ともナデ。底部は凹板すえおき法で、タタキは使用していない。	石英・長石・チャート・雲母粒を含む。	赤味のあるにぶい黄橙 10 Y R 3/6	硬	Bトレンチ 外面にステンス付着。
92	歌生土器	甕	口径：15.4⑧ 頸部径：12.5⑧ 底径：4.9 器高：26.0 胴部最大径：20.3	口縁部は体部より屈曲外反し、ほぼ直線的に伸びる。端部は長胴で突出する。底径が小さく、底部側面が外方向に拡張する。最大径は器高中位。	口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は中央付近に分割成形痕が残り、上半は左下がり後平行タタキ(断面方形形2.5凹/cm)。下半は左下がりのタタキ(断面方形2凹/cm)。内面は上半ナデ上げ、下半は板状工具によるナデ調整。底部は凹板すえおき法による。	石英・長石・チャート粒を含む。	浅黄 2.5 Y 7/4	硬	Bトレンチ
93	歌生土器	甕	底径：3.4 胴部最大径：15.8⑧	長胴の体部に突出度の低い平底がつく。	体部外面は左下がりのタタキ(断面方形3凹/cm)。底部はナデ。内面はナデ。	石英・長石・チャート・雲母粒を含む。	黄橙 5 Y R 6/6	硬	Bトレンチ 外面にステンス付着。

94	弥生土器	甕	口径：18.6⑥ 頸部径：15.1⑥ 胴底径：2.6⑥ 器高：29.4⑥ 胴部最大径：22.4⑥	口径部は体部より屈曲外反し、伸び、端部は丸く終る。体部は長方形で、突出する底部がつくと推定される。最大径は器高中位よりやや下。	口径部は内外面ともヨココナデ後、内面はハケ目調整。体部外面は左下がりのタタキ(断面方形3回/cm)。体部中央よりやや下位に分割成形痕。内面は縦方向のハケ目調整後ナデ上げ。	石英・長石・雲母・赤酸粒を含む。	5 Y R 7%	硬	Bトレンチ 外面にスチ付着。
95	弥生土器	甕	口径：18.0 頸部径：13.4 底径：4.4 器高：26.5 胴部最大径：21.2	口径部は体部より屈曲外反し伸び、端部は外傾する面を終る。体部は球形。底部は突出する平底。最大径は器高中位。	口径部は内外面ともヨココナデ後、外面はハケ目調整(5条/cm)。体部外面は4回タタキの方向が変わり3箇所に分割成形痕が残る。上左下がり、平行右下がりとなる(断面方形3回/cm)。タタキ後部分前にナデ上げ。内面はナデ。底部にヘラ形状工具の圧痕が残る。底部は凹版すえおき法による。	石英・長石・雲母粒を含む。	5 Y R 7%	やや軟	Bトレンチ 外面中位にスチ付着。
96	弥生土器	鉢	口径：207⑥	外反する口径を持ち、端部近くでさらに外方向に開く。端部は丸く終る。	口径部は横方向後縦方向のナデ。内面は横方向のナデ。	石英・長石粒を含む。	にぶい橙 7.5 Y R 1/4	硬	Bトレンチ
97	弥生土器	鉢	口径：23.6⑥	口径部は体部より外反し、端部は尖り気味に終る。体部は長く外開きで扁平。底部は突出度の低い平底と推定。	口径部は内外面ともヨココナデ後、内面は横方向のヘラミミガキ。体部は内外面共ナデ後、内面は縦方向のヘラミミガキ。	石英・長石粒を含む。	にぶい橙 5 Y R 7%	硬	Bトレンチ
98	弥生土器	高杯	口径：16.8⑥	口径部は扁平な杯体部より大きく外反し、伸びる。端部は方形に終る。	内外面とも磨耗が著しいが、内面には部分柄にかろうじて放射状のヘラミミガキが見られる。	石英・長石粒を含む。	浅黄橙 10 Y R 9%	やや軟	Bトレンチ
99	弥生土器	高杯	口径：21.1⑥	口径部は杯体部より大きく外反し、端部付近で少し内彎し、端部は丸く終る。	口径部外面はナデ。内面は横方向のハケ目調整後ナデ。	石英・長石粒を含む。	にぶい橙 5 Y R 7%	硬	Bトレンチ
100	弥生土器	高杯	口径：23.1⑥	口径部は体部よりゆるやかに外反し、端部は丸味を持った方形。体部は扁平と推定される。	内外面ともヨココナデ。	石英・長石・チャート・赤酸粒を含む。	赤 2.5 Y R 7%	硬	Bトレンチ
101	弥生土器	高杯	脚部上部径：3.3	脚柱部は少し開き中空である。	外面は縦方向のヘラミミガキ。内面にはしばり痕が残る。	石英・長石粒を含む。	浅黄橙 10 Y R 9%	硬	Bトレンチ
102	弥生土器	高杯	底径：13.2⑥	「八」の字形に開き、端部は尖り気味に丸く終る。4方に孔あり。端部には1条の沈線が走る。	外面はハケ目。内面はナデ。	石英・長石・雲母粒を含む。	にぶい橙 7.5 Y R 1/4	硬	Bトレンチ

No.	種類	器種	法量	形態の特徵	成形・調整	胎土	色調	焼成	備考
103	弥生土器	鉢	口径：13.0⑩	碗状で平底と推定。口縁端部は尖り気味に終る。	体外外面は横方向のヘラミガキ。内面は縦方向のヘラミガキ。	石英・長石・赤酸粒を含む。	ぶい橙 10Y R $\frac{7}{4}$	硬	Bトレンチ
104	弥生土器	鉢	口径：13.4 底部：3.7 器高：7.2	平底からほぼ直線的に伸び、端部付近で少し内彎し、丸く尖り気味に終る。底部に焼成前の穿孔有り。	内外面ともナデ。外面には粘土接合面が残る。	石英・長石・赤酸粒を含む。	灰黄 2.5Y $\frac{7}{4}$	硬	Bトレンチ
105	弥生土器	壺	口径：8.2⑩	少し外反し伸びる。端部は薄く丸く終る。端部には1条の凹線が走る。	外面は縦方向のヘラミガキ。内面はナデ。	石英・長石・チャート・赤酸粒を含む。	淡赤橙 2.5Y R $\frac{7}{4}$	硬	Bトレンチ
106	弥生土器	甕	口径：13.1⑩	大きく外反する口縁部で、端部は更に横に開く。	口縁部内外面ともナデ。	石英・長石・雲母粒を含む。	浅黄橙 10Y R $\frac{9}{4}$	硬	Bトレンチ スス付着。
107	弥生土器	高杯	口径：12.1⑩	頸部は大きく「八」の字形に開く。端部は丸く終り1条の丸線が走る。	脚端部のみヨコナナデ。内外面ともハゲメ後板ナデ。底部は挿入付加法による。	石英・長石・赤酸粒を含む。	褐灰 5Y R $\frac{9}{4}$	硬	Bトレンチ
108	弥生土器	甕	口径：11.1⑩ 頸部径：10.3⑩ 胴部最大径：11.3⑩	口縁部は体部よりゆるやかに外反し、ほぼ直立気味に伸びる。端部は丸く尖り気味に終る。体部には肩の張りは見られない。	口縁部は内外ともヨコナナデ。体部外面は左下がり（断面方形3凹/cm）。内面はナデ。	石英・長石・雲母粒を含む。	橙 7.5Y R $\frac{9}{4}$	硬	Bトレンチ 外面にスス付着。No.110と同一個体か。
109	弥生土器	鉢	口径：8.1 底部径：3.3 器高：5.0	碗状の体部に、上げ底の底部が付く。口縁部は凹凸が見られる。	全体にナデにより粗製品。体部外面は下から上方のナデ。体部には指圧痕が多く残る。底部は時計回りの指圧痕が強く残る。	石英・長石・雲母粒を含む。	明褐灰 7.5Y R $\frac{7}{4}$	硬	Bトレンチ 外面にスス付着。
110	弥生土器	甕	口径：5.4	底部は突出する平底で平坦。側面が外方向に拡張する。	体部下外面は左下がり（断面方形3凹/cm）。底部側面は指圧痕が残る。底部内面にはくも果状圧痕が残る。底部は凹嵌すえおき法による。	石英・長石・雲母粒を含む。	橙 7.5Y R $\frac{9}{4}$	硬	Bトレンチ 外面にスス付着。No.108と同一個体か。
111	弥生土器	脚台	口径：6.6 体部上部径：3.6 脚高：3.1	「八」の字形に開き、中央が窪む。底部は丸く終り、中央が窪む。	外面に指圧痕が残る。	石英・長石・雲母粒を含む。	灰黄 2.5Y R $\frac{7}{4}$	硬	Bトレンチ 鉢の脚台か。
112	弥生土器	甕	口径：3.9 体部最大径：9.6	体部から連続して突出する平底。底部は中央が窪む。	体部は内外面ともナデ。底にヘラ状工具の圧痕が残る。底部側面に明瞭な指圧痕が残る。底部は凹嵌すえおき法による。	石英・長石・赤酸粒を含む。	明褐灰 7.5Y R $\frac{7}{4}$	硬	Bトレンチ 外面にスス付着。底部近くに焼成後穿孔。

		弥生時代後期Ⅰ 包含層出土遺物							
113	弥生土器	甕	口径：12.8⑥ 頸部径：12.4⑥	口縁部は体部より屈曲し、内彎気味に伸びる。肩部はやや尖り気味に終る。体部には肩の張りはみられない。	剝離により不明。	石英・長石粒を含む。	にぶい澄7.5YR7/4	硬	Bトレンチ
114	弥生土器	台付甕	口径：12.9 頸部径：11.0 底径：5.4 器高：11.0 脚部最大径：11.1	口縁部は受け口状を呈する。被状の体部に「八」の字形に開く脚部が付く。	口縁部は内外面ともヨココナナデ。一部は口縁叩き出し技法による。体部外面には有り、上位置は平行タタキキ。下位は脚部まで左下りのタタキキ(断面方形3凹/cm)。	長石・チャート・角閃石粒を含む。	赤味のあるにぶい澄10YR7/2	硬	Bトレンチ 外面にスス付着。
115	弥生土器	鉢	口径：12.7 底径：5.2 器高：10.1	口縁部は碗状の体部より外反し、短く伸びる。肩部は丸く終る。底部はあげ底。	体部は内面とも剝離のため調整不明。底部側面には指圧痕が残る。	石英・長石・チャート・雲母粒を含む。	にぶい澄5YR7/3	硬	Bトレンチ 外面にスス付着。
116	弥生土器	壺	—	体部破片	内外面ともナナデ。内面に粘土紐の継目を残す。	石英・長石・雲母粒を含む。	茶褐色	硬	Bトレンチ 外面にヘララで2条の記号文を施す。小片のため生容は不明。
117	土師器	甕	口径：15.6⑥	口縁部は「く」の字形に外反し、端部ははやや尖り気味にたちあがる。	口縁部は内外面ともハケ目後、ナナデ。体部上位内面はヘラケズリ。	石英・長石・雲母・角閃石・赤鉄粒を含む。	暗褐色	硬	3Bトレンチ
118	弥生土器	壺	口径：16.4⑥	口縁部は肩部から直立気味に立ち上り、上半は大きく外反し、端部は丸く終る。	口縁部はナナデ、外面は剝離のため不明。内面はハケ目のちナナデ。頸部に粘土の接合痕が残る。	石英・長石・雲母粒を含む。	黄灰色	硬	3Bトレンチ
119	弥生土器	甕	口径：13.0⑥ 頸部径：10.8⑥	球形の胴から口縁部がゆるやかに外反し、端部は丸く終る。	口縁部外面はヨココナナデ、体部外面は右下りのタタキキ(断面方形4凹/cm)。	石英・長石・チャート・雲母粒を含む。	黄褐色	硬	Bトレンチ
120	弥生土器	甕	口径：11.6⑥	口縁部は外反し、端部は丸味を持つ。方形。	口縁部内外面ともハケ目のちナナデ。頸部に粘土の接合痕が残る。	石英・長石・雲母粒を含む。	黄褐色	硬	3Bトレンチ 外面にスス付着。
121	弥生土器	壺	口径：15.8⑥	口縁部下半は直立気味に立ち上り、上半は大きく外反する。端部は上方へ少し折り曲げ、丸く終る。	外面は剝離のため不明。内面はハケ目のちナナデ。	石英・長石・雲母・赤鉄粒を含む。	黄灰色	硬	3Bトレンチ
122	弥生土器	高杯	口径：21.2⑥	杯部から屈曲し、口縁部がゆるやかに外反し、端部は丸く終る。	剝離のため不明。	石英・長石・雲母粒を含む。	暗黄褐色	硬	Cトレンチ

No.	種類	器種	法	量	形態の特徴	成形・調整	胎	土	色調	焼成	備考
123	弥生土器	甕	口径：19.4④ 頸部径：17.0④	球形の胴部から口縁部がゆるやかに外反し、端部は丸く終る。	体部外面はタタキ（断面方形2凹/cm）。口縁部は内外ともヨコナデ。口縁部内面はハケ目のちナデ。指圧痕が残る。外面下半に指圧痕が残る。	石英・長石・チャート・雲母粒を含む	石英・長石・チャート・雲母粒を含む	黄褐色	硬	Bトレンチ 外面にスス付着。	
124	弥生土器	壺	底径：5.2④	底中央が窪む。	外面はハケ目のちナデ。内面はハケ目のちナデ。指圧痕が残る。	石英・長石・雲母粒を含む	石英・長石・雲母粒を含む	黄褐色	硬	6Bトレンチ	
125	弥生土器	甕	底径：4.4	平底。	外面はタタキのちナデ。内面は剝離石英・長石・チャート・雲母粒を含む。のため不明。底部は凹板すえおき法による。	石英・長石・チャート・雲母・赤酸粒を含む	石英・長石・チャート・雲母・赤酸粒を含む	黄褐色	硬	Bトレンチ	
126	弥生土器	甕	底径：4.3	底部は少し窪み、ゆるやかに外反する。	外面はタタキのちハケ。内面はタタキの真状のハケ目。底は凹板すえおき法による。	石英・長石・チャート・雲母粒を含む	石英・長石・チャート・雲母粒を含む	にぶい黄褐色	硬	Bトレンチ	
127	弥生土器	甕	底径：5.6	底部中央が窪み、端部は少し張る。	外面はナデ。内面はハケ目のちナデ。	石英・長石・チャート・雲母粒を含む	石英・長石・チャート・雲母粒を含む	にぶい黄褐色	硬	Bトレンチ	
128	弥生土器	甕	底径：4.2	底部は中央部が少し張る。	外面はタタキ。底部側端はタタキのちナデ。内面はハケ目のちナデ。	石英・長石・チャート・雲母・赤酸粒を含む	石英・長石・チャート・雲母・赤酸粒を含む	淡黄灰色	硬	3Bトレンチ	
129	弥生土器	甕	底径：3.6	底部中央が窪む。	外面はタタキ（3凹/cm）。内面はハケ目。	石英・長石・チャート・雲母粒を含む	石英・長石・チャート・雲母粒を含む	黄褐色	硬	Bトレンチ 外面にスス付着。	
130	弥生土器	壺	底径：3.7④	底部中央部が少し窪む。	外面はナデ。内面はハケのちナデ。	石英・長石・雲母・赤酸粒を含む	石英・長石・雲母・赤酸粒を含む	黄褐色	硬	Aトレンチ	
古墳時代後期 自然河川出土遺物											
131	弥生土器	甕	底径：3.0	突出度の低い平底。	外面は左下がりのタタキ（断面方形3凹/cm）のちナデ。	石英・長石・雲母粒を含む	石英・長石・雲母粒を含む	浅黄 2.5Y $\frac{1}{4}$	硬	Bトレンチ 外面にスス付着。	
132	弥生土器	甕	底径：4.0	体部から連続して突出する平底。底部中央が少し窪む。	外面はナデ。内面はタタキのハケ目。	石英・長石・雲母粒を含む	石英・長石・雲母粒を含む	にぶい黄 5YR $\frac{1}{4}$	硬	Bトレンチ	
133	弥生土器	甕	底径：4.0④	底部中央が少し窪む。	外面はナデ。	石英・長石・雲母・赤酸粒を含む	石英・長石・雲母・赤酸粒を含む	黄褐色	硬	Bトレンチ	

134	歌生土器	甃	底径：3.2	突出度の低い平底。	外面は左下がりのタタキ(断面方形3凹/cm)のちナデ。内面はナデ。	石英・長石・雲母粒を含む。	浅黄 2.5YR7½	硬	Bトレンチ
135	歌生土器	高杯	底径：9.1⑩	脚部は大きく開き、端部は丸く終る。	内外面ともナデ。内面に指圧痕。	石英・長石・雲母粒を含む。	浅黄橙	硬	Bトレンチ
136	歌生土器	甃	底径：4.0	突出する平底。	外面はタタキ(断面方形2凹/cm)のちナデ。内面にはへら状工具の圧痕が残る。	石英・長石・雲母粒を含む。	浅黄 5Y7¼	硬	Bトレンチ 外面にスス付着。
137	歌生土器	甃	底径：3.8	突出度の低い平底。	体部は内外面ともナデ。底部は側面を面取り風に強くナデる。円敲すえをおき法による。	石英・長石・雲母粒を含む。	灰黄 2.5Y7½	硬	Bトレンチ 鉄か？
138	歌生土器	高杯	脚部径：3.8	脚部下半は大きく開く。	外面はナデ。内面はしぼり痕が残る。円敲充填法による。	石英・長石・雲母粒を含む。	浅黄 2.5Y7½	硬	Bトレンチ
139	歌生土器	鉢	口径：12.8⑧	口縁部は内彎気味にのび、端部は薄く終る。体部は碗状を呈す。	口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は左下がりのタタキ(断面方形3凹/cm)。肩部より上方は粘土粗粒をみ上げによる。内面はナデ。	石英・長石粒を含む。	橙 5YR7%	軟	Bトレンチ
140	歌生土器	甃	底径：3.7⑧	体部から連続して突出する平底。底部中央が少し窪む。	外面は左下がりのタタキ(断面方形3凹/cm)のちナデ。内面はハケのちナデ。底部は円敲充填法による。	石英・長石粒を含む。	淡茶褐色	硬	Bトレンチ
141	土師器	高杯	口径：16.4④	口縁部が少し外反し、端部は薄く終る。	内外面ともナデ。	石英・長石・雲母・赤酸粒を含む。	灰黄 7.5YR7½	硬	Bトレンチ
142	土師器	鉢	口径：13.0④	口縁部はゆるく外反し、端部は薄く丸い。体部は碗状をなす。	内外面ともナデ。	石英・チャート・雲母・赤酸粒を含む。	黄 2YR7%	硬	Bトレンチ
143	土師器	高杯	口径：19.2②	口縁端部は丸く体部は浅く皿状を呈す。	不明	石英・長石・雲母粒を含む。	黄 5YR7%	軟	Bトレンチ
144	歌生土器	甃	口径：14.1④	口縁部は体部より屈曲外反する。端部は丸くおわる。体部には肩の張りがない。	口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は平行タタキ(断面方形2凹/cm)。内面はナデ。肩部より上方は、粘土粗粒をみ上げて、タタキなし。	石英・長石・チャート・雲母粒を含む。	黄 2.5YR7%	やや軟	Bトレンチ 外面にスス付着。
145	歌生土器	甃	口径：13.8④	口縁部は外反し、端部は細く丸くおわる。	内外面ともナデ。	石英・長石・雲母・赤酸粒を含む。	明黄褐 10YR7%	硬	Bトレンチ

No.	種類	器種	法量	形態の特徵	成 形 ・ 調 整	胎 土	色 調	焼成	備 考
146	歌生土器	甕	口径：21.6④	口縁部は端部近くで大きく屈曲外反する。	内外面ともナデ。	石英・長石・雲母粒を含む。	にぶい黄橙 10Y R 7/4	硬	Bトレンチ
147	歌生土器	甕	口径：18.0④	体部より屈曲し、外反する。端部は丸くおわる。	内外面ともヨコナデ。屈曲部に粘土接合痕と指頭圧痕が残る。	石英・長石・雲母粒を含む。	にぶい橙 7.5Y R 9%	硬	Bトレンチ 外面にスス付着。
148	歌生土器	甕	口径：14.6④	口縁部は体部より屈曲外反し、途中で角度をかえ上方にのびる。外面に凹線が走る。体部はナデ肩。	口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面には平行タタキのちナデ(単位不明)。内面はナデ。	石英・雲母粒を含む。	にぶい黄橙 10Y R 7/4	硬	Bトレンチ
149	歌生土器	鉢	口径：14.6 底径：4.6 器高：6.9	口縁部は体部より屈曲し、内彎気味に短くのびる。体部は上げ底の突出した底部から内彎してのびる。	口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面にはタタキ痕はみられない。底部外面に指頭圧痕が残る。内面は底にへら状工具の痕跡が残る。底部は輪台法による。	石英・長石・雲母粒を含む。	にぶい褐 7.5Y R 9%	硬	Bトレンチ
150	歌生土器	高杯	口径：21.4④	杯部は大きく外反し、端部は丸くおわる。	磨滅のため不明	石英・長石・雲母粒を含む。	にぶい橙 10Y R 7/4	硬	Bトレンチ
151	歌生土器	高杯	口径：21.4④	口縁部は差い杯体部から途中で角度をかえ外反する。端部は外傾する端面を有する。	口縁部は内外面ともヨコナデ。	石英・長石・チャート・雲母粒を含む。	にぶい橙 5Y R 7/4	硬	Bトレンチ 酸化鉄付着。
152	歌生土器	甕	口径：15.5	口縁部は体部より屈曲し外反する。端部は丸くおわる。体部は震りの小さい球形。	口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は右下がりのタタキ(断面方形3凹/cm)。内面はナデ。肩部上位より上は粘土紐積み上げてタタキは加えていない。	石英M◎・長石LO・角閃石SO・雲母S△	明褐灰 5Y R 7/2	硬	Bトレンチ 外面にスス付着。
153	歌生土器	鉢	口径：13.8 底径：4.5 器高：6.6	口縁部は体部より屈曲し、直線的に短かくのびる。端部は丸くおわる。体部は突出する上げ底から内彎してのびる。	口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は全面ナデにより、タタキは未使用。内面はナデ。底部にはへら状工具、底部外面には指頭圧痕が残る。底部は輪台法による。	石英・長石・チャート・雲母粒を含む。	灰黄褐 10Y R 9%	硬	Bトレンチ 酸化鉄付着。
154	歌生土器	甕	底径：3.9	長胴の体部に突出する平底。底中央が少し窪む。	体部外面は左下がりのタタキ(断面方形3.5凹/cm)。内面はナデ。底部側面は面取り風ナデ。円板充填法	石英・長石・チャート・雲母粒を含む。	明黄褐 10Y R 9%	硬	Bトレンチ 外面にスス付着。
155	歌生土器	甕	頸部径：12.4④	長胴の体部で口縁部は屈曲外反する。	体部外面は左下がりのタタキ(断面方形2凹/cm)のちナデあげ。頸部から口縁部外面はヨコナデ。内面はナデ。	石英・長石・雲母・赤酸粒を含む。	淡橙 5Y R 8/4	硬	Bトレンチ

156	弥生土器	高杯	口径：20.4 底径：13.4 器高：14.4	杯部は斜め上方に直線的にのびる杯底部から途中で角度をかえ外反し伸びる。脚柱部は、中実で細長い。脚部は「八」の字形に傾き、端面には刻み目がめぐる。4方透し孔。	杯部は内外面とも縦方向のハケ目がヨコナデ。脚部外面は縦方向のハケミキ。内面はナデ。杯部と脚部の接合は挿入付加法による。	石英・長石・雲母粒を含む。	にぶい橙10YR7/2	硬	Bトレンチ
157	弥生土器	甕	口径：16.6 頸部径：12.4	口縁部は体部より屈曲し外反する。端部は外傾する端面を呈する。体部は球形をなす。	口縁部外面は縦方向のハケ目のちヨコナデ。内面はヨコナデ。体部外面は左トがりがりのタタキ(断面方形3凹/cm)。内面はハケ目調整で、屈曲部下に指頭圧痕が残る。	石英・長石・雲母粒を含む。	2.5YR7/6	硬	Bトレンチ 外面にスス付着。
158	弥生土器	甕	口径：16.4 底径：5.1 器高：18.1 脚部最大径：17.3	口縁部は体部より屈曲外反する。端部は丸くおさまる。体部は政形で、突出度が低く端部が外方向に拡張する平底。	口縁部は内外面ともヨコナデ。外面に指頭圧痕が残る。体部外面は左下がり(断面方形3凹/cm)のベルトとして残る。内面屈曲、下部は横方向のハケ目調整(10~12条/cm)。底部にヘラ状工具の圧痕が残る。底部は凹散すえおき法による。	石英・長石・チャート粒を含む。	7.5YR7/4	硬	Bトレンチ 外面にスス付着。
159	須恵器	杯	口径：10.0④	口縁端部がやや外へ張る。	内外面とも回転ナデ。	石英・長石粒を含む。	灰白色	硬	Bトレンチ
160	土師器	杯	口径：10.4④	碗状の体部で、口縁部はやや立ち上がり、端部は尖り気味におわる。	体部外面はヨコナデのでナデ。下半に指頭圧痕が残る。内面は板ナデのちヨコナデ。	石英・長石・チャート粒を明黄褐色を含む。	明黄褐色	硬 やや軟	Bトレンチ 酸化鉄付着。
161	須恵器	杯身	口径：12.8④	浅い体部に内傾した短い立ち上がり部をもつ。	体部外面下半はヘラケズリ、立ち上がり部及び内面は回転ナデ。体部中にヘラによる回線がめぐる。	石英・長石粒を含む。	青灰色	硬	Bトレンチ 回転は時計回り。
162	須恵器	杯身	口径：13.0④	浅い体部に内傾した短い立ち上がり部をもつ。立ち上がり部は厚している。	体部外面下半はヘラケズリ、上半及び内面は回転ナデ。	石英・長石・長石粒を含む。	灰白色	硬	Bトレンチ
163	須恵器	杯身	口径：10.0④	体部は浅く、底は平底に近い。立ち上がりは直立気味。	体部下半はヘラケズリ、上半及び内面は回転ナデ。	石英・長石粒を含む。	青灰色	硬	Bトレンチ 回転は時計回り。
164	須恵器	杯身	口径：9.8④	体部は浅く、底は直立気味。	体部下半はヘラケズリ、上半及び内面は回転ナデ。	石英・長石粒を含む。	青灰色	硬	Bトレンチ
165	土師器	鉢	口径：12.1④	碗状の体部で、口縁部は丸くおわる。	体部外面は、下半はナデアグ。口縁部外面はヨコナデ。内面はヨコナデのちナデ。体部外面下半に指頭圧痕が残る。	石英・長石・長石粒を含む。	にぶい黄橙10YR7/4	硬	Bトレンチ

No.	種類	器種	法量	形態の特徴	成形・調整	胎土	色調	焼成	備考
166	須惠器	杯身	口径：13.6④	浅い体部に内傾する立ち上がりをもつ。	体部外面上半及び内面は回転ナデ。	石英・長石粒を含む。	灰黄白色	硬	Bトレンチ 回転は逆時計回
167	須惠器	壺	底径3.5	ほぼ平底で中央が少し窪む。	体部外面及び内面はヨココナデ。	石英・長石粒を含む。	暗青灰色	硬	Bトレンチ 回転は時計回
168	土師器	甕	口径：14.8④	口縁端部近くで直立気味になり、端部は尖る。	内外面ともナデ。	石英・長石・チャート粒を含む。	浅黄 2.5Y½	硬	Bトレンチ
169	須惠器	杯身	口径：12.3④	体部は深く、立ち上がりは内傾し、端部は直立気味になる。	内外面とも回転ナデ。	石英・長石粒を含む。	灰青色	硬	Bトレンチ 回転は時計回
170	須惠器	杯身	口径：12.5④	肉厚の体部で、立ち上がりは大きく外反する。やや内傾する。体部外面下位に1条の凹線。	体部外面下半はヘラケグズリ、上半及び内面は回転ナデ。	石英・長石・長石粒を含む。	青灰色	硬	Bトレンチ 外面にヘラ記号。
171	弥生土器	甕	口径：15.2④	体部より屈曲し、大きく外反する。端部は薄く、尖り気味におわる。	内外面ともヨココナデ。	石英・長石・チャート粒を含む。	不明	硬	Bトレンチ 酸化鉄付着。
172	須惠器	杯身	口径：14.0④	肉厚の浅い体部で立ち上がりは低く短い。	体部外面下半はヘラケグズリ。上半及び内面は回転ナデ。	石英・長石・長石粒を含む。	暗青灰色	硬	Bトレンチ 回転は時計回
173	土師器	鉢	口径：16.6④ 器高：10.3	平底で、内傾する体部をもち、口縁端部は立ち上がり、尖り気味におわる。	体部外面はナデ。口縁部内外面は回転ナデ。体部内面はヘラミガキ(暗文)のちナデ。体部外面中位に指頭圧痕が残る。	石英・長石・角閃石・雲母粒を含む。	赤褐色	硬	Bトレンチ 体部外面下位に黒斑。
174	弥生土器	甕	口径：16.2④	外反する口縁部で、中位から角度をかえて端部は尖り気味におれる。	内外面ともナデ。	石英・長石・雲母粒を含む。	黄 5YR¾	やや軟	Bトレンチ
175	土製品	土錐	長さ：3.7以上 径：0.9 孔径：0.3	素焼きの環状土垂。約¾が欠損。	横方向のナデ。	石英・長石・雲母粒を含む。	にぶい黄澄 10YR¾	硬	Bトレンチ
176	弥生土器	甕	底径：4.4④	平底で、端部が外へ張る。	磨滅のため不明。	石英・長石粒を含む。	淡黄褐色	硬	Bトレンチ
177	土師器	鉢	口径：23.8④	肉厚の体部で口縁部に近づくほど薄くなる。端部は肥厚し、丸みをもつ。	内外面ともナデ。	石英・雲母粒を含む。	灰白 2.5Y%	やや軟	Bトレンチ

178	弥生土器	壺	底部径：2.8	わずかに突出する平底。	内外面ともナデ。	石英・長石・角閃石・雲母・赤酸粒を含む。	灰色	硬	Bトレンチ
179	弥生土器	甕	口径：12.1④	屈曲外反する口縁部で、端部は内彎気味に丸くおれる。	内外面ともヨコナデ。	石英・長石・チャート粒を含む。	赤褐 5YR 5/6	硬	Dトレンチ
180	土師器	鉢	口径：12.4④	やや扁平な体部で屈曲外反する口縁部をもつ。端部は薄く丸くおわる。	磨滅のため不明。	石英・長石・赤酸粒を含む。	淡橙 5YR 9/4	軟	Dトレンチ
181	弥生土器	甕	口径：16.0④	口縁部は体部から大きく外反し、端部は丸くおわる。	磨滅のため不明。	石英・長石・チャート粒を含む。	明褐 7.5YR 5/6	硬	Dトレンチ 外面にスス付着。
182	須恵器	壺	口径：17.8④	外反し、端部近くで角度を変え立ちあがり気味になる。端部下で、内面に三角状に張り出す。	内外面とも回転ナデ。	石英・長石・雲母粒を含む。	灰色	硬	9Bトレンチ
183	土師器	杯	口径：11.6④	椀状の体部をもち、口縁部は直立気味に立ちあがる。端部は丸くおわる。	外面はナデ。口縁部内面は横ナデ。体部内面はヘラミガキのちナデ。	石英・長石粒を含む。	淡黄褐色	硬	9Bトレンチ
184	弥生土器	甕	口径：12.0④	外反し、端部は丸くおわる。	磨滅のため不明。口縁端部下外面に指頭圧が残る。	石英・長石・チャート・雲母粒を含む。	明褐 7.5YR 5/6	硬	Dトレンチ 外面にスス付着。
185	土師器	甕	口径：10.6④	体部からゆるやかに口縁部が外反し、端部は細く丸くおわる。	体部外面はナデ。口縁部外面は下から上への指ナデ。口縁部内面は横ナデ。体部内面はナデ。	石英・長石粒を含む。	淡灰色	硬	11Bトレンチ 外面にスス付着。
186	弥生土器	甕	口径：12.4④	ゆるやかに外反する口縁部で、端部は丸くおわる。	内外面ともヨコナデ。	石英・長石・チャート・雲母・赤酸粒を含む。	浅黄褐 7.5YR 9/6	軟	Dトレンチ
187	土師器	甕	口径：14.2④	体部から屈曲外反し、端部は尖り気味におわる。	口縁部外面はナデ、内面は横方向のハゲ目のちナデ。	石英・長石・雲母粒を含む。	淡褐色	硬	11Bトレンチ 外面にスス付着。
188	須恵器	甕	—	肩がゆるく張る。	外面は不明。体部内面は背海波のタタキ、頸部は回転ナデ。	石英・長石・長石粒を含む。	青灰色	硬	Aトレンチ 外面に自然釉。
189	須恵器	杯蓋	口径：15.6④	平坦な天井部で、体部に1条の稜線をもつ。	天井部はヘラケズリ、体部下半及び内面は回転ナデ。	石英・長石粒を含む。	青灰色	硬	11Bトレンチ
190	須恵器	杯身	口径：11.8④	内傾する短い立ちあがりをもつ。	内外面とも回転ナデ。	石英・長石・チャート・雲母粒を含む。	灰 N61	硬	Dトレンチ

No.	種類	器種	法量	形態の特徴	成形・調整	胎土	色調	焼成	備考
191	須恵器	杯身	口径：11.9④	器壁の薄い体部で、立ちあがりは短く直立気味。端部は細い。	内外面とも回転ナデ。	石英・長石粒を含む。	青灰色	硬	Dトレンチ 体部外面に自然釉。
192	土師器	鉢	口径：11.3④	丸味をもつ体部で、口縁部はゆるやかに外反し、肥厚する。	磨滅のため不明。	石英・長石・雲母粒を含む。	黄澄7.5YR% 黄褐色7.5YR%	硬	Dトレンチ
193	弥生土器	鉢	口径：23.8④ 胴部最大径：24.2④	口縁部は少し内傾気味に立ち、端部は肥厚する。端面は水平。頸部と体部中間位に凹線。	磨滅のため不明。	石英・長石・チャート・雲母粒を含む。	黄澄7.5YR% 黄褐色7.5YR%	硬	Dトレンチ
194	弥生土器	高杯	脚部上部径：1.7部。	接合部からゆるやかに外反する脚部。	外面はナデ。脚部内面下半はヨコナデ。上半は縦方向の指ナデ。絞りに痕が残る。	石英・長石・雲母粒を含む。	茶褐色	軟	6Bトレンチ
195	弥生土器	鉢	口径：12.9④	口縁部は直立気味に立ち、端部では少し外反し、肥厚する。	磨滅のため不明。	石英・長石・雲母粒を含む。	灰10YR%	硬	Dトレンチ
196	弥生土器	高杯	口径：29.6④	杯部中間位で角度をかえ、口縁部はゆるく外反する。端面は外傾。	口縁部は内外面ともヨコナデ。体部はナデ。	石英・長石・雲母・角閃石・雲母粒を含む。	暗灰褐色	硬	Bトレンチ
197	須恵器	壺	口径20.4④	口縁端部は直立気味に立ちあがる。	内外面とも回転ナデ。	石英・長石・雲母粒を含む。	灰白色	硬	6Bトレンチ
198	土師器	鉢	口径31.0④	張りの少ない体部で、口縁部はゆるく外反する。	体部外面はナデ。口縁部内外面はヨコナデ、内面はナデ。	石英・長石・雲母・赤酸粒を含む。	淡黄褐色	硬	Bトレンチ
199	土師器	甕	口径：15.0④	球形の体部から、口縁部が屈曲外反する。端部は丸くおわる。	磨滅のため不明。	長石・チャート・赤酸粒を含む。	黄澄7.5YR%	硬	Dトレンチ
平安時代 土 甕 3 出土 遺 物									
200	土師器	杯	口径：11.4④	浅い体部で端部は丸くおわる。	体部外面及び内面はナデ。口縁部内外面はヨコナデ。外面底部近くに指頭圧痕が残る。	石英・長石粒を含む。	淡灰褐色	硬	Bトレンチ
201	土師器	高杯	底径：5.0	筒状の脚部で中間位から広く。	脚部外面及び杯部内面はナデ。脚部内面はナデ。端部付近は指頭圧痕が残る。	石英・長石・チャート・雲母・赤酸粒を含む。	色にぶい橙褐色	硬	Bトレンチ
202	土師器	壺	口径：11.4④	張りの少ない球形の体部から、口縁部がゆるやかに外反する。端部は丸く、少し張る。	内外面ともナデ。	石英・長石粒を含む。	淡赤褐色	硬	Bトレンチ

203	土師器	杯	口径：16.8㉔	浅い体部で口縁部は少し内傾し、端部は丸くおわる。	口縁部内外面はヨコナデ。体部内外面は石英・長石粒を含む。	暗赤褐色	硬	Bトレんチ	
204	土師器	甕	口径：15.8㉔	肩の垂る体部から少し開き気味に口縁部が立ちあがる。端部は尖り気味におわる。	体部内外面はナデ。口縁部内外面は石英・長石・雲母粒を含む。	赤褐色	硬	Bトレんチ	
205	土師器	甕	口径：34.4㉔	口縁部が大きく外反し、端部はやや外傾する。	口縁部は内外面ともヨコナデ。頭部内外面は石英・長石・雲母粒を含む。	淡灰褐色	やや軟	Bトレんチ	
古墳時代後期 青灰色粘土層（古墳時代後期）出土遺物									
206	須恵器	杯身	蓋口径：16.2㉔ 器高：4.5	やや浅い体部。	体部外面上半はヘラケズリ。下半及び内面は回転ナデ。	淡青灰色	硬	12Bトレんチ 天井部に「十」字 形のヘラ記号。	
207	須恵器	杯身	身口径：11.4㉔	やや浅い体部で、立ちあがりは少し内傾気味で短い。	体部外面はヘラケズリ。上半及び内面は回転ナデ。	淡灰色	硬	12Bトレんチ 回転は時計回 り。	
208	須恵器	杯身	身口径：13.1㉔	浅い体部で、内傾する短い立ちあがりをもつ。	体部外面はヘラケズリ。上半及び内面は回転ナデ。	淡灰色	硬	12Bトレんチ 回転は時計回 り。	
209	須恵器	杯身	身口径：12.8㉔	肉厚の体部で、内傾する短い立ちあがりをもつ。端部は丸い。	体部外面はヘラケズリ。上半及び内面は回転ナデ。	淡灰色	硬	12Bトレんチ 回転は逆時計回 り。	
210	須恵器	鉢	底径：13.6㉔	平底で体部下半で肉厚。	体部外面は縦方向のナデ。内面は横及びびなめ方向のナデ。底面近くには指頭丘痕が残る。	淡灰色	やや軟	12Bトレんチ	
青灰色粘土層上面（古墳時代後期）出土遺物									
211	須恵器	蓋	口径：9.5 器高：3.5	平坦な天井部で、口縁端部は丸い。	体部外面上半はヘラケズリ。下半及び内面は回転ナデ。	青灰色	硬	7Bトレんチ	
212	須恵器	杯蓋	口径：12.4 器高：4.1	外傾する口縁部で、端部は丸味をもつ。	内外面ともナデ。	灰白色	軟	Bトレんチ	
213	須恵器	杯蓋	口径：14.2㉔ 器高：4.0	肉厚の体部で、外傾する口縁部をもち、端部は尖り気味におわる。天井部中央部はやや窪む。体部中位に縦をもつ。	体部外面上半はヘラケズリ。下半及び内面は回転ナデ。	青灰色	硬	7Bトレんチ	

No.	種類	器種	法	量	形態の特徴	成形・調整	胎土	色調	焼成	備考
214	須恵器	杯蓋	口径：12.5⑩		高い体部で、少し外傾する口縁部をもつ。端部は尖り気味で、内側へ張り出す。体部は中位に稜をもつ。	体部外面上半はヘラケズリ。下半及び内面は回転ナデ。	石英・長石粒を含む。	淡灰色	硬	3 Bトレンチ
215	須恵器	杯蓋	口径：13.2⑩		ゆるやかに外傾する口縁部をもつ、体部中位に凹縁。	体部外面下半及び内面は回転ナデ。	石英・長石粒を含む。	灰白色	硬	5 Bトレンチ 回転は逆時計回り。
216	須恵器	杯蓋	口径：14.6 器高：5.4		高い体部で口縁部は外傾する。端部は丸みをもつ。	体部外面上半はヘラケズリ、下半及び内面は回転ナデ。	石英・長石粒を含む。	灰青色	硬	Bトレンチ 回転は時計回り。
217	須恵器	蓋	口径：16.3⑩		口縁端部が直立気味に立ち、内面にかえりがつく。	内外とも回転ナデ。	石英・長石粒を含む。	青灰色	硬	6 Bトレンチ
218	須恵器	壺	口径：18.1⑩		外反する口縁部で、端部が立ちあがり気味に肥厚しておわる。	内外面とも回転ナデ。	石英・長石粒を含む。	青灰色	硬	6 Bトレンチ
219	土師器	高杯脚部	脚部径：3.5⑩		杯底部からゆるやかに脚部が外反する。	脚部内外面ともナデ。杯部内面はハケのちちなデ。脚部内面に絞り痕と指む。頭田痕が残る。	石英・長石・雲母粒を含む。	灰茶色	硬	3 Cトレンチ
220	土師器	高杯	脚部上部径：2.6		杯部は脚部からゆるやかにのび、中位から角度を變える。杯底部はほぼ水平。	磨滅のため不明。	石英・長石・赤酸粒を含む。	淡い橙色	軟	Cトレンチ
221	須恵器	杯身	口径：10.6⑩		浅い杯部で内傾する立ちあがりを持ち、端部近くで直立気味で尖る。	内外面とも回転ナデ。	石英・長石粒を含む。	灰白色	硬	Bトレンチ 体部外面中位にヘン記号。
222	須恵器	杯身	口径：13.4⑩		浅い体部で直立気味の短い立ちあがりをもつ。	体部外面下半はヘラケズリ、口縁部及び内面は回転ナデ。	石英・長石・赤酸粒を含む。	青灰色	硬	3 Cトレンチ 回転は時計回り。
223	須恵器	杯身	口径：14.6⑩		やや大型で、内傾する立ちあがりをもつ。	内外面とも回転ナデ。	石英・長石粒を含む。	青灰色	硬	2 Cトレンチ
224	土師器	鉢	口径：21.9⑩		底部からゆるやかにのびた体部が、中位から角度をかえて立ちあがる。口縁端部は平坦。	内外面ともヨコナデ。	石英・長石・角閃石・チャート・雲母粒を含む。	茶褐色	硬	3 Cトレンチ
225	土師器	甕	口径：14.8⑩		体部から屈曲した口縁部が、端部近くで少し角度をかえ、直立気味におわる。	内外面ともヨコナデ。	石英・長石・雲母・赤酸粒を含む。	淡灰褐色	硬	3 Cトレンチ

平安時代出土遺物						
226	須恵器 長頸壺	胴部最大径： 18.2 底径：9.0	肩の張る体部で外傾する高台がつく。高台端面は面取り削り込んで、頸部は肩部から内傾気味に立ち、中位からゆるやかに外反する。	脣部は内外面ともナデ。脣部は内外面とも回転ナデ。石英・長石・雲母・赤鉄粒を含む。	暗灰青色	硬 7Bトレンチ 底部に白い固形物が溜る。外面に部分的に自然釉がかかる。
中世層出土遺物						
227	土師質器 土壺	口径：14.8⑧	口縁部は大きく外反し、端面は外傾気味におわる。	内外面ともナデ。	灰黄褐色	軟 7Bトレンチ
228	瓦器 皿	口径：10.8⑧	平坦な底部からゆるやかに体部がのび、端部は丸くおわる。	体部外面はナデ。内面はナデ後へラミガキ。	黒灰色	硬 Bトレンチ
229	瓦器 碗	底径：5.6⑧	低い肉厚の高台をもつ。	内外面ともナデ。	灰白色	硬 7Bトレンチ
230	瓦器 碗	口径：14.6⑧	口縁部は体部からゆるやかにのび、端部は丸くおわる。	外面はナデ。内面は横方向にへラミガキ(暗文)のちナデ。	黒色	硬 Bトレンチ
231	土師質器 土壺	口径：10.5⑧	口縁部は細く尖り気味におわる。	内外面とも微方向のナデ。	淡黄褐色	硬 5Bトレンチ
232	瓦器 碗	底径：6.4⑧	断面三角形の短い高台。	内外面ともナデ。	黒色	硬 7Bトレンチ
233	須恵器 杯身	底径：9.0⑧	内傾する断面方形の高台で、端部は丸い。	内外面とも回転ナデ。	淡青灰色	硬 Bトレンチ
234	土師器 碗	口径：11.4⑧	平坦な底部から体部がゆるやかにのび、端部は丸くおわる。	内外面ともナデ。	淡灰褐色	硬 Bトレンチ
235	瓦器 皿	口径：11.9⑧	薄手の体部で浅く、口縁部は丸くおわる。	口縁部内外面はヨコラデ。体部外面はナデ。内面は横方向のへラミガキを含む。(暗文)。	灰白色	硬 Dトレンチ
236	土師質器 土壺	——	中実で下部に向って細くなる。断面はいびつな楕円形。	ナデ。	灰黄白色	軟 Bトレンチ
237	瓦製品 瓦製円板	径：4.6×4.6 厚さ：0.7~1.5	平瓦を打ち欠いて作る。平瓦の端面及び化粧面を残す。	表面はナデ。裏面は布目が残る。周縁部は磨減している。	淡灰色	硬 Aトレンチ
黄褐色土層出土遺物						
238	土師質器 土壺	口径：30.6⑧	口縁部は体部から肥厚しながら屈曲外反する。端面は外傾気味で、中央部に凹線が走る。	体部外面はハケ目のちナデ。口縁部内外面はヨコラデ。体部内面は微方向のハケ目のちナデ。	灰黄褐色	硬 Bトレンチ

No.	種類	器種	法量	形態の特徵	成形・調整	胎土	色調	焼成	備考
239	土師質器	壺	口径：9.1④	ゆるやかに外反する口縁部で端部は丸くおわる。	内外面ともナデ。	長石・雲母粒を含む。	淡褐色	やや軟	7 B トレンチ
240	須恵質器	こね鉢	—	口縁端部近くで肥厚し、端部は尖り気味におわる。	体部外面はヨココナナデ。口縁内面はヨココナナデ。下部はななめ方向のナデ。	石英・長石粒を含む。	淡青灰色	硬	11 B トレンチ 東播系？か
241	須恵質器	挿鉢	口径：34.6④	細身の体部で、口縁下に稜線をもつ。口縁端部は直立気味にたち、丸くおわる。	内外面ともナデ。	石英・長石・雲母粒を含む。	淡灰色	硬	2 C トレンチ
242	須恵器	聴	口径：9.4④	口縁部は端部近くで少し角度をかえ、立ちあがり気味になる。端面は平坦で少し内側へ張る。	内外面ともナデ。	石英・長石粒を含む。	淡灰色	硬	7 B トレンチ
243	施釉陶器	鉢	口径：38.0④	口縁端部近くで外へ張り出し、端面は面取り風に内側に稜をつける。	内外面とも回転ナデ。端部内面に密に1条の細い凹線が走り、刻み目を施す。		褐色 釉色は灰黄色	硬	2 C トレンチ 唐津焼か？
244	磁器	碗	底径：4.8④	断面三角形の外傾気味の高台をもつ。内面と外面の底部近くに染付の横線。	内面ナデ。施釉は外面全面に及んでおわる。内面と外面の底部近くに染付の横線。		釉色は青味がかった灰色。染付は藍色。	硬	2 C トレンチ 伊万里焼か？
245	磁器	碗	底径：4.4④	高台は直立し、端面は丸い。外面底部近くに綱手文と横線が4条、内面底部に藍で文様を描く。	内外面とも回転ナデ。		釉色は青味がかった白藍色。染付は藍色。	硬	2 C トレンチ 伊万里焼
246	土師質器	甕	口径：22.8④	頸部は直立気味で、口縁部は屈曲外反し、端面下に稜をもつ。	内外面ともナデ。	石英・長石・雲母粒を含む。	黄褐色	軟	7 B トレンチ
247	土師質器	甕か？	底径：2.4	平底で端部は丸い。	磨滅のため不明。	石英・長石・雲母粒を含む。	淡黄褐色	硬	C トレンチ
248	陶器	碗	底径：4.6④	直立気味の高台で底面は平坦。	内外面とも回転ナデ。釉は底面を除く全面にかかる。		灰色がかった黄褐色	硬	2 C トレンチ 黄瀬戸焼
249	土師器	高杯	—	ゆるやかに閉く脚部。	外面は縦方向のナデ。内面に絞り痕が残る。	石英・長石・雲母・赤酸粒を含む。	淡褐色	硬	2 C トレンチ
250	須恵器	高杯	脚部上部径：5.0④	外開きの脚部にゆるやかにあがる杯部をもつ。3方透し。	杯部外面はへラケズリ。内面及び脚部は回転ナデ。	石英・長石・赤酸粒を含む。	青灰色	硬	2 C トレンチ 回転は時計回り。

251	須惠器	高杯	脚部上部径：5.4㊦	外開きの薄い脚部。3方透し。	内外面とも回転ナデ。	石英・長石粒を含む。	青灰色	硬	2Cトレンチ
252	瓦器	碗	底径：5.8㊦	断面三角状の貼り付け高台で、底面は平坦。	内外面ともナデ。	石英・長石粒を含む。	灰白色	硬	7Bトレンチ
253	瓦器	碗	底径：6.0㊦	直立気味の薄く短い高台で、端部が少し外へ張る。	体部外面はヨコナデ。内面は割離のため不明。	長石・雲母粒を含む。	灰色	硬	11Bトレンチ
254	土師質器 土	碗	底径：5.0㊦	平坦な体部で直立気味の短い高台が付く。	割離のため不明。	石英・長石・雲母粒を含む。	黄褐色	軟	13Bトレンチ
255	陶器	碗	口径：13.6㊦	ゆるやかに外する体部で、口縁端部は丸くおわる。	内外面とも回転ナデ。内面に釉がかか		灰褐色	硬	2Cトレンチ
256	瓦器	碗	口径：13.8㊦	浅い体部で、端部は少し肥厚し丸くおわる。	内外面ともナデ。体部外面に指頭圧痕が残る。	石英・長石粒を含む。	黒灰色	やや軟	13Bトレンチ
257	須惠質器 土	挿鉢	鉢底径：12.0㊦	平底で、薄手の体部がゆるやかに外へ開く。	体部外面はナデ。内面は横方向のハケ。糸底の1単位は8条/2.2cm。	石英・長石粒を含む。	灰黄色	硬	2Cトレンチ
258	土師質器 土	甕	底径：23.0㊦	平底で外開きの体部をもつ。	内外面ともナデ。内面底部近くに指頭圧痕が残る。	石英・長石・雲母・赤酸粒を含む。	灰色	硬	2Cトレンチ
259	土師質器 土	高杯	底径：5.2	手づくねの小型の高杯。脚部は端部近くで大きく外反する。	脚部内面に絞り痕。外面に指頭圧痕が残る。	石英・長石・雲母・赤酸粒を含む。	淡褐色	やや軟	Cトレンチ
260	須惠器	杯身	底径：10.8㊦	断面方形に近い高台で、杯部との接合部外面に凹線。	内外面とも回転ナデ。	石英・長石粒を含む。	淡灰色	硬	11Bトレンチ
灰褐色土層出土遺物									
261	磁器	碗	口径：9.1㊦	薄身の体部で、口縁端部は少し外へ開く。内外面とも草花文縁。	内外面ともナデ。	密	釉色は藍	硬	Cトレンチ
262	須惠器	壺	口径：8.8㊦	ゆるやかに開く口縁部で、端部は外反し、細く丸くおわる。	内外面とも回転ナデ。	石英・長石粒を含む。	青灰色	硬	Bトレンチ
263	瓦器	碗	底径：5.0㊦	断面三角形の小さい高台で、端部が細く外へ張る。	内外面ともナデ。	石英・長石粒を含む。	灰白色	硬	Bトレンチ
264	土師質器 土	碗	底径：5.4㊦	断面三角形の短い直立気味の高台。	内外面ともナデ。	石英・長石粒を含む。	淡灰黄色	やや軟	Cトレンチ
265	土師質器 土	碗	底径：11.0㊦	外傾する高台で、端部は丸みもち、細くなる。	内外面ともヨコナデ。	石英・長石粒を含む。	褐色	硬	11Bトレンチ

No.	種類	器種	法量	形態の特徵	成形・調整	胎土	色調	焼成	備考
266	須惠器	杯身	底径：9.2㊸	高台の中央で外へ張り出し、稜をなす。	内外面とも回転ナデ。	石英・長石粒を含む。	青灰色	硬	Bトレンチ
267	瓦器	碗	底径：4.8㊸	短く低い高台をもつ。	外面はナデ。内面はヨコナデ。	石英・長石粒を含む。	黒灰色	硬	Bトレンチ
268	土師器	碗	口径：12.3㊸	平坦な底部で、浅い体部をもち、口径縁部は丸くおわる。	内外面ともヨコナデ。	石英・長石粒を含む。	淡黄褐色	硬	7Bトレンチ
269	施利陶器	碗	底径：6.0㊸	内傾する高台で、端面近くが面取り風に稜をもつ。	回転ナデ。	密	釉色は淡黄白色	硬	Cトレンチ 内面底部に重ね 焼きの痕。
270	土師質土器	杯	口径：13.8㊸	浅い体部で口径縁部は細く尖り気味におわる。内面に稜をもつ。	剥離のため不明。	石英・長石・チャート・雲母・赤酸粒を含む。	黄褐色	軟	Bトレンチ
271	磁器	碗	口径：10.7㊸	ゆるやかに開く体部で、口径縁部は丸くおわる。外面に花文様。	回転ナデ。	密	釉色は藍	硬	Cトレンチ
272	須惠器	杯蓋	蓋口径：11.4㊸	浅い体部で、口径縁部は直立気味に細く尖る内面のかえりは端部とはほぼ同じ。	内外面とも回転ナデ。	石英・長石粒を含む。	暗青灰色	硬	Bトレンチ
273	瓦器	皿	口径：8.7㊸	底部は平坦で、口径縁部は体部より角度をかえ、外反する。端部は丸くおわる。	外面はナデ。内面はヨコナデ。	石英・長石粒を含む。	黒灰色	硬	Bトレンチ 内面にヘラで線 をかく。
274	瓦器	碗	口径：10.8㊸	薄身の体部で口径縁部は肥厚し、丸くおわる。	外面はナデ。内面はヘラミガキ(暗文)。	暗雲母粒を含む。	淡灰色	やや軟	Cトレンチ
275	須惠器	杯身	底径：12.8㊸	断面三角形の少し外傾する高台をもつ。	内外面とも回転ナデ。	石英・長石粒を含む。	青灰白色	硬	Bトレンチ
276	瓦器	碗	口径：13.6㊸	肉厚の体部で、口径縁部は薄くなり、尖り気味に丸くおわる。	内外面ともナデ。	石英・長石粒を含む。	灰白色	硬	Bトレンチ
277	須惠器	杯身	底径：9.0㊸	断面方形の高台で、端面は面取り風に稜をもつ。	内外面とも回転ナデ。	石英・長石粒を含む。	淡灰色	硬	3Cトレンチ
278	須惠器	杯身	口径：13.6㊸	肉厚の浅い体部で、立ち上がりは内傾する。	体部外面はヘラケズリ。口径縁部及び内面は回転ナデ。	石英・長石・赤酸粒を含む。	青灰色	硬	Cトレンチ
279	陶器	壺か甕	底径：13.3㊸	平坦な底部で、体部はゆるやかに外傾する。	内外面とも回転ナデ。	密	茶色	硬	11Bトレンチ

280	須惠器	壺	—	高台部が欠損する。底部は平坦で肉厚。	内外面とも回転ナデ。	石英・長石粒を含む。	青灰色	硬	Bトレンチ 内面底部に自然釉。
281	瓦質土器	土釜脚	脚径：2.2×1.7	断面は不正な長円形。面取り風に鋭稜のため不明をつける。		石英・長石粒を含む。	黒灰色	やや軟	III Bトレンチ
282	土師質土器	土釜脚	脚径：1.6×1.5	断面は不正な円形。	縦方向のナデ。	石英・長石粒を含む。	灰白色	やや軟	Bトレンチ
283	須惠器	壺	底径：7.4⑩	平痕で、中央部が少し窪む。	内外面とも回転ナデ。	石英・長石粒を含む。	青灰白色	硬	Bトレンチ
284	土師質土器	壺	口径：16.2⑩	外傾する口縁部で、端部近くで外反し、細く尖り気味におわる。	口縁部はヨコナナデ。口縁部は内外面ともナデ。	石英・長石・雲母・赤酸粒を含む。	橙黄色	やや軟	Bトレンチ
285	土師質土器	甗	口径：15.8⑩	口縁部は大きく外反し、端部は肥厚する。	剥離のため不明。	石英・長石・雲母粒を含む。	黄橙色	やや軟	Bトレンチ
286	土師質土器	鉢	口径：20.1⑩	浅い体部で、口縁部は体部から角度をかえ、少し外反する。端部は肥厚気味で丸くおわる。	内外面ともハクメのちナデ。外面底部近くに指頭圧痕が残る。	石英・長石・雲母・赤酸粒を含む。	淡赤褐色	硬	Cトレンチ
287	土師質土器	鉢	口径：19.6⑩	平坦な底部から体部が直立し、端部はほぼ直角に外へ張る。	剥離のため不明。	石英・長石・雲母・赤酸粒を含む。	淡褐色	軟	Cトレンチ
288	須惠器	平瓶	口径：8.5⑩	内傾気味にたちあがる口縁部で端面は平坦。	内外面とも回転ナデ。	石英・長石粒を含む。	青灰色	硬	Bトレンチ
289	土師質土器	鉢	口径：19.0⑩	内傾する体部で、口縁部は外へ張る。	内外面ともナデ。	石英・長石・雲母粒を含む。	淡褐色	硬	Bトレンチ
290	土師質土器	甗	口径：24.0⑩	内傾気味の頸部から、口縁部は大きく屈曲外反する。口縁端面は内傾し、稜がつく。	口縁部内外面はヨコナナデ、頸部は内外面ともナデ。頸部から口縁部の外面に指頭圧痕が残る。	長石・雲母粒を含む。	淡灰褐色	硬	Bトレンチ
291	陶器	插鉢	—	口縁端面は内傾し、丸味をもつ。	内外面とも回転ナデ。	石英・長石粒を含む。	茶褐色	硬	3 Cトレンチ 丹波焼
292	土師質土器	甗	口径：28.6⑩	肩部から口縁部は外反し、端面は内傾し稜をもつ。	剥離のため不明。	石英・長石・チャート・雲母粒を含む。	灰白色	やや軟	Bトレンチ
293	須惠器	壺	脚部最大径：20.2⑩	やや扁平な体部をもち、肩部は丸味をもつて内傾する。肩部下に凹線がある。	内外面とも回転ナデ。	石英・長石粒を含む。	青灰色	硬	Bトレンチ

No.	種類	器種	法量	形態の特徴	成形・調整	胎土	色調	焼成	備考
近世抜き掲げ田出土遺物									
294	施釉陶器	鉢	口径：15.4④	やや内傾気味の口縁部で、端部は直角におおれ、上方へ尖る。外面に楕円状の文様をつける。	内外面とも回転ナデ。	密	赤褐色 釉は褐色	硬	1 C トレンチ
近世・近代井戸出土遺物									
295	陶器	碗	底径：4.0④	直立する高台をもち、底中央が下へ張る。	内外面とも回転ナデ。	密	釉は灰褐色	硬	6 B トレンチ 井戸4
269	陶器	不明	---	円形の体部で把手が付く。内面は窪んでいる。把手は面取りを施す。	把手及び内面はナデ。把手の付け根に指頭圧痕が残る。	石英・長石粒を含む。	茶褐色	硬	2 B トレンチ 井戸1
297	磁器	碗	底径：10.3④	厚手で直立する高台をもち、内面に花文様を描く。	内外面とも回転ナデ。	密	水色 染付は菴藍色	硬	2 B トレンチ 伊万里窯、井戸1
298	陶器	挿鉢	---	口縁端部下位は外へ大きく張り、中央部に2条の凹線が走る。	内外面とも回転ナデ。	密	赤褐色	硬	1 C トレンチ 備前窯、井戸11
299	施釉陶器	碗	底径：4.7④	短い削り出し高台をもち。	外面体部下位はヘラケズリ。内面は回転ナデ。内面のみ施釉。	石英・角閃石粒を含む。	灰色 釉色は淡緑灰色	硬	2 B トレンチ 井戸1
300	陶器	碗	底径：4.3④	内傾する断面三角形の高台をもち。体部との接合部に凹線。	内外面とも回転ナデ。	密	灰白色	硬	2 B トレンチ 井戸1
301	陶器	鉢	底径：11.0④	幅広の低い高台をもち。	内外面とも回転ナデ。	密	黄褐色	硬	1 C トレンチ 井戸11
302	陶器	揺鉢	---	厚手の体部で底部に近い部分。	外面は回転ナデ。	密	茶灰色	硬	8 B トレンチ 井戸7
303	瓦	平瓦	26.6×27.2×3.0	ゆるやかなそりをもち、外面に文様をつける。	端面に面取りを施す。	石英・長石・雲母粒を含む。	灰褐色 含黒灰色	硬	1 C トレンチ 井戸9
旧耕土出土遺物									
304	弥生土器	甕	口径：13.2④	口縁部は体部から屈曲外反し、端部は肥厚し、内傾する。端部に凹線が3条。	体部外面はヨココナデのち縦方向のハケクケ目。内面はナデ。口縁部はヨココナデ。	石英・長石・チャート・雲母粒を含む。	灰白色	硬	D トレンチ

305	土師質 土	鉢	口径：25.2㉔	口縁部は直立気味に立ち、端部は肥厚し丸くおわる。	内外面とも回転ナデ。	石英・長石・雲母を含む。	淡赤褐色	やや軟	2 C トレンチ
306	土師器	甃	頸部径：19.7㉔	口縁部は肩部から屈曲外反する。	肩部外面は斜め方向のハケ目。頸部外面はヨコナデ。内面はナデ。	石英・長石・赤酸粒を含む。	黄白色	やや軟	12 B トレンチ
307	土師質 土	鉢	口径：28.2㉔	口縁部は内傾気味で端部は丸い。	内外面ともナデ。	石英・長石・雲母・赤酸粒を含む。	赤褐色	硬	5 B トレンチ
308	瓦質土器	甃	口径：15.3㉔	肉厚の体部で、口縁部はゆるく外反する。口縁部内面に1条の凹線。	口縁部は内外面とも回転ナデ。	石英・長石・雲母粒を含む。	黒灰色	硬	3 B トレンチ
309	土師質 土	甃	口径：11.2㉔	口縁部はゆるやかに外反し、端部は丸くおわる。	内外面とも横方向のナデ。	石英・長石・赤酸粒を含む。	茶褐色	普通	8 B トレンチ
310	土師質 土	皿	口径：11.2㉔	平底で低い体部をもつ。	内外面ともナデ。	石英・長石・赤酸粒を含む。	淡灰褐色	普通	11 B トレンチ
311	磁器	碗	口径：14.0㉔	口縁端部は肥厚気味に丸くおわる。	内外面とも回転ナデ。	密	釉色は緑	硬	1 C トレンチ
312	土師質 土	埴	底径：7.7㉔	断面三角形の貼り付け高台をもつ。	内外面ともナデ。	石英・長石粒を含む。	乳白色	軟	C トレンチ
313	陶器	鉢	口径：12.0㉔	口縁部は外反し丸い。	内外面とも回転ナデ。	密	淡茶灰色	硬	1 A トレンチ
314	土師質 土	高杯	脚部上部径：3.6㉔	細い脚部で、杯部底面は中央が低くなる。	外面はナデ。杯部内面はハケ目。	石英・長石粒を含む。	赤褐色	軟	1 B トレンチ
315	施釉陶器	碗	底径：2.8	径の小さい、断面台形の高台を持つ。	内外面とも回転ナデ。	密	黄白色 釉色は淡緑色	硬	11 B トレンチ
316	須恵器	杯身	口径：10.8㉔	肉厚の底部で、口縁部に近づくと薄くなる。	内外面とも回転ナデ。	石英・長石粒を含む。	青灰色	硬	8 B トレンチ
317	須恵器	杯身	口径：12.6㉔	口縁部は体部から直線状に外反し、端部は細い。	内外面とも回転ナデ。	長石・雲母粒を含む。	灰白色	硬	1 B トレンチ
318	須恵器	杯身	口径：13.0㉔	立ち上がりは受け部から直立気味で、端部は細く丸い。	内外面とも回転ナデ。	長石粒を含む。	青灰色	硬	1 B トレンチ
319	須恵質 土	甃	底径：16.6㉔	平底で体部は外傾気味にのびる。	体部外面は斜め方向のタタキのちナデ。内面はナデ。	石英・長石・雲母粒を含む。	灰白色	硬	A トレンチ

No.	種類	器種	法	量	形態	特徴	成形・調整	胎土	色調	焼成	備考
320	須恵器	杯身	底径：11.0		断面方形の高台をもち、体部は直線状に外方へ伸びる。	内外面とも直線状に外方へ伸びる。	内外面とも回転ナデ。	長石・雲母粒を含む。	青灰色	硬	4 Bトレンチ
321	須恵器	杯身	底径：8.4④		断面方形の低い高台をもち、体部は直線状に伸びる。	内外面とも回転ナデ。	内外面とも回転ナデ。	石英・長石粒を含む。	灰色	硬	11 Bトレンチ 回転は逆時計回り。
322	須恵器	長頸壺	口径：7.8④		頸部は内彎気味に伸び、口縁部で大きく外反する。口縁部は外傾し、端部は細く丸くおわる。	内外面とも回転ナデ。	内外面とも回転ナデ。	長石粒を含む。	灰白色	硬	8 Bトレンチ 頸部内外面に自然釉がかかる。 頸投窯
323	土師質土器	甕把手	2.7×1.3		断面はいびつな長円形。	ナデ。	ナデ。	長石・赤酸粒を含む。	淡黄褐色	硬	1 Bトレンチ
324	土師質土器	甕把手	5.1×1.4		断面は横幅の広い、いびつな長円形。	断面は幅広い、いびつな長方形ナデ。全面に指頭圧が残る。	断面は幅広い、いびつな長方形ナデ。全面に指頭圧が残る。	石英・長石・雲母粒を含む。	淡黄褐色	やや軟	8 Bトレンチ
325	土師質土器	土釜脚	1.7×1.3		断面はいびつな円形。部分的に面取りが残る。	断面は部分的に面取りナデ。	断面は部分的に面取りナデ。	石英・雲母・赤酸粒を含む。	灰黄褐色	やや軟	2 Cトレンチ
326	土師質土器	土釜脚	1.2×1.9		断面はいびつな円形。面取りを施す。	断面はいびつな円形。面取りを施す。	断面は縦方向のナデ。	石英・長石粒を含む。	黄白色	硬	12 Bトレンチ
327	土師質土器	土釜脚	2.2×2.2		断面はいびつな円形。面取りを施す。	断面はいびつな円形。面取りを施す。	断面は縦方向のナデ。	石英・長石粒を含む。	淡灰白色	硬	2 Cトレンチ
328	瓦質土器	土釜脚	2.5×2.5		断面はほぼ円形。	断面はほぼ円形。	縦方向のナデ。	石英・長石・雲母粒を含む。	白灰色	やや軟	1 Bトレンチ
329	瓦質土器	土釜	口径：23.6④ つば径：29.6④		内傾する口縁部で縁を持ち端部は平坦。	口縁部外面はナデ。内面は横方向のハゲ目。	口縁部外面はナデ。内面は横方向のナデ。	石英・長石・雲母粒を含む。	黒色	硬	4 Bトレンチ
330	瓦器	碗	口径：11.0④		浅い体部で口縁端部は丸くおわる。	内外面ともナデ。外面底部近くに指頭圧が残る。内面見込みに暗文を施す。	内外面ともナデ。外面底部近くに指頭圧が残る。内面見込みに暗文を施す。	石英粒を含む。	黒灰色	硬	1 Bトレンチ
331	瓦器	皿	口径：11.6④		浅い体部で口縁部は外傾する。	内外面ともナデ。内面に粗い暗文を施す。	内外面ともナデ。内面に粗い暗文を施す。	石英粒を含む。	灰色	硬	Cトレンチ
332	瓦器	皿	口径：14.8④		体部はゆるやかに外反し、端部は細く丸くおわる。	内外面とも横方向のナデ。	内外面とも横方向のナデ。	石英・長石粒を含む。	黒灰色	硬	1 Bトレンチ

333	瓦器	埴	口径：12.4④	口縁部は体部より外方へ直線状に伸び、端部は尖り気味におわる。	内外面ともナデ。	石英・長石粒を含む。	灰白色	硬	1 B トレンチ
334	瓦器	皿	口径：10.2④	口縁部は体部からゆるやかに伸び、端部は丸くおわる。	内外面ともナデ。体部外面に指頭圧痕が残る。	石英・長石粒を含む。	淡灰色	硬	2 C トレンチ 口縁端部にスス 付着
335	瓦器	埴	底径：3.8	断面U字形の低い高台をもつ。	ナデ。	石英・長石粒を含む。	黒灰色	やや軟	C トレンチ
336	瓦器	埴	口径：14.2④	平底で、体部は肉厚。	内外面ともナデ。内面に暗文を施す。体部外面に指頭圧痕が残る。	石英・長石粒を含む。	黒灰色	硬	1 B トレンチ
337	瓦器	埴	口径：14.6④	肉厚の体部で、端部は丸い。	内外面ともナデ。	石英・長石・チャート・雲母粒を含む。	淡黒灰色	硬	B トレンチ
338	施釉陶器	甕	口径：19.0④	外傾する口縁部で、端部は大きく張る。	口縁端部は内側へ折り曲げている。内外面とも斜め方向のタタキのち回りナデ。	密	褐色	硬	11 B トレンチ 丹波焼
339	瓦質土器	鉢	口径：16.0④	外彎する体部で、口縁部は内彎気味に肥厚し、端部は平坦。	内外面ともナデ。	石英・長石・雲母粒を含む。	黒灰色	硬	11 B トレンチ
340	陶器	碗	口径：9.0④	外彎する体部で、口縁端部は肥厚し、端面は平坦。外面に8条の凹線。	内外面とも回転ナデ。	石英・長石粒を含む。	茶褐色	硬	C トレンチ
341	陶器	鉢	口径：16.2④	大きく内彎する体部で、口縁部は肥厚し、丸くおわる。	内外面とも回転ナデ。	石英・雲母粒を含む。	黒褐色	硬	11 B トレンチ
342	陶器	こね鉢	底径：13.8	平底で体部は直線状に外方に伸びる。	体部外面は斜め方向のユビナデ。内面は横方向のナデ。	内やや粗。	淡灰色	硬	11 B トレンチ 丹波焼か？
343	陶器	鉢	底径：6.8④	底部はやや窪み、体部はゆるやかに外反する。	内外面とも回転ナデ。	石英・長石粒を含む。	茶褐色	硬	C トレンチ 底面中央部に 「十」記号
344	陶器	壺	底径：9.1④	平底で、体部は直線状に外方に伸びる。	内外面とも回転ナデ。	密	茶褐色	硬	3 B トレンチ
345	陶器	甕	—	口縁部は大きく外反し、端部は肥厚気味におわる。	内外面とも回転ナデ。	密	緑灰色	硬	2 C トレンチ 唐津焼
346	陶器	碗	底径：3.2④	底部は中央が少し窪む。体部は外彎気味に伸びる。	内外面ともナデ。	密	茶色	硬	2 C トレンチ

No.	種類	器種	法量	形態の特徴	成形・調整	胎土	色調	焼成	備考
347	陶器	碗	口径：8.8④	口縁端部は細く尖り気味におわる。	内外面とも回転ナデ。	密	紫がかかった 灰色。釉色 は茶色がか った緑	硬	1Aトレンチ 美濃焼か？
348	陶器	皿	口径：7.6④ 底径：5.3④ 器高1.9	平底で、体部は直線状に外方へ伸び、 口縁部はほぼ垂直に立ち上る。	内外面とも回転ナデ。口縁部以外の密 内外面に施釉。	密	黄褐色	硬	11Bトレンチ 瀬戸焼
349	陶器	碗	底径：4.4④	高台は端部が尖る。	内外面とも回転ナデ。高台端部以外密 に施釉。	密	黄白色	やや軟	2Cトレンチ 黄瀬戸焼
350	陶器	土管？	口径：14.8④	口縁部は外傾し直線状に伸びる。端 部は外傾する。口縁部内面に凹線が 6条巡る。	内外面とも回転ナデ。	石英・長石粒を含む。	赤褐色	硬	Cトレンチ
351	施釉陶器	皿	口径：10.7④	口縁部近くで細くなり、丸くおわ る。端部内面に1条の凹線が巡る。	内外面とも回転ナデ。	密	灰黄白色	硬	13Bトレンチ
352	施釉陶器	碗	口径：11.0④	肉厚の体部で、口縁端部は丸味をも つ。	内外面とも回転ナデ。	密	淡灰色	硬	Cトレンチ
353	陶器	碗	底径：4.2④	薄手の断面長方形の高台をもつ。	内外面とも回転ナデ。	密	緑がかった 白	硬	2Cトレンチ 重ね焼きの痕残 る。
354	陶器	碗	底径：3.8④	断面三角形の高台で、端部は丸味を もつ。	内外面とも回転ナデ。内面厚び高台密 に施釉。	密	灰白色	硬	11Bトレンチ
355	施釉陶器	鉢	口径：14.6④	丸味をもつ体部で、口縁端部は水平 に張る。端面は直立する。	内外面とも回転ナデ。体部内外面に密 施釉。	密	赤褐色 釉色は褐色	硬	12Bトレンチ
356	施釉陶器	碗	底径：4.8	内傾気味の高い高台をもつ。	内外面とも回転ナデ。高台端部を除 く全面に施釉。	密	黄白色	やや軟	2Cトレンチ 黄瀬戸焼
357	施釉陶器	碗	底径：5.3④	内傾気味の高台をもつ。	内外面とも回転ナデ。	密	灰白色	硬	11Bトレンチ
358	施釉陶器	壺？	口径：15.5④	内傾する口縁部が中部で立ち上りが り、端部は肥厚し内傾する。	内外面とも回転ナデ。口縁部外面に密 に施釉。	密	茶褐色	硬	11Bトレンチ
359	磁器	碗	口径：9.4④	体部から口縁部になるほど器壁が薄 くくなり、端部は尖り気味におわる。 外面中位に菊花文の染め付け。	内外面とも回転ナデ。	密	青味がかっ た白	硬	2Cトレンチ

360	施釉陶器	碗	底径：4.5	内傾気味の断面方形の高台で、端部近くに稜をもつ。	内外面とも回転ナデ。	密		釉色は黄褐色	硬	2Cトレンチ瀬戸焼
361	施釉陶器	碗	底径：3.4	肉厚底部で、三角形の削り出し高台をもつ。	外面はヘラケズグリの回転ナデ。	石英・長石粒を含む。		淡赤褐色 釉色は淡灰色	硬	11Bトレンチ
362	陶器	壺	口径：11.1⑩	口縁部は肩部からやや内傾気味に立ち上がり、端部は三角状に肥厚する。端面は平坦。口縁部上部に凹線が2条巡る。	内外面とも回転ナデ。	石英・長石粒を含む。		灰褐色	硬	2Cトレンチ
363	施釉陶器	碗	口径：10.5⑩	器壁は体部から口縁部になるほど薄くなり、端部は尖り気味におわる。	内外面とも回転ナデ。	密		灰白色	硬	2Cトレンチ瀬戸焼
364	施釉陶器	碗	底径：4.6⑩	断面方形の太い高台をもつ。	内外面とも回転ナデ。	密		灰白色 釉色は灰緑色	硬	4Bトレンチ
365	施釉陶器	碗	底径：3.9	肉厚の底部で、断面方形の削り出し高台をもつ。	内外面とも回転ナデ。	密		灰褐色 釉色は緑灰色	硬	Aトレンチ
366	施釉陶器	碗	底径：3.8	平底で体部はゆるやかに外縁する。	内外面とも回転ナデ。糸切り底。	密		灰黄褐色 釉色は灰緑色	硬	Cトレンチ 重ね焼の痕が残る。
367	施釉陶器	碗	底径：5.3⑩	断面方形の細い高台をもつ。	内外面とも回転ナデ。	密		黄白色 釉色は淡灰色	硬	12Bトレンチ
368	陶器	鉢	口径：14.4⑩	少し外傾気味の口縁部で、端部は丸い。	内外面とも回転ナデ。	密		褐色	硬	2Cトレンチ 丹波焼
369	陶器	壺	底径：9.0⑩	底部はやや窪み、肉厚の体部をもつ。	内外面とも回転ナデ。	やや粗		茶褐色	硬	11Bトレンチ 丹波焼か？
370	施釉陶器	碗	底径：3.9	内縁する高台で、上と下に稜をもつ。	内外面とも回転ナデ。	密		褐色 釉色は深緑色と灰黄色	硬	2Cトレンチ 唐津焼 重ね焼の痕が残る。
371	施釉陶器	碗	底径：4.5	ゆるやかに外縁する高台をもつ。	内外面とも回転ナデ。	密		灰白色	硬	2Cトレンチ瀬戸焼

No.	種類	器種	法量	形態の特徴	成形・調整	胎土	色調	焼成	備考
372	陶器	壺	口径：11.2②	口縁部は厚部から大きく外反し、端部は肥厚する。端部は内傾する。端部に凹線を1条めぐらす。	内外面とも回転ナデ。	石英・長石粒を含む。	褐色	硬	11Bトレンチ 丹波焼
373	陶器	鉢	底径：9.2②	平底で、体部にくらべて底部は器壁は薄い。	内外面とも回転ナデ。糸切り底。	密	淡褐色	硬	12Bトレンチ
374	施釉陶器	鉢	底径：9.4②	底部はやや窪み、器壁は薄い。	内外面とも回転ナデ。糸切り底。	密	淡黄褐色	硬	1Cトレンチ
375	施釉陶器	碗	底径：6.6②	断面方形の低く大きい高台で、上位に稜をもつ。	内外面とも回転ナデ。	密	灰黄褐色 釉色は灰色 がかった緑 色。	硬	2Cトレンチ 瀬戸焼
376	施釉陶器	碗	底径：4.8②	断面三角形の高台で、上位にぶい稜をもつ。	内外面とも回転ナデ。	密	緑がかった 灰褐色	硬	12Bトレンチ 唐津焼
377	施釉陶器	碗	底径：4.2	外彎する、断面方形の高台をもつ。	内外面とも回転ナデ。	密	淡黄褐色 釉色は緑が かった灰色	硬	2Cトレンチ 重ね焼の痕が残 る。 瀬戸焼か？
378	施釉陶器	碗	底径：4.6②	断面方形の外傾する削り出し高台をもつ。	内外面とも回転ナデ。高台以外に施釉。	密	淡灰色釉色 は緑色	硬	2Cトレンチ 瀬戸焼
379	陶器	鉢	口径：10.4② 底径：11.0② 器高：5.8	底部はやや窪み、体部はわずかに内彎しながら伸びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外とも回転ナデ。	やや粗	茶褐色	硬	11Bトレンチ 丹波焼
380	施釉陶器	鉢	底径：10.0②	底部はやや窪み、器壁が薄い。	内外面とも回転ナデ。体部外面に施釉。	密	灰茶色 釉色は茶色	硬	Aトレンチ
381	施釉陶器	鉢	口径：16.6② 底径：4.4② 器高：3.7	断面長方形の高台で、下位にシャープな稜をもつ。体部は長く口縁端部は水平に広がる。体部外面に花文様。	体部外面中位は楕円。口径部及び内面は回転ナデ。	密	褐色 釉色は灰白 色・灰緑色 ・茶色	硬	2Cトレンチ
382	施釉陶器	把手付鉢	口径：13.2②	ゆるやかに外彎する体部で、口縁端部は受け口状に横に伸びる。2箇所 に把手をもつ。	内外面とも回転ナデ。	密	灰白色 褐色は黄白 色	硬	11Bトレンチ 瀬戸焼
383	磁器	皿	底径：7.2②	断面三角形の丸味をもつ高台、内面に梁め付け文様。	内外面とも回転ナデ。	密	白色 梁付は藍色	硬	2Cトレンチ 伊万里焼

384	陶器	鉢	底径：12.0㊸	平底で底部は薄い。	内外面とも回転ナデ。	密	灰白色	硬	12Bトレンチ 回転は時計回 り。
385	磁器	皿	底径：9.6㊸	断面三角形の高台をもつ。底部は中央が低くなる。体部外面下位と高台部に染め付けの横線。内面底部に花文を施す。	内外面とも回転ナデ。	密	青味がかった白色染め付けは藍色	硬	2Cトレンチ 伊万里焼
386	施釉陶器	盤	底径：10.4㊸	断面截頭三角形の高台をもつ。体部は下位で角度を変え外反する。	内外面とも回転ナデ。	密	赤褐色釉色は茶色がかった灰色	硬	11Bトレンチ
387	磁器	鉢	底径：8.2㊸	断面方形の幅広い高台で、低い段をもつ。内面に染め付けを施す。	内外面とも回転ナデ。	密	白色染め付けは藍色	硬	2Cトレンチ 伊万里焼
388	磁器	碗	口径：11.6㊸	口縁部になるほど器壁が薄くなり、端部は丸くおわる。体部外面中に井桁文様、口縁内面に横線の染め付けを施す。	内外面とも回転ナデ。	密	白色染め付けは藍色	硬	7Bトレンチ 伊万里焼
389	磁器	鉢	口径：10.2㊸	体部下位から直立気味に立ち上がり、やや外彎する。端部は丸い。	内外面とも回転ナデ。	密	乳白色釉色は淡い緑がかった無色	やや軟	2Cトレンチ 瀬戸焼
390	施釉陶器	鉢	口径：10.2㊸	体部は底部からほぼ垂直に立ち上がり、口縁部は横に大きく張る。端部は少し窪む。	内外面とも回転ナデ。	密	灰色釉色は緑灰色	硬	7Bトレンチ 瀬戸焼
391	施釉陶器	鉢	口径：14.6㊸	外彎する体部で、口縁端部は水平に大きく張る。	内外面とも回転ナデ。	密	赤褐色釉色は褐色	硬	12Bトレンチ
392	磁器	碗	口径9.6㊸	細身の体部で、口縁端部が外反し、丸くおわる。外面及び口縁部内面に染め付けを施す。	内外面とも回転ナデ。	密	白色染め付けは赤・黄・青・茶色	硬	11Bトレンチ 九谷焼か？
393	磁器	小鉢	口径：7.0㊸	口縁部がわずかに外反し、端部は波型。体部内外面に花文様を染め付ける。	内外面とも回転ナデ。	密	白色染め付けは藍色	硬	2Cトレンチ 瀬戸焼
394	磁器	碗	口径：10.1㊸	口縁部になるほど器壁が薄くなり、端部はわずかに反る。外面中に草文様の染め付けを施す。	内外面とも回転ナデ。	密	白色染め付けは薄い藍色	硬	Cトレンチ 伊万里焼か？

No.	種類	器種	法量	形態の特徴	成形・調整	胎土	色調	焼成	備考
395	磁器	碗	口径：8.8㊸	ゆるやかに伸びる体部から口縁部はわずかに反る。外面中位に染め付けを施す。	内外面とも回転ナデ。		白色染め付けは赤・青	硬	11Bトレンチ瀬戸焼
396	磁器	浅鉢	口径：14.4㊸	口縁部は体部より小さく外反し、端面は外傾する。	内外面とも回転ナデ。		白色釉色は淡灰色	硬	13Bトレンチ
397	磁器	碗	口径：9.6㊸	肉厚の体部で、端部は丸い。外面下位に草文様の染め付けを施す。	内外面とも回転ナデ。		白色染め付けは藍色	硬	11Bトレンチ伊万里焼
398	磁器	碗	口径：9.0㊸	体部はゆるやかに外方へ伸び、端部はわずかに反る。外面に草文様、内面に横線の染め付けを施す。	内外面とも回転ナデ。		白色染め付けは藍色	硬	9Bトレンチ伊万里焼
399	磁器	碗	底径：4.0㊸	高い外傾する高台をもつ。外面に花文様と横線の染め付けを施す。	内外面とも回転ナデ。		白色染め付けは藍色	硬	2Cトレンチ伊万里焼
400	磁器	鉢	口径：14.8㊸	ゆるやかに外彎する体部で、端部は細い。	内外面とも回転ナデ。		青みがかつた灰白色	硬	1Aトレンチ瀬戸焼
401	磁器	碗	口径：10.2㊸	ゆるやかに外彎する体部で、口縁部は細く尖り気味におわる。外面に草花文様を染め付ける。	内外面とも回転ナデ。		白色染め付けは藍色と緑色	硬	11Bトレンチ伊万里焼
402	磁器	碗	口径：10.2㊸	体部は底部から外彎し、直線状に伸びる端部はわずかに反る。外面は花文様、内面に横線を染め付ける。	内外面とも回転ナデ。		白色染め付けは藍色	硬	9Bトレンチ伊万里焼
403	磁器	皿	口径：10.2㊸ 底径：5.6㊸ 器高：2.2	断面三角形の小さい高台をもち、体部は下位で屈曲外反し、端部は更に外反する。内面見込み文様に文様。	内外面とも回転ナデ。		青みがかつた白色	硬	2Cトレンチ瀬戸焼
404	磁器	鉢	口径：15.8㊸	体部から口縁部になるほど器壁が薄くなる。外面に花文様を染め付ける。	内外面とも回転ナデ。		灰色がかつた白色染め付けは藍色	硬	11Bトレンチ伊万里焼か?
405	磁器	碗	底径：3.8㊸	外歪する高台をもち、体部は外彎しながらゆるやかに伸びる。内外面に草花文様を染め付ける。	内外面とも回転ナデ。		青みがかつた白色染め付けは藍色	硬	2Cトレンチ伊万里焼

406	磁器	碗	口径：11.6㉔	口縁端部は細く尖り気味におわる。	内外面とも回転ナデ。	密	乳白色	硬	11Bトレンチ
407	磁器	浅鉢	口径：11.4㉔	浅い体部で、ゆるやかに外縁し伸びる。外面及び内面に染め付け文様。	内外面とも回転ナデ。	密	白色染め付けは藍色	硬	11Bトレンチ 伊万里焼
408	磁器	碗	口径：6.8㉔	体部はわずかに外傾する高い高台をもつ。細くなる。外面は花文様を染め付ける。	内外面とも回転ナデ。	密	白色染め付けは青色	硬	2Cトレンチ 瀬戸焼
409	磁器	碗	底径：4.1㉔	わずかに外傾する高い高台をもつ。高台に横線を通らす。	内外面とも回転ナデ。	密	青みがかった白色染め付けはくすんだ緑色	硬	2Cトレンチ 瀬戸焼
410	磁器	花瓶	底径：4.8㉔	断面形の高台をもち、体部は底部から大きく内傾し、上位は肩が張る。外面に花文様を染め付ける。	内外面とも回転ナデ。	密	白色染め付けは藍色	硬	2Cトレンチ 伊万里焼
411	磁器	碗	口径：7.2 底径：3.4 器高：44	断面長方形の高台で、体部は底部より直線状に伸び、端部は薄くなり反る。外面に菊花文を染め付ける。	内外面とも回転ナデ。	密	白色染め付けは青色	硬	11Bトレンチ 瀬戸焼
412	磁器	碗	口径：14.8㉔	ゆるやかに外傾する体部で、端部は尖り気味におわる。内外面に草花文様を染め付ける。	内外面とも回転ナデ。	密	青みがかった白色染め付けは藍色	硬	11Bトレンチ 伊万里焼
413	磁器	碗	口径：10.2㉔	ゆるやかに外傾する体部で、口縁端部は細く丸くおわる。外面に罽手文を染め付ける。	内外面とも回転ナデ。	密	青みがかった白色染め付けは藍色	硬	11Bトレンチ 伊万里焼
414	施種陶器	碗	底径：4.2㉔	外傾する高台で体部との間に凹線を巡らす。	内外面とも回転ナデ。内面に施種。	密	淡黄褐色 紅色は緑が かった淡黄 褐色	硬	4Bトレンチ
415	磁器	碗	口径：14.0㉔	ゆるやかに外傾する体部で、端部は丸い。外面に草花文様を染め付ける。	内外面とも回転ナデ。	密	白色染め付けは藍色	硬	11Bトレンチ 伊万里焼
416	磁器	鉢	口径：1.65㉔	体部中位で外傾し、口縁部はやや反り気味におわる。端面は少し外傾する。体部内面に草文を染め付ける。	内外面とも回転ナデ。	密	白色 外面は緑釉 染め付けは 藍色	硬	11Bトレンチ 瀬戸焼

No.	種類	器種	法量	形態の特徴	成形・調整	胎土	色調	焼成	備考
417	磁器	碗	口径：12.0④	口縁部は大きく反り、端部は細い。外面に染め付け。	内外面とも回転ナデ。	密	白色 染め付けは 青色	硬	1 Cトレンチ 瀬戸焼
418	磁器	碗	底径：4.0④	断面三角形の高台をもつ。外面底部に染め付け文。	内外面とも回転ナデ。	密	白色 染め付けは 藍色	硬	2 Cトレンチ 伊万里焼
419	磁器	碗	口径：7.7④ 底径：3.8 器高：4.7	外傾する細い高台をもち、体部はゆるやかに伸び、端部は直立気味で細くおわる。外面中に三葉のマーク・鉛筆、内面見込みに馬・ホース鉛筆を染め付ける。	内外面とも回転ナデ。	密	白色 染め付けは 藍色	硬	11 Bトレンチ 伊万里焼
420	磁器	浅鉢	底径：8.2④	内傾する小さな高台をもつ。内面に菊花文を染め付ける。	内外面とも回転ナデ。	密	白色 染め付けは 藍色	硬	2 Cトレンチ 伊万里焼
421	青磁	碗	口径：11.4④ 底径：5.2 器高：7.1	内傾する高台をもち、体部はゆるやかに外彎し、端部は直立気味で、丸くおわる。高台内面に萩をもつ。	内外面とも回転ナデ。	密	淡緑色	硬	2 Cトレンチ 龍泉窯か？
422	磁器	碗	底径：4.2④	直立気味の高台で、体部はゆるやかに外彎する。体部外面下に横線を染め付ける。	内外面とも回転ナデ。	密	乳白色 染め付けは 藍色	硬	11 Bトレンチ 伊万里焼
423	磁器	碗	底径：2.8④	断面逆台形の高台をもつ。	内外面とも回転ナデ。	密	白色	硬	2 Cトレンチ 瀬戸焼
424	磁器	碗	底径：4.2④	内傾気味の高台をもつ。	内外面とも回転ナデ。	密	灰色	硬	1 Bトレンチ 伊万里焼か？
425	磁器	碗	口径：6.8④	外彎する体部で、口縁端部は丸い。体外面に花のアフリント文様。	内外面とも回転ナデ。	密	白色 文様は茶・ 緑色	硬	11 Bトレンチ
426	磁器	壺	口径：9.8④	口縁端部は大きく外反し肥厚する。外面に凹線、内面に萩をもつ。	内外面とも回転ナデ。	密	淡灰色 和色は深緑・藍色	硬	7 Bトレンチ 唐津焼か？
427	磁器	小皿	口径：9.4④ 底径：4.8④ 器高：2.8	小さな高台でゆるやかに外彎する体部をもち、端部は丸味をもつ。体部内面見込みに萩の染め付け。	内外面とも回転ナデ。	密	白色 染め付けは藍・赤色	硬	Cトレンチ

428	磁器	碗	底径：4.4㊸	やや外傾する高台で、体部は外彎する。体部外面に花文を染め付ける。	内外面とも回転ナデ。	密		白色染め付けは藍色	硬	11Bトレンチ伊万里焼
429	磁器	そば楕口碗	底径：6.6㊸	底部は上げ底で、体部はやや外傾しながら伸びる。	内外面とも回転ナデ。	密		灰白色	硬	11Bトレンチ
430	磁器	碗	底径：4.4㊸	直立気味の高台で、外彎する体部をもつ。内外面に花文を染め付ける。	内外面とも回転ナデ。	密		白色染め付けは青色	硬	11Bトレンチ瀬戸焼
431	磁器	碗	底径：3.5㊸	外傾する薄い高台をもつ。外面に草文を染め付ける。	内外面とも回転ナデ。	密		白色染め付けは青色	硬	12Bトレンチ瀬戸焼
432	磁器	碗	底径6.6㊸	やや外傾する短い高台をもつ。内面に文様を染め付ける。	内外面とも回転ナデ。	密		白色染め付けは朱色と緑色	硬	11Bトレンチ
433	磁器	鉢	口径：21.8㊸	口縁部は体部から大きく外反し、端部近くでわずかに彎曲する。内面に染め付け文様。	内外面とも回転ナデ。	密		白色染め付けは藍色	硬	11Bトレンチ伊万里焼
434	磁器	碗	口径：8.8㊸	体部はゆるやかに外彎する。内外面に花文を染め付ける。	内外面とも回転ナデ。	密		白色染め付けは青色	硬	Cトレンチ瀬戸焼
435	磁器	皿	口径：13.6㊸	口縁端部は体部より外彎し丸くおわる。内面に花文を染め付けている。	内外面とも回転ナデ。	密		白色染め付けは濃緑色	硬	2Cトレンチ伊万里焼
436	磁器	碗	口径：13.4㊸	外彎する体部で、端部は反り気味に丸くおわる。内面に染め付け。	内外面とも回転ナデ。	密		白色染め付けは青色	硬	7Bトレンチ伊万里焼
437	磁器	碗	口径：11.8㊸	外彎する体部で、端部は細い。外面に花文を染め付ける。	内外面とも回転ナデ。	密		白色染め付けは青色	硬	2Cトレンチ伊万里焼
438	磁器	碗	底径：5.2㊸	断面三角形の高台で、外面に染め付け。	内外面とも回転ナデ。	密		灰白色染め付けはうすい藍色	硬	2Cトレンチ伊万里焼
439	磁器	碗	口径：9.4㊸	肉厚の体部で、内外面に草花文の染め付け。	内外面とも回転ナデ。	密		青みがかった白色染め付けは藍色	硬	11Bトレンチ伊万里焼くらわんか茶碗

No.	種類	器種	法	量	形態の特徴	成形・調整	胎	土	色調	焼成	備考
440	磁器	碗	口径：11.0④		外轆する体部で、外面に花文を染め付ける。	内外面とも回転ナデ。	密		白色 染め付けは 藍色	硬	2 C トレンチ 伊万里焼
441	磁器	碗	底径：4.1		肉厚の底部で、高台内面に稜をもつ。外面に染め付け。	内外面とも回転ナデ。	密		白色 染め付けは くすんだ青 色	硬	C トレンチ 内面底部に重ね 焼きの痕。
442	瓦器	皿	口径：10.2④		口縁部は肥厚し、端部は尖り気味に おわる。	底部外面に指頭瓦痕。		長石・石英粒を含む。	淡灰色	硬	2 C トレンチ
443	磁器	碗	口径：10.8④		内轆する体部で、端部は尖り気味に おわる。体部外面に花文を染め付け る。	内外面とも回転ナデ。	密		白色 染め付けは 淡青色	硬	11 B トレンチ 伊万里焼
444	施釉陶器	碗	底径：4.2④		外傾する断面方形の高台で、体部と の境に回縁。	内外面とも回転ナデ。内面に施釉。	密		淡黄褐色	硬	4 B トレンチ
445	磁器	碗	底径：4.0④		断面三角形の薄い高台をもつ。外面 に染め付け。	内外面とも回転ナデ。	密		白色 染め付けは 藍色	硬	2 C トレンチ 伊万里焼
446	磁器	小皿	口径：7.4④ 底径：4.2④ 器高：1.6		断面三角形の小さな高台をもち、体 部は底部から屈曲外彎し、端部はさ らに反る。内面乳白に印花。	内外面とも回転ナデ。	密		白色	硬	2 C トレンチ 瀬戸焼
447	磁器	碗	口径：11.7④		外轆する体部で、外面に花文を染め る。	内外面とも回転ナデ。	密		灰白色 染め付けは うす藍色	硬	2 C トレンチ 伊万里焼
448	磁器	碗	口径：12.2④		ゆるやかに外轆する端部で、梅花文 を染め付ける。	内外面とも回転ナデ。	密		白色 染め付けは 藍色・ピン ク色	硬	11 B トレンチ 伊万里焼
449	磁器	碗	底径：3.8		直立気味の細い高台をもつ。内面底 部に朱縁。	内外面とも回転ナデ。	密		白色 染め付けは 朱色	硬	2 C トレンチ 伊万里焼 内面底部に重ね 焼きの痕。
450	磁器	碗	底径：3.8④		内轆気味の細い高台をもつ。外面に 染め付ける。高台内面に年号銘。	内外面とも回転ナデ。	密		白色 染め付けは 藍色	硬	11 B トレンチ 伊万里焼

451	磁器	碗	口径：8.8⑩	ゆるやかに外彎する体部で、端部は細く尖り気味におわる。内外面に染め付け。	内外面とも回転ナデ。	密		白色	硬	11Bトレンチ 瀬戸焼
452	磁器	鉢	口径：9.2⑩	ゆるやかに外傾する体部で、端部は細く尖り気味におわる。内外面に染め付け。	内外面とも回転ナデ。	密		白色 染め付けは 青色	硬	1Cトレンチ 瀬戸焼
453	磁器	碗	底径：3.6⑩	断面三角形の細い高台をもつ。体部外面に菊花文を染め付ける。	内外面とも回転ナデ。	密		白色 染め付けは 淡青色	硬	12Bトレンチ 伊万里焼
454	磁器	碗	底径：4.6	断面三角形の小さな高台をもつ。外面高台付近に横線。	内外面とも回転ナデ。	密		白色 染め付けは 淡青色	硬	2Cトレンチ 伊万里焼 内面に重ね焼き 痕。
455	磁器	碗	底径：6.0⑩	外傾気味の高い高台をもつ。内外面に横線の染め付け。	内外面とも回転ナデ。	密		白色 染め付けは 淡い藍色	硬	2Cトレンチ 伊万里焼
456	磁器	碗	底径：4.1⑩	断面三角形の高台をもち、体部は肉厚。	内外面とも回転ナデ。	密		白色	硬	2Cトレンチ 伊万里焼
457	磁器	小皿	口径：9.1⑩ 底径：3.9⑩ 器高：3.1	外傾する細い高台をもち、体部はゆるやかに外彎する。端部はやや反り気味におわる。体部外面に花文、内面に波文の染め付け。	内外面とも回転ナデ。	密		白色 染め付けは 藍色	硬	2Cトレンチ 伊万里焼
458	磁器	碗	口径：10.6⑩	ゆるやかに外彎する体部で、口縁端部は細い。体部外面上位は斜格子、下位は斜格子と花文、内面は横線を染め付ける。	内外面とも回転ナデ。	密		白色 染め付けは 藍色と黒み がかかった青 色	硬	11Bトレンチ 伊万里焼
459	磁器	碗	底径：4.1⑩	外傾する小さな高台をもつ。体部外面に斜格子と花文を染め付ける。	内外面とも回転ナデ。	密		白色 染め付けは 青色	硬	12Bトレンチ 瀬戸焼
460	磁器	碗	底径：5.0⑩	断面台形の高台をもつ。体部外面に横線を染め付ける。	内外面とも回転ナデ。	密		淡黄白色 染め付けは 藍色・淡灰 色・深緑 色	硬	2Cトレンチ 伊万里焼
461	磁器	碗	底径：4.0	やや内傾する高い高台をもつ。体部外面に花文と横線を染め付ける。	内外面とも回転ナデ。	密		白色 染め付けは 藍色	硬	2Cトレンチ 伊万里焼

No.	種類	器種	法	量	形態の特徴	成形・調整	胎	土	色調	焼成	備考
462	磁器	碗	底径：3.8④		外傾する高台をもつ。	内外面とも回転ナデ。	密		乳白色	硬	11Bトレンチ
463	磁器	碗	底径：3.4④		断面三角形の小さな高台をもつ。体部外面に染め付け。	内外面とも回転ナデ。	密		白色染め付けはうすい藍色	硬	13Bトレンチ 伊万里焼
464	磁器	碗	口径：11.6④		ゆるやかに外彎する体部で、端部は薄く丸くおわる。外面に花文を染め付ける。	内外面とも回転ナデ。	密		白色染め付けは青色	硬	2Cトレンチ 伊万里焼
465	磁器	碗	口径：10.8		ゆるやかに外彎する体部で、端部はやや細くなる。体部外面に花文を染め付ける。	内外面とも回転ナデ。	密		白色染め付けは藍色	硬	2Cトレンチ 伊万里焼
466	磁器	碗	口径：12.2④		ゆるやかに外彎する体部。	内外面とも回転ナデ。	密		淡灰色	硬	11Bトレンチ 瀬戸焼か?
467	磁器	碗	底径：3.8		内傾する細い高台をもつ。体部の壁は薄い。外面及び内面見込みに染め付け。高台内面に筋。	内外面とも回転ナデ。	密		白色染め付けは濃い青色	硬	13Bトレンチ 瀬戸焼
468	磁器	小鉢	底径：4.6④		断面三角形の外傾気味の高台をもつ。体部は、下位に最大径をもつ扁平な球形。体部外面に花文を染め付ける。	内外面とも回転ナデ。	密		白色染め付けは藍色	硬	Aトレンチ 伊万里焼
469	磁器	碗	底径：5.2		断面台形のやや大きい高台をもち、下部は下位近くで屈曲してのびる。体部外面に花文を染め付ける。	内外面とも回転ナデ。	密		白色染め付けは淡青色	硬	12Bトレンチ 伊万里焼
470	磁器	碗	口径：13.0④		細身で内彎する体部で、端部は細くなる。外面に染め付け文。	内外面とも回転ナデ。	密		白色染め付けは青色	硬	2Cトレンチ 伊万里焼
471	磁器	碗	底径：4.4④		断面方形の高台をもち、体部は下位から下位まで外彎し、直立気味に立ち上がる。体部外面に染め付け文。	内外面とも回転ナデ。	密		白色染め付けは藍色・茶色	硬	Cトレンチ
472	施釉陶器	鉢	底径：10.8④		平底で、底部は薄い。	内外面とも回転ナデ。底部は糸切り。内面に施釉。	密		黄白色 釉色は黄褐色	硬	11Bトレンチ 瀬戸焼
473	磁器	碗	口径：11.6④		細身の体部で端部になるほど薄くなる。体部外面に花文、内面に斜格子を染め付ける。	内外面とも回転ナデ。	密		青みがかった白色 染め付けは藍色	硬	11Bトレンチ 伊万里焼

474	磁器	碗	口縁：10.6⑩	ゆるやかに外傾する体部。外面に山、内面に横線を染め付ける。	内外面とも回転ナデ。	密	青みがかった灰色、染め付けは鉄釉	硬	2 C トレンチ瀬戸焼
475	施釉陶器	壺	口径：15.6⑩	口縁部は体部から「く」の字形に屈曲し、端部はさらに肥厚し内傾する。	内外面とも回転ナデ。外面に施釉。	やや粗	淡灰褐色釉色は茶褐色	硬	11 B トレンチ
476	磁器	碗	底径：3.6	外傾する細い高台をもつ。外面及び内面見込みに花文を染め付ける。	内外面とも回転ナデ。	密	白色染め付けは藍色	硬	2 C トレンチ瀬戸焼
477	磁器	鉢	口径：16.8⑩	ゆるやかに外傾する体部で、口縁部には少し外反する。内面に唐草文を染め付ける。	内外面とも回転ナデ。	密	白色外面は緑釉染め付けは藍色	硬	11 B トレンチ瀬戸焼
478	磁器	皿	底径：14.4⑩	断面三角形の低い高台をもち、外面高台に横線、内面に花文を染め付ける。	内外面とも回転ナデ。	密	白色染め付けは藍色	硬	2 C トレンチ伊万里焼
479	磁器	碗	底径：4.4⑩	断面三角形の丸味をもつ高台で、底部は厚い。外面に花文の染め付け。	内外面とも回転ナデ。	密	白色染め付けは淡藍色	硬	11 B トレンチ伊万里焼内面部に重ね焼きの痕あり。
480	磁器	碗	底径：4.0	断面長方形の高台で、底部は厚い。	内外面とも回転ナデ。	密	淡灰白色	硬	2 C トレンチ瀬戸焼か？
481	磁器	鉢	底径：6.0⑩	やや外傾する高台で、体部は底部からゆるやかに外傾する。	内外面とも回転ナデ。	密	白色	硬	11 B トレンチ
482	施釉陶器	燈明皿	口径：6.3 底径：2.6 器高：1.4	やや上げ底の底部で、口縁部は尖り気味に細くおわる。	内外面とも回転ナデ。内面に施釉。	密	淡灰白釉色は淡灰褐色	硬	11 B トレンチ瀬戸焼口縁端部スス付着。
483	磁器	燈明皿	口径：7.5⑩ 底径：3.3⑩ 器高：1.0	平底で、口縁部は細く尖り気味におわる。内面中位に燈芯受けがめく。	内外面とも回転ナデ。	密	乳白色	硬	11 B トレンチ瀬戸焼
484	磁器	猪口	口径：6.8⑩	浅い底部で、口縁部は尖り気味におわる。内外面に格子文の染め付け。	内外面とも回転ナデ。	密	白色染め付けは青色	硬	2 C トレンチ伊万里焼

No.	種類	器種	法	量	形態の特徵	成形・調整	胎土	色調	焼成	備考
485	施釉陶器	小皿	口径：7.1④ 底径：3.6④ 器高：0.9	上げ底の底部で、体部は非常に浅い。口縁端面は直立する。	内外面とも回転ナデ。内外面に浅釉。	石英・長石・長石粒を含む。	赤褐色 釉色は黄白色	やや軟	Cトレンチ	
486	施釉陶器	小皿	口径：7.7④	口縁部は肥厚し、丸い。	内外面とも回転ナデ。内外面に施釉。		赤褐色 釉色は黄灰色	やや軟	11Bトレンチ	
487	土師質土	小皿	口径：7.4④ 底径：3.4 器高：1.8	底部は、中央部が肥厚し、周辺部がやや窪む。体部はゆるやかに外彎し、口縁部は細くなる。	手づくね。	石英・長石・雲母・赤酸粒を含む。	橙褐色	やや軟	Bトレンチ	
488	土師質土	小皿	口径：7.4④ 底径：3.0④ 器高：1.8	上げ底の底部で、体部は中位に緩をもつ。	手づくね。体部外面及び内面底部はナデ。内面はヨコナデ。	石英・長石・雲母・赤酸粒を含む。	にぶい橙褐色	硬	Bトレンチ	
489	土師質土	小皿	口径：7.6④	上げ底の底部で、体部は肥厚しながら大きく外反する。	手づくね。内外面ともヨコナデ。	角閃石・雲母粒を含む。	淡黄褐色	硬	1Aトレンチ	
490	土師質土 (燈明皿)	皿	口径：9.0④	浅い体部で、口縁部近くで最も厚する。体部下位に、にぶい緩をもつ。	手づくね。内外面ともナデ。	石英・長石・雲母・赤酸粒を含む。	にぶい橙褐色	硬	Bトレンチ 口縁部にスチ付着。	
491	陶器	台	径：8.8④ 厚：0.7	薄い円形で、内面がやや窪む。	内外面とも回転ナデ。	密	茶色	硬	2Cトレンチ 丹波焼	
492	磁器	花瓶?	径：1.9	外傾気味の口縁部で、端部は外反する。	内外面とも回転ナデ。	密	白色	硬	11Bトレンチ 瀬戸焼か?	
493	磁器	小壺	口径：4.0④	外傾気味の口縁部で、端部は外反する。	内外面とも回転ナデ。	密	灰色がかつた白色	硬	11Bトレンチ 伊万里焼	
494	土師質土	ミチュア土 釜	口径：3.4④ 器高：2.8	丸みをもつ底部で、体部中位に断面三角形のツバをもつ。	手づくね。内外面ともナデ。	雲母・赤酸粒を含む。	黄褐色	硬	2Cトレンチ	
495	磁器	燭台	底径：3.4	平底で下位に緩をもち、体部は大きく内彎する。口縁部内面に断面三角形の受け部がめぐる。体部下位の緩縁下に面取りを施す。	内外面とも回転ナデ。糸切り底。	密	黄白色	硬	2Cトレンチ 瀬戸焼	
496	施釉陶器	円板	径：3.8④ 厚：0.4	断面台形の円形。	内外面ともナデ。上面に施釉。	石英・長石粒を含む。	淡赤褐色	硬	Cトレンチ	

497	磁器	不明	底径：2.8⑧	底部近くでわずかに外反する。	内外面とも回転ナデ。	密	白色	硬	11Bトレンチ 瀬戸焼か?
498	土師質 土器	白形 土製品	口径：4.2 底径：5.1 器高：2.1	断面三角状を呈する。底部は薄く体部中位でゆるやかに内彎する。	手づくね。内外面ともナデ。底部外面に指頭圧痕が残る。	石英・長石・赤酸粒を含む。	黄褐色	硬	1Bトレンチ
499	土人形	鶏	台径：2.2×3.2	低い台付きの鶏で、頭部が欠損している。頸部は直立気味に立ち、尾羽の部分は屈曲する。	型押し。体部はヘラミガキ。	雲母粒を含む。	淡黄褐色	やや軟	Cトレンチ
500	土製品	マンコ (ベタン)	厚：0.8	約1/3が欠損している。長円形を呈し、外面に残存部で4コマの縁と辺に「文」の陽刻を施す。	手づくね。	石英・長石・雲母粒を含む。	黄褐色	硬	4Bトレンチ
501	土製品	仏像	台幅：4.2	頭部を欠損している。台上の結伽未型押し。坐の菩薩像。	型押し。	石英・長石・雲母・赤酸粒を含む。	淡赤褐色	硬	Cトレンチ
502	土製品	仏像	—	頭部・左腕及び下位が欠損している。薬師如来立像。右手に杖、左手に藥壺をもつ。胸部に赤色顔料を施す。	型押し。	密	淡黄白色	硬	5Bトレンチ
503	陶器	擂鉢	口径：28.0⑧	口縁部体部より屈曲し、直立する。凹縁が2条めぐる。内面に凸部が1条。	内外面とも回転ナデ。	密	茶褐色	硬	11Bトレンチ 備前焼
504	陶器	壺	口径：19.7⑧	口縁部は体部から肥厚しながら立ち、端部はさらに太く、外反する。端面は平坦。	内外面とも回転ナデ。体部内面に同密	密	黒褐色	硬	Aトレンチ
505	陶器	こね鉢	口径：30.5⑧	ゆるやかに外彎する体部で、口縁部は端面が直立する。端部近くに凹縁が1条。	内外面とも回転ナデ。	石英・長石粒を含む。	茶色	硬	4Bトレンチ
506	陶器	擂鉢	—	口縁部は肥厚し、端面は内彎気味に立つ。凹縁が2条。	内外面とも回転ナデ。	密	褐色	硬	2Cトレンチ 備前焼
507	陶器	擂鉢	—	外傾する口縁部で、端面下端は鋭く尖る。外面に凹縁が2条。内面に凸部が1条。	内外面とも回転ナデ。	石英・長石粒を含む。	茶褐色	硬	2Cトレンチ 備前焼
508	陶器	擂鉢	口径：29.3⑧	外傾する口縁部で、端面に2条の凹縁。上端部は三角状に張る。	内外面とも回転ナデ。	石英・長石粒を含む。	灰色	硬	Cトレンチ

No.	種類	器種	法	量	形態の特徴	成形・調整	胎土	色調	焼成	備考
509	陶器	揺鉢	—	—	口縁部下端が大きく三角状に張り、上端面が内彎する。内面に凹線が2条。	内外面とも回転ナデ。	石英・長石粒を含む。	暗紫色	硬	2Cトレンチ 備前焼
510	陶器	揺鉢	—	—	口縁端面は内傾気味に立ち、上端部は細くなる。外面に深い凹線が2条。内面は口縁部上下で段をもつ。	内外面とも回転ナデ。	密	褐色	硬	1Cトレンチ 丹波焼
511	陶器	片口 揺鉢	口径：26.2②	—	口縁部はやや外傾気味に立ち、外面に浅い凹線が3条。	内外面とも回転ナデ。	密	淡褐色	硬	11Bトレンチ 備前焼
512	須恵器 土器	片口 こね鉢	口径：32.2②	—	口縁部は内傾し、上下端が張る。端面中央に深い凹線をもつ。	内外面とも回転ナデ。	石英・長石粒を含む。	灰色	硬	2Cトレンチ 東播系
513	陶器	揺鉢	—	—	薄手の口縁部で、外傾する。端部はさらに反る。外面に深い稜をもつ。	内外面とも回転ナデ。	石英・長石粒を含む。	淡灰色	硬	Cトレンチ
514	陶器	甕	口径：30.4②	—	丸味をもつ体部から、口縁部は外傾気味に立ち、端部は大きく丸く張る。外面頸部以下に稜を施す。	内外面とも回転ナデ。	石英・長石・雲母粒を含む。	淡褐色	硬	11Bトレンチ 丹波焼
515	陶器	揺鉢	—	—	口縁部は外傾し、端面は尖る。外面に2条、内面に1条の凹線がめぐらる。内面に凸部が1条めぐらる。	内外面とも回転ナデ。	石英・長石粒を含む。	赤褐色	硬	2Cトレンチ
516	陶器	揺鉢	口径：36.0②	—	口縁部は三角状に張り、やや内傾する。端面は内傾する。外面に深い凹線が2条。内面に凹線が1条、稜がめぐらる。	内外面とも回転ナデ。	石英・長石粒を含む。	褐色	硬	11Bトレンチ 備前焼
517	陶器	揺鉢	—	—	口縁部は三角状に張り、内傾する。端面はほぼ平坦。内外面に各2条の凹線。	内外面とも回転ナデ。	石英粒を含む。	赤褐色	硬	11Bトレンチ 備前焼
518	須恵器 土器	鉢	口径：42.6②	—	外反する口縁部で、端部近くにゆるやかな段をもつ。端面は内傾気味で、上部へ少し張る。	内外面とも回転ナデ。	石英・長石粒を含む。	淡灰茶色	硬	11Bトレンチ 東播系
須 恵 器 へ ラ 記 号										
519	須恵器	杯蓋	—	—	天井部にへラ描きの2本線。	天井部はへラケズリ。内面及び外面は回転ナデ。	石英・長石・赤酸粒を含む。	青灰色	硬	12Bトレンチ

520	須惠器	杯身	—	ヘラ描きの不整な長円形。	体部外面下半はヘラケズリ。内面は石英・長石粒を含む。回転ナデ。	青灰色	硬	Cトレンチ
521	須惠器	杯身	—	底部にヘラ描きの1本線。	体部外面下半はヘラケズリ。内面は石英・長石粒を含む。回転ナデ。	青灰色	硬	9Bトレンチ

